
転生者がネギまの世界に入り込んだようです。

葵 東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者がネギまの世界に入り込んだようです。

【Nコード】

N0008U

【作者名】

葵 束

【あらすじ】

ただ一言「ネギま系を書きたかった！」それだけです。

更新が意味不明です。

グツタグタの文でよろしいでしたら、どうぞ読んで行って下さい。

本当に真面目に書いてませんよ。

読むからには、最悪なシナリオ……だと思ってくださいね……。

本編と同じような文体で書いてると思わないでねっ!!

※現在作者が暴走して、転生者を大量入荷しています。

※100部目にして、ようやく大分裂戦争に章が入りました。

プロローグ（前書き）

ども。

気がついたら、やってしまいましたWWW

プロローグ

アレから数十年たった。

世界というのは、理不尽な事だらけだったけど私は楽しかった。

愛すべき人と共にいる時間。

それが一番楽しかった。

私の幸せは、愛すべき人と共にあった。

それが当たり前のこと。

「楽しかったね……。」

しかし、それはすぐに終わろうとしていた。

「うん。」

私は不老不死。

愛すべき人は、ただの人。

互いの姿は、数十年前から変わってはいない。

しかし、人という存在は寿命という物があった。

私達は互いに手をつなぎ合わせる。

世界は回り続ける。

終わりは始まり。

始まりは終わり。

「……私、幸せだったよ。」

愛すべき人が、そう言う。

その言葉は、すでに自身が終わりを迎えようと知っているようだ。

逝って欲しくはない。

しかし、彼女は死を望んだ。

共に生きるという道はあった。

しかし、彼女は愛すべき物を人として愛し続けたかったのかもしれない。

その愛には終わりがなく、別の終わりがある。

「私は、貴方を幸せに出来たかな。」

その言葉に頷く。

「にゃは、泣いちゃだめだよ。」

そう言うと、彼女は手で涙をぬぐった。

優しそうな顔で、涙をぬぐった。

「そろそろ時間かな。」

いつものように喋ってはいるが、彼女の魂は死にかけていた。

「ごめん……。」

謝る理由はある。

しかし、彼女は笑って首を振った。

「ううん。 謝る必要なんかないよ。」

そう言って抱きしめた。

銀と薄紫の長い髪が風に揺れる。

「私は長生きしたいんじゃない。 貴方と共に幸せになりたい。
……自分だけ幸せになっちゃったけど……。」

目を閉じる。

「……最後に楔を打ち込む……。 私と貴方を結ぶ楔を……。」

いつか聞いた言葉。

その言葉のおかげで、私は貴方と共にいられた。

いわば鎖という名の約束。

「……生まれ変わっても、必ず貴方を見つける。」

そう言うと、彼女の手から力が抜ける。

「何回生まれ変わっても、貴方を愛し続ける……。」

彼女の手が落ちた。

「……今私はこの身を横たえ眠りにつきます……。もしもう一度生まれ変われることができたなら……。私は……。もう一度貴方に会いたい……。」

「……うん。……うん。」

涙で彼女の顔が見れなくなった。

「だから……。またね、リリィちゃん。」

「うん。またね……。束……。」

それが篠ノ之リリィと篠ノ之束の別れであり。

……
始まりであつた。

プロローグ（後書き）

長い事、リリィや束を書き続け妄想すると、『世界とI Sと名もなき者へ』出は使えなかったネタやアンチが色々あったので、アンチがやりやすい『ゼロの使い魔』か『魔法先生ネギま!』でうつぷんを晴らそうかとW W W

ええW W W

作者ふざけています。

基本『世界とI Sと名もなき者へ』出でた事は過去の事になるため、I Sや剣術はそのままだったりもします。

という事で『世界とI Sと名もなき者へ』を読んでいる方達は付いて行けるでしょうW

作者よ、そんなに愛着がわいたのか？

001 (前書き)

まあ、ふざけてます。

とりあえず、数話は完成させたいね。

それからか亀更新。

001

|| || || 神 || || ||

「あの子カワエエ!!」

神と呼ばれるものは、相当な変態でだ。

コレ事実。

俺こそ神であり、変態という名の紳士だ（大爆笑）

といっても、神って色々いるんだよね。

紳士だったり変態だったり鬼畜だったり。

あ、違った。

えーっと。

ランク付けがされているそうだ。

俺は知らないけどな。

という事で、俺が髪だ。

……髪？

……紙？

……神だ。

うん。

文字変換はつらいね。

という事で、俺は趣味の可愛い子ウォッチをしている。

「お仕事ですよ？」

下級の神が何か言っているが、俺は知らん。

「おしご……。」「

勝手にやれっ！！」

誰だか知らないが、俺の楽しみを邪魔するな。

……ゴズン♪

頭に何か重い者が……。

「お仕事ですよ？」

ああ、誰だ……。

「げっ！？ 神（つまり作者）！？」

「こっちだって、色々あるんですから、仕事ぐらいしましょうね？」

そう言うとおそらく俺を殴った物を振りかぶる。

もしかして、それは……。

「みんな大好きちえーんそー☆」

そんなものは誰も好きではない。

……フヒュン……ブロロロロ♪

神が何か引つ張ると、刃が回り始めた。

「わ、分かった。」

そういつて、俺は仕事に戻った。

|| || || 束 || || ||

ん？

確か私は……。

そう思いながら周りを見る。

辺り一面真っ白……。

病室以上に真っ白だった。

入院した事無いけど。

死んだのだって、自宅でリリィちゃんに抱かれて、だ……し……。

あれ？

そういえば、私死んだんだよね？？

うーん、リリィちゃんは？？

「では、今日のお仕事です……。」

「へいへい。」

なんか声がした。

そっちの方を向くと、黒く長い髪の女性と、だるそうな茶髪の男性がいた。

「……。」

「……。」

私は訳の分からない状況だったため、二人を見る。

なに、このアホな服装の人は……。

真っ白な服って。

しかも、微妙にぼろいし……。

「……アホではありませんよ……。」

ん？

私口に出したっけ？

「いいえ、出してませんが。」

女性がそう言うと、私は目を見開いた。

なぜか考えていた事が読まれている。

その事に、数個の可能性を思いつく。

「ええ、その2番目です。」

さっすが私☆

まさか、2番目の「まさか神様？」が当たるなんて♪

「あっはっはっはっは♪ ……はぁ……。」「

高笑い出来……、ないね、この状況。

なに、神様とか。

ふざけてんの？

そんな感じで、束は神に出会った。

001 (後書き)

とりあえず、適当に……うっぷんを晴らしています。

書いて、書いてうっぷんを!!

とりあえず、サイドを入れてみました。

002 (前書き)

……はっちゃけろ!!

私はふざけたいんだっ!!

|| || || 女神 || || ||

どうも、女神です。

メガミとは読みません。

一応……。

オンナカミと読んでください。

ええ。

女、神です。

区切ってくださいね。

ついでに、ここに馬神こと神がいますしね。

馬鹿神を略したのですが、分かりましたか？

まあ、良いでしょう。

目の前には、薄紫髪の女性がいます。

「えーっと。」

とりあえず、かなり落ち着いているようですし大丈夫でしょう。

なんか、隣の馬鹿が震えてますが大丈夫でしょうか？

「おい。」

ん？

なんか、馬鹿が話し始めましたよ。

「お前、俺の者になれ。」

「え、嫌。」

馬鹿がとんでもない事言いましたよ。

それにしても、嫌と即答ですか。

当たり前ですけどね。

「なんでだっ！！ 俺は偉い神様だぞ！！」

うわっ。

ウザい事この上ないですね……。

汚い物を見る目で見て上げましょう。

「神様とか、頭大丈夫？ あ、もう死んじゃった？ ご愁傷さま。」

彼女……というのも疲れましたね。

束と言いましょか。

かなり毒の強い発言というか、喧嘩を売っているような発言というか。

「く、ならば貴様を犯……。」

神が何か言った瞬間に、神の頭に何か刺さりました。

私は横から見ていましたので、何とか分かりましたよ。

エネルギー弾でした。

良く見ると、束の手にレイジングハートさんが握られていますね。

流石、天災。

流石、仲の人（笑）

まあ、私が持たせたような物ですしね。

作者ですし。

|| || || 束 || || ||

気持ち悪かった……。

なにが「俺の物になれ」だよ……。

死んじゃえばいいのに。

私はリリィちゃんの物なのに。

「あの、惚気は良いですから……。」

ん？

そう言えば、自称神と言ってる女性もいたね。

「いや、自称ではありませんから。」

……はあ、頭の中覗かれてるのは本当らしいね。

これで、アレと一緒に参っちゃうよ……。

「……私は馬鹿ではありませんから……。」

そう言うと、男を蹴ってどこかに飛ばした。

リリィちゃん並だね……。

「とりあえず、急展開になりそうですけど、話していいですか？」

なんか真摯な対応取られたよ……。

まあ、情報もないし、死んだはずだし……。

別に聞いただけ聞いておこうかな。

「とりあえず、貴方は自分が死んだと言う事を認識されているようなので、さっさとお話しましょうか。」

神は言っている、死ぬ運命ではないと。

「いえ、死んでいますよ。」

002 (後書き)

転生者になりかけてる？

別にいつか。

束だし
wwww

思うがまま行きましよう。

003 選択肢？（前書き）

という事で、適当な感じですよ。

まあ、色々言いたいでしょうが……。

急展開ワロタ と来るのは目に見えてますからね。

別にいいですけど。

003 選択肢？

|| || || 束 || || ||

どうやら女性の方はまともらしいね。

とりあえず話は聞いておこうか……。

「……貴方は死にました。おk？」

棒読みだよ……。

棒読みで「貴方は死にました」とか、殴っていいのかな？

ま、事実だから別にいいけど。

「で、私は貴方が死ぬことが許せない。おk？」

……とりあえず、最後の「おk」がアレ……。

五月蠅いね。

「で、どっかに転生しようと思ってるのヨネ。」

ついに似非中国人っぽくなったよ。

思考読んで、ウザいって気がついたのかな。

それでも、ウザいんだけど……。

「まあ、という事で貴方には生きてもらいたいですけど……。」

そろそろはつきり言っておかなくっちゃ。

「リリィちゃんの約束があるから、転生しないよ。　　というか余計なお世話。」

「別に、そこらへんも大丈夫なんだけどなく。」

無視無視。

何行ったって無駄だよ。

私はリリィちゃん、命♪

だからね☆

なんか余裕ができた気がする。

「これなら……まあ、大丈夫ですよ。　　というわけで行ってらっしゃい。」

「ふえ？」

気がつく足元に穴があいていた。

……え？

嘘っ!?

「にゃあああ!?!」

訳が分からないまま、束さんは穴に引きずり込まれた!?!?

たぶん、あの女の言う通り転生するんだろうね……。

がつくし……。

|| || || リリイ || || ||

ん?

あれ?

束が死んで、私も世界から消えたのに……。

あれ?

存在してるね……。

私は、束が生きていない時間消えてるはずなのに……。

……なんでだろ？

まあ、いいや。

私が存在してるってことは、束が生きてるってことだね。

……ん？

ああ、おはようございます。

もしくはこんばんは？

篠ノ之リリィだよ。

……って、そんな事してる場合じゃないや。

私はフリーダムになると、飛んで束を探し始める。

真っ白な世界。

気にはなるけど、今は束優先。

……いた。

というか、この世界真っ白だから薄紫の髪の色が目立つね。

そこらへん、感謝しよう。

白という世界に（笑）

なんか女性と話してるね。

近づこう……って、穴っ!？

ああ、束が落ちたっ!？

「間に合えっ!!」

私は束を助けるために、持ち前の高機動で穴に突入した。

途中「篠ノ之様ごあんない」とふざけた声が聞こえたが、どうでもいい。

束が目をつぶっていた。

その姿に私は頬が緩んだ。

というか、あの頃のままじゃないかな？

そんな事を考えながら、落下して行く束をお姫様だっこで受け止めた。

003 選択肢？（後書き）

選択肢 ？

選んでくださいね。

？・適当に、1000年以上

？・エヴァが生まれる、原作開始まで600年

？・大分烈戦争当たり、20年前。
ベルム・スキスマデイクム

？・原作開始時

締切は、15日あたり。

一一一 1 (前書き)

主人公二名

適当に紹介。

……一応、『世界とISと名もなき者へ』を知らない人のため……。

— 1

名前…篠ノ之リリィ

> i 2 5 3 5 6 — 3 0 4 5 <

性別…男の娘

年齢…良い年行っている

身長…束より少し高い

特殊技能・能力

・フリーダム化

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・部分、一部展開

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・剣術

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・災厄

（『世界とI Sと名もなき者へ』から）

・再生

（『世界とI Sと名もなき者へ』から）

・不老不死

（『世界とI Sと名もなき者へ』から）

束と結婚した男の娘。

束と共に消え、束が生まれ変わったら再び現れるはずだったがフリーダムと束の楔のせいで、なぜか束と共に天界と思わしき場所に出てきてしまい、束を追い穴へ入って「ネギま」の世界へと行く事になる。

おそらく、今回が二度目の転生となる。

産まれてから数カ月で歩行と喋る事を可能とし、五歳時にはサイエンスを理解することができた直観像素質を持つ天才。

それら全て、フリーダムや前世の災厄という負の存在が作用していたためである。

産まれた当初は前世の記憶を持っていなかったが、とある事件で死

亡に近い状況に会い、前世である自身フリーダムと対話し同化する。

ISと呼ばれるマルチフォーム・スーツの生みの親であり、妻である篠ノ之束と幼馴染とは仲がかなり良い。

身体能力も高く、素手でISを制圧することも可能である。

自身と似た境遇の子供を引き取るなど、優しい一面を見せる。

だが教員であつた事もあり、間違いを犯した者には容赦がない。

容姿が女性ではないかと間違われるほどの男。

リリィ本人も男と見られる気がないのか、リアルパットを作ったり髪を伸ばしたりするなどしている。

常に女装。

二十歳以降、外見が変わらなくなり隠れて暮らすようになる。

名称…ZGMF-X30A ストライクフリーダム・フェニックス

>i22861—3045<

ドラグーン ×18

背部プラズマビーム砲 ×2

腰部レールガン ×2

腰部レールガン・出力低 ×2

腹部ビーム砲

連結可能ビームライフル ×2

連結可能ビームサーベル・大 ×2

連結可能ビームサーベル・小 ×2

両腕ビームシールド ×2

頭部対空バルカン砲塔システム ×2

特殊装甲・技術

・シフト変化

(『世界とISと名もなき者へ』から)

・フェイズシフト装甲

(『世界とISと名もなき者へ』から)

・ミーティア

(『世界とISと名もなき者へ』から)

・魔法無効化装甲

（新規技能・能力）

・エネルギー変換機構

（新規技能・能力）

・エネルギー収束発射

（新規技能・能力）

ストライクフリーダムの高機動性能を更に発展した物。

スラスター数が倍増した事により、さらに使い辛くなった機体。

その分、機体性能は抜かれる事はない

ISに武器やシステムをもたらした存在である。

一体多数を目的とした戦闘を行う機体で、一機だけで大国の軍事力を一時間もしないうちに奪い取ることができる。

シフト変化という特殊技術で「ZGMF-X10A フリーダム」や「ZGMF-X20A ストライクフリーダム」などに機体を変換することができる。

そのどれもが最大火力で敵を殲滅することができ、誰にも止める事

が出来ない。

唯一止めることができる可能性を持つのは、束がもつ機体「レイジングハート」だけだが、束との戦闘はあり得ない。

フリーダムとリリィは同化しているため、リリィの技能である「再生」で破壊された武器も回復するため、フリーダムを落とすのは不可能である。

機体内には情報として他の機体や高度なハッキング可能な機器、カメラや録音機、PC以上の事ができる機材が装備されている。

フリーダムとレイジングハート間での通信も可能である。

ちなみに、リリィの前世である。

名前…篠ノ之束

>i25656—3045<

性別…女性

年齢…リリィより少し上

身長…リリィより少し下

・特殊技能・能力

・レイジングハート装備

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・部分、一部展開

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・ハッキング

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・開発

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・天災

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・再生

（新規技能・能力）

・不老不死
(新規技能・能力)

天才科学者と同時に、元国際指名手配犯。

リリィと出会うまでは、一人でISを開発していたほどの天才。

ISの生みの親で夫がリリィという、いわゆる天才夫婦である。

いつも頭にウサミミをつけているが、アリス服となぜか合うため疑問に思わない。

常にハイテンションの、変人。

フリーダムを纏ったりリリィと出会った当初、自身が開発していたISの研究材料にしようとしていたが、リリィ本人を見た瞬間に目ぼれた。

だが束もリリィを女だと思っており、出会って数日にしてお風呂場に入。

そこでリリィが男だと知り、常に行為を見せるようになった。

ISを発表後、事件を起こし各国から追われる事になるが、リリィ

と共に逃げる。

そしてお互いを愛し合うようになる。

事件から十年後に、政府と取引をしI S学園に教師として現れる。

他人嫌いであったが、教師をしているうちに徐々に治ってきた。

自身の持てるもの全て使い、フリーダムに並ぶ機体「レイジングハート」を完成させる。

暴走したりリリィを簡単に止めるほどの戦闘ができる。

なぜか、老けない体質。

そのため、教員時代から外見は変わっていない。

種族はちゃんとした人間なのに……。

名称…レイジングハート

【イラストなし】

特殊装甲・技術

・シフト変化

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・トランスフェイズ装甲

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・半永久機関搭載

（『世界とISと名もなき者へ』）

・攻防一体エネルギーフィールド

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・攻撃強化カートリッジ

（『世界とISと名もなき者へ』から）

・魔法無効化装甲

（新規技能・能力）

・エネルギー変換機構

（新規技能・能力）

束が自身の防衛と、リリーの横に立つために製造した機体。

全身装甲の機械だが、束自身「バリアジャケット」と呼ばれる服を纏い戦っている。

一応「バリアジャケット」も、全身機体装甲と同じ役割を果たしているためほとんど問題はない。

ただ全身装甲地でない場合、ほとんど戦闘時に杖を持っている。

装甲から常にエネルギーを放出し、エネルギーフィールドを作っている。

それを一定に固めることで、攻撃や防御に使用したりする、

攻撃の制御には、高性能AIを使用している。

シフト変化で戦闘方法を変えることができ、フリーダムを凌駕する高威力砲撃を可能にしている。

砲門はないが、エネルギーを自在に固めることで多彩な攻撃ができる。

全力で戦闘してもレイジングハートのエネルギーだけが減り、反動などはトランスフェイズ装甲が相殺するため束自身に何の影響も出さない最高の機体である。

ちなみにフェイズシフト装甲も同じだが、トランスフェイズ装甲は使用者にかかる全ての負担を相殺するものであり、実弾や実剣、果ては摩擦抵抗も相殺してしまう。

フリーダムが過去の戦闘で、時速6300kmを出した事がある。

一一一(後書き)

選択肢 ？

選んでくださいね。

？・適当に、1000年以上前

？・エヴァが生まれる、原作から600年前

？・大分烈戦争当たり、20年前
ベルム・スキスマデイクム

？・原作開始時

ちなみに、？以外どれも一票づつ。

？は0。

どうしたらいいんだろうね？

ミンナーオラニセンタクシヲー

004 選択肢？決定／選択肢？（前書き）

選択肢決定

？・エヴァが生まれる、原作から600年前

？があの後4票になった……。

マジっすかw

他は1票づつなのに……。

という事で、原作から600年前です。

004 選択肢？決定／選択肢？

「くっ！！」

束を抱えリリィは落下速度を軽減する。

だが急激に速度を落とすと、束の身が危険になってしまう。

そのため落下しながら、速度を落としていた。

「束！ 束！！」

何度も束を呼ぶが、気絶しているのか起きない。

手には束の愛機であるレイジングハートが握られているが、おそろく部分展開のため装甲がないだろう。

展開していたなら、急制動をかけて上に上られる。

だが展開していない。

この状態でかけてら、束が骨折してしまう。

だからリリィは急制動をかけなかった。

「……ん？」

毒づいていると、落ちて行く方向に光が見えた。

穴の底に光があると言う事がよく分からないが、確認するため重力に逆らうのを止める。

「……なんだろ。」

穴の底の可能性があった。

そのため落下速度を適度に軽減し、ゆっくりと降りる。

「……。」

そして静止した。

「なに……、これ……。」

啞然とした。

穴の底に町が見える。

しかも、地形の端が見えない。

いや、町が見えたのではない。

穴の底で世界を見たのだ。

「……穴の底……ってわけじゃないのかな……?？」

穴の底なら、端はあるし底がある。

だがリリィが見た限り、端はない。

さらに穴の底とは思えない。

むしろ地球のように地平線が見える。

翼を広げゆっくりと降下する。

穴から大地に向けて降りた。

|| || || リリイ || || ||

森の中にゆっくりと降り立つ。

辺りを見るが、人の気配がしない。

「……ふう。」

一息つくど、束を抱えたままフリーダムを解除する。

解除した時に足と地面の間に差ができたため、束を揺らしてしまう。

「……う……。」

そのせいで起こしたようだった。

おきるならもうちょっと早く起きて欲しかったが、仕方がないね。

「……アレ……。」

目を開ける。

おそらく束が見ている光景は、木だろう。

目が私の方を向いていない。

「……おはよう。」

一応、起きたのならそう言おう。

私の声に束が気がつき、私を見る。

「……リリィ……ちゃん？」

信じられなさそうにそう言った。

束は目を擦り、もう一度私を見る。

「……うそ。」

……嘘って……。

結構傷つくよ……。

束が私の頬を触れる。

「……リリィちゃん！」

ようやく私だと認識してくれた。

そんなこんなで、篠ノ之夫婦は大地に降り立った。

「そう言えば、懐かしい服着てるね。」

「あ、本当だ〜♪」

アリス服を久しぶりに着た束は、懐かしそうに服を眺めた。

ウサミミをつけている事んについては何も言わない……。

とりあえず、お互い気になさそうだから良しとしよう……。

004 選択肢？決定／選択肢？（後書き）

とりあえず、次の選択肢……。

次話にも同じ選択肢を乗せます。

選択肢
？

降り立った場所を選んでください。

？・日本

（武器入手イベント）

？・ヨーロッパ

（エヴァ吸血鬼化イベント）

追記…すみません、少々変えました。

特殊イベントではありませんけど、教えずに選ぶのもアレなので…。

とりあえず……。

18日まで受け付けます。

うーん、数話ほど書いたら選択肢？のイベントへ。

……選択肢の補助必要ですか？

P S 2 版の「おとぼく」系参照。

雑誌でしか見た事無いけど……。

005 (前書き)

神再来。

という説明回W

「で、ココは何処かな？」

「さあ？」

束がリリイの足の上に座り、リリイに身体を預けていた。

リリイはリリイで、フリーダムを使って色々やっている。

モニターが色々画面を出し、情報を出す。

が、その大半にノイズが走っていた。

「……ダメ。衛星とリンクができない。」

そう言ってフリーダムのモニターを消す。

「何処にいるのかさえ、完全に分から……。」

「そりゃそうっすよ。」

突然別の声が聞こえた。

リリイ達は目を見開き、声のする方を向く。

「ども。」

そこには、黒い髪を足元に付きそうなくらい伸ばした女性がいた。

「さっきぶりっすね。」

そう言って女性は近づいてきた。

|| || 束 || ||

さっきぶり？

さっきって……。

「誰？」

リリィちゃんがそう聞く。

私も何度もいなずいた。

さっきって、私二人ぐらいしか会ってないのに？

というか、あの自称神（笑）に会ったぐらいだよ☆

「……その神なんですけどね。」

……え。

|| || 女神 || ||

ども、お久しぶりっすね。

画面の前の皆さん、私が神っす。

はい、あの女の神です。

「え？」

あゝ、束が混乱してるもんで説明的に話させていただきますね。

「あゝ、おそらく貴方は私に会ってないと言いたいんでしょうが、

会ってますよ？ おそらく外見が違うからでしょう。」

一応証拠という様な感じで、天使の羽根でも出しましょうか。

えーっと、こうだったかな？

あ、でたでた。

「……混乱してますね。」

目の前の二人は目を白黒させて私を見る。

微妙に面白いっすね。

「……まあ、災厄がいるなら神がいても可笑しくないか……。」

そう言ったのは、リリィ。

貴方はなんでそんなに冷静になれるんですかね？

ま、私のせいでしょ。

主に全て……。

「で、その神様が何の用ですか？」

おっと、そうでしたそうでした。

「そうですね、貴方達に術式とパスをつなげる事を忘れていたので、追って来ました。」

うん、我ながら簡潔っす♪

……アレ？

なんか、微妙に言葉が……。

あ、身体に精神が引っ張られてるのか。

私の身体では無いっすからね。

「一応貴方は不老不死の災厄ですが、貴方に限っては人として転生というか、転送してしまったので、不老不死の術式をかけにきました。」

私は相手を見ながら、そう言った。

つまり簡潔に言えば、リリィが不老不死だけど束が不老不死じゃないから困るって言ってるんっすよね……。

これから先の物語的にも。

ああ、神という名の作者っすから、メタ発言も簡単なんっすよ。

なんせ、私の能力は「文字を操る」能力なんっすから！

もちろん、今貴方達が画面に映っている文字っすよ。

「ちーと？」って言うんでしょうか、そう言うやつっす。

つまり、本来なら地の分で「その剣は心臓に突き刺さった」という文があるとしたら「その剣は空を切った」とすることができると言うやつです。

やろうと思えば「右手にはエクスカリバーが握られていた」と地の文を変えれば、その指定した右手にエクスカリバーが握られてるって言う事ですよ。

「ちーと？」でしょ♪

だから、メタな発言ができるっす。

何でもやれるんですよ（笑）

005 (後書き)

選択肢 ?

降り立った場所を選んでください。

?・日本

(武器入手イベント)

?・ヨーロッパ

(エヴァ吸血鬼化イベント)

ちなみに現在、?が4票の?が0票。

18日まで集計中。

神の別名は作者(大爆笑)

006 (前書き)

神が仲間になりたそうだ。

どうする。

- ・ 追っ払う
- ・ 追い返す
- ・ 戦う
- ・ お帰りいただく

|| || 女神 || ||

まだまだ私のターンっす♪

そう言えば今の私の外見とか言ってませんでしたね。

私の私室にあるPCに入ってるゲームのキャラクターです。

まあ、語尾に「っす」と付く様な特殊な人は、そんなにいませんが。

神界のお姫様じゃないっすよ。

あの主婦業の神……じゃなかった。

いつもスーパで「悩みモード全開中」な、あのお姫様じゃないっすから……。

第一、髪の色違いますしね。

黒い髪が足元に付きそうな、キャラクター。

あえて言ってしまうおう。

PCゲーム「G線上の魔王」の宇佐美ハルであると！

……なんか似合わないっすね。

口調もハルの身体に引っ張られて、微妙にハルっぽくなってるんですけど……。

「あゝ。なに……。術式って何？」

某軍人のマルギッテさんっぽく、表情を作ってふざけているとリリィがそう質問してきた。

マルギッテさんの声優、ハルと同じだからね。

キャラ違い過ぎっすけど……。

というか、貴方は気がついてるでしょ。

ま、良っすけど……。

「本当だったら術式は……この世界に来る前にやっておくべきだったんです。ですが、術式をせずに送ってしまったため、私がここまで追ってきてしまったんですよ。理解できましたか？」

リリィは首を振る。

……分からないのですか……。

何が分からないのでしょうかね……。

まあ、適当に喋って「能力」使って納得させましょうか。

「これから未来でおきる事が、私にとってはすつごく嘆かわしい事で……。」

「……はあ。」

「なんやかんやで、その六百年前に転送しました。」

うん、簡潔……じゃないね。

二人とも啞然としてるよ……。

説明省き過ぎたかな……？

真面目に話そうか……。

「えつとですね、まず最初に神という存在は、ただ人間が作り出した想像の塊です。それが崇高されあがめられた結果、神という存在が作られたんです。ですが、その神にはやることがない、だから神は人間が作り出した物に介入したり、介入させたり好き勝手やっちゃっています。それを他の神たちは……「転生者？」やら「介入者？」と呼んでいます。別に困った事は起きないんですが、まれに馬鹿がいて……。見ているだけで腹だたしい。という事で、それを見つけたら暇つぶしに駆逐してください。で、本題は「永遠にいちやいちゃラブラブしてろよお前達」という事です、理解していただけましたか？」

あゝ、久しぶりの長いセリフ。

噛まずに言えたよ。

「……本音と建前が逆じゃない……?」

「逆じゃありません。」

失礼な。

神とは言え貴方達のそばにずっといたんですから、私をたのしま……
…ゲフンゲフン。

幸せを見せて下さいよ。

どっちかというと、貴方達の考え方はこの世界の馬鹿が反発しそうなものですし、最強を見せつけてやってくれればいいな、って感じっすね。

ま、後で言いましょうか。

「とりあえず、術式起動させるっす。」

とりあえず、二人に術をかけよう。

何をかけようかな。

006 (後書き)

選択肢 ?

降り立った場所を選んでください。

?・日本

(武器入手イベント)

?・ヨーロッパ

(エヴァ吸血鬼化イベント)

前回と変わらず、?が4票の?が0票。

18日まで集計中。

神は不老不死と無敵装甲、エネルギー魔法変換資質の呪文を唱えた。

リリイはむてきになった。

たばねはむてきになった。

リリイのしゅんかんせんめつかのうはんいが、はんけいひゃっきろになった。

たばねのしゅんかんせんめつかのうはんいが、ひゃっきろにのびた。

ふたりにまほうこうげきがきかなくなった。

007 (前書き)

……メタ発言やネタ多し……。

本日選択の閉め切り……。

なんか、投稿した24時間以降、票が来ないんっすけど……。

|||||リリイ|||||

はあ、もう意味が分からないよ……。

神様とか、別の世界とか。

夢だったらいいんだけど、起きたら起きたで束に会えそうにないし……。

ま、束といられるのなら夢でもいいか。

「そうそう、一緒にいられるんですから。」

黒髪の神が私の思考を読んだのか、考えてきた事を言ってきた。

つくづく何でもあるんだね……。

私と束を囲んでいた魔法陣が消えた。

なんか、変な感じがする。

……コレがパス……？

「ええ、パスです。私に念話することや、緊急的な呼び出しの際に綱として使用するのが主な使用目的っす。あとは、特殊な術式

を私とパスを繋いだため、簡単に行うことができます。」

へえ、なんか便利そうだね……。

「便利っすよ。例えば……。」

そう言って神は空間から何か取り出した。

アレは……刀？

刃渡り80cm近くの刃の根元が少し、前に出た刀があった。

それ以外は、ごく普通の刀。

「これは膝丸という刀です。貴方なら説明しなくても分かるですよ？」

膝丸……。

源満仲が作らせた刀……。

源頼光の代、源頼光が己を熱病に苦しめた土蜘蛛を切ったとされた刀で、その際刀名を変えたとされているんだっけ……。

確か別名……蜘蛛切……。

「そう、この刀は膝丸であったものの、すでに原型を忘れ皆から名を蜘蛛切と呼ばれる、草壁七宝の一振り。」

そんな刀が、なぜ……。

……ん？

なんか、変な単語が……。

「あの、草壁七宝って？」

束が私の代わりに聞いてくれた。

神は「知らないの？」という風な顔をしていたが、何かに気がついたのか説明し始めた。

「知らないのは無理ないっすね……。草壁七宝は、陰陽師の四大名門とされている草壁家が所有する妖刀の事を指しています。」

……聞いた事の無い陰陽術師の姓名だ……。

「それはそうですよ。世界は一つの起源から無数に分かれているんっすよ。ISが存在する世界と草壁家が存在する世界が同じとでも？」

……小さな誤差が、大きな違いを生むと言う事？

それって……。

「……バタフライ効果……。」

束がまた私の考えを読んだかのように、言葉を発した。

「カオス力学系なんか、よく知ってるね……。神なのに。」

「むしろ神だからですよ……。」

……神って何だろうね……。

「まあ、暇があったら【STEINS;GATE】ってゲームかア
ニメを見てみたら、簡単に分かるっすよ。」

神……。

それは誰に向かって言っているの……。

「メタ発言は気にしない方が得策っすよ。」

007 (後書き)

草壁七宝 (11eyes)、バタフライ効果……。

STEINS;GATEだとバタフライ効果じゃなくて、バタフライエフェクトだった気がする。

草壁七宝もシナリオ前半だと草壁五宝でしたしね……。

ネタ分かる人いるかな……。

008 選択肢？決定（前書き）

そろそろ神を消したい……。。

神とフェイトが仲間になりたそうだ。

- ・ 殺す
- ・ 消す
- ・ 消滅させる
- ・ デリート

008 選択肢？決定

|||||リリイ|||||

まあ、カオス力学系は置いておこう……。

「……その蜘蛛切をどうするの？」

そう言うと、神は私に近づいてきた。

「手出して〜。」

ん？

とりあえず言われた通りに右手を出した。

すると、蜘蛛切を右手に近づけながら、神が何か喋り始める。

……聞き取りにくい……。

そして喋り終わると、蜘蛛切が光り……消えた。

「はい。ゲートの術を爪に書きこんだから……。」

……は？

「はい、そのまま右手から、蜘蛛切を出す！」

ふえ！？

意味分からない！！

え？

なに、爪にゲートの術！？

それ自体何！？

「……あゝ、なら説明するっす……。」

そう言って神は口を開いた。

「妖剣って言うのは、出しているだけでも危険なのは理解できるっすか？　　というか理解しろ。」

……命令しなくても、そこは理解できるから……。

「その妖剣を、別空間に収めたんです。　そしてその空間の出口の術を貴方の爪に施したっす。」

神がそう言くと、私はようやく理解した。

つまり爪にかけた術に何かする事で、蜘蛛切を取り出すことができるって言う感じかな。

「という事で、やれ。」

……説明というか、何と言うか……。

いじめだね……。

「本来なら「呪^{しゅ}」を唱え解放するんっすけど……そこら辺……アレ。私とのパスで詠唱なしで行けると思うけど……。」

……パス、無駄に便利！

「とりあえず念じて出ると思う……。」

神がそう言うと、私はとりあえず念じる。

……出ろ、と。

すると……なんか右手親指の爪が光った……。

そして気がつく、右掌に刀の柄が……徐々にせり出してくる……。

……掌から柄が生える。

無駄にシニール（笑）

「ひっぱれ。」

神の言葉に仕方なく柄を引っ張る。

すると、大道芸みたく蜘蛛切が出てきた。

掌から……。

「はい、それがパスの利点です。良く覚えといてくださいね。」

へへ。

とりあえず納得……。

仕掛けて、疑問が出た。

「戻す時は？」

出す時は理解出来た。

けど、戻す時はどうすればいいのだろう……。

「あゝ、それも念じてくれれば良いと思うよ。」

「やっぱ、パスのおかげ？」

おそらく別空間というのを作り、物を出し入れするのもかなり複雑な術式なのだろう……。

神のパスというのは、そう言うのを無視している。

このチート神め……。

「まあ、そうだね。」

……やっぱりか……。

008 選択肢？決定（後書き）

数十年ほど、武器集めに集中させる気です。

エヴァと会うのは……おそらくエヴェ三十歳（笑）って感じですかね……。

口調が荒々しい、皆さんご存知のエヴァさんです。

それまでに、相手をオーバーキルさせる武器を集めまくる気です……。

妖刀ひな とか……w

いや……よく考えれば、ヒナより真打・童子斬安綱（11eyes）の方がオーバーキルか……。

鬼牙絶刀だけで、十分ひなを上回ってる気がする……。

なんか、リリイが頭の中で「飛天御剣流」と「草壁流」を生み出してる光景が……。

009 (前書き)

そろそろ神のターンが終わりそうだ。

フェイトが仕掛けてきた。

どうする？

- ・ 殺す
- ・ 命までは取らない
- ・ 腕の一本は貰って行こう

|| || 束 || ||

「後は……貴方の身で頑張るなさい。」

なんか神がリリイちゃんと仲よさそうにお話してるな。

刀とか渡してたし……。

「さて、今は1400年だから……室町時代っすね……。」

神が淡々と喋ってる……。

「じゃあ、数時間ほど頑張っ♪」

ん？

神が脈絡もなくそう言うと、リリイちゃんが光に包まれて消えた……え。

……えっ!?

リリイちゃん!?

私は慌てて辺りを見る。

しかし、リリイの姿はいなかった。

「大丈夫っすよ。すぐ近くにいるっすから……。」

相変わらず心を読んでくる。

「何をしたの……。」

一応警戒しておこう。

何をするか分からない……。

しかし、私の警戒とは裏腹に神はかなり笑ってる。

「……そう言えば、室町時代って言ってたね……。」

私はさっき神が言った言葉を思い出す。

1400年。

室町時代は明と国交樹立し、その後勘合貿易が始まったぐらいだ……。

神は何をする気なの……。

思わずレイジングハートを握る。

「ま、大丈夫よ。近くの戦に放り込んだだけだから……。」

そう、それは安心……。

……うん。

微妙に安心できないね……。

「なんでそんなことしたの……。」

|| || || リリイ || || ||

あの神、後で殺す……。

いきなり斬り合いの最中に移動させないでよ……。

そう言いながら、私は背後から来る人を蜘蛛切で薙ぎ払う。

神が転移した場所は、なぜか斬り合いの最中。

千人規模の戦であった……。

何があったのかは知らないが、戦をしている

私はその場に転移されたのだ……。

そして、群がってくる者を蜘蛛切で殺していく……。

流石、蜘蛛切。

軽く振っただけで人がスライスチーズのように切れた。

……まあ、頭から膝までやすやす斬り裂いた蜘蛛切……いや、その時は膝丸か……。

人を縦に簡単に着る事の出来る膝丸なら、当たり前か……。

同族を……災厄を……殺してきた私にとって、人を殺すと言う事はたやすい事だった。

しかし、あまり殺す気にはなれない……。

殺して、その者の家族が悲しむと言うのは勘弁してもらいたい……。

だけど、いずれ別の者に殺される……。

ここで生きて、変な勢いをつけても問題になっちゃう……。

なら、私だけが怨まれよう……。

「死ねっ！」

おそらく私は両軍から、敵として見られているだろう……。

別に構わない……。

私はくる者を切り払う。

返り血がリリィに降り注ぐが、リリィ自身気にしない。

……力試しというわけか、神……。

そう思い、蜘蛛切を強く握った。

009 (後書き)

右手に5本。

左手に5本という感じで、呪を刻み……リリィに十本の妖刀を持たせようと思います。

基本11eyesの妖刀七本に追加三本です。

左手

親指 真打・童子切安綱

人差 小烏丸天国

中指 火車切広光

薬指 雷切

小指 鉋切長光

右手

親指 蜘蛛切

人差 鬼切

中指 ひな

薬指 未定

小指 未定

未定……どうにかなんないかな……。

童子切安綱の影打（御神刀を打つ場合、あらかじめ複数打っておく。
真打と呼ばれる御神刀以外の物を指す。）でも持たせようかな…
…。

二本募集中。

期限なし。

一一二（前書き）

蜘蛛切 の説明です。

作者自身11eyesを何回やっても、蜘蛛切と鬼切が……どっちがどっちなのか分からないため「破軍の太刀」という所と、刀の長さでこちらが蜘蛛切であろうと考えています。

といっても、事実……現実では長さ両方とも同じなんだよね……。

とりま、皆さん刀は好きですか？

私は大好きです♪

京都行って、七本買うほどに♪

一 二

刀名…蜘蛛切くまぢり

>i 2 6 0 5 0 — 3 0 4 5 <

刃長…約81cm

重量…不明

上…蜘蛛切

下…刀

リリィが神という名の作者から受け取った刀。

通常の刀より一回り大きいのが特徴。

重そうに見えるが、一部の人間にとっては片手で持てるほどの重さである。

神が言った草壁一族に七刀ある妖刀の内の一刀。

「破軍の太刀」と称されるほどの大きさと、破壊力を持つ。

妖刀としての能力は不明。

一応まったく関係の無い話になるが、蜘蛛切は1900年前半に草壁七宝の内の一刀「鬼切」おにきりと共に草壁一族を破門にされた、草壁一族の歴史上最強の女陰陽師「草壁操」くさかべ みさおの手によって持ち去られている。

そのため草壁一族は、その失態をなかった事にするため草壁七宝を草壁五宝にすることとなる。

一世紀後の草壁一族は「草壁の妖刀は5刀だけ」としか知らず、蜘蛛切と鬼切の存在は一部の者しか知らない状況になった。

しかし2000年前半に、当時のころと変わらぬ姿の草壁操と共に蜘蛛切と鬼切が確認されている。

草壁操が何故草壁一族を破門され、なぜ再び現れたかについては「*l l e y e s*」をプレイしていたくほかない。

蜘蛛切は本来「膝丸」と呼ばれる刀で、平安時代に髭切とともに源氏重代の刀として伝えられている。

罪人を試し切りした際、膝まで切れたというのが「膝丸」という名の由来。

源頼光が己を熱病に苦しめた土蜘蛛を切ったとされ、その際刀名を蜘蛛切と変えた。

髭切とは、草壁七宝の鬼切である。

一一二（後書き）

どうしますか。

ネギまの世界に「草壁一族」でも作りますか W W W

……やばいお。

そうしたら、刀の存在が……。

無駄にめんどくさい事になりそうだ……。

後は行き当たりばったりで行こう……。

……草壁操を登場させたら、不味い事になりそうだ……。

010 (前書き)

この世界に来ての、初めての強敵です。

まあ、仕方ないんですけどね……。

|||||リリイ|||||

かなり減ってきた……。

蜘蛛切で戦い続ける事、一時間近く。

生きている人間が近くにいなかった。

「……やり過ぎたかな。」

蜘蛛切を死体から引き抜く。

大きな刀身が血に濡れる。

辺りは鉄のにおいが充満していた。

「……で、殺気を飛ばさずにかかってきたら。」

……私が気が付いてないとしても？

振り向きながら、殺気が来る方向へ蜘蛛切を向ける。

「……いつから気が付いていた。」

観念したかのような声を出し、黒髪の男が現れた。

手には、刀身が持ち手に包まれている刀を持っている。

その刀は、私と似た様な感じを漂わせていた。

私より、蜘蛛切りに近い……。

アレも妖刀……？

そう思いながらも、質問に答えてあげるため口を開く。

「最初からよ……。あそこで死んでいる者の心臓を突き刺した瞬間、貴方が私に殺気に向けた……。その時から、ね。」

そう言うのと、目の前の男が刀を強く握った。

「……よくも……。」

「っ!？」

瞬間的に男が消えた。

私を感じる事のできない早さで、男は消えた。

何処だ……。

……っ!!

殺気を感じ、私は身体を捻りながらしゃがんだ。

「っ!?! 良くかわした!!」

男は後ろから、剣で私を突き殺そうとしていた。

……縮地……。

瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角に入り込む体捌きをする歩方。

瞬間的に爆発的な移動力を見せるため、瞬間移動にも見えなくはない……。

何者……。

そう考えながら蜘蛛切で薙ぐが、男はそれを避ける。

男は避けると同時に、刀の刃で顔を切りつけようとした。

しかし刃が短く、顔に当たらない。

「かかったな!」

「っ!?!」

男の声で私は、瞬間的に顔を刃の軌道上全体から離れた。

しかし間に合わず、頬が少しだけ切れる。

私は急いで男から距離を取った。

……何が……。

そして気が付いた。

男の持っている刀の刀身が……、伸びていると言う事に……。

……なんだ、あれは……。

男の所持している剣は、日本刀なのだが、作りや思想が日本刀のそれではなかった。

持ち手に包まれていた刀身が伸びる。

意味が分からない……。

「良くそれだけの傷で済んだな……。 鉋ごと化物を切った逸話があるのだがっ!!」

そう言う男は縮地で、また切りかかってきた。

……鉋ごと化物ごと……。

私は刀をかわしながら、男の言葉を思い出す。

鉋……、鉋……。

……鉋って、大工道具だよね……。

……ん？

そして、男の持っている刀が分かった気がした。

……もしかして……鮑切長光……？

010 (後書き)

・縮地

・鉋切長光

はい、これでリリィに鉋切長光と縮地フラグが立ちました。

あゝ、眠れない……。

寝たいのに、眠れない。

なんだ、この嫌な気分は……。

睡眠薬が欲しいお。

011 (前書き)

なんか、エヴァに会いに行く前に、色々ありそうです……。

ええ。

|||||リリイ|||||

「鉋切長光……ねえ……。」

大工に化けた妖怪を堅田又五郎が鉋ごと斬ったという伝説があるのだ。

おそらく鉋を切ったことから、刀身の強度や斬れ味は普通の刀の比ではないだろう。

しかし目の前の刀は、刀というより暗器に近い……。

刃が伸びるというのは、日本刀の常識を覆している……。

男はにやりと笑うと、再び私に向かって縮地で距離を詰めてきた。

「っ!?!」

しかし、私にとって縮地^{それ}は……。

「すでに無意味。」

刃をかいぐり、鉋切長光の持ち手を私は握る。

そして男の腕を、蜘蛛切で切り裂いた。

「くっ！」

はずだった……。

男は鉋切長光から手を離し、私から距離を取った。

男は目を見開き、驚愕する。

「……何を……した……。」

自分がされた事が分からないのか、男の声は震えていた。

……種明かしをして上げるか……。

「……体温を追っただけだよ……。」

一種の卑怯な技。

フリーダムである自身の能力を極限に使い、体温をレーダーで細かく観測していただけだ……。

目に映らないのなら、目を使わなければならない。

目に止まらない早さなら、余計に……、ね。

「……くっ！」

男は辺りを見渡す。

男の手には唯一の武器である、鉋切長光はすでない。

そして観念したのか、その場に座った。

「……女にやられるとは……。殺せ……。」

……物騒だね……。

そう思いながら、鉋切長光を構える。

男の首に刃を立てた。

「……そう言えば、聞きそびれていた……。」

男に向かって、私はそう言う。

「お前は、何のために戦う……。」

そう聞いた。

「聞いてどうする。」

男は訝しげに私を見た。

その顔に少しだけ、内心笑ってしまった。

「いや、一応聞いておこうと思って、ね。」

男は私の言葉を聞き、少しだけ目を閉じた。

「……皆を助けるためだ……。」

「……。」

男の言葉に私は何も言わなかった。

「今の私達村人はつらい目にあっている……。その苦難から村人を守るために、この戦場に赴き戦った……。それだけだ……。」

私はその言葉を聞き、男を殺すのを止めた。

……こいつなら……。

思考。

剣速。

判断力。

観測眼。

目の前の男は、全て持っている。

……守るために、刀を振るえる……。

良く見てみれば、体つきも悪くない。

教師をしていた性分か、私はこの男に守るための力をつけたくなつた……。

私が初めて剣を教えた、千冬のような眼をしている……この男に……。

011 (後書き)

あっさり戦闘終了。

フリーダムの方さえあれば、かつる W W W

まあ、目に移らなければ、別の何かを追えば良い話ですよね……。

目を使わずに W

そして、もう分かり切った事になると思いますが……。

この男……。

次話でリリイがなんか凄い事になっちゃいます……。

男を魔改造 W W W

012 (前書き)

コノ話から、なぜか「るる剣」系のシナリオが混じってきました…。

まあ、過去に戻れると言うのなら、戦国時代に一体多数を得意とする剣術があっても良いよね。

|| || || リリイ || || ||

「御剣の剣、即ち、時代時代の苦難から弱き人々を守ること」
 …お前は、これに従えるか？」

意味が分からなさそうに男は私を見た。

以前、鉋切長光の刃は男の首筋に立てている。

「飛天の剣」というのがよく分からないが…、苦難から人々を
 守ることなら、従うではなく、実行するが…。」

男は私を見て、そう言った。

「まあ、すでに殺される身だから、実行はできないがな…。」

そして男は目を閉じた。

「…どうした、早く殺せ。」

男がそう言うが、リリイは一向に刃を振り下ろさない。

だが代わりに、下ろされた物があった。

「お前。今から自分の名を捨てろ。」

男にとっては、意味が分からない言葉だろう。

閉じていた目を見開き、私を見上げる。

「……何を言って……。」

「お前には……。私のおきをおきにくれてやる……。」

男の言葉を遮り、私はそう言った。

鮑切長光に呪を刻み、別空間に送る。

その光景や私の発言に、男は目を見開いたままだった。

「飛ひてんみつるぎりゅう天御剣流ひこせいじゅうろうと比古清十郎の名を……。」

|| || || 清十郎（仮） || || ||

……俺は啞然とした。

目の前の女が、私を子供の様にあしらい、殺すために刃を向けたはずだった。

俺よりも小さな女が……。

しかし、女はおれを殺さない。

……何故だ……。

「お前には……。私のおきをおきてやる……。」

は？

……どういう事だ……。

俺は思考と一瞬止めてしまった。

……しかし、考えた所で女が言っている事が理解できない。

どういうことだ。

「飛天御剣流と比古清十郎の名を……。」

女が次に口を開いた時には、そう言っていた。

「……お前はこれから、「比古清十郎」と名乗れ。」

啞然とした。

目の前の女は何を言っている。

村の仲間を殺して、何を……。

「……清十郎行くよ。」

そう言って女は俺に背を向けた。

まだ混乱している俺を置き、女は歩きだした。

……何処に行く気だ。

そう思い、女の背を見た。

「お前らの村を苦しめていた、者達を切りに行く……。死にしたくないなら、付いてこなくていいけどね。」

ま、無駄

女は俺が言いたい事を感じたのか、そう言った。

いや、待て……。

この女、何と言った。

俺達の敵を殺しに行くと言ったのか……。

……意味が分からない。

着ている物も俺達のと違う……。

なにより、さっきまで敵味方関係なく殺していたやつが、何を言うんだ……。

そう思いながらも、俺は女の背を追っていた。

012 (後書き)

飛天御剣流……。

多分、神鳴流より……危ない……かな？

雷を出すわけではないけど、一体多数戦や早さや殺人剣に関したら強いと……。

まあ、比べても意味がないですしね……。

一応、ISの方では某明治剣客浪漫譚の漫画がありましたから、リイはふざけてるんだと思いますよ……。

牙突も再現できますし……。

一一三（前書き）

蜘蛛切に続き、比古清十郎（仮）が所持していた鉋切長光について説明します。

すでに、リリィの手に落ちたけど……。

比古には……。

童子切安綱の影打でも持たせましょうか……。

刀名・かなざりながみつ 鉋切長光

> i 2 6 0 6 5 — 3 0 4 5 <

刃長..約39cm

重量..不明

上..鉋切長光

中..鉋切長光

下..刀

リリィが男（回収後に比古清十郎（仮）と名付けられる）から回収した妖刀。

妖刀扱いされているが、さほど妖刀として目立たない。

どちらかというと、特殊な技術が組み込まれており暗器である。

おそらく、暗器型の刀がないため妖刀と思われたかもしれない。

神が言った草壁一族に七刀ある妖刀の内の一刀。

七刀の妖刀の中で一番刀身が堅く、長さが変更可能。

柄には暗器が隠されているが、使用する事はないと思われる。

堅田又五郎が、大工に化けた妖怪を鉋ごと斬ったことから鉋切と刀名をつけられた。

すでに逸話扱いであるが、刀身の強度を考えてみれば、鉋を切る事は造作もない。

斬鉄より技術はいらないと思われる。

蒲生家より徳川家光に献上され、徳川将軍家に伝来した。

大正時代に水戸徳川家に贈られている。

ちなみに「やり投げ」の要領で投擲するのも攻撃方法に含まれているらしい。

しかし、それを実践した草壁七宝の残り五刀を手に入れた陰陽術師「草壁美鈴^{くさかべ みすず}」は、一刀を破壊され精神状態が安定しないのにもかかわらず投擲し、草壁操の「忌剣^{きけん}・蟲喰^{むしばみ}」によって2000年前半に、鉋切長光を破壊されている。

しかし、数日後に破壊された形跡の無い鉋切長光が、草壁の里で確認されている。

一一三（後書き）

まあ、基本「11eyes」の解説に、現実を混ぜているぐらいな
んですけどね……。

比古には業物を使わせたいですね。

この時代だと……、何かいい日本刀あったけ……？

013 (前書き)

次話は……一気に教えた事にしましょうかね……。

飛天御剣流。

|||||リリイ|||||

……やっぱいい……。

なんか比古清十郎作り上げようとしてるけど、やっちゃっていいのかな？

時代的に考えれば、明治に十三代めができるように計算すれば、今こいつに教えても問題はないと思うんだけど……。

そう思いながら、人の気配が強い方向へ歩いて行く。

途中清十郎（仮）^{かっこわりかっこじ}に、方向を確認する。

……間違っではないようなので、気配を辿る。

「……。」

黙って歩く。

さて、問題が少しある……。

比古清十郎を作るにあたって、飛天御剣流は絶対だ。

比古清十郎というなと共に、飛天御剣流は存在しないといけない。

さて、何が問題か分かるかにゃ？

……と聞いても、返事はなさそうなので答えよう。

私自身……飛天御剣流は使えなくはない。

むしろ使える部類に入ると思われる。

問題は……。

完璧に全てできるわけでは無いと言う事だ……。

見落として、取りこぼした技もあるかもしれない……。

そう言う私が教えても良いのか……？

「アレです。」

そう言う清十郎。

良く見ると、質の悪くない鎧を着た兵が何人かいる。

しかも、その近くに鳥居がある。

おそらく社殿を陣に構えているのだろう……。

「ほい。」

清十郎に先ほどの戦場から取ってきた刀を二刀渡す。

「自分の身は自分で守ってね。　まあ、近づけさせる気はないけど……。」

そう言って、私は清十郎を連れ見えやすい位置に移動する。

……ここなら清十郎は見やすいかな？

「今から清十郎……貴方に教える、飛天御剣流だけで相手本陣を制圧するから、よく見ておきなさい。」

そう言って、私は鳥居に向かって歩き出した。

|| || || 清十郎（笑） || || ||

女が無防備に歩いて行った。

ありえない。

死にたいのだろうか……。

そう思いながら俺はその姿を追った。

「すまないっ!!」

女の声量とは思えないほどの、大きな声が聞こえてきた。

……は、ははは……。

苦笑いしかできない。

敵陣から数人出てくる。

女を見て舌舐めずりする。

そして数度言葉を交わした瞬間……。

女が消え……。

その場に数人の首なし死体が出来上がっていた。

俺はその光景が信じられなかった。

……目で追うのがやっと……だと……。

本陣から、大量に兵が女に群がる。

だが、女はそれを一瞬で殲滅して行った。

コレでも早さは誰にも負けるはずがないと自負している。

だが女は、俺よりも早い……。

……目の前の惨状はなんだ？

女一人に蹂躪される敵はなんだ？

俺達が刃向かって言った事が馬鹿に思えるぐらいの虐殺劇だった……。

013 (後書き)

さて……。

選択肢が思い浮かばないよ……。

次はどの選択肢を出せばいいのやら……。

思い浮かばない……。

どうしたら……。

014 (前書き)

とりあえず……。

駆逐しておこう……。

うん。

|||||リリイ|||||

私は怒っている……。

理由？

目の前に馬鹿という虫がいるからね……。

「よお、女」。村からの貢ぎ物はどうしたあ？」

「ばかやろお、この女に決まってんじゃないか。」

「上玉だぜ。」

「最初は俺だあ。」

……清十郎……。

お前の村を苦しめていたやつって、こんなのだったのか？

というか、何が苦しめていたの……。

私は少し呆れた。

これは人じゃないよ……。

人の形をした、醜い豚だよ……。

なんで、こんなのに貢いでたの……。

「よし、女こい。」

そう言って豚が私の肩に触れようとする。

「というか……。 」

「え？」

目の前の豚が変な声を出す。

私の刀が、豚の手が切った。

「ぎゃあああ!!！」

豚の悲鳴で、他の豚が騒ぎ出す。

「……女、女って盛ってんじゃねエよ……。 」

私はそう言うと、戦場の死体からはぎ取ってきた刀を振るう。

豚の声が五月蠅い……。

その口から言葉が出ないように、豚の首を切り飛ばす。

「女!! てめえ!!！」

後ろの豚が騒ぎ出す。

豚が鳴いてる……。

五月蠅い、汚らしい……。

そう思いながら、一歩だけ踏み込み……。

五歩向こうに立っていた豚の首を切り飛ばす。

次の瞬間、豚の首から血が噴水のように湧き出る。

……あ。

清十郎に飛天御剣流見せるんだった……。

コレじゃあ、ただ神速に任せて殺してるだけだね……。

失敗失敗……。

豚の返り血を浴びているのにもかかわらず、私は笑った。

「……鬼だ……。」

豚かがそう言った。

「悪いね……。これから私的な理由で、貴様ら豚を殺させていた
だくよ……。何、痛みは一瞬だよ……。」

そう言うと、私は走り出した。

豚が「消えた」とか言っているが、そういう豚は加工工場へ行った方がいいと思う。

他人に食べられるしか、他に使い道ないしね……。

あ、食べられないか……。

剣を翻し、回転しながら首や手を切り取っていく。

「飛天御剣流……龍卷閃……。」
りゅうかんせん

一振りで三人の首を斬りとる。

……ちょっとだけ、刀の重さに引っ張られてかな……。

回転による遠心力を使用した業であるから、身体が刀に振り回される事もある。

その場合、大いに隙を生む。

……後で修正しておこう……。

そう考えると、死体の間を駆け大将の首を斬り落とすために刃を振るう。

……女って言ったやつは、腕を切って出血死の苦痛を……。

私的な理由がコレだったりもする……。

「お、おん……。」

「悪いけど、死んで。」

大将が何か言おうとしていたが、私が聞くはずもなく……。

わずか数分で、豚を駆逐した。

014 (後書き)

次の……話を終えたら……。

おそらく、一気に二十年は過ぎる気がする……。

うん。

そんな気がする……。

015 (前書き)

束が久々に登場。

そんな回。

|| || 束 || ||

「さっさと帰って。」

そう言っ、私は神を蹴った。

神は苦笑いしながら消えていく。

「困った時には呼んで欲しいっす。」

……多分、呼ばないと思うよ？

そう思いながら、私は消えて行く神を眺めた。

なんか、適当に言い包められて気がするけど……。

はぁ……。

リリィちゃん捜しそう。

そして、もう一度二人で過ごそう。

そう思っていた時期が、この束さんにもあったんだよね……。

……はぁ……。

「というわけで、比古清十郎です。」

捜す前に帰ってくるなり、リリィちゃんはいきなりそう言って連れてきた男を紹介した。

……なんで、私が考えていた事はことごとく外れて行くんだろぅね……。

というか、なんで比古清十郎？

アレって漫画のキャラクターでしょ？

私はリリィちゃんに向かって手招きする。

「『ど』という事……？」

小声でお話する。

「いや、ね。こいつの目が千冬っぽかったから……つい……。」「

……。

ちゅちゃんの名前を聞いた瞬間、私は男をマジマジと見た。

私がいきなり振りむいたせいで、男はうろたえている。

だけど、その目は確かに……。

ちゅちゃんの目だった……。

「……分かった。」

私は何も言わないでおこう。

ちゅちゃんの目は、何かを守りたい。

唯それだけを、伝えてくれる。

それと同じ目が、私の前にあった。

「はじめまして。私が天才の束……、篠ノ之束だよ。」

自己紹介なんて、めったにしないからね……。

今日は、特別……。

とりあえず、血を流さないね。

そう思って、私はせーちゃんにお風呂とか川とかないか聞く。

一応、ちーちゃんと同じ目をする人は見た事無いからね……。

親しみを込めて、せーちゃんと呼ぶ事にした。

「ああ、それなら……。えっと、村のはずれに温泉があるな。」

わお♪

最高だねー。

日本書紀にも「幸千撰津国有間温泉」と呼ばれる温泉が出てきた事があるから、もしかしたらと思ったけど。

あー、良かった。

お風呂に入れないなんて、苦痛だか、ら……。

……ボディーソープやシャンプー、リンス……トリートメント……
がないや……。

……どうしよう……。

……まあ、なるようになるかな？

「じゃ、ちょっと行ってくるね♪」

そう言うと、リリィちゃんの手を引っ張っていく。

目指すは温泉♪

いや、楽しみだね。

「……行くのは良いが、俺はその間何をしていれば……。」

清十郎だけがその場に残された……。

015 (後書き)

……次話は一気に年数が、飛びま……せん！

次回は天然温泉話。

なんか、砂糖を吐きたい人がいっぱいいたので……。

駄文でも頑張るよ。

あ、そうだ。

基本私「喘ぎ声」とか書かないし、危険になるまで書くことしないけど……。

やった方が良くないかな？

ぎりぎりの3歩手前までは、頑張るよ？

016 (前書き)

……あゝ。

眠いです。

だけど、起きないと……。

|| || 束 || ||

……そう言えば、せーちゃんの村ってどこだか聞くの忘れた……。

……まあ別にいいや。

そう思って、レイジングハートのモニターを出す。

実は神と話している間に、ブラスタースピットを辺りに展開していたんだよ。

一応、情報収集のためね。

神は600年前って言ってたけど……。

私達に、600年前の地形や正確な知識があると思ってるの？

答えは否。

無いんだよ……。

だから、情報集め。

「束……。」

リリイちゃんが私の名前を呼んだ。

私は首を傾げてリリイちゃんを見る。

リリイちゃんはある方向を向いていた。

私もその方向を見る。

レイジングハートのモニターが、その方向にある物を教えてくれた。

……ラッキーというのかな？

御都合主義と言った方が良い様な……。

「んじゃ、いこうか☆」

リリイちゃんが見つけた物に向かって、私達は歩き出した。

|| || || リリイ || || ||

束が私を連れてある場所についた。

「とぅちやくぅ♪」

その場所が温泉というのは……。

まあ、いいか。

水浴びで血を落とすのも微妙にアレだし……。

たしか温泉は、西暦600年中ごろにあったはずだし……。

あっても可笑しくはないけど。

「さて、まずは……。」

……ん？

気がついたら束が視界から消えていた。

……何処に行ったんだろ……。

「えいやああ!!」

そんな掛け声とともに、後ろから衝撃が来る。

……背中が痛い……。

束のタックルが背中に当たって、微妙な痛さを与えてくれた……。

「さて、ヌギヌギしましょうね♪」

そう言って後ろから前の方に手を伸ばしてくる。

その手は私の……ク……。

ちょっと、だけ……。

敏感な……。

……あ、横っ……。

脇下っ、やめっ!!

「とっただとおお♪」

束はそう言っていると、私を解放してくれた……。

……はあ。

脇下5cmは弱いって言ってるのに……。

そう思いながら私は束の手にある、血に濡れた白いシャツを眺めた。

「さて、早く脱がないと……。」

束は手をワキワキさせながら私に向かって言った。

……早く脱がないとっ!!

そう思ったが、束の早くというのは……普通の人からすると一秒以下という事で……。

思った時には、すでに束の手は私の首筋にあった……。

そしてその場に……。

艶やかな、声が響いた……らしい。

まあ、束が私の弱いところを何度も触ったせいで、私の口からその声が出ただけだね……。

男の声が艶やかでいいのかな？

そう……、すでに諦めた事を思ったりもした。

016 (後書き)

娘がそろそろ参戦。

シャルロットじゃないよ。

ラウラでもないよ。

……………私が扱いに困っている、「くぅちゃん」と言いう存在でもないよ。

束とリリイの実子が、そろそろ登場……。

マジさせるからね。

超鈴音対策かもしれないからね。

カシオペア対策かもしれない……。

時とめちゃうよ。

容姿はナイフ投げが得意なメイドさんっぽいよ。

名前？

容姿がアレだし……、皆が妄想しやすいように……そのままで行くよ。

017 (前書き)

……まあ、説明文ですね……。

歴史ばつかですので、シナリオについては……変化ないっす……。

|||||リリイ|||||

「痒いところはない？」

束が私の髪をお湯で流しながらそう聞いてきた。

髪に付いた血がお湯に溶け、流れて行く。

……鏡がないから、自分だと出来ないんだよね……。

今さらながら、束がいてくれた事に感謝する。

「……はい。　終わったよ♪」

そう言ってお湯をかけてくれる。

髪を纏め水を絞り落とす。

タオルもなければ、桶もない。

なら、今まで何でお湯を掬って流していたのか。

そうなってしまう。

ここに来た当初問題は山ほどあった。

身体を拭く物、シャンプーやボディーソープなどの存在。

そして、お湯を掬う物だ。

解決する前に、束と一緒に私の服をお湯を手で掬いながら洗ったため、入った瞬間にどうしようか悩んだモノである。

まず一つ目に身体を拭く物の存在。

おそらくこの時代の日本では、着物を作る際に出る布や手拭てぬぐいが主流なのだろう。

しかし、二人はそんなものを持ってはいない。

そうすると答えは、自然乾燥という状態に落ち着いてしまう。

まあ、手で身体に付着したお湯は払い落せるので、乾燥は早いだろう……。

私の服が乾くまではお湯につかってはいるため、まだ先の話だけど……。

そして二つ目。

シャンプーやボディーソープ、リンス、コンディショナー、トリートメントなどの薬用洗剤の存在である。

はっきり言おう。

この時代にシャンプーという名はあるが、それは「マッサージする」という意味であるため、洗剤の意味ではない。

シャンプーという言葉は、紀元前132年のハンガリーの文献でその文字を確認できたそうだ。

……まあ、深く説明したらしたでめんどくさいから、気になったら各自調べる事をお勧めするよ……。

さて、一応方法はある。

日本人……、まあ……江戸時代あたりの話だけど、髪を結う時に「ふのり」や「米ぬか」、「小麦粉」などを使い髪の質を保させたそうだ。

この時代にもあるため、まだ知られてないのだろう。

それらを使えば、シャンプーの変わりは可能である。

しかし、私達はそれを使うのに対して抵抗があった……。

まあ、私達は不老不死。

洗剤がないからといって、病気になる事はない……。

だけど、身体が汗でべたつくのは勘弁してもらいたい……。

という事で、早急にシャンプーの製造をする事に決めた。

今回は、仕方がないので「なし」ということで挫折した……。

三つ目。

お湯を掬う物の存在である。

温泉に浸かってしまえばいいのだろうが、温泉自体を汚してしまう。

……ロゼ色に染まった温泉に入りたいと思うか？

思わない。

結果、掬う物を探さないといけなかった。

桶などが良いのだろうが、桶が生まれるのは江戸時代である。

中国から輸入した物を見て作られた「結桶^{ゆいおけ}」という物もあるが、神はこの時代を「1400年」と言っていた。

つまり、勘合貿易前。

結桶も存在していなかった。

結果……。

フリーダムのシールドの内側のくぼみを使う事になったのでした……。

はい……。

017 (後書き)

まあ、私……基本的に風呂好きな人種なんで。

お風呂の事を考えると、結果的にこの3点が問題になりました。

ので、wikiで調べた……ということ。

……14世紀にはちゃんと風呂とかもあったし、別に問題はなかったね。

もしお風呂がない時代に行ったら、窯風呂でも作ったんじゃないかな……。

リリイがW

補足として、13世紀ごろに教会で行われていた身を清めるための行水という行為に木桶があった事を、ここに記しておく。

018 (前書き)

少しばかり、ね。

……口調は微妙に違います。

少しばかり、真面目ですけど……。

ちなみに、性格はラウラ (真面目) + シャルロット (何か) ÷ 1.
5 ぐらいです。

リリィ達が温泉でいちゃついているころ、ある場所で神の前に女性がいた。

その者の髪は、銀に薄く青味がかかっている。

「……で、私をどうするんですか？」

後ろ髪より、横髪が長い女性は黒い髪の毛のアノ神に向かってそう言う。

その顔は不機嫌であった。

何故か持っているナイフを、今にも神に向かって投げつけそうなほど機嫌が悪いらしい。

「え、っと……転生して欲しいんですけど……。」

それを聞いて女性は眉をひそめた。

「転生？ 何かに生まれ変わるんですか？」

少々首を傾げる。

女性の年齢はかなり行っているはずなのだが、この場所では本人が一番思い入れがある時期の姿をするのだろう。

外見年齢は二十代前後に見える。

「いえ、その姿のまま……。」

「……テンプレですね。」

「……。」

神の言葉を遮り、女性はそう言った。

「一応、昔そういう系のお話は何度も書きましたし、使い古されてるので止めた方が良いでしょう？」

神はたじろいだ。

「まあ、仮に私が死んでここにきて。貴方が神としましょうか。」

「いや……。実際その通りなんっすけど……。」

神は女性の言葉に訂正を求めるが、女性は気に下そぶりも見せない。

「この姿で転生させたとして、貴方は私に何をさせたいんですか？」

その言葉に神は悩んだ。

神は「幸せ」という言葉が、この場合の返答に一番合っているのか不安だった。

ここで変な事を言っても、別に問題はないのだろうが、手に持っているナイフを投げられるのは勘弁してほしいと思う。

「……ただ生きて欲しいって言うのは、ダメっすか？」

「ダメです。」

神が考えた言葉は、一瞬にして拒否させられた。

（……なんか懐かしいな。）

神は前に送った束を思い出す。

ついこの間、同じようなやり取りをした感じがした。

ここには時間概念が、ほぼ無いに等しい。

だから、束を送った事は一秒前の事かもしれないし、一年以上前の事かもしれない。

「……要件は終わりましたか？」

女性は、めんどくさそうにそう言う。

神は仕方ないと思いながら、ため息をつく。

「……篠ノ之リリィ……。」

女性の表情が変わった。

「篠ノ之束……。」

更に表情が変わる。

神は隠す事を止めた。

「あの二人が、生きて貴方を送ろうとした世界にいたと言ったら？」

「……行きます。」

女性はそう言うと、神を真面目に見た。

ナイフを持つのを止め、神の目を見据える。

「……じゃあ、転生してくれる？」

「分かりました。」

神の言葉に女性は即答する。

見つめ合い、お互い少しだけ苦笑した。

お互い何に苦笑したか何か分からない。

「貴方にいくつかのパスと能力をつけて行ってもらうっす。良いですね。」

その言葉に女性は頷いた。

それは女性にとって、再び幸せを感じれる時間への片道切符。

018 (後書き)

まあ、こんな感じの口調ですね……。

基本、真面目な人という感じしかないので……。

まあ、気軽にやりますか……。

感想に、スカーレット姉妹を入れて吸血鬼3姉妹はどうですか、と書かれていたので考案……。

……。

あれ？

レミリアが500年、フランが495年だっけ？

生きた年数……。

………なんか、悩む……。

というか、フランの口調が……ね……。

私は悩み続ける。

どうするべきか
W

019 (前書き)

さっさと、飛天御剣流の話を終わらせたかった。

本当に……。

|| || 清十郎 || ||

……師と出会って二十年がたった。

今では、俺一人で数百人規模の敵と戦える。

まさか、俺がここまで強くなるとは……。

師が繰り出す技を受け続けて、身に付けるとは微妙な気分だが……。

色々な感情が俺の中でせめぎ合う。

「師匠！」

俺は師を呼ぶ。

「ん？」

銀髪を揺らして、師は振り返った。

俺の師であり、飛天御剣流を俺に授けてくれた恩人。

驚く事に、師は妖怪あやかしの類らしい……。

しかし、目の前にいる師はどう見ても可憐な女性……。

……じゃなかったな……。

この師……、衰えず、死なず……不老不死という人の夢を勝ち取ったものらしい。

しかも、女性のように見えて男性……。

その胸ぬ付いている乳房は、なんなのだと言いたいが、昔……師と一緒に温泉に入った時に確認した。

乳房が取れたのだ……。

……あの時ほど、驚いた事は無いな……。

しかも、師の妻も不老不死らしい。

……なんか、本当に俺はよく生きていたな……。

そう思いながら師に向かって、話しかける。

「本当に行ってしまったわけのですか？」

師はどうやら行きたい場所があるらしい。

俺も色々な場所に連れて行ってもらったが、それより遠くに行きたいらしい。

師が言うには、日の国以外にも国はありその国に行きたいらしい。

詳しく聞いたが、俺にはさっぱりだ……。

そのどこかに行きたいそうだ。

それもずっと前から。

俺は少しだけ寂しかった……。

「うん。結構前から決めていた事だしね。」

師はそう言うと、少し笑う。

……美しいんだけど……ねえ……。

だが男だ!!

そう言い聞かせて、気持ちを落ち着かせる。

師の妻がそんな俺を見て苦笑していた。

「……まあ、一応……七刀だけ集めたからね。」

そう言って師は自身の爪を俺に見させた。

両手の爪は綺麗に整えられており、そのうち七つには文字が刻まれていた。

師は本当に何でもできた……。

いつも陰陽術を使って刀を出し入れしているらしい。

相変わらず、便利そうだ……。

「んじゃあ、私はそろそろ行くよ。」

そう言って師は一振りの刀を俺に差し出した。

俺はそれを受け取る。

「……真打は危ないから渡せないけど、影打ならそんなに危険性は無いからね。」

そう聞くと、俺はさやから刀を抜いた。

「これは……。」

普通の柄に、大太刀にも見える太く長い刃。

それを見て、首を傾げながら師に聞く。

「童子切安綱。」

俺はそれを聞いて目を見開いた。

酒吞童子を切った刀の影打……！

「……ま、後は弟子をとるなり、人を助けるなりして行きなさい。」

その声に俺は師を見た。

すでに師は背を向けている。

「バ―イ。 またどこかで会おうね。」

そう言うと、師は歩いて去って行く。

その背を見て俺は、初めて心の底から感謝をした。

019 (後書き)

比古は四十歳手前ぐらいです。

リリィの持っている妖刀は、真打・童子切安綱、小烏丸天国、火車切広光、雷切、鉋切長光、蜘蛛切、鬼切の初期決定していた妖刀7刀です。

また日本に来た時に、妖刀は増やします。

さて、そろそろエヴァ編に入ろう……。

いちやいちやが少ないと思うけど、勘弁してね。

よくよく考えると、神の能力とレミリアの能力が微妙に似ている件について……。

これは、神がおぜうさまとして参戦するフラグだったのだろうか
ww

020 (前書き)

タグに「東方」とつけた方が勝ちな気がする。

……まあ、そんな回……。

リリィと束に縁がある人物登場。

|||||リリイ|||||

……ゆっくりと歩く。

飛べばいいのだが、飛んでしまっては面白く無い。

私と束は歩き続けた。

清十郎と別れ、ヨーロッパに向けて歩く。

神はどうやら私達に、とある少女を保護して欲しいらしい。

良く分からないが、やらないといけないらしい。

神に少女の名前は聞いたため、その人物の名前を頼りにあるく。

と言っても、まだ日本も出てはいない。

「そういえば、女の子の名前覚えてる？」

束が微妙な顔をしながら、私を見た。

おそらく、束は女の子の名前を忘れたのだろう。

表情が苦笑い……。

忘れたの……かな。

「エヴァンジェリンだよ。」

教えてあげた。

「え？ ……なに？」

……聞こえてたよね？

絶対聞こえてたよね……。

「エヴァンジェリン。」

私はゆっくりという。

今度こそ絶対聞こえたはず……。

「え、え、エヴァ……。 エヴァン……。ゲリ、オン？」

なんでその間違いに辿り着く……。

文字的には半分以上あっているが、全く別物だ。

巨大な人造人間を保護しに行くわけじゃないんだから……。

「……。」

そんな話を話しながら歩くと、視線を感じた。

……何処からだろう……。

そう思って、辺りを見る。

束も感じたのか、同じようにあたりを見た。

そして気が付く。

全身を見られているような感覚に……。

「……上？」

なんとなくそう思った。

「視線が空から降ってくる……。」

……おい。

束がなんか言い始めた。

「僕を見るな……。」

「待てエッ!？」

急いで、束の口をふさぐ。

「誰のセリフだ。誰のセリフだ。ネットゲ神の「ふひひひ」と言っているような、妄想具現化リアルフットできる人のセリフじゃないよね!？」

束は口をふさがれているため、答える事ができない。

そんな事を言っている間に、何かが近付いてくるような風切り音がした。

そしてそれは私の前に落ちた。

「痛たたた……。」

なんか、結構見慣れた女性が落ちてきた気がする……。

土煙で何も見れないが……。

だが、私は地上と激突する前に女性の顔をちゃんと見ることができた。

「……なんでいるの……？」

私は知らずに眩いていた。

土煙が晴れ、そこには落ちた衝撃で出来たクレータに銀に薄く青味

が掛った色の髪をした女性が、地面と抱き合っている姿を確認できた。

私と束はその女性を見て、黒髪の自称神を一瞬だけ思い出した。

まあ、すぐに忘れたが……。

「う”く……。」

女性がうなだれながら、起きあがろうとする。

顔が私達に向けられ、互いの目が合う。

「……。」

「……あゝ。」

なんて言ったらいいのだろう。

やっぱりアレかな。

「久しぶりだね……。咲夜……。」

あいさつからかな。

020 (後書き)

CHAOS;HEAD ネット……。

ニトロ好きだなぁと思った今日この頃……。

咲夜さんは……、通常のチート設定に、さらにチートを足したようなキャラに……。

まあ、次話から少しずつ……ネ。

021 (前書き)

まあ、色々ありましたが……。

娘設定ができました。

そんな話。

咲夜さんっぽくないのは、仕方がないと言う事で……。

|| || || 咲夜 || || ||

神に行方知れずだった、両親に会う事ができる。

それだけで、私は神の転生の話に乗った。

はっきり言うと、私の両親は元国家指名手配犯。

そして、世界の理ことわりを変えた人達だ。

母は天才的な発明家で、各国家から狙われるほど危険な生き方をしたらしい。

それを父が守ったと言うのが、今あの世界で物語になっている本の内容だ。

父は母の幼馴染を鍛えたり、理を変えたISの開発もしたりと、何でもできる。

私の印象では、父と母は天才でだけど心配性な人。

だけど、優しくて美しい人。

私は長い間、二人に愛されていた。

しかし、私が愛すべき人を見つけると「じゃ、私達も愛し合うために旅行に行ってきまゝす♪」と書き置きを残して、どこかに行ってしまった。

私は最初は呆れたが、数年たっても帰ってくる気配がない。

心配しながら、私は生き続けた。

そして、結婚式当日。

何故か当たり前の様に出席していた。

あの時は、かなり泣いた覚えがある。

はつきり言おう。

あの人達は「自由」過ぎる……。

そして私は、結婚し「篠ノ之咲夜」から「十六夜咲夜」になった。

その後、私は両親たちの足取りがつかめなくなる。

けど、どこかで生きてるだろう。

そう考えているうちに、私は歳をとり死んだ。

そして……。

「久しぶりだね……。

咲夜^{さくや}……。」

会いたかった二人に出会えた。

気のせいではないかと思い、目を擦る。

だが、擦った後も二人はいた。

銀髪の女性らしい父親と、ウサミミをつけた薄紫髪の母親に……。

「大丈夫？」

母の声が私の耳に届く。

懐かしく感じる声。

自然と涙が出てきた。

私はなんとか立ち上がる。

「だ、大丈夫。」

そう言って、周りを見る。

落ちた衝撃か私を中心に地面が凹み、クレーターになっていた。

あの人たちの足が、今の私の目線。

……あの人たちの元に行くのは大変そうだ……。

急な坂になって上るのに一苦労しそうな感じになっている。

「ほら。」

父が私に向かって、手を伸ばしてくれる。

私はその手を握り、引き上げてもらった。

引き上げてもらい、父に抱きつく。

「……。」

私は何も言えなかった。

言いたい事が山の様にあっただけど、言葉に出せない。

だから、せめて抱きつくと言う行為で理解して欲しかった。

……寂しかった……と。

021 (後書き)

まあ、咲夜さんの容姿は……あの咲夜さんですので、想像は簡単かな？

けど……まあ。

想像して一番最初にメイド服装備って言うのは、仕方ないのか……な？

ちなみに、この咲夜さん。

PAD長ではありません。

巨でもありません。

至って普通です。

束は巨ですけど、咲夜さんは巨ではありません。

……ん？

なんか気配が……えっ!？

ちよつ、くぁwせdrftgyふじこlp……。

作者がログアウトしました。

022 (前書き)

別名、神の再登場

……やりたかっただけです。

神はすでにカリスマブレイクされまくっている、ふざけた人種。

コノ話も作者のふざけで構成されています。

|| || 馬鹿 || ||

※音声だけで、お楽しみ下さい。

「という事で、お前にはある人物の捕獲に行ってもらうぞ。」

「……さて。俺はそいつの捕獲のために殺されたのか？」

「そうだ。光栄に思えよ。」

「思えるかっ!! むしろ死ね!! 今すぐ死ねっ!!」

「ふ、死なないのが神の特権だ!」

「けっ!!」

「篠ノ之という女を捕獲してこい。そのために、最古の魔術師に
とりつかれた犠^{ぎしや}者の能力を再現させたんだから、な……。」

「……余計な事を……。」

「行け。」

「命令すんな。」

「あ？　俺は偉いから命令できるんだよ。」

「チツ……。」「

「生け捕りにしろよ？」「

「お前に渡す時にゃ、焦げ肉になってるかもな。」

|| || || リリイ || || ||

※元に戻りました

なんか、娘が空から降ってきた……。

どういう事だ？

「咲夜がなぜここにいるのだ？」

なんか、混乱してきたね……。

「さあ？」

咲夜も分からないようだ。

まあ、考えても仕方がない。

どうせあの神の事だ。

ろくでもない事を考えているのだろう。

「ろくでもないとは失礼ね。」

……噂をすればなんとやら。

私はその声をした方向を向く。

「「……え？」」

私とリリィは目を疑った。

黒髪を長髪にした女の神だと思い振り返ったからだ……。

「どうしたのよ。」

……私は目を擦る。

しかし、目の前にいる人物は、私が思っていた容姿をしていなかった。

女性は私の思考を読んだのか、何か納得したようだ。

「どう？ キャラ変えてみたんだけど。」

そう言って、持っている日傘を少しだけ上に上げる。

……いや、まて。

このフレンドリーな口調に、思考を読んだような発言。

……まさか。

「気が付いた？ 私が神よ！」

女の神らしい。

「……ちっちゃくなったね……。」

束がそう言うのと、俺も頷いた。

唯一、咲夜だけが意味が分からないのか、ただ眺めているだけだった。

「こうでもしないと、私の出番が消えるのよ……。 咲夜にまぎれて、私も登場したってわけ。」

なんと、この神……。

出番欲しさに登場したらしい。

というか、出番って何？

そう思いながら、私は神を見た。

白いドール人形に着せるような服と帽子をかぶり、同じ色の傘を持っている。

背中には天使の羽根ではなく、悪魔のような羽が生えていた。

……何その格好。

神自身、身体も顔も幼くなってるし、髪も青っぽいショートヘア

になっている。

「ふふふ。この格好の時は、私の事を「お嬢様」って、いいなさい。良いわね。」

神が横暴になった瞬間であった。

「私の出番とか少ないのよ？　なら、これぐらいはやっても良いはずよね？」

022 (後書き)

神はレミリアになって登場した。

おそらく、すぐ消えるであろう。

やってみただけです。

一応、敵っぽい物を作ってみた。

能力は、分かる人には分かるアレ。

戦闘能力が貂魔テンマしかないと言う……。

いや、6巻以降はほぼ最強種か……。

Q、本編にスカーレット姉妹は出るのか？

A、神が何かしない限り、本人は出ません。

一応、伝承みたいな形で絡ませる予定。

けど、おそらく本人は出ない。

……すでに東方化してきたのなら、ここいらでアンケートを取るのもありかな？

1・スカーレット姉妹を無敵モード（弱点なし）で原作500年前辺りから参加させる。

2・邪魔になるから、現状維持。

3・というか、フランのセリフが少な過ぎて書けないから、いなくて良いと思う（b y作者）。

4・普通に東方のスカーレット姉妹を登場させた方が良い。

5・おぜうさまに妹様？　だれそれ？　知らないから知らない。

6・リリィが伝承に残っていた二人を、ダオライマ球内のみの活動制限で、作り上げる。

7・どちらでも構わない。

8・おぜうさまだけで良い。

9・妹様だけで良い。

選択肢ではないので、あしからず。

期限は……原作500年前になるまで。

……長いね……。

というか多いね W

023 (前書き)

神がふざけると言うお話。

咲夜のチート設定も、少しばかり書いてみた。

というか、さっさとエヴァに会いに行け……。

アンケートはまだ閉め切っていませんよ。

|| || || 女神 || || ||

いや、久しぶりの登場って良いわね。

え？

そんなに立ってない？

さっさと消えろ、ですって？

はいはい。

さっさとお話したら、消えるわよ……。

「で、どうして咲夜をここに連れてきたの……。」

そう聞いてきた。

妙に殺気立ってるわね……。

……悪いことした？

「まあ、アレね。貴方達が心配そうに思ってたから、かしらね。」
前々から思っていたけど、キャラを変えると口調まで変わるって言

うのはどうにかならないかしら？

別にいいのだけど……。

というか、レミリアってこんな口調だったかしら？

軽くカリスマブレイクしてる気がするのだけれど……。

「ま、これから先、咲夜の力がある事もあるからね。」

特にカシオペアとかカシオペアとかカシオペアに。

……全部カシオペアよね……。

まあ、他にもいろいろあるんだけどね。

……それにしても、この二人狙っているのかしら？

名前が咲夜なんて、ぴったしすぎでしょ……。

ああ、もう本当に早く帰って東方やりたくなってきたわ……。

「え、力って？」

ああ、説明の途中だったわね。

「簡単に言えば……。 時を操る程度の能力……。」

「「「え。」」」

「……を改造して、時を操る程度……つまり、時を止めることができる、なおかつ動ける人物も特定することができる能力よ（キリッ）」

今さら思うけど、それってチートよね……。

私がやったから、何も言えないのだけれどね……。

「え、最強じゃ……。」

「あと、ナイフ投げたら反射して戻ってくるくらいかしらね？」

そう言うと、三人は口を咂然としている。

……意外と面白いわね。

「あ、ナイフで思い出したわ。 ナイフ……自動で手元に戻ってくるわよ。」

私はそう言うと苦笑した。

「当たり前のように不老不死化したから、最強よね……。 どうかしら、私の所でメイドをするって言うのは。」

咂然としているため、何の反応もない。

まあ、面白いから良いのだけれど。

……ん？

異物の感覚……？

……あの馬鹿、何か送りこんだ様ね。

……そうだ。

「ちょっと良いかしら？」

……なんか咲夜が「急展開過ぎてワロタ」といっている気がするけど、無視よ無視。

……基本的に「急展開過ぎてワロタ」と言われて、話を考え直す私（作者）じゃないわ。

こういうのは、ノリとテンポよ！

さっさとエヴァにあわないと、原作タグがあやしくなっちゃうからね。

こういうの急がないと、私の不評に繋がっちゃうのよ。

「……敵が来るわ。もの凄く強いのが……。」

その一言で、全員警戒し始める。

「という事で、咲夜にそれを撃退してもらいたいの。力の確認だと思って、ね。」

こうでもしないと、面白くないわよね。。

流石、文字を操る能力……もとい、「運命を操る程度の能力」！

無理にでも、戦闘に持つて行くわよ……。

023 (後書き)

十六夜咲夜を知らない人がいると思われるため、軽く説明。

原作は「東方Project」。

皆には「東方」と言った方が伝わりやすい。

紅魔館という洋館で、住み込みのメイドをやっている女性である。

完璧そうに見えるが、少し抜けているキャラクター（だそうだ）。

得意技はナイフ投げとタネ無し手品。

体術もできると言う、メイドさん。

ナイフ投げは、料理の腕に比例するらしい。

なぜ、ナイフ投げと料理と思うが、気にしたら負けなのであろう…
…。

投げナイフの射程は、36m。

レミリアを見て鼻血を出すことから、ロリコン疑惑がある。

結構、動画でそういうネタがよく見られる。

- ・時間を操る程度の能力

時間を加速させたり遅くしたり、停止させることができる。

しかし事実上、時間を戻す事は出来ない。

詳しい事は、ニコニコ大百科をご覧に頂けると良いと思われる。

024 (前書き)

納豆が嫌いな私です。

あのねばねばが、生理的に受け付けないんです……。

というか、豆自体が好きではないんです……。

それにねばねばが加わった事で……。

うっ……。

|||||リリイ|||||

神……が「敵が来る」と言った瞬間に、私は身構えた。

辺りに気配を張り巡らせる。

……普通の人間の気配はない。

普通の……は。

神が言いたいののは、この事かな？

人とは思えない、私と同じくらいの禍々しい気配。

それがまっすぐこちらに向かってくる。

……気取られたか……。

腰に手を持って行き、すぐに対応できるようにビームサーベルを持つ。

……狙うは襲いかかってきた瞬間……。

「止めなさい。」

しかし、神がそれを制す。

私は神を見ると、神は少しばかり苦笑していた。

「咲夜の能力の確認には、丁度良いのよ。」

……本当に咲夜にやらせるつもりなのか。

咲夜は私達とは違い、ごく普通に戦いもしないで生きてきたのだ。

それでもやらせるのか……。

すこし、神に殺意を抱いた。

|| || || 束 || || ||

神とリリイちゃんが何か話してる。

多分、咲夜に戦わせようとしてる事に、リリイちゃんが怒っている

のだと思う……。

私も反対だよ……。

何処に、子供に戦わせようとする親がいるの。

……はあ。

けどこの世界って、戦わないと自分の身が危ないんだよね。
今ここで戦いを覚えておけば、自分の身ぐらいは守れるかな。

……たぶん、神はそう考えてると思うけどね……。

でも、親は子の心配をする者なんだよ……。

ま、仕方がないか……。

咲夜が負けそうになったら、助けるぐらいで良いかな。

えーっと、レイジングハート、レイジングハートは、っと。

あった、あった♪

|| || || 咲夜 || || ||

……どうも、皆さんはじめまして？

十六夜咲夜……改め、旧姓である篠ノ之を再度名乗らせていただきますしょう。

篠ノ之咲夜です。

なんか変な気配を感じるのですが、これは気のせいではないんでしょうね……。

もしかして私死ぬんじゃないのかなって思うような、嫌な予感がね……。

それよりも、それと戦わされそうになってるんですが……。

回避できないのですかね……。

これまで、殺人経歴なんてありませんよ。

むしろ殺人したら、掴まってしまいますしね……。

「……咲ちやくん♪」

母の声が聞こえた。

……久しぶりに、その愛称で呼ばれた気がする。

母は私が困った時に、その愛称で私を呼んで何かをほぐしてくれた。

まあ基本的に、母と父は「咲夜」といつも呼んでくれるからか、少しばかりこそばゆいんだけど……。

「どうしたのかにゃ。」

そう言っ、後ろから抱き締めてくれる。

というか、抱きついてくる。

「ま、戦う事に関して乗り気じゃないんだよね。」 うんうん、この束さんは何でもお見通しだよ。」

……はあ。

そうなら、せめて逃げるとかしようよ、ね……お願いだから。

しかし、その願いは届いてくれない。

「ま、がんばってね。」

母……。

なんで子に戦わせようとするんですか。

アレですか？

この世界は、戦いが普通だって言うんですか？

私は知らず知らず、再度ため息を履いていた。

024 (後書き)

咲夜の愛称が微妙な件について……。

仕方ない。

即席で作ったんだもん…… (ノ△T)

あゝ、次話わ……。

やる気のない咲夜VS馬鹿を殺そうと思う者

の対決。

まあ、咲夜のチート能力全開で、すぐに終わりますけど……。

時は戻せないけど、タイムラグなしで時を止めたりする事は簡単
by 神

025 (前書き)

眠くてめんどくさい。

蚊がウザい。

暑い……。

そんな夜。

|| || 女神 || ||

近づいてきたわね……。

そろそろ接触すると思うわ。

そう思いながら、私は傘が追いつく間に腕を組む。

……人の姿が見えた。

「来たわよ。」

全員気が付いていたのか、表情が硬くなる。

……面白くないわね……。

そう思いながら、適当に眺める。

人の姿が私達の前でとまった。

「篠ノ之って奴はどいつだ。」

外見は、男。

髪は肩まであり、遠くから後ろ姿を見れば女にも見間違えそうなへ

アスタイル。

三人が一斉に私に指を向ける。

……ん？

なんで私に指を向けるのかしら……？

どういう事か、し……？

「そうか、お前が篠ノ之か。」

……は？

……男は私を篠ノ之だとお、も……て……。

そして私は気が付いた。

この親子、私に男を押し付けようとしているわね……。

否定しないと、私も巻き込まれるわね。

私が巻き込まれたら、咲夜の能力確認ができないじゃない。

……はあ……。

「……違うわ。篠ノ之というのは、そのこにいる三人の事。……あなた、他人の言葉を鵜呑みにするのはやめた方がいいわよ。」

咲夜がため息をついた。

男はめんどくさそうに頭をかいた。

……ふん、私に押し付けようなんて……。

「仕方ない、四人捕まえれば当たりがあるだろう。」

よりよって、その全員を巻き込むと言う選択肢をしたわ……。

仕方ない、強制的に咲夜的能力を発動させようかしらね……。

|| || || 咲夜 || || ||

めんどくさい事になりましたね。

目の前にいる男は明らかに敵でしょう。

話を聞いて、この幼女……いえ。

「お嬢様」^{おぜうさま} はあの時の神様らしい。

ここに送ってくれたことには感謝しているけど、戦うと言う選択肢を突き付けた事については怒っている。

だから男が質問したとき、私は真っ先にお嬢様を指した。

しかし、すぐさまお嬢様が否定する。

……はあ。

ため息が漏れた。

めんどくさい事に巻き込まれるのはいつもの事なんだけど、はつきり言ってそれ以上に性質が悪い……。

仕方なく、ナイフを握る。

……？

その瞬間、何かが起きた。

私を中心に、世界が色褪せる。

……なに？

そう思って、男を見る。

「……。」

男は時間が止まったかのように、動きが止まっていた。

なんなの……。

そう思いながら、周りを見る。

父も母も動きが止まっていた。

……そう言えば、さっき神が「時を止めることができる」って言うてたわね……。

……もしかして、コレって私のせい？

025 (後書き)

厚さで、ちょっとだけ鬱になった日だった。

エヴァを保護しに行きたいから、さっさと戦闘を終わらせる。

めんどくさいという感覚が、文に現れます。

ご注意をWWW

026 (前書き)

さっき、サークルKで激辛チキン（名称忘れた）とコアラのマーチ、
たけのこの里、リプトンミルクティーを買ってきました。

服に、チキンの油が落ちた時には一瞬鬱になりかけた……。

|| || 咲夜 || ||

……。

時が止まったと思われる空間で、私はただ一人悩んでいた。

どうしてこうなったのかと。

世界は少しだけ灰色が掛り、時間が止まっているのだと分かる。

男が何かしようと構えているが、時が止まっているため動かない。

「これが貴方の能力。」

突然、私以外の声が響いた。

「貴方が殺しの覚悟を決めるために、私が強制発動させた世界。」

後ろを振り返ると、お嬢様だけが動いていた。

紅の瞳が私を射抜く。

「……この世界では、貴方は裏に関わってしますの確実。そして裏の世界は、弱肉強食。強ければ生き残り、弱ければ死ぬという世界。そんな世界で、殺さずを貫くことなんかできないのよ……。」

」
お嬢様は淡々と私に向かってそう言う。

「貴方が敵を殺せなかったら、貴方の親が危険になる時だってある。」

「……。」

「だから私は今のうちに、貴方に実践してもら……。」

お嬢様が目をつぶりながら何か言っていた。

だが私はお嬢様の言葉を見殺しして、男に向かってナイフを投げ……殺した。

「ちよっ、えっ、ええええええ!？」

お嬢様は何か驚愕していた。

私はお嬢様の方へ振り返る。

「ちよっ! え!?! そんなあっさり殺しちゃったわよっ!?! え!?!」

未だに驚いていた。

「貴方! そんな簡単に殺して大丈夫なのっ! 吐き気とかはっ!」

お嬢様が混乱しながら叫んでいた。

微妙に面白いわね……。

ついでだから、お嬢様にもナイフを投げる。

だけど、かわされた。

「……貴方……。」

そのせいで、お嬢様は冷静になっていた。

「殺しが何ですか？ 私は篠ノ之の娘ですよ？」

お嬢様に向かってそう言うと、私はお嬢様に投げたナイフを回収しに行く。

どうやらこのナイフが戻ってくるのは、ナイフが止まり、なおかつ時間が進んでいる時ではないといけないようだ。

微妙にめんどくさいナイフ……。

「いつも監視や、観察。拉致未遂や監禁未遂なんて当たり前ですよ？ そんな私が殺しに戸惑うと思いますか？」

そういうと、お嬢様は苦笑いをしていた。

「ま、私が結婚した相手も、私を心から愛してくれましたが……あわよくばって言う気持ちもありましたしね……。　　なんと、殺そうかと思いましたよ。」

「あ、あははは……。」

「そう言わけですから、別にそこら辺は大丈夫ですので能力の使用方法を教えてくださいませんか？」

私はひきつった顔で笑っている神に、そう聞いた。

026 (後書き)

という事で、咲夜はすでに「殺し？　それが何か？」的なテンションになっています。

篠ノ之ですからね。

何でも開発で来て、お金が成る木と思ってしまえば、狙われやすいですしね。

ちなみに、咲夜用のISはこの世界には……ありません。

ISは所持していましたが、ほぼ倉庫代わりでしたし……。

ISの小型ナイフを量子変換して、多量に持ち歩くだけですしね……。

……すみません。

今考えましたW

……束がなんか作りそうで怖いな……。

ナイフ収納型ISとかWWW

027 (前書き)

眠い。

疲れる。

めんどくさい。

|||||リリイ|||||

気が付くと、男にナイフが刺さっていた。

私の目を持っても、ナイフの軌道はおろかナイフ自体が見れない。

束も分からなかったのか、驚愕している。

男は目を見開いたまま、仰向けに倒れた。

「……。」

何も感じなかった。

何も分からない。

ただ咲夜が手を男に向けていて、男が死んだと言う事しか分からなかった。

男に刺さっているナイフが、咲夜の手に戻る。

「……咲夜……。」

私は血のついたナイフを持った咲夜を見て、啞然とする。

確かに、神は咲夜に戦わせようとしていた。

おそらく、この世界で生きるための覚悟を決めさせるために。

私としては束と一緒に私に守られて、平和に生きて行って欲しかった。

しかし目の前の光景で、それらが遠のいて行くような気がする。

「……。」

咲夜は男を見て、ただ目を細める。

……私は少し信じられなかった。

男の死因は、咲夜が持っているナイフで間違いないだろう。

なら、それを使って男を殺したのは？

「……。」

間違いなく咲夜だ。

私は信じられないと言う気持ちと、やっぱりという気持ちで咲夜を見つめる。

「ふう。」

咲夜はそう息をつくと、ナイフの血を指でぬぐい落す。

「これで良い？」

そう言っ、咲夜は神を見た。

神は「上出来」とい、目をつぶった。

「……リリィちゃん？」

「……何も聞かないで。私も何が起きたのかよく分からないんだから……。」

私達はため息を吐いて、咲夜を眺めた。

|| || || 咲夜 || || ||

私は時を再度止めた。

男からナイフが抜けたとき、私の眼には不可解な現象が見えた気が

したからだ。

父も母も動かなくなる。

「……。」

私は男に近寄った。

……ん？

傷跡が消えていた。

確かに頭部にナイフを刺した。

刃が全て埋まるほど、刺さっていた。

……それなのに、男の額には傷が見当たらない。

「……どういう事？」

目を細めて男を観察するが答えが出るわけでもなく、仕方なしにお嬢様の方へ向く。

「……。」

無言で説明を促したが、お嬢様は首を振った。

考えろと言う事ですか？

私は仕方なく男の死角に移動し、見やすい所を切った。

……これぐらい深く切れば、多分分かるはず……。

……ついでに、心臓も刺しておこう。

男の背中に、ナイフを投げ刺す。

そして時間の流れを進めた。

「っ！」

男は痛みに耐えていた。

……。

私は男を観察し続ける。

徐々に男の傷が回復して行った。

027 (後書き)

M Gのウイングガンダム（E W）を作って無かったから、M Gを積んでいる場所を探したら……。

無い……。

無い……。

えっ!？

ゼロカスが無いっ!!

もしかして作っちゃった!？

と思って作品棚を見るが、ゼロカスの姿は無く……。

……鬱だ……。

という事で、買いに行こうかな……。

028 (前書き)

別名「神と男の退場話」。

さっさと終われ。

エヴァに会いに行け。

|| || 咲夜 || ||

……傷が回復する。

回復系の能力でも持ってるのでしょうか。

男が私を見る。

「今のお前か？」

そう言うのと、男は私に向かって跳んできた。

魔法みたいなファンタジーではない、純粋な脚力。

それで一瞬にして私に詰め寄った。

けれど私はあまり驚かない。

投げナイフではなく、アーミーナイフを右手で持ち横へよけながら
男の頬を薙いだ。

男はそれでも追撃の手を緩めない。

私は再度、時を止めた。

……？

傷が回復しない？

良く見ると男の傷が回復してないのだ。

致命傷を負わないが、傷は傷だ。

回復するだろうと思ったが、男の傷は回復しなかった。

……不死者じゃないのかしら？

そう思いながら、ナイフで心臓を一突き。

肉をひきさき、突き進む感触がする。

冷凍した鶏肉よりは、柔らかいと思う……。

胸骨の間を刃は進み、心臓を貫く。

普通なら、これで死ぬはず。

咲夜は男から離れると、時間の流れを進ませる。

「……ぐあっ!？」

マンガみたいに男はうずくまる。

だが、すぐに立ち上がりナイフを心臓から抜き取った。

「……何をやったお嬢ちゃん。」

男はそう言うと、身構える。

しかし昨夜は「お嬢様、不死者と戦うのめんどくさいので、帰ってもらえませんか？」と言った。

男がピンピンしている。

死ぬ寸前とも思えない。

おそらく服の下の傷はもうないであろう。

そう考えると、男は不死者である。

「……そうね……。」

お嬢様はそう言って男に近づいて行く。

男は警戒しながら、お嬢様を見る。

「あなた、転生者でしょ？」

お嬢様がそう言うと、男は目を見開いた。

「誰がここに送ってきたのかしら？」

……転生者？

あの男もそうなのですか……。

私はそう思うと、男をただ眺めた。

「……ふうん。あの馬鹿が送ってきたのね。」

どうやら、思考……というか記憶を除いたようです。

「貴方もここに来たかったわけじゃないのね……。」

お嬢様が同情的な目で男を見た。

男は頬をひきつらせて、お嬢様の言葉を聞き続けている。

「……安心なさい。貴方は役目をしなくていいわ。」

私には何を言っているのか分からないですね……。

あ、私たちでしたね。

……あ、男が何か納得しました。

「……オッケー。んじゃあ、この子は私が預かるから。」

お嬢様はそう言って、男と一緒に消えて行きました。

……何がなんやら……。

028 (後書き)

……さて、エヴァとの出会うシーンはどうしようかな……。

テンプレ的に、エヴァが下手こいて魔女狩りにあうシーン？

それともお腹空かせて、リリィ達に見つけられるシーン？

それまた、エヴァがリリィ達を見つける？

あわずに魔法使いと戦闘後に、出会う？

なんか、想像力ないね……私って奴わぁ……。

029 (前書き)

飛び飛びで進んでるけど、許してね。

真面目に書いてるわけじゃないしね……。

|| || 束 || ||

「……。」

私達は目の前の光景に何もできないでいた。

神が消えて半年。

とりあえず、ヨーロッパに行つてエ……エヴァ……エヴァンゲリオンドっけ……、まいつか。

その子を探さないといけないらしい。

不老不死になったこの身体だから、それぐらいは良いと思って引き受けた……。

んだけど……。

「……お。」

目の前に倒れている、金髪少女はどうしたらいいんだろう……。

たしか、エヴァンゲリオンと言う子も金髪の子供って言ってたし……。

森の中で、地面にうつ伏せで倒れている少女は本当にどうしたらいいんだろう……。

なんか、近くにちっちゃい人形が落ちてるし……。

しかも……魔力って言うのか分からない物の、感じるし……。

……束さんのめんどくさいゲージ、80%きっちゃったよ……。

「お、お腹……。」

目の前の子がかすれた声で何か言う。

「……お腹……すいた……。」

……なんだろう……。

このやるせない感じは……。

ラウラちゃんを見てる気がしてきたよ……。

||||リリイ||||

……多分、この子がエヴァンジェリンっていう子だね。

妙にぼろぼろのマントを着た、女の子……。

「…………お腹…………すいた…………。」

…………ん？

もしかして、空腹で倒れてるのかな？

…………困ったな…………。

すぐ食べれるモノなんて、荷物にあったっけ？

そう思っていると、咲夜が少女に近づいた。

日本で作った、竹の水筒を少女の口に近付ける。

……空腹時に水でもお腹の中に入れておけば、確かに誤魔化せるけど…………。

そう思いながら、その光景を眺めた。

「…………ん。っ!？」

水が少女の喉を通ると、少女は勢いよく起きあがり水筒をかつさら

うように咲夜の手から取り、思いつきり飲み始めた。

適当に荷物を探ると、なぜかサトウキビを見つけた……。

なぜ、荷物に入ってる……。

……いや、そんな事は別にどうでもいい……。

一応……サトウキビだし、水よりはましだよねえ……。

そう思いながら、サトウキビを少女に差し出す。

「……。」

少女は警戒しながらサトウキビを見つめ、やがて受け取った。

が、食べ方が分からないのか首を傾げる。

「茎をそのまま噛んで食べる事は出来るよ。」

私がそう言うと、言葉が通じたのか少女は茎を噛み始めた。

少女は一心不乱に茎を噛み続ける。

それが、私達と少女の出会いだった。

「少女言うなっ!!」

……はて。

少女か「だから言うなと言ってるだろっ!!」……。

幼じ……「死にたいのか……?」……。

……少女「クロス」エヴァンジェリンとの出会いだった。

029 (後書き)

ま、さっさとキンクリしてエヴァと合おうと言う事でこうなった…。

お腹がすいて倒れていると言う、何ともカリスマブレイクした状態で
の登場www

テキトーに次いこう。

タイトル変えようかな……。

030 (前書き)

まあ、なんとなくで書く今日。

そう言えば、ここ最近……選択肢を出した覚えがない……。

少ししたら出そう。

||||リリイ||||

「……大丈夫か？」

目の前の少女は、お腹がすぎ過ぎていたためサトウキビを、何故かのどに詰まらせると言う失態をしちゃった。

……サトウキビって喉に詰まらせる前に、つまるような大きさで食べれるっけ？

そう思いながら私は少女の前に座った。

「ああ、助かった。 礼を言うぞ。」

少女は少女らしくない喋り方で、礼を述べた。

……一体いくつなんだか……。

そう思いながら、私は口を開く。

「私は篠ノ之リリイって言うんだ。」

私がそう言うと束が「私が天才の篠ノ之束さんだよ♪」と自己紹介し、それに続くように咲夜が「私の名前は篠ノ之咲夜と言います。」と言った。

幼女……って、なんでさっきから「女の子」じゃなくて「幼女」で縛られてるんだろう……。

別にいつか……。

幼女は、全員「篠ノ之」と言う名前を名乗ったため、怪訝そうに私達を眺めていた。

そして咳払いをして、口を開く。

「私は……。」

と、そこまで言っただけのを止め。

「……エヴァと呼んでくれればいい。」

そして、そう言った。

「へー、エヴァちゃんねー♪」

そう言いながら束はエヴァを後ろから抱きしめた。

「なっ!?!」

いつのまにか後ろを取られていたと言う事に驚いたのか、それとも、束の行動に驚いたのか……。

おそらく両方だろう。

良く見ると、性格が義娘のラウラに良く似ている。

まあ、その大佐ファツシヨンの義娘は、私と同じで銀髪だけどね…
…。

私は内心で苦笑した。

「くお、の、離せええ！」

エヴァは必死に束から脱出しようともがくが、束は全然離れない。

……ああ、そう言えば多分……この子がエヴァンジェリンって子だから、この子を保すればいいんだよね……。

追う思いながら、束とエヴァのじゃれ合いを見る。

「……そう言えば、私達って誰を探してたんだっけ？」

束が不意にそう言った。

空気を読んでるのか、と一瞬思ったが気にしない。

「エヴァンジェリンって言う女の子だよ……。」

私の言葉に、エヴァは反応した。

気不味そうな表情をする。

「うん。束が今抱きついているその子。」

そう私が言うと、エヴァは束の腕を外し私に向けて背負い投げの要領で投げつけた。

私や束にとって慣れた事なので、いちいち叫ばない。

一回転して着地するが、着地しきれずに私に頭から突っ込む。

「……危ないね。」

そう言いながら、私は束を抱いて受け止める。

「何が目的だ。」

エヴァは私達を敵と思っているのだろう。

……誤解なんだけどね……。

030 (後書き)

チャチャゼロって百年戦争時代から一緒なんだよね……。

百年戦争時代って……1337ー1453か。

素手にいてもおかしくないよね、うん。

適当に戦闘開始。

おそらく、相手はリリィ……。

031 選択肢？（前書き）

めんどくさい感ばりばりです。

ええ。

ついでに急展開です。

031 選択肢？

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

エヴァが叫ぶ。

「氷の精霊17頭、集い来たりて敵を切り裂け……魔法の射手・連弾・氷の17矢（セプテンデキム・スピリトウス・グラキアーレス・コエウンテース・イニミクム・コンキダント・サギタ・マギカ・セリエス・グラキアーリス）！！」

ちよつとばかり長い詠唱を終え、氷の矢を作り飛ばす。

それらは私を狙い、飛んでくる。

咲夜が何か動こうとしたが、束がそれを阻む。

「……見てて、アレが世界最強と呼ばれたリリイちゃんの力だよ……」

束がそう言ったのが聞こえる。

少し照れながら、数十年ぶりの姿を思い浮かべた。

祖は全てのISの頂点なり、祖は全てのISの親であり……。

祖は……自由の名を持つ最強の災厄なり……。

まあ、なんとなく言いたかったただけなんだけど……。

頭の中でふざけながら私は、身体を変える。

「「なっ!?!」」

エヴァと咲夜が驚く。

私の身体が変化して、角張った形になって行く。

身長も少し伸び、鎧のような形になる。

背中には翼が生え、リリイと言う人の形が消えた。

灰色の身体が、白、黒、青、赤、黄で色付く。

「……こんなもんかな。」

そう言って私は頭部についたバルカンで、氷の矢を全て撃ち落とす。

エヴァはその光景を驚愕しながら見ていた。

咲夜もISの起動とは違う登場に驚いている。

「……な、なんなんだ貴様はっ!?!」

「ケケケ、ゴ主人。 コイツヤツパ何カ変ダゼ。」

あ、倒れていた人形も動き出した。

というか、人形が動くんだ……。

「ZGMF-X10A……。」

咲夜がそう呟く。

エヴァはその言葉に、なんだそれと言う感じでリリースを眺めた。

「……っちからだ。」

ん？

レーダーに感……。

誰かがこっちにくる。

そう思いながら、音がした方向を向く。

そして、一人のロープをかぶった人が現れる。

「いたぞっ！！ 悪の吸血鬼だっ！！」

……男の声……。

私の方を見ずに、男は仲間を呼ぶ。

エヴァがたじろぎ、身を後ろに傾ける。

「……なにか、悪いことしたの？」

私は真面目に聞く。

しかしそれがいけなかったのか、ロープの男が私を見る。

「っ!?!?　なんだお前!?!?」

めちやくちや驚いていた。

「さては、その吸血鬼の仲間だなっ!?!」

……はあ。

何か言おうにも、ため息しか出ない。

呆れて言葉も出ないとは、この事だろう。

男の仲間が集まってくる。

全員ロープをかぶっている……。

正直言ったださい……。

「……で、何かしたの?」

そう思いながら、男達をよそにエヴァに近づき聞く。

「おわっ!?!?　いきなり近づくなっ!?!」

私の接近に気が付かなかったらしい。

「で?」

「やるわけないだろう。 やったとしても正当防衛だ。」

……正当防衛って、この時代にそんな言葉あったっけ？

明治でも「当義殺^{じやうぎころ}」という、名称だったのに……。

……どうやら私達は厄介な事に巻き込まれたらしい……。

031 選択肢？（後書き）

まゝ、選択肢もそろそろ入れましょうか。

まゝ、皆さんエヴァが好きそうなので、意味無い選択肢を1つ入れますか。

選択肢？

どうする？

？・エヴァの味方をし、男たちを殺す。

（エヴァの好感度が上がる、おそらく魔法使い達にフリーダムが存在が広まる……と思う）

？・エヴァの見方をし、男たちの戦闘能力だけ奪う。

（フリーダムの名が、魔法使い達の間広がる）

？・男たちの味方をする。

（最終的には魔法使い殺害）

いつも通り3日後の7月4日まで。

032 選択肢？決定（前書き）

？・エヴァの味方をし、男たちを殺す。

が多かったので、それで行きますね……。

というか、今日が4日だと思っていた……。

032 選択肢？決定

|||||リリイ|||||

「正義の名の元に死……。」

男が口を開いた瞬間に、男の仲間が血を噴き出し倒れる。

めんどくさいので、頭部のバルカンを無造作に撃っただけだ。

もちろん、急所を狙っているため目の前の男以外死んでいる。

「……。」

「……酷くない？」

「酷くないでしょ……。」

男が仲間を見ながらそう呟く。

「せめて言いきらせてくらないか……。」

そう言って、男は硝煙が上がる私の頭部を見た。

バルカンシステムを初めて見たのか、若干驚いている。

「どうせ死ぬなら、言おうが言わないが関係ないでしょ。」

「……あ、はい……。」

どンドン男の気が小さくなって行く。

「で、遺言は？」

私がそう言うと、男は目を瞑り「カッ」と見開き叫ぶ。

「天使ちゃん、マジ天使いいっ!!」

「お前完全に転生者だろおおおお!!」

男の遺言を聞くと、私はそう叫びながらビームサーベルを男の鳩尾に向けて突いた。

少し苦しんでから、男は地面に倒れ込んだ。

「……悪は滅^{バカ}んだ……。」

そう言うと、束の方へ振りかえる。

そこには、座りながらモニターで漫画を読んでいる束がいた。

「……あ、終わった？」

束はそう言って、こちらを向いた。

「AB」と書かれたモニターを少し上に上げる。

少しばかり、肩を上げ束に近づく。

……なんで、束はそんなにのんきなんだろう……。

「……御主人、完全ニ忘レラレテンジャーノカ。」

「……。」

その声に、私はエヴァの方へ振りかえる。

「ワスレテナンカイナイヨ。」

「嘘ダナ。」

「ウソジャナイヨ。」

実際忘れてはいない。

ほんの少しだけ、頭からエヴァの存在を外していただけたよ。

「……マア、イイカ。」

人形がそう言って、ナイフを構える。

「斬ラセロ。」

そう言いながら、私にナイフを振りかざす。

もちろん、私は何もしない。

ただ立っているだけ。

ナイフが装甲に当たる。

「ナッ……。」

そして、ナイフが根元から折れる。

人形とエヴァが驚いた表情をした。

人形の表情は変わっていないけど……。

人形、もといキーリングドールが私から距離を取る。

「……御主人、才縄二付キナッ！」

そしてエヴァに向かって、そう言った。

エヴァはそれを見ると、アホらしそうにキーリングドールを見る。

「……だらが漫才をしろと言った……。」

エヴァはため息をつきながら、額に手を当てた。

032 選択肢？決定（後書き）

キャラブレイク。

なんか、腰が痛い状態で書くに変な風になっていくね……。

戦闘もめんどくさいので、魔法を使わせることなく殺害。

天使ちゃん、マジ天使。

ただ言いたかっただけです。

033 (前書き)

……めんどくさくなってきた……。

勝手にやっておいて、そう言うって……。

||||エヴァンジェリン||||

話をして分かった事がある。

どうやらこいつらは、馬鹿な魔法使いではないと言う事だ。

警戒した私がばかだった気がする……。

いやあの時は、普通は警戒するよな？

……うむ、するな。

ま、そこら辺は考えるのはよそう。

私達は適当に森を抜けようとしていた。

そう……、私達、だ。

結局私は負けた。

だが、捕まらない。

逃げてもいいのだが、行くあてがない。

ついでに、こいつらは私以上の化物だ。

なら、付いて行った方が得策じゃないのか？

おそらくこいつらは、私が逃げても構わないと思っているが……、こっそり追いかけてくるだろう……。

……自分より年下を見ると言うのはこんな感じなのか……。

……と、違ったな。

「はぁ……。」

私は知らずにため息をはいていた。

リリィが振り返り心配そうに私を見るが、私は「何でもないぞ」と言って再度思考の海に漂い始める。

篠ノ之家。

別の世界の住人と言うが、アレを見せられたら信じるほかない。

篠ノ之咲夜。

旧姓を名乗ってはいるが、本名は十六夜咲夜。

時を操る程度の能力を持ち、ナイフを高密度な計算で投げ地面に当たってもリフレクションショットができると言う、反則染みた女。

しかも、私より年上ときた……。

篠ノ之束。

別世界の理を捻じ曲げ、守るべき物のために動いたらしい女。
遠距離攻撃で勝てるモノはいない、と言われるほどらしい。

あと、天才……。

まさか、軽く説明しただけで大体を理解されるとは……。

ついでに四人の中で、一番年上だった……。

まさか約百歳と言われた時には、私も啞然としたな……。

篠ノ之リリィ。

女だと思っていたが、まさかの男。

別世界で不老不死を持ち、フリーダムと呼ばれる変化と妖刀を七本
所持しているわけのわからない存在。

そして束同様、約百歳。

この中で、一番危ない人物と言っても良いほどだ。

……というか、な。

三人とも危険人物だ。

全員吸血鬼ではないが、不老不死って……。

……いや、今思っても意味がないな。

いつかゆっくり考えようか……。

モニター、機械と呼ばれる物を見せられた時には「ああ、完璧に別世界の住人だ」としか言いようがなかった。

魔法世界と言う所でも、こんな技術は無いらしい。

本当……、なんなんだこいつら……。

「……はあ。」

知らず知らずのうちに、私はまたため息をついていた。

……やってられないな……。

別の世界で指名手配され逃げ続けた事がある者が二人いる事に、私は少しだけ気が楽になった。

033 (後書き)

……軽くキンクリしていいかな？

いや、するよ。

いや、する。

させろw

034 (前書き)

なんか、夢で龍が出てきた。

うん。

ミラボ○アスが、ね。

||||エヴァンジェリン||||

アレから半年近くが立ったか。

いや、こいつらの近くにいると退屈せずに済む。

最初はエヴァンジェルンと言う名前だと不味い時があるからと言いい、人目がある所では篠ノ之性を名乗らせてもらっていた。

なんでも四人とも同じファミリーネームだと、相手の目を掻い潜り易いらしい。

実際、馬鹿にマグダウェル性を名乗らなかつただけで、無視された事もある。

いやいや、アレは面白かった。

笑いをこらえるのに必死だったよ。

篠ノ之エヴァと名乗った時にはバレると思っていたが、いやはや…
…。

チャチャゼロは腕に抱いて子供らしく見せる。

そうするだけで、男は私を吸血鬼だとは思わない。

……ああ、面白いな。

ほんと面白い……。

面白いんだがな……。

「……御主人。現実逃避シテンジャネーゾ。」

……はあ。

なぜ、こんな奴が目の前に……。

魔法世界でもないのに……。

黒が掛った紫と灰が掛った白色。

大きな翼に、長い尻尾。

手足はあるが、指の間に水かきの様な膜がある。

なにより……。

「……。」

長い首に、角が生えた頭に鋭い牙……。

……分かるか？

目の前に大きな龍がいるのだ。

龍だ、龍だぞ！！

可笑しいだろ！！

この地上に龍なんかいないし、想像上の存在のはずだ。

しかし、現実には目の前にいるんだぞ！！

ここに一般人がいたらどうする気だったんだっ！！

いや……。

いても、私と同じように畏怖の対象になるだけか。

そう思いながら、龍を見た。

龍も私をただ見ている。

……なんでこんな時に限って、リリィ達はいないんだっ！！

というか、黒龍だぞ！！

黒龍！！

龍主の中で、一番強いと言われている黒龍だぞっ！！

「……落ち着け御主人。」

チャチャゼロがそう言うが、龍を前に落ちつけだど？

無茶を言うな。

いくら不老不死、悪の魔法使いとはいえ……。

吸血鬼としても……。

黒龍相手に無事に勝てるかつ！

……いや修業を積みば、……勝てるかもしれないが……。

流石に……。

「……。」

「っ！？」

黒龍がこちらに向けて口を開く。

私は咄嗟に、手を前に出し楯を出す準備をする。

が、攻撃は来なかった。

「ア……。」

そう言う口を閉じ、眠たそうに眼を閉じる。

……眠たそうに？

……いやいや。

黒龍は龍主の中で強くてプライドが……。

そう思っていると、黒龍は私の前で首を地面に下ろし横たわる。

「寝タゾ。」

「……分かってる……。」

……なぜだろう。

私の中で、黒龍と言う存在が……。

崩れ去った様な……。

まあ、良い。

帰ってくるまで、黒龍を眺めているか……。

034 (後書き)

と言う事で、なんか夢をお告げと捉え出した黒龍。

というか、ミラボ。

仲間にしたら面白そうだな、と思いつつも悩んでいた W W W W W

035 (前書き)

おひさひさ。

ちよつとばかり、無茶な事が始まるよW

||||束||||

今現在、私とリリイちゃんと咲夜は目的のためにとあるものを集めていた。

戦場だった場所を歩き回り、死体から金属物質をはぎ取っていく。

リリイちゃんが前世で作成した試験運用型IS運搬艦の設計図を持ってきて、「移動型の家を作るよ」と言った時には驚いた……。

これから起こる事にとってみれば、おそらくこういうのは早めに作っておいた方が良いのだろう。

おそらく運用艦は居住区として利用できるし、砲門をかなり搭載して戦闘艦としても運用できる。

ISの基本構想をそのまま流用して、宇宙艦としても航行ができるようにする。

潜航など出来れば、もっと面白い。

私は死体を見てレイジングハートを翳す。

《金属反応はありません。》

レイジングハートがそう報告し、私は別の死体の方へと歩き出す。

私達は大量の金属物質を加工し、一つの巨大戦艦をつくろうとしているのだ。

ISの技術とフリーダムのビーム技術。

さらに、フリーダム内にあった全ての技術の集大成。

全長420mにも及ぶ巨大戦艦。

「アークエンジェルか〜♪」

元は強襲機動特装艦らしい。

フリーダム内のデーターベースにあり、それをリリイが改修しながら強化したらしい。

おかげで、通常のコストより14%抑えて作る事ができ、修理も簡単にできるそうだ。

まあ、何故か完前方に巨大なカタパルトがあったらしいが、リリイがIS用に改修している。

とはいっても、ISなんか私達以外誰も持ってるはず無いんだけどね〜。

そうは思っているが、一応つける。

技術者としては、カタパルトはあっても困らない物なのだ。

特に宇宙での資材搬入口とか。

必要あるとは思えないけど。

「それにしても本当に作る気？」

私は汗をぬぐいながら、リリイちゃんに話しかける。

リリイちゃんはモニターでプログラミングをしながら、私達と同じ事をやっていた。

問題点がかなりあるが、リリイちゃんは本気で作る気だろう。

金属加工がこの時代には無いといっても良い。

機械技術が発達していない。

以上の事から、作るのは不可能だろう。

しかし「え？ 素材が無ければ作ればいいんだよ。」と言うリリイの言葉で一蹴。

真面目に鉱山までISで資材を確保しに行ったり、戦場で貴重金属などを回収したりと真面目にやっているんだよね……。

「あれば、かなり便利だと思うけどね。」

「それはそうだけど……。」

私は何も言えなかった。

ISを作るならいざ知らず、420m級の巨大戦艦なんか今まで作った事が無い。

何年かける気なんだろうと思いつつも、作業を進めるしかないのだった。

035 (後書き)

と言う事で、家代わりにアークエンジェルの製造に力を入れ始めます。

ぶっちゃけ、アークエンジェルで魔法世界の艦隊を薙ぎ払いたくなってきたわけです。

レーベン……何とか城もありましたね。

500年前までには、完成させる勢いでやりましょう。

036 (前書き)

神のターンです。

神のターンです。

何話ぶり？

ちなみに、今回の神は何のコスプレもしていません。

ご自由に姿をご想像下さい。

|| || 女神 || ||

おひさひさ。

やっぱりあいさつは大事だよね。

バナナ帝国の御挨拶は「バナナナ」だった気もするけど、気にしな〜い、気にしな〜い。

と言う事で、久方ぶりの登場です。

吾輩は神様である、名前はまだない。

まあ、そんな感じで久しぶりのターンなんですよ。

何話ぶりだっけ？

「おい、聞いてんのか？」

ん？

ああ、私がいつも気にかけている夫婦に危害を加えようとした男じゃないですか。

ま、男と言う性別で呼ぶのもアレですし、クロガネ タイト鉄大兎と言う名前で呼ば

せてもらいましょう。

丁度いい感じで、原作の鉄大兎と似たような能力持っていますしね。

……私が強化したせいで犠牲者以外の力も持ち始めちゃってるけど……。

それにしても、顔が微妙に似てないですね……。

後で本人に了承得て整形させますか。

「……と言う事だが……。聞いてないな。」

頭部から兎の耳みたいな何かが伸びてくる。

だけど、それは空中で何かに阻まれるように止まった。

「ごめんごめん、本当に聞いてなかった。」

私はそう言って、それを消滅させる。

鉄くんは舌打ちすると、ため息と一緒に肩を落とした。

……そこら辺は原作とは違うんだね。

まあ、性格まで一緒だったら転生者なんて唯の入れ物か。

「……もう一度言うぞ。あの世界に転生者が数名入りこんだ。」

あらく、それは大変。

私はそう思いながら、鉄くんを見つめ続ける。

あの世界とは、もちろん私のお気に入りの夫婦が行った世界だ。

「転生者の詳細は、『Fate／stay night』のアーチャーをそのままコピーしたヤツと、セイバーをコピーしたヤツが一人づつ。魔力と気を強化して魔法をかなり使えるやつが一人。

「魔法少女リリカルなのは」のフェイト・T・ハラウンを記憶以外丸々コピーしたヤツが一人だ。全員不老不死化されているな。」

それを聞いて私は少し呆れた。

「……容姿を変える事まで流行ってるの？」

養子までそっくりにする必要が分からない。

「しらねえよ。問題はアーチャーと気と魔力を強化した奴だ。」

私はため息をつきつつ、適当に聞く。

「ハーレム願望持ちの男だから……って、聞いてんのか？」

「キイテルヨ。」

生返事でそう返す。

鉄くんは諦めたのか、口を開く。

「女の方は問題ない、ただ生き返って過ごしたいのに、馬神の趣味

でああなっただらしい。」

その言葉は私に重いよ……。

「……これ以上仕事増やさないでくれないかな？」

一応神にも、転移出来る世界が決められている。

それは神自身が持っている領土と言っても差支えはない。

今回の事は、他神領土不法転移罪と一部の神で言われている犯罪だ。

「……馬鹿の方はいつも通りに頼むね。」

私はそう言って、P Cに向き直る。

鉄くんは「はいよっ」と返事し、馬鹿を抹殺しに行こうと歩き出す。

「あ、あとで「ef」貸せ。」

「そこに置いてあるから、仕事が終わったら取りに来なさい。」

私はそう言って近くの机に置いてある、二つ箱をを指差した。

鉄くんもオタク化したな。

036 (後書き)

まあ、適度にネタを入れてみた。

神様の日常はこんな感じって？

知らないよ。

とりあえず、転生者を入れてみた。

最初に転生者云々入れたせいで、こんな感じになったのは仕方がない。

仕方が無いんだ。

基本ネタは何処からでも持ってきますよ。

037 (前書き)

……作者が暴走をし始めた。

本当に……。

暴走だよ……。

あとがきで、ふざけながら今後のクルーについて長々と書いておこう。

|| || || ?? ? ? || || ||

……だあああつ、くそっ!!

ほんと何処なのよここ……。

いきなり「貴様はすでに死んでいる」って言われたら、こんな所にいるし……。

意味が分からない……。

しかもさっき川で自分の姿を見たら、金髪ナイスな別人になってるし……。

……というか誰って感じ……。

どっかのアニメで見た事があるんだけど……、思い出せないし。

「……冷静にならないと……。」

そう言って冷静さを取り戻そうとする。

けど、冷静になりきれない。

……たしか、火事で娘を助けるために飛び込んで……。

窓から救急隊の人に、娘を渡したら……天井が落ちてきて……。

……潰されて……。

……燃やされて……。

死んだ。

……で、今別人になって生きている。

「……夢だね。」

そう言って呆然と空を見る。

黒いスーツに整った外見。

しかし、夢とは思えない。

「……コレが俗に言う、転生って奴なのかな？」

だけど、既に身体は成長してるしね……。

身体を弄られた転生……？

「……どうしてこうなったのかな……。」

|| || || リリイ || || ||

……そこそこ戦場からはぎ取ったし、エヴァの所に変えるかな。

……と、いいたいんだけどね。

《はろは、聞えてる？》

女の神からの連絡ですよ。

「聞こえてますよ。」

貴金属を大量に詰めた袋を担ぎ、そう話す。

《戦艦作るのは良いけど、搭乗員が少ないでしょ？
いい搭乗員いるから確保に向かって。》
だから、丁度

……。

「……本音は？」

《面白そうだから。》

この神、死ねばいいと思うのは私だけ？

自然に袋を握る手が強くなる。

ああ、これがストレス……。

《ま、適当に転生者集めてクルーにしちやいなよ。》

本当に何を考えているんだろう。

《え？ 私が面白ければいいというわけ♪》

ああ、人類史上一番めんどくさい人種と言うわけね。

《クルーは女性だけで構成ね。 その世界に強大な力を持つ男性が現れたら、即座に殺してね。》

……やばい。

……それは、めんどくさいよ……。

束と咲夜は、私が独り言を言っているかのように思ってるんだろうね。

しきりと私の顔を覗き込んできるとよ。

《戦艦作るの手伝うからさ……、お願いできないかな？》

……交渉材料はあるんだ。

なら、別にいいかな？

「……了解。」

そう言うと、さっさと通信を切る。

そして振り返ると、二人に向かってなんて言おうか考える。

「……これから戦艦を作りながら、女性転生者だけを探す事になりました。」

めんどくさそうにそう言うと、二人は「ああ。」と納得した。

……納得する場所あった？

とりあえず、エヴァの元に帰ろう。

037 (後書き)

と言う事で、転生者を仲間にして一つの組織を作ろうかと思っています。

まあ、おそらくこの時代に転生された者は不老不死化されてるでしょうから、そこら辺は大丈夫かな？

ま、作者の暴走で適当にやるんですけどね。

名前..不明

偽名..フェイト・T・ハラオウン

外見..フェイト・T・ハラオウン

能力..別体系の魔法使用可

所持..バルディッシュ・アサルト

口調..原作フェイトとは違う部分アリ

備考..不老不死化されている

まあ、最初の所ではフェイトがクルー入り。

なのはで行こうかな、って思ったけど……束さん自身がレイハさんを所持しているため、最初っからかぶるのは面白くないので断念。

ま、原作で運転できたんだし、操舵師が妥当かな？

面白く、マヴラブキャラの「クリスカ・ビャーチェノワ」のそっくりさんでも投入してみるか。

戦術機をISに変えれば戦力としては問題ないし。

選択肢はないけど、作者にも分かりそうな女性キャラを……。

このキャラの外見した転生者、カモーン！！

と言うやつあれば、御報告を。

……スカーレット姉妹投入計画が、再浮上しそうなあとがきだな。

期限はなし。

どんどん組み込む予定。

gdgdになると分かっているもやる。

これが、やりたかった。

ISの方だと真面目に出来ないしね。

038 (前書き)

今回の話は、完全に巨大ロボ介入のためです。

ちなみに、転生者はかなりの勢いで募集中。

あとがきに続くかもしれない……。

|| || 女神 || ||

……とりあえず、手伝う事になった。

けど、420m級の戦艦を大型機材なしで作れるとは思えない。

……数機ほど機体を連れていくか。

「ねえ。」

私はそう言って、鉄くんを呼ぶ。

鉄くんは隣の部屋で休んでいるはずだから、すぐ着てくれる……。

はず……。

「……。」

しかし、一向に来る気配がない。

不思議に思いながら、私は鉄くんの部屋に向かう。

「ねえ、聞ってる？」

しかし、返事はない。

「入ってこい、そして助けろっ!!」

あ、返事があった。

しかし、前から思っていたけど口調がどうにかならないのかな？

私はそう思いながら、ドアを開ける。

基本的にこの世界は平面で真っ白だが、私は想像し作り上げた場所は家みたいな構造で色々な物がそろっている。

まあ、快適と言うやつだ。

「どうした……。」

私はそう言おうとして、鉄くんを見た。

見たはずなんだけど、目の前には鉄くんと知らない女性がいる。

朱色の髪を背中まで伸ばした高校生らしい女の子。

「……どうしたのその子。」

私が疑問を口にする。

……その身体、……転生者だね。

でも、鉄くんは私みたいな神じゃない。

転生者の設定は鉄くんはできないはず……。

「ミスで俺に送られてきたんだよ。」

そう言うのと頭に手を当てる。

本当に疲れたと言う感じが漂ってきた。

「どうも……。」「

目の前の女性はそう言ってお辞儀する。

礼儀正しい子は私は好きだよ。

うん。

私は鉄くんとアイコンタクトして、女性を引き取る。

「……自分がどうなったか分かる？」

最初は優しくお話する。

女性は頷き、口を開く。

「この人に会う前に、神様と言う方がアニメの世界に転生させてくれると言っていたので、お長いして能力とかも設定してもらい「蒼穹のファフナー」の世界に転生するはずだったらしいんですけど、気がついたらここに。」

その言葉で、私は納得した。

蒼穹のファフナー。

人類とフェストウムと呼ばれる宇宙からやってきた、金色のシリコン型生命体との戦いの物語。

目の前の女性はその中の登場人物、カノン・メンフィスになっている。

いや、所々違う……。

特に前髪のはねが、消えてはいないがかなり落ち着いている。

羽佐間のほうかな？

「で、その姿で貴方はその姿でどう介入する気だったの？」

私はある程度予測を立て、質問する。

原作キャラの姿での介入。

それがどう作用するか分からなくはない。

だが、それでも介入すると言う事は……。

038 (後書き)

と言うわけで、蒼穹のファフナーから、カノンを引っ張ってきます。
もち映画版の方ね。

機体は強化するけどね。

まあ、面白おかしく行こうかな？

適当に進むため、最近選択肢が無い……。

……うm。

作るか？

作った方が良いのか？

選択肢？ (？)

アークエンジェルのクルーに、男性転生者を入れる？

1..はい

(MS系兵器の大量参加)

2..いいえ

(特に変わりなし)

MS系兵器は、対艦用のMSサイズ(約20m前後)のヤツとISサイズ(2m前後)のヤツを構想。

1の方は、00とかそういう系の参加とか？

結構、早く参入すれば真面目に木星に行ってGNドライブ作れると思うけど。

アークエンジェルの搭載機体数が分からないけど、居住ブロックと船体の大きさから考えて、かなり入ると予測。

まあ、すぐに次話を更新。

039 (前書き)

基本「蒼穹のファフナー」ネタですので、分からなければ……分か
らないといってくれば対処しますよ。

キャラを描いたり、兵装を描いたり。

絵は下手ではないと思うけど……。

|| || || 女神 || || ||

「……原作のカノンを引き取って、フェストウムと戦おうかと……。」「

……やっぱり……。

色々突っ込みたいけど、突っ込めない答えだね……。

確かにその姿なら、カノンと姉妹といっても通じる。

まあ、同一人物だしね……。

家族さえいれば、カノンもあんな歪んだ性格にはならないだろう。

だが、適正ないとファフナーには乗れない。

そこら辺は改造してもらったのかな？

出来なくても薬の投与で、乗る事はできるけど……。

そう思いながら、私は女性を見る。

……使える♪

そう思うと、一瞬にして悪だくみを考えつく。

「……悪いけど、ファフナーの世界に行けないわね。」

その言葉に女性は「なぜですか。」と冷静に聞いてきた。

……軍人として存在するカノンの部分が、女性を冷静にさせたのかな？

まあ……、いいや。

こんな軍人娘がいても良いでしょう。

「貴方は私のと事に現れた、つまりその神に捨てられたと言う事。そして私は今からやる事があるのよ。」

嘘だけど。

……キャンセルされたのは、多分鉄くんがその神を殺したからでしょうね。

その言葉を聞くと「私の転生は？」と聞いてくる。

それほど生き返りたいのかな？

良いね、その欲……と言ったら別キャラになりそうだね……。

自重次長。

誤字ったけど、気にしないでおう。

別に性別が女性なら、あの世界では無害に等しい。

「今から貴方は「ネギま」の世界に、私と共に来てもらうわ。目的はあの世界にいる転生者で軍を作り原作に介にゆ……。……凄
い嫌そうな顔だね……。」

女性の顔は凄く嫌そうなモノになっていた。

「……あんな捻くれたガキの世界はいやですよ。」

……確かにね……。

殆どの転生者は、あの世界に行くと主人公を否定する。

私もそうなんだけどね。

「大丈夫、貴方が入る軍は対魔法使い専用軍だから。」

「……つまりアンチ魔法使いや、原作ブレイクしてもいい、と？」

なかなか鋭い子だね。

私は頷くと、女性の身体能力をスキャンする。

適正因子アリ。

パラメーターはカンスト。

専用機はマークドライツェン……。

劇場版機体だね……。

弱くはないんだけどね……。

なんか……ね。

ザインの翼状武装装備状態に変えちゃうかな。

そっちの方が、私的に好きだし……。

ノートウングモデルより、ザルヴァートルモデルの方が好きだもんね♪

適性や、同化などの抗体も強化……。

不老不死化も……オッケー。

「……いやですと言いたいですが、まあ、転生者だらけのアンチも面白そうですしね。」

つまり行くと。

まあ、拒否権はなかったんだけどね。

ちなみに、マークドライツェンは……？という意味を持っているが、PSPゲームだとザインが……？の意味を持つと言う事になっていたね。

うろ覚えだけど……。

「……向こうで私は何をすれば？」

女性は首を傾げ、私に聞いてきた。

順応力あり過ぎじゃない？

私は少し戸惑いながら、口を開く。

「先に付いている転生者と合流して大型戦艦を作り原作介入。無効であった有害な転生者は殺害、後は自由。」

そう聞くと、女性は「了解。」と敬礼した。

……既にカノン化してない？

039 (後書き)

名前…不明

偽名…カノン・メンフィス

外見…羽佐間カノン (旧姓…メンフィス)

能力…同化、吸収可能

所持…ザルヴァートルモデル

口調…原作カノンとは違う部分アリ

備考…不老不死化されている

蒼穹のファフナーネタです。

スパロボに参戦したんだっけ？

多分、知らない人は少ないと思うけど、劇場版はどうか？

2010／12／25に公開したんだし、そっちの方は知らない人が……多いのかな？

ファフナーは良いよ。

ほんと。

チートキャラはまだ作ろう。

フェイト (なのは)、カノン (ファフナー) ……。

どう行くか？

そう言えば、F a t eや危ない転生者もいたんだっけ。

カノンに同化させるか……。

うん。

040 (前書き)

前回に引き続き、転生者登場。

しかし、カノンはない。

酔っ払いですw

||||リリイ||||

とりあえず荷物を束に渡して、神が指定した場所に向かっている。

指定と言うか、ポインターかな？

回収する転生者に、マーカーをつけたらしい。

おかげで、レーダーに何処にいるのか分かる。

分かるのだが……。

「……現状を把握しよう。」

まず一。

女性の5 m以内に接近した。

その二。

女性らしき人物を発見した。

金髪で、完璧にこの時代では作れそうにないスーツを着ている。

その三。

女性がお酒を飲みまくっているせいか、口説きにかかる男性が雑巾のようにボロボロになっていく。

その際、斧らしき物を振って攻撃している。

その4。

店主に向かって、愚痴を呟いている。

つまり、一番厄介な酔い方をしているのだ。

……出来れば、ああいうのは相手をしたくない。

千冬でも、酔うとあそこまでひどい事にはならないよ……。

仕方なしに、女性に近づく。

《後方五時方向、距離3m》

渋い声がそう言うと、女性は斧を私に向けて振る。

もちろん危ないので回避。

《回避されました》

その言葉に、女性は少しだけ肩を震わせこちらを向く。

「は、はろ〜？」

とりあえず、挨拶はしておこう。

女性は「はろーう」と言うと、カウンターに向かってお酒を飲み始めた。

……めんどくさいよう……。

泣きそうな気分になりながら、私は女性に近づく。

「……お話があるんだけど？」

そう言っただけで女性と会話しようとしたが、無視される。

「ねえ。」

……無視。

「聞いている？」

……無視。

「……お話があるんだけど……！」

だが、無視される。

……心が折れそうだよ……。

本当に泣きそうな気持ちになりながら、女性に話しかける。

「……ねえ……。」

「うっさいよっ!！」

怒られた。

精神年齢が百歳近いとはいえ、かなりこたえるな。

泣きそうだよ……。

と思いつつも、さっきから表情一つ変えてないんだけどね。

「まったく、このお酒飲み終わったら聞いてやるから黙ってろっ!！」

美人なのに、性格が最悪だ。

いやもしかして、酔ってるからっ!？

酒乱って言うやつ!？

そうだったら、お酒って怖いっ!!

女性はジョッキを思いっきり傾けて飲み干す。

そして、大きな音を立ててジョッキをカウンターに置く。

置くと言うか叩き置く。

「まったく、気がついたら知らない場所って!!！」

……御愁傷様です。

女性はそう言うのと、私の方へ振りかえる。

「んで、話って何だ？」

「詳しい事は外で……。 」

私はそう言っで、先に外に出た。

少しして女性が付いてくる。

酔っ払いのくせに、よく歩けるな〜と感心したよ。

本当に……。

040（後書き）

フェイトさん登場。

ちなみに、転生者は一児の母（転生前）です。

かなり温厚だったはずですが、お酒と現状でぶっ壊れています。

一応フェイトさん25歳。

いわゆるForceの時のフェイトさん。

精神年齢は三十路前後w

丁度いい感じかな？

リリィより大人っぽく見えるが、人生経験はリリィの方が年代が上。

まあ、IS（作者別作品）でかなり色々な事があったし、精神年齢100歳（笑）ですしね〜。

ま、きがむいたらまたいつきにかくとしましょう。

ひらがなあw

選択肢？（?）

アークエンジェルのクルーに、男性転生者を入れる？

1..はい

2..いいえ

あ、三日後の21日まで受け付け。

その間は、普通にシナリオを進めるよ♪

一一四（前書き）

フェイトさんは皆さん分かっていると思うから無視。

カノンの方を重点的に説明。

そのために、何故か4時間もイラストを書いていた始末……。

名前…不明

コードネーム…カノン・メンフィス

機体識別…不明

機体モデル…ファフナー・ザルヴァートルモデル

性別…女性

年齢…十代後半

精神年齢…三十代後半

身長…160後半

特殊技能・能力

- ・高戦闘技術

- ・高機動耐性

- ・不老不死

- ・変性意識（怒り）

- ・同化抗体

- ・同化不可

ザルヴァートルモデル

- ・魔法無効化装甲

- ・エネルギー変換装甲

- ・エネルギー収束発射

- ・同化不可

- ・半催眠システム

- ・非ジークフリードシステム

「蒼穹のファフナー」の世界に行こうとし、女神が捕獲した者がその神を殺した事により、転生がおかしくなった女性。

死亡前も女性で、アニメを見ることからソツチ系の可能性が大いにある。

「ネギま！」自体も、1〜5巻まで持っているという半端な状態。

「薬味坊主が歪み過ぎて面白くない」という理由により、6巻以降は買ってない。

だが二次創作系は読むと言う状態。

本人いわく「薬味坊主アンチいいね」だそうだ。

一般大学を卒業し、とある企業に就職。

そこそこの学力があると言う事は確か。

しかしカノンと言う外見のせいか、しばしばカノンのような行動を取る事がある。

対フェストウム戦闘を想定してか、色々弄っているが「ネギま！」

の世界ではオーバーしているほどの戦力を保持。

リリィと戦闘したら少しの差でリリィが勝つ程度。

機体を使用して戦うとしたら、ホーミングレーザーがありISシルバリオ・ゴスペルと変わらない戦闘方法になる。

フリーダムの高さが20m行かないのに対し、ザルヴァートルモデルの高さは45mと二倍以上。

機体動作が互いの機敏で、エネルギー切れという概念が互いにない。

そのため機体を使用した戦闘ではどちらが勝つかは分からない。

カノン自身が武器ルガーランスを使用しているせいか、転生カノンもどき（笑）もルガーランスを多用する。

兵装…ザルヴァートルモデル

- ・ホーミングレーザー

「追尾型のレーザー」

- ・翼状アンカー

「左右3つつつ装備されている、大型アンカー」

- ・腕部ブレード

「時機の腕を剣へと変化させる」

後付け武装

- ・ルガーランス

「槍を突き刺した後、左右に刃を開き敵を裂く事やその状態から砲撃する事が可能な槍」

- ・ガラム44

「実弾と誘導ミサイルを装備したライフル」

- ・次元砲

「大出力大型拠点強襲用レーザー砲」

- ・ドラゴントウース

「長距離狙撃用ライフル」

- ・レールガン

「装弾数が少ないが、高威力を保持したライフル」

- ・ゲグナー

「レーザー連射型武装」

一一四（後書き）

フェストウムは同化とワームスフィアと呼ばれる攻撃をしてくる、金色に光る生命体である。

ぶっちゃけ、よくエンカウントする敵だと思ってくれればいい。

人類はフェストウムによって、滅びを迎えようとしていた。

かなり省略したが「蒼穹のファフナー」とはそんなお話。

マヴラブ的なお話っぽいと思ってくれればいいと思う。

何時ブレーカーが落ちるかと思うと、長くかけないという現状……。

なぜザルヴァートルモデルが赤なのか。

白じゃないかと言われたら、白は真壁専用だ!!

断じて白いザルヴァートルモデルが嫌いなわけじゃない。

黒もあったけど、アレは不吉過ぎる……。

結果、赤。

今後白の方も出る可能性あり。

041 (前書き)

腰が痛い……。

うん……。

|| || 束 || ||

私は目の前の光景に唾然としていた。

荷物をレイジングハートにぶら下げながら、エヴァちゃんの所に戻ってきたら……。

……黒い黒龍が寝ていたのだから。

驚く事はもうなくなったと思ってたんだけどね。

「……龍……よね……。」

咲夜がそう呟く。

私は自然とその言葉に肯定するようかのように、首を縦に振っていた。

「……ん？」

エヴァちゃんが私達が集めた構成の上に乗っかり龍を眺めている。

……私達に気が付いたようだ。

「遅かったな。」

龍を背にのんきに話しかけ始めた。

しかし、私達は啞然として龍を見ているしかできない。

なんせ、初めてここが異様な世界だと見せつけられた気がしたからだ。

……龍って存在するんだね♪

と、いつもは思うんだろうけど……、流石に龍を目の前にそう思えるほど冷静な部分がない……。

「あゝ。」

……。

「あゝ。」

……んにゃ？

何処からか声が聞こえる。

多分上から……。

首を傾げながら、私は空を見上げた……。

……なんか……、龍に向かって落ちてくるね……。

赤くて大きな人……。

……多分、大きいロボットかな……。

……ロボット？

「あゝは〜りお〜♪」

そんな声と共に、何かが龍に落ちた。

龍は巨大な何かに押しつぶされ、叫ぶ暇もなく死んだ……。

……と思う……。

私と咲夜は啞然としながら、その光景を見ることしかできない……。

「……何これ……。」

……うん。

何これ……。

アレ……？

リリィちゃんの声？

|| || || リリイ || || ||

転生者の女性が酔っぱらっていたので、手刀で気絶させ拉致ってエヴァの元に帰る……。

帰った……んだけど……。

目の前には、ドラゴンとそれより大きなロボットが存在していた。

というか、赤いロボットがドラゴンを押しつぶしている。

「……ん？ あ、ス、スマナイ……。」

聞いた事のない声が、辺りに響く。

状況的に考えて、龍の上に落ちたロボットの搭乗者の声なんだろう……。

……多分……。

……多分……。

束に近づきながら巨大ロボットを見る。

「やつほ〜♪」

誰かが、ロボットの首元から地上に飛び降りた。

40 m以上の高さを、紐無しバンジー……。

……非常識過ぎる。

というか、神か。

……神のせいなんだな。

「お〜い、私無視？」

神が何か言っているが無視しておこう。

……うん。

041 (後書き)

……キンクリと選択肢……。

キンクリ……。

本当にしようかな……。

……テンカワ君でも突撃させちゃう？

高機動型のブラックサレナでW

次に出す選択肢は、AA完成後……。

※何処へ行く

って言うのだけど、何処に行かせようか決めてないのだ現状……。

日本に戻るか、アフリカにでも行かせるか……。

またはアーカディアンプロジェクト臭い島でも建造するか……、魔法世界に突貫するか……。

まあ、まだ完成してないため、先の事だけど。

それにしても、一斉に集まったW

多分、マスター型フェストウムっぽい人が、白いザルヴァートルモ

デルを所持して参戦予定……。

フェイトとカノンの本名を募集中。

一応、二人とも日本人と女性と言う事は確定状況。

うん募集。

042 (前書き)

へい、へい、ハイッ!!

やあやあ皆さん、こんばんは? こんにちは? さようなら? はじめまして?

テンションが高いのには理由がある、訳が無い。

と言う感じの作者です。

特に理由もない前書きは置いておいて、アンケートがいくつかあるよ。

||||リリイ||||

とりあえず、神だと思われる人物に私が担いできた女性の酔いを覚まさせている間、私と束は設計図を見直す。

「基本エンジンはどうする？」

「……一応、核エンジンにさせてその最大熱量に耐えきれぬぐらいのが良いかな？」

「そうすると、エンジン機器全体に耐熱装甲？」

「うゝ、……艦全体でよくない？」

「……でも、かなり時間かかるよ？」

そう言って少し離れた場所で、お互い話し合う。

基本装甲を無視して、設計した際に使う機材や機器を作る際に使ってしまう物の計算をした後に、装甲の話となった。

今回の話でIS使用で最短五十年だったのが、ファフナー・ザルヴァートルモデルと呼ばれる全高45mの機体の参入で、数年は早まる見込みだ。

しかし、さらに問題が起きた。

アークエンジェルのハッチは、どれも45mはないと言う事。

つまり、ザルヴァートルモデルを出し入れする事が出来ないと言う事だ。

……なんというか、めんどくさい……。

「……む、起きたか。」

エヴァの声が耳に入ると、私はエヴァの方へ振り向く。

長金髪の女性が起きたようだ。

赤い瞳が、キョロキョロと動く。

そして気が付いたのか、私と目があつた……。

「気分はどうか？」

私がそう言うと、少しばかり頬をひきつらせた。

「それが、いきなり私を気絶させた人が言う言葉ですか？」

……酔いがさめたのか、口調が穏やかだね……。

というか、覚えていたんだ……。

私は頬をかきながら「酔ったままじゃ、正確なお話ができなさそう

だから拉致っちゃった」

と言うと、何故か呆れられた。

警戒しているのか、三角の宝石を握っているのは気にしないでおい
ておこう。

「さて、軽めにお話しようか♪」

束がそう言って、全員を集める。

訝しみながらも、長金髪の女性も近づく。

私はそれを見ながら口を開く。

「はじめまして、転生者の諸君。……エヴァは違うけど……。」

「……当たり前だ。」

転生者と言う意味を理解しているエヴァは、そう言っただけ息をつ
く。

……はて、それほど疲れるような事言っただけかな？

まあ、良いかな。

他人の心を知るつもりはないし。

「ちなみに転生者とは、死んだものが別の世界に記憶を持ったまま
生まれ変わらせる事を指す。最近の神では色々な転生方法で生ま

れ変わった物を転生者と言う風に呼ぶ呼が、基本的には今言ったのがメジャーだ。 ついでに最近の転生方法は能力をつけて転生すると言うのが流行っているので、テストに出るから頭の片隅に置いておくように。」

……まるで神が、昔の私みたいに説明する……。

というか、テストなんかあるの？

そう思いながら、私は驚く金髪女性をよそに口を開いた。

042 (後書き)

アンケ1

再度スカーレット姉妹の登場について。

1.. 知らない

2.. いる

3.. 中身が転生者で

アンケ2

次(の次)に転生者を出すとしたらどの作品

1.. 魔法少女リリカルなのは

2.. とある魔術の禁書目録

3.. M u v - L u v

4.. その他(タイトルもお願いします)

アンケ3

敵(転生者)を出すとしたら何？

- 1 .. 魔法使い
- 2 .. 超能力者
- 3 .. モンハンの何か
- 4 .. BETA っぽい気持ち悪い生物
- 5 .. その他（作者が思いつかないせいだね）

043 (前書き)

作者のマイブームアニメ。

「蒼穹のファフナー」

久々に見たらハマった。

映画もいちいち遠出して見に行ったくらいのおきに♪

そのため、大体ネタがファフナー系多めになって行きます。

ですが、本編にあまりかかわらないと……。

まゝ、そんな感じです。

|| || 女神 || ||

そう言えば、今だ姿が固定してない。

今回の話が終わったら、姿変えよう……。

そんなわけで「こんにちは?」「こんばんは?」「おはようございます?」「さようなら?」と言う感じで私のターン。

と言っても、殆どないんだけどね……。

そんな感じで、自己紹介が始まった。

ルールは唯一つ。

本名を明かしたくなければ、偽名でもよい。

……と言うか本名を応募してるけど、集まらない言い訳なんだよね。

まあ、元が日本人だけに適当に決めても良いんだけど……。

おっと、メタ過ぎたね。

うん……。

神でもこれ以上は言っではいけない気がする。

リリィと束、咲夜、エヴァンジェリンが自己紹介を終えた。

本名で嘘を言う気はないようだ。

しかし、前世で何をやっていたかはかなりぼかしていた。

別にいいけどね。

そして私が連れてきた赤髪の女性の番になった。

「本名を開かせない事を先に謝らせてもらう、カノン・メンフィスだ。実年齢は三十四歳、外見年齢十六歳の独身。この世界の事がある程度知っていると言う事だけは明かしておく。」

そう言うと、一歩下がる。

終わりなのだろうか。

意外にもあっさりしている。

別に困らないけど、ちなみに質問したそうに束がファフナーを見ているが後回しだ。

長金髪の女性がうろたえながら口を開く。

少しばかり警戒しているようだ。

「……私は、フェイト・T・ハラオウン。もちろん偽名……、で

実年齢三十二歳の子持ち……です。」

やはり必要最低限以外の情報は出してくれないか……。

そして最後に私……。

問題は私の外見が固定されてないせいで、自己紹介しても意味を成さない気がする。

まあ、名前の紹介だけでも意味はあるんだけどね……。

さて、私は顔を帰る事ができるからね……。

……カノンに便乗する？

そうしようか……。

となると……。

全員が私を見る中、私は目を瞑り姿を変える。

どうせなら全は一、一は全的なテンションでこのキャラクターの姿を借りよう……。

黒い髪の毛、敵と同化したお母さんの姿を。

我々は私を一つの個体として認識する。

と言っても、我々と言う感じで私以外の私はいないけど……。

まあ、私が飽きたら姿を変えるんだろうけどね。

姿を変えた事に、フェイトは驚いているようだが気にせず自己紹介。

「私は真壁紅音まかべ あかねと呼ばれる……。 」

「フェストウム口調は止めろ。」

自己紹介中にカノンがそう言うてくる。

しかも軽く殺気飛んできてるし……。

……面白くないな。

姿をそのまま自己紹介。

「私が神だ！ 異論は認めない。 名前は以後、真壁紅音と名乗らせてもらおう。」

もちろんキャラ名だから偽名。

さて、これからこの集団で何が起こる事やら……。

043 (後書き)

アンケート1

再度スカーレット姉妹の登場について。

1.. 知らない

2.. いる

3.. 中身が転生者で

アンケート2

次(の次)に転生者を出したらどの作品

1.. 魔法少女リリカルなのは

2.. とある魔術の禁書目録

3.. M u v - L u v

4.. その他(タイトルもお願いします)

アンケート3

敵(転生者)を出すとしたら何？

1..魔法使い

2..超能力者

3..モンハンの何か

4..BETAっぽい気持ち悪い生物

5..その他（作者が思いつかないせいだね）

ちなみに、アンケート1はまたも同票……。

次の話はキンクリして、40年後あたりまで飛ばします。

内容は、アークエンジェル製造までの日々。

そんな感じのお話です。

044 選択肢？（前書き）

キンクリした結果がこうだよ。

完成しちゃったよ。

そんな感じ。

今回は久しぶりの選択肢。

044 選択肢？

|||||リリイ|||||

アレから四十年が立った。

長々しく製造過程を説明するほど時間を使うつもりはない、と紅音が言っていた。

ああ、紅音とは神の事だと。

未だ私達以外の三人が偽名を名乗っているが、別に問題になっではない。

むしろ、中が良い状態を保っている。

そう言う状態で作業を続けた事でアークエンジェルは完成した。

簡易説明で良いから説明するべきなのだろう。

ここ最近、紅音が「見られているから、常にその者に説明するように考えろ。」と言うからか、こういう事が多くなってきた気がする……。

まあ、今日は紅音が私を見てきたからヤレと言う事なんだろうけど……。

と言う事で、製造過程を簡単に説明。

まずはサイズ調整。

紅音が白いザルヴァートルモデルを何処からか持ってきた事により、サイズ調整が問題となった。

流石に45m級の機体が二機も入るわけがない。

と言う事で根本的な改造を始めようとした矢先、紅音が「ハッチ先端に魔法陣を展開させ、巨大化させればいいのではないか。」と言ったため、そこら辺は紅音任せ。

結果、ザルヴァートルモデルがISサイズに調整され、発進時に魔法陣をくぐらせる事によ

って元のサイズに戻す仕組みとなった。

流石神。

しかし、コクピットへの移動とかどうなってるのか……。

いや……、私が考える事じゃないね……。

さて、機材についての説明は簡単。

私と束が二十年かけて全て作り上げた。

機材だけでだ。

中には海中に潜って必要な物を取ってくるなどとしたが、二度としたりくはない。

その間に、艦の骨組みを紅音達が製造。

ザルヴァートルモデル一機につき、溶接作業員一人と言う配置で十七年かった。

ちなみに、骨組みだけ組み上げて十七年だ。

外装版はとりつけなかった。

製造は紅音が完成するまで雨を振らせないで居てくれたため、何も起きてはいない。

周りの植物は枯れたが……。

そして一年がかりで機材を取り付け、もう一年で機材の配列などを完成させる。

六年かけて艦全体のチェックをして不備の確認をし、二年かけて内

部を整えた。

四年かけて艦内のシステムを私と紅音が作り上げ、束と咲夜が武器などを製造できるスペースを作り上げる。

カノンとフェイトは、どちらかを手伝うぐらいに動いていた。

五年でエンジンや水などの艦内に必要な物を完全に補給し、七年かけて武装のチェックとエネルギー伝達を再調整。

最後に紅音が「ラミネート装甲だと頼りないから、魔法無効化装甲もつけておくべきだろう。」と言う事で、神能力でつけてもらい完成。

後は色々紅音に特殊ギミックをつけてもらい、長い時間を駆けて完成をしたのだった。

そして今日が初始動日。

それにしてもよく数人で完成させたな……、と感動。

私、東、咲夜、エヴァ、紅音、カノン、フェイト。

七人でつくる様なものじゃないのにね……。

そう思いながら、全員艦橋の席に着く。

どうやら紅音も付いて行くようだ。

帰れと言いたいが、帰りそうにない。

仕方なく連れて行く事にした。

行かなくても密航とかしそうだけど……。

艦橋には十席あるが、三人いなくても動かせるため問題はないのだろう。

そんなこんなで、アークエンジェルは起動した。

044 選択肢？（後書き）

選択肢

何処へ向かう？

1..魔法世界

（モンスターと魔法使いの駆逐）

2..世界巡り。

（メンバー強化や何かをします。）

2の何かって何……。

と言う事で、月曜まで放置します。

うん、月曜まで。

おそらく次出てくる転生者は……。

一一五(前書き)

今回は一応神事、紅音の説明。

フェイト？

後回でもいいでしょ？

フェイトと紅音どっちが有名と言ったら、迷わずフェイト選ぶでしょ？

選択肢が同票というありさま。

— 5

名前…真壁紅音まかべ あかね

本名…不明

種族…最上位神

種族…マスター型フェストウム（紅音の時のみ）

>i28049—3045<

性別…女性

外見年齢…三十一歳（紅音の時のみ）

精神年齢…不明

生存年数…不明

身長…162cm

特殊技能・能力

- ・文字を操る能力

- ・不老不死

真壁紅音（ミヨルニア）

- ・マスター型フェストウム

- ・ワーム・スフィアー現象

- ・テレポート

- ・同化現象

- ・高次元防壁

- ・読心能力

言わずもがな神。

束やカノンを「ネギま!」の世界に送り、楽しんでいる神。

ぶっちゃけ作者。

押しが弱いと言うか、気が弱いと言うかそういう性格。

基本ふざけているが、真面目な時には真面目なキャラ。

というか、作者がそんな感じ。

姿を自由に変える事ができる為、自身の身体という物が無い可能性がある。

一人目…宇佐美ハル（PCゲーム G線上の魔王）

二人目…レミリア・スカーレット（東方project）

三人目…真壁紅音（アニメ 蒼穹のフェフナー）

以後、この姿を維持するかどうかは分からない。

ただ、作者のお気に入りキャラ（フェフナー内で）なため、結構続くと思う……。

ファフナーでの真壁紅音は、すでに故人である。

生きているかいないかと言えば、微妙なラインだが故人。

理由としてフェストウム（宇宙から来たシリコン型結晶生物）に同化をされた者は、一般的に死亡扱いとなっている。

紅音も同化されているため、一応死亡扱い。

しかしフェストウムを理解した初めての人間である為か、真壁紅音の姿をしたフェストウムが出来上がる。

同化して人格（外見も人間そのもの）が出来上がるフェストウムは極稀な事である。

ちなみに同化して人格ができたフェストウムの事を、マスター型と言う。

紅音はミョルニアと呼ばれる、マスター型フェストウムである。

喋り方はミョルニア（紅音）的な喋りがよく見受けられるが、普通に喋る方が多い可能性がある。

まだ未定のため、何とも言えない状況。

ミョルニア的に喋るならば「我々は私までを殺そうとするだろう。」という風に、微妙に分かりづらい離し方をする。

この時の「我々」というのはフェストウム全体の事を指し、「私」は当たり前のようにミョルニアの事を指す。

訳すなら「私以外のフェストウムは、私までも殺そうとするだろう。」

」という感じになる。

問題は「我々」と言っ、 「ネギま」の世界に紅音以外のフェスト
ウムがいるかどうか……。

※ワーム・スフィアー現象

任意で出す事ができ、対象をひしゃげ、ねじ切ったりする事ができ
る。

歪曲回転体と呼ばれる超物理的な運動を起こす暗黒の球体はブラッ
クホールに等しく、それに飲み込まれた者は消滅しフェストウムと
同化する。

一瞬で出す事ができ、数秒間は存在し自然に消滅する。

※同化現象

生物や無機物などなんでも同化する事ができる。

同化された場合、相手側は結晶となりフェストウムとなる。

つまり死亡という事。

※高次元防壁

防壁に触れた物を、空間ごとねじ切る壁。

攻撃を弾いたり、捻じ曲げる事でアサルトライフルなどを無効化している。

ただし長時間の展開は不可能。

すぐに張り直せるため、ほぼ永続的な防御壁である。

高次元防壁を突破できる特殊能力が無い場合、接近した瞬間に原型をとどめる事ができなくなり死亡する。

読心能力との併用で、展開を自在に行い隙を無くしている。

※読心能力

数キロ範囲で相手の思考などを読む事ができる。

地下にいる相手を読唇する事がほぼ出来ない。

地下の場合、数十メートルしか範囲が無い。

思考などを読みとるため、相手がいる位置なども分かる。

一一五（後書き）

選択肢

何処へ向かう？

1..魔法世界

（モンスターと魔法使いの駆逐）

2..世界巡り。

（メンバー強化や何かをします。）

……明日までなんだけどね。

同票なんだよ……。

決まらない。

だからおねがいします。

どちらかに入れてください。

045 選択肢？決定（前書き）

選択肢決定

1..魔法世界

（モンスターと魔法使いの駆逐）

篠ノ之夫婦だけじゃないからタイトル変えて……。

「ドキッ☆ 転生者だらけの魔法世界」に変えようかな……。

……冗談だよ。

けど真面目にもう一回ぐらい、タイトル変えたい……。

045 選択肢？決定

|| || エヴァ || ||

私の目はおかしくなってるのだろうか……。

いや、おかしくはなってない。

……む？

なんだ貴様らは？

私の心を覗きこむなど……ん？

……ああ、昔から見ていた視線か……。

ならいい……。

な訳もない気がするか、少しばかり私の愚痴を聞いてくれ。

四十年の年月をかけて、科学の塊を作り上げそれに乗ってるのは良いんだ。

良いんだが、な。

なぜ、単体で魔法世界に来れるのだ？

ゲートもくぐらず、何故転移出来る……。

ああ、考えるだけで頭が痛い……。

……そう言えば、何が起きたのか説明してなかったな。

簡単に説明しておくか。

アークエンジェルを起動させた。

すると艦全方に巨大な魔法陣が現れて、それを潜ったら魔法世界だった。

……何を言ってるか分からないか？

安心しろ、私も分からん。

「エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。この艦は我々の技術と別の技術の固まりだ。科学だけではない。」

後ろから紅音にそう言われた。

……腐っても神。

思考を読むのは、造作もないと言う事か……。

椅子の背もたれに背を預け、私は肩の力を抜いた。

……もう、考えるのがあほらしくなってきたな……。

|| || || 紅音 || || ||

ん？

我々以外に読心出来る者がいるのか？

……まあ、この口調は置いておこうかな？

エヴァが魔法世界に転移した事に、現実逃避してるよ……。

さて、軽く艦の説明をしておくべきだと思った。

知らない人が一割でもいたら、めんどくさいしね。

簡単に……。

一つ目。

陽電子破城砲 ローエン格林。

高威力だけど、環境への影響が凄い武器。

両艦首に一門ずつ装備されている。

二つ目。

225cm連装高エネルギー収束火線砲 ゴットフリートMk. 7
1。

一基二門のビーム砲。

艦首両舷に一機ずつ搭載。

三つ目。

110cm単装リニアカノン バリアントMk. 8。

艦側面に一機ずつ装備されているリニアカノン。

可動範囲が広いため、かなりの頻度で使われると思われる武装。

四つ目。

75mm対空自動バルカン砲塔システム イーゲルシュテルン。

はっきり言えば、対空機関砲。

全十六門あり、かなり優れている分簡単に破壊されやすい。

五つ目。

艦橋後方ミサイル発射管 対空防御ミサイル ヘルダート。

イーゲルシュテルンと同じぐらい必須な、艦対空ミサイル。

こちらも全十六門。

ちなみに、発射前に爆発したら大問題。

六つ目。

艦尾大型ミサイル発射管。

唯の発射管と思うなかれ。

全二十四門の、ミサイル変えれば宇宙でも地上でも撃てるという万能……え？

ミサイルの性能？

……気のせいだって。

まあ、こんな感じ。

少ないと思うけど、実際見てみると武装し過ぎとしか言いようがないよ……。

ここら辺は原作と同じだから良いんだけど、問題は中身^{システム}だったり。

既に尺を超えたため、次話へ続く！

……自由すぎる？

気にしたら負けだよ。

045 選択肢？決定（後書き）

転生者達の魔法世界

転生者たちのアンチ魔法世界

【ネギま！】で暗躍する転生者

転生者達が魔法世界で好き勝手に暴れているようです

「あれ？ ココは何処だろう」 「転生者が暴れる場所です」

046 (前書き)

朝から2話更新。

紅音ばかり映っても面白くない……。

次は誰にしようかな……。

|| || || 紅音 || || ||

よし、次話だね。

んじゃあ、システム面の説明をしようか。

……まあ、こういう風に離すのは嫌なんだけどね……。

なんで、三人称だけで書かなかったのやら……。

……三人称に変えようかな？

けど、めんどくさいしね……。

……ん？

ああ、はいはい……。

大体は原作とおんなじだけどね、かなり別作品のシステムを組み込んじやったから、もはや別モノ。

まずは魔法無効化装甲。

ちなみに、魔法だったら大抵は無効化する。

遠距離魔法は完全無効。

だけど、近距離という名の零距离での高威力魔法はダメージになるというモノ。

ラミネート装甲や耐熱装甲などがあるから、炎系の攻撃は無効化装甲あってもほぼ利かないね。

さてここからが、問題。

自動で敵の発見する事は熱門などで出来るけど、それらを全て無視して接敵に気がつかれない相手の場合、動機が付けばいいのでしょうか。

……。

まあ、いくら待っても答えてくれるわけじゃないしね……。

答えは簡単。

完全に接近を知らせてくれるモノを作ればいい。

という事で、ソロモンと呼ばれる人工知能を製造した。

本来膨大な情報量を処理したり開示したりする為、パソコンみたいなモニターだと不都合がある。

まあ、もし膨大な情報を開示する時になったら分かるでしょう……。

次に偽装鏡面。

はつきり言えば、ステルス機能……。

特殊な素粒子を散布することで、外角からアークエンジェルを見つ
けられないようにする。

もちろん熱量や、音波、赤外線も遮断する事ができる。

この時内部では西に太陽がある場合、外では太陽が東にあると言
うことになる。

偽装鏡面と呼ばれる由来だったりもすのだが、覚えなくていい。

つまり内部では、外と内部が鏡のように反転している状態なのだ。

そして問題だった、機体のサイズについてだが……。

青いポンコツタヌキのロボットが、腹部から出す怪しげなアイテム
を見習った。

たしか、ガリ〇ートンネルだったかな……？

出撃する際に魔法陣を潜る事によって元のサイズに戻り、着艦の際
にくぐる事で小さくなるというモノだ。

魔法ってチョー便利ー。

……さて、後々紹介したり増やしたりする場所があるかな？

温泉とか、潜水航行可能とか世界転移システムとか……。

あ、ワルキューレの岩戸の存在を忘れていた……。

かける文字も少ないから簡単に説明すると、私だけが使える艦全体の統制システム。

操舵師がいなくても、動かせたり隔壁も自由に閉鎖出来たりする。

ちなみに、私が勝手に艦にくっつけたモノだから秘密という事で……。

では、また次回。

046 (後書き)

ソロモン

偽装鏡面

ワルキューレの岩戸

蒼穹のファフナーからひっぱり出してきたW

ソロモンがる時点で、敵にアレが出てきそうだけど……。

出てきたら、魔法使い死ぬよ。

マジで。

魔法付き戦ったら死ぬよ。

すぐに。

047 (前書き)

とりあえず、メタ。

このお話自体メタ成分で構成されてるから、メタ以外の何でもないんだけどね……。

||||カノン||||

……ん？

えっ、私か!？

な、何を言えば……ええ、あ、そうだっ!!

……んうん”ん”、はじめましてと言うべきかな。

カノン・メンフィスだ。

階級はあつたら中尉と名乗っていただろうな。

「……んじゃあ、この世界いる時間は262800時間という事で良い?」

今現在、これからの事を皆で話し合っている。

リリイがこの艦の艦長という事になり、副官は束。

まずは、魔法世界で資金を集める事を目的とするそうだ。

期間は262800時間。

はつきり言って、三十年だ。

原作まであと五百三十年ある。

三十年間資金を集め、原作開始まで四百年ごろになったら地球に戻るらしい。

その間の百年は何をするのか聞きたが、自由時間だそうだ。

何とも行き当たりばったりな……。

しかし私はココで二次創作を思い出し「原作舞台の土地を買い占めた方が良い。」と助言した。

保留になったが、おそらく実行されるだろう。

実行されなくても、私が買い取りに行く。

そして麻帆良学園への超鈴音以上の科学を詰め込ませた学園にしてみせる!!

まあ、ただのアーカディアンプロジェクトっぽく、地下に格納庫や戦闘指令所なんかを作るだけだ……。

「では、とりあえずお金を集める事を目標として……。」

リリイがそう言うのと、艦が動き始めた。

密かに野望を胸に燃やしながら、私は生きるとしよう。

——これがカノンの最後のターンです——

⋮
ん?
?

頭に何か文字、が……。○

え”
？

ええええええ！？

ま、待てっ！！

嘘だ、嘘だと言ってくれっ！！

――時期文章テストの為に現在の視点を止めます――

止めてくれええええ！！

最初で最後の視点での出番は悲し過ぎるうううう！！

お願いだから、止めてえええええ！！

作者止めろ……。

おい、作者つ……あ。

「あ、紅音えええええ！」

私は紅音の襟首を掴む。

全員、同じ事を思ったのか止めようとはしない。

「お願いだから、これ以上出番を削らないでくれっ!!」

スポットライトがあつたりにくくなる。

お願いだから、視点は消さないで……。

お願い……。

——カノン・メンフィスがログアウトしました——

——カノン・メンフィス視点終了——

——次話、フェイト・T・ハラOWN視点——

——文章テスト終了まで、あと一話——

——時期文章テスト開始まで、後二話——

047 (後書き)

事実です。

時期文章テストを開始します。

流石にこのままだと、何をやっているのか分からないでしょうし…
…。

うん。

後数話で、転生者最低2名参加。

048 (前書き)

産まれてくる身体間違えた気がしてならない今日この頃。

変態性能が備わっているのは、知っている人は知っている。

そんな私。

||||フェイト||||

えーっと……。

なんか、最初で最後の出番になっちゃった？

……私は操舵席に座りながら、目の前にあるハンドルを握ってます。
おそらく二十代の、子持ちだった私です。

……というか、口調が半分以上の方とかぶってるんだよね……。

そう言う先行基準でもあるのかな？

皆さんに質問です。

私って不幸に見えますか？

……。

……え？

昔はこういう事をしちゃいけない的な感じだったのに、やっていいのか？？

……まあ、良いんじゃないかな？

既に紅音さくしやも、メタ発言していいよ的な感じだしてるし。

なんか、私が最後って言う事で後ろからの視線が……。

紅音さん……。

本当に勘弁して下さい……。

泣きそうです……。

……弱気発言で、終わらせるのももったいないかな……。

うん……。

あ、……そうだ。

そう言えば、この艦って凄いやね？

運転（？）は車的な感覚だし……。

まあ左右のスラスタ―は、ハンドルの左右にある操縦棒で制御しなきゃいけないけど……。

操舵師を言い渡された時は、かなり不安だったんだよ。

一応家族が多かったから、大型自動車免許を持っていたから大丈夫かなって、少しだけ思っていたんだけどね……。

……でもね、前提が違った。

浮いているから、障害物がほぼないと言う状態。

気軽に動かせる。

中小企業のビル以上の高さを飛んでいるから、細かい動作さえしつかりやれば大丈夫だと思う。

……というかね、リリィさん達って何者？

私と同じ転生者って言うけど、私がいた世界にこんな技術は流石にないよ……。

戦艦作れるし、ガンダムだっけ？

娘と一緒に見たことある奴、も作れるし……。

何処の星の住人なのかな？

……ドリフト出来るかな？

………。

やばっ！！

話題が終わった！！

私の出番が、カノンみたいに終わっちゃう！！

どうしよう!!

ああ、もう本当にどうしよう。

何か言おうとしたんだけど、作者が（リアルで）スカイプの相手に怒鳴ったから、何言おうとしたか忘れちゃった!!

ええっと、ええっと……。

あっ!!

紫のボディースーツって、なんかエッチな感じだよね？

……………。

て、違ああああう。

これじゃ、ただの変態じゃんつ、私!!

どこの変態男性っ!?

かなり混乱してるっ!!

ど、どうしたらっ!!

しかもっ、本当に紫色のボディースーツを着た二人、が……、見え……、る？

……え？

――フェイトのターンが終わりました――

――次話から書き方が変わります――

048 (後書き)

紫のボディースーツってエッチだね？

あえて深く言うなら、肌のラインが出るスーツが特にW

マヴラヴとなのはを見て、これはハズイ！

だけど、着てみたいと言う私がいましたとだ。

何故かプラグスーツとシナジェティックスーツだけは、エロいと感じられなかった。

作者のこの身の女性キャラは、髪の毛が長く、デコが出ていないキャラです。

ロリコンじゃないからね！！

ロリコンだったとしたら、年齢とかが60越えた金髪少女の学園長ぐらいだからねっ！！

あえて言おう、ロリコンではないとっ！！

でも、なのは系はロリィかな？

049 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…???

九人目…???

|| || || ? ? ? || || ||

「ねえ、ここ何処だか分かる？」

私の妹が、乗っていた機体の方に乗っかりながらそう呟く。

「分からない……。」

そう落胆しながら、私は森の木々を見続ける。

……姉妹共々、餓死かな？

少しだけ縁起の悪い事を思いつきながらも、横目で妹を見た。

……少しだけ私達の事を、これを見ている人々に説明しておこうと思う。

……私達は死んで転生した。

……分かるか？

……いわゆる二次創作などの転生らしい。

……結果、神に一人一つのお願いと外見の変更を聞いてもらい指定された世界に転生させられた。

……のだが、指定された場所ではなかった。

……つまり、何らかの事故があり別の世界にとばされたようだ。

私は少しだけ落胆し、コクピットから水が入ったペットボトルを取りに行く。

普通なら踏み場タラップを使うが、それが無い。

しかし驚異的な運動神経などを与えられた私にとってみれば、タラップなしでコクピットに乗り移るのは簡単だった。

近くの川で数日前に補給した水を入れたペットボトルを見る。

……そう言えばこの数日間、何も食べてないな……。

……チエルミナートルも動かなくなっただし、雨風を防ぐことしかできない。

……第三世代戦術機らしいが、これは神が指定した機体だ。

……私だったら迷わず動力切れの起こさない機体を選ぶ。

戦術機せんじゆつき、S u - 3 7 U B チエルミナートル。

戦術機という名でも分かる通り、M u v - L u v というゲームの機体だ。

この二人の世界には、ガンダムという機体はない。

その代わり、ガンダムではなくMuv-Luvが有名なメディアミックス化を果たしている。

二人が転生先に指定されたのは、【Muv-Luv Alternative Total Eclipse（マブラヴ オルタネイティヴ トータル・イクリプス）】の世界。

原作キャラクターになり替わり、生きて行く事を神は命じた。

もちろんその事に姉妹は驚愕し、同時に喜ぶ。

「自分たちが好きな世界に行ける」、ただそれだけで姉妹は喜んだのだ。

姉妹だからという理由で作品内の紅の姉妹スカーレット・ツインという単語を思い出し、外見を変えた。

姉はクリスカ・ビャーチェノワ、妹はイーニャ・シエスチナの姿に。

ハッピーエンドを目指して蓋を開けてみたら、平和な世界。

……どうなってるのやら……。

ため息をつき、私はコクピットから身を乗り出して妹の方にペットボトルを投げる。

妹は慌ててペットボトルを二つ受け取った。

「……いきなり投げないでよ……。」

妹はそう言うと、頬を膨らませる。

「ごめんごめん。」と言いながら、私は戦術機の突起部分を掴み、腕力だけで妹がいる場所までよじ登った。

……ん？

そして私は、妹の背後に白亜の巨艦を見た。

049 (後書き)

※M u v - L u v A l t e r n a t i v e T o t a l E c l i p s e / が紹介しました。

※書き方が若干変わりました。

※カノンが無駄に慌てたと誰もが理解しましたw

作者の趣味です。

クリスカ可愛いよ(※、D、) ハアハア

だけど、中身は転生者。

.....はあ.....。

作者が微妙に偏ったアニメやゲームしかないせいで、分かるキャラと分からないキャラがあるんですよね.....。

「天地無用！」とか知らんですよ.....。

本当に.....。

基本作画が良いとか、シナリオ、キャラ絵が良いと言うのしか見ませんしね。

薄桜鬼とかの絵は本当に良かった気がしますよ。

ああいうように、立ち絵が書ければな……。

PS3の薄桜鬼は個別ルートをクリアすると、メインメニュー画面をそのキャラのアイコンや壁紙に変える事が出来て、私得♪

だけど……、ねエ……。

※村でモンハンらしきものが始まります。

※村に転生者二名がいます。

050 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…???

九人目…???

|| || || 咲夜 || || ||

私は艦前方にある機体を見て、ため息をついた。

誰がどう見ても転生者だと分かる。

機体の方に二人の女性が乗って、こちらを見ていた。

……私の出番が取られそうですね。

長生きをすると口調が変わるらしい。

そうも思いながら、私はお母さんを見た。

「どうしますか？」

「どうしよっか？」

しかし、お母さんもそう言ってお父さんの方を向いていた。

……ああ、親子だな……。

そう思ってしまう。

お父さんは少し考え、フェイトに「航行中止、着陸して会ってみよ

うか。」と言った。

……何ともお父さんらしい。

……お母さんの周囲の空気が、微妙に変化しているのに気が付いているのでしょうか？

……まあ、別に気にしてないですけど。

フェイトが艦の後部エンジンの出力を落とし、高度が下りる。

既にお父さんは艦橋にはおらず、お母さんが「いいもんいいもん、後でたっぷりヤッて貰うんだから。」と言って拗ねていた。

……一応実子だから、堂々とそう言って欲しくはなかった……。

「そう言えばエヴァも消えているな……。何処に……。」

カノンがそう言って、艦橋を見渡した。

……確かにエヴァもいないですね。

……まあ、お父さんと一緒に行ったのでしょう。

何度もため息が漏れた。

木々が艦に押しつぶされる音がする。

そして軽い振動の後に「着陸シタナ。」とチャチャゼロの音が響いた。

……いたんですか。

「イタンダゼ。」

チャチャゼロが私の心を読み、そう言ってきた。

……チャチャゼロって心を読む事ができましたっけ？

そんな疑問が、私の頭の中に生まれた。

ちなみに、まだお母さんは「リリィちゃんも、ああいうエツチな服が好きなのかな？ 後で作ろう♪」と言っていた。

……お願いだから、場所を弁えてください。

|| || || クリスカ || || ||

私達の前に、白亜の巨艦が着陸した。

一瞬「なぜ？」と思ったが、考えていても仕方が無い為出来る事をする。

再度私はコクピット内に乗り込み、拳銃を取り出す。

……一応、護身用としては大丈夫。

そう自分に言い聞かせるが「もしも新型のBETAが出てきたら」と思うと、拳銃を握る手が強張る。

……BETA。

一瞬、ゲームであつたグロイシーンを思い出してしまう。

好きな作品だけに、バットエンドは悲しい。

「お姉ちゃん!!」

妹が私を呼んでくれたおかげで、少しだけ落ち着いた。

艦の一部が開き始める。

……鬼が出るか蛇が出るか……。

……BETAだけは勘弁……。

そう思いながら、拳銃を構える。

せめて人が出てくるように、祈りながら。

050 (後書き)

これから3連続更新開始。

久々に咲夜の出番が出た……。

出番少ないからね……。

メイド長……。

というか、クリスカの方が多くない？

ホントに、嫌マジで、超マジ、まじまじだってW

051 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…???

九人目…???

||||エヴァ||||

……面白い恰好をした奴らだから、笑えるかなと思いリリィに付いてきたのだが。

そう思いながら、ゆっくりと開く搬入用口を少し離れて眺める。

ゆっくりと動く壁らしきものを、じれったい思いで眺めていた。

『銃構えられているから、きおつけてね。』

館内放送でそう忠告される。

……私には銃は少々無意味なのだな。

……まあ、楽しませてくれよ？

黒い笑みを浮かべながら、私は完全に開くのを待った。

|| || || リリイ || || ||

私はエヴァを連れて転生者と思われる者達に会いに出た。

「……はじめまして。」

私はそう言って、女性達の前に立つ。

短い髪の女性は一瞬唖然とし、持っていた銃を突きつける。

……警戒し過ぎだよ。

私は銃口を見つつも、女性に近づく。

「……動くなっ!!」

銃を突きつけているのに、近づいてくる私を見て女性は驚愕していた。

「……別に取って食おうってわけじゃないんだけどね……。」

そう言いながら、女性に触れられる距離に立つ。

そして女性の持つ銃を握り、私の額に押し付ける。

さらに女性は啞然となる。

「撃ってみる？」

女性は頬を引く付かせ、私を見る。

そして数分間その場に立ち尽くすと、女性はため息をつき引き金から指を離す。

……あら、撃たなかった。

女性は目を瞑り「好きにしろ」と言い始める。

……了承と見てもいいのかな？

……良いよね。

「まあ、なんでここにるか聞きたいんだけど、ね……？」

私はそう言って女性を見た。

だが、途中で誰かのお腹が鳴ったのか、大きな音が響く。

……もしかして、お腹……空いてる？

一瞬啞然となり音のする方を見ると、後ろの方に隠れた長い髪の女性が、短い髪の女性の影に恥ずかしそうに隠れていた。

私は少し苦笑してしまった。

「食べ物あるけど、来る？」

その言葉に二人とも、頷いた。

ちなみに、後ろでエヴァは笑っている。

……うるさいよ？

|||||イーニャ|||||

ご飯をくれると聞いた時、正直もの凄く嬉しかった。

この数日間、飲まず食わずでいたから……。

……良い人っぽいね。

お姉ちゃんは拳銃をコクピットに置き、戻ってくる。

「あ、そう言えば、そこの機体動かないの？」

目の前の女の人、首を傾げながらそう聞いてきた。

「うん、動力切れだって。」

私はそう素直に答える。

すると女の方は、苦笑いして戦術機を眺めた。

そして近づき機体の周囲を見て回ると、私達を見る。

「……良かったら、動力を補給してあげようか？」

その言葉に、私は呆然とした。

……確かにあの戦艦には、戦術機以上の技術が絶対あるはずだから補給は簡単に出来うかもしれないけど……。

そう思っている私をよそに、お姉ちゃんが「頼む。」と言った。

051 (後書き)

戦術機を艦内に収容しました。

補給を開始します。

という事で更新しています。

イーニャが原作の用に喋っていたら、大変すぎる。

たまに何を言っているのか、掴みどころが無いからね……。

その点、転生者は楽だ。

本当に。

というか子供ですしね……。

TEなら唯依姫でも入れた方が良かったかな？

052 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…クリスカ・ビャーチェノワ

九人目…イーニャ・シエスチナ

|| || || カノン || || ||

……なんかホッとしている私がいる……。

胸を何度もなでおろす。

……紅音……、人が悪いと言うか何と言うかな。

……まあ、良いか。

私は艦橋に紅音を置いて、食堂に移動していた。

「カノン。ホッとしたのは分かったから、……その、ね。」

そう言って、フェイトはなでおろす腕を止める。

「すまない……。」

私はフェイトの言葉と行動に、腕を動かすのを止めた。

……だけど、本当にホッとしているんだがな。

また動かしそうになった腕を、再度フェイトが止めた。

無意識に動かしてしまったらしい。

……自重自重……。

|| || || クリスカ || || ||

私は啞然としていた。

リリィさんから、この世界とリリィさん達転生者の事を聞いたのだ。

…… M u v - L u v A l t e r n a t i v e T o t a l E c
l i p s e の世界じゃなくて、知らない漫画の世界だって……。

……そしてその世界に、転生者が複数入りこんでいるって……。

……なんていうカオス……。

向かい合う形で座っている妹も、啞然としている感じた。

かく言うリリィさんは、厨房で私達の食事を作ってくれていた。

少しばかり申し訳ない気持ちになる。

「まあ、私達はこの世界で害のない転生者を集めているんだけどね。」

リリィさんはそう言って、笑っていた。

……害って……。

「……そう言えば、今後クリスカ達はどのようなの？」

いきなりリリィさんは話題を変えた。

少しだけ、頭の中が真っ白になる。

そしてすぐ意味を理解した。

……今後……、ねえ……。

そう思いながら、私はテーブルに肘を乗つけて妹を見る。

同じ気持ちなのか、妹も私を見ていた。

……どうしたらいいかな……。

……と言っても、半分近く決まっているんだけどね。

私は先に出された水を飲む。

……この世界でも、戦う力が必要らしい。

……一歩間違えば私達が死ぬ。

……それだけは避けなければならない。

……しかし、私達の戦闘方法はどれも有限。

……無制限に戦えるわけではない。

……さらにこの世界には無い技術を使っており、戦えば戦うほど戦えなくなっていくのだ。

……何時戦えなくなるか分からない。

そう考えていると、妹が口を開いた。

「……あのもし良いのであれば、この艦に乗せていただけませんか？」

妹が私が考えていた事を先に言う。

事実食事も機体の補給もままならないのが現実。

しかし、この艦には両方揃っている。

……だけど、そう簡単に許可してくれるか……。

「いいよ。」

……してくれたー!?

052 (後書き)

クリスカがツツコミ役になりそうなラスト……。

それにしても、服装はどうなっているのやら……。

まさか、まだ……。

それで良いのか私よっ!!

早急に制服を作った方が……。

いいのかな？

……別にいらないよね？

うん。

という事で……。

※クリスカとイーニヤが仲間になりました。

※戦術機が配備されました。

作業中のBGM「INSANITY」

053 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…????
- 十一人目…????

|| || || 紅音 || || ||

フェイトが食堂に行ったため、自動操縦で艦を動かす。

ワルキューレの岩戸を展開し、その中で私が操縦しても良いんだけど、あくまで自動操縦。

……レモンティーおいしくな。

結果、やる事が無くレモンティーをすすりながら艦長席でだらけている。

……森永のリプトン、よく1?で百円台販売できるね。

……安いから良いんだけど……。

……128円……。

そう思いながらレモンティーを飲んでみると、レーダーに何かが反応した。

……転生者が二人……。

……それと超大型の四足獣？

|| || || 束 || || ||

リリィちゃんがクリスカという事一緒に食堂に行った後、私は戦術機と呼ばれる機体を解析と改修をしていた。

流石にこの状態で外に出すわけがない。

……敵対行動した場合に自爆装置を私の手で押せるように……。

……リリィちゃんについた悪い虫は、私が残らず……。

……うふふふふふ♪

……とは思ってないんだけどね……。

……リリィちゃんは優し過ぎるから。

そう思いながら、戦術機 S u - 3 7 U B チェルミナートルの武装を外していく。

「……あゝ、やっぱり雨風にさらして整備しなかったせいかな、劣化が激しいね……。」

そう思いながら、私はチェーンを別の武装に巻きつける。

しっかり固定して、コクピット内で武装のパージをした後、チェーンを動かして接続部分を見た。

……やっぱりISとは違うけど、そこそこの技術が使われてる……。

……多分内部装甲も、劣化してそうだね……。

そう思い、私は機体脚部の装甲板を外しにかかる。

機体をアームでロックしているため、装甲板を外しても重心で倒れたりはない。

……。

そして、私は装甲板を閉じた。

……分かんと思うんだけど、分からない機体を触るもんじゃないね……。

そう思いながら、再度装甲板を外す。

そして目を凝らして良く見る。

……気のせいじゃない……。

……なんで、機体内部でキノコを栽培してるんだろう……。

そこには、機体機器の間に挟まった木からキノコが生えていた。

私は、かなり首を傾げながらそのキノコを眺める。

……食べられるのかな？

『はろはろ、聞える？』

突然頭の中に声が響いた。

基本的にISのプライベートチャンネル感覚で私は使っているが、念話らしい。

……どうしたの☆

私は考えるだけ。

そうすれば、勝手に読みとって答えてくれる。

『艦前方に、超巨大な四足歩行をする龍種を発見。 進行先に村があり、転生者二名が龍種と戦闘中。』

報告らしい。

……どうして欲しい？

『艦長は「束に聞いてみて。」と……。』

……いや、そう言うわけじゃなくて……。

……というか、私の考え気が付いてるでしょ？

『了解。』

053 (後書き)

選択肢

別に砕いてしまってもいいのだろうか？

冗談です。

この龍種の行方は既に決まっているので。

選択肢と言うかアンケート的な感じですね。

既に今回の敵は、モンスター（モンハン）です。

リリィは何と戦う？

エヴァは何と戦う？

カノンは何と戦う？

フェイトは（転生者二名と）何と戦う？

紅音は……別にいらぬか……。

モンハンですので、モンスターの名前でお願いできますかね？

分からなければ、龍種や飛龍、草食種や昆虫種、獣人種や鳥竜種でもokです。

モンスター一覧はwikiにあつたので、そちらを見ながら考えても良いですね。

お願いします。

054 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…????
- 十一人目…????

|| || || フェイト || || ||

『はろはろ。』

突然私の中に声が響いた。

……いきなりどうしたの？

一瞬食べていた物が、のどに詰まりそうになった。

それはエヴァも同じようだ。

……エヴァがかわいそうだよ。

そう言いながら、私は紅音からの念話を聞いていた。

『あのね、エヴァとフェイトで龍種を討伐して欲しいんだよ。』

その言葉に、エヴァの目が光った。

……なんか、指をボキボキ鳴らしてるし……。

……殺る気満々だね……。

そう思いながら、私は気付かれないようにため息をついた。

リリィが私を見て、笑っている。

……楽しんでないかな？

そう思い、私とエヴァは席を立った。

|| || エヴァ || ||

……別に碎いてしまってもいいのだろうか？

私は苦笑しながら格納庫に出る。

後ろにはフェイトが付いてきている。

『あ、別にいいですよ？』

……む、独り言みたいなモノのつもりだったのだから……。

そう思い、束の横を通り抜ける。

そして戦術機と呼ばれるモノの中に、キノコが生えているのを私は見てしまった。

束はキノコを見ながら、観察を続け私達に気が付いていない。

……私は何も見なかった……。

……見なかったんだ。

そう自分に言い聞かせ、カタパルトに足をつける。

カタパルトが開き、空が見えた。

《進路クリアー》

そう声が響いた瞬間、私は押し出された。

|| || ? ? ?
|| || || || ||

私は村の人を助ける為に、戦っていた。

と言っても、相手はただ進むだけらしい。

名前はラオシャンロンって言うそうだけど、その大きさは100m
越えるんじゃないかと思うくらい。

村まで後数十歩でついてしまいそうだ。

「ディバイーン……、バスタァアアアア！」

レイジングハートの先端から、高密度の魔力が放たれる。

ラオシャンロンの背中に、砲撃は当たるがそれほど傷が付かない。

……何かがおかしいよ。

そう思いながら、私「高町なのは」は空を飛ぶ。

……転生したばしょに、モンスターハンターのモンスターって……。

……神様って、職務怠慢なんだね。

「なのはちゃんっ!!」

私の名前を呼ぶ声が聞こえる。

茶色い髪、女性。

転生前に何の接点も持った覚えが無いけど、一緒に転生させられた人。

名前は「八神はやて」と言い、転生前の記憶が無いらしい。

どうも、私を転生させた神様は魔法少女リリカルなのはが好きなようだ。

054 (後書き)

捨て転生者？

捨て犬感覚w

拾え、拾え、拾えっ！！！！

うはっ！

変な風にテンション上がってキターw

何人まで、仲間にしようかな。

そう言えば、セイバーとアチャ男と不明が一人いたんだっけ。

そろそろKILLで捕獲しないと。

さて、どうしよっかな。

※何か血迷って変な短編を投下。

055 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…????
- 十一人目…????

||||フェイト||||

出撃した私が見た現場は、カオスとしか言いようがなかった。

転生者が私と同じ作品のキャラクターの外見をしていたからだ。

……幼馴染グループ。

そう一瞬思ってしまった。

なのはの外見をした転生者が、ディバインバスターを龍種に撃つ。

だが、それほど威力が強いわけでもないらしい。

「フェイト、アレを砕く。あそこにいる転生者どもを退避させろよ。」

「巻き込みかねない。」と付け加え、エヴァは龍種に近づいて行った。

……派手な事はしないよね？

と思いながら、私は転生者に向かって話しかけた。

＝＝＝はやて＝＝＝

『その転生者、早く退避してっ!!』

そう私の頭に響いた瞬間、一人の女性が目に付いた。

私と同じように、転生したなのはと名前を言ってきた女性も気が付いた様や。

……誰や？

一瞬そう思い、なのはちゃんを見ると「フェイトちゃんっ!？」と驚いていた。

……知り合いだろうか？

……それとも、私と同じように転生してきた人だろうか？

だけど、そんな事はどうでもよかった。

「あかんっ！　今ウチらが退避したら村がつ！！」

そう叫んで、答えたが女性は『いや、貴方達がいたらエヴァが攻撃できないの。』って言うてきよった。

……エヴァ？

一瞬「誰や？」と思ったが、なのはちゃんは顔を青くしていた。

……なんや？

「はやてちゃんっ！！」

なのはちゃんがそう言うて、私の手を握るとフェイトちゃんと呼んだ女性の方に移動。

その表情は必至で、私は混乱する。

そんな私の耳に、また別の声が聞こえてきた。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……ウンデトリーギンタ・スピーリトウス・オブスクーリー……サギタ・マガカ・セリエス・オブスクーリー！！（闇の精霊29柱、……「魔法の射手・連弾・闇の29矢」）」

そんな声が聞こえた瞬間、龍種が悲鳴みたいな声を上げた。

|| || || エヴァ || || ||

龍種はサギダ・マギガを受け、ダメージを追うが大ダメージには見えない。

……ふむ、適当に撃ってみたが意外と堅いな……。

そう呟くと、私は碎くと戦前通りの呪文を呟き始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……ト・シュンボライオン・ディアー・コネートー・モイ・ヘー・クリュスタリネー・バシレイア・エピゲネーテートー・タイオーニオン・エレボス・ハイオーニエ・クリュスタレ！（契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが）」

唱え終わると、龍種が地面から生えた氷柱らしき物と共に、凍りつけになる。

……砕くか。

そう思い、詠唱を続ける。

「パーサイス・ゾーサイス・トン・イソン・タナトン・ホス・アタラクシア（全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ也。）」

詠唱を続けると、凍った龍種にヒビが入る。

……それにしても魔法撃つだけで、出番が少ない気がするな……。

……普通に何か言わせて……？

……む、話数の尺？

……それなら仕方が無いか……。

何かに納得しながら、私は凍った龍種を見る。

「……コズミケー・カタストロフエー（「おわるせかい」）」

そう唱え終え「砕け散れ。」と私は呟きながら指を弾いた。

055 (後書き)

メタった!?

最後の最後に1話2k b台という掟を守った!?

というか、ラオ相手に「おわるせかい」って……。

村まで被害言っていないよね?

と考えながら「あ、そう言えば御都合主義だったな」と思います。

そんな感じで、村人はどう反応する事やら。

056 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…????
- 十一人目…????

|| || エヴァ || ||

砕け散り、地面に落ちて行く龍だった物を私はただ眺めた。

……何だ、龍種と言ってもこの程度か。

……弱過ぎる。

そう言って、エヴァはフェイトに近づいた。

先にいた転生者二人は、私を見て哑然としている。

「す、凄過ぎるわ……。」

……なんかタヌキっぽいな、この女。

茶髪の女性を見て、私はそう思った。

「なんか思ってたか？」

「……気のせいだ。」

感付かれたのか、茶髪の女性はそう言う。

一応誤魔化しておいた。

「あ、あのっ!!」

「……ん？」

今度は同じ茶髪でも明るい色した女が、私に話しかけてくる。

その表情は、なぜか輝いていた。

「助けてくれてありがとうございますっ!!」

そう言って、頭を下げた。

……助けたつもりなど、無いのだがな。

……アレは、八つ当たりの様なものだ。

……と言いたいのが、なんか言っではいけない気がする……。

そう思いながら、私は「まあ、暇だったからな。」と言って艦に戻ろうとした。

だが、呼び止められる。

今度は下の方からだ。

村から人がこちらを見ていた。

むしろ、私だけと見えている気がする。

……見ろ、人がゴミのようだ。

……とは、誰が言ったのだったかな？

そんな気分になりながら、私は背を向けて帰る。

帰り際フェイトに「後、頼む。」と言って、丸投げした。

呆然としていた横を通り抜けて、私は帰った。

……ストレス発散にもならなかったな……。

……艦内のどこかに、ダイオラマ魔法球と似たような場所でも作るか。

……というか、神が手伝えば簡単に作れる気がしてきたな……。

……魔法球と一緒に作るか……。

そして私は、ある一つの事に気が付いた。

「……チャチャゼロを連れてくるの忘れてたな。」

|||||チャチャゼロ|||||

ケケケ、御主人ニ置イテケボリニサレタゼ。

……アゝア、俺モ戦イタカタナ……。

……ト言イツツモ、コツチデ酒盛リシテタ方ガ意外ト面白カタゼ。

ヨモヤ、イーニヤーツテ言ウ奴ガ、俺ノ酒ヲ水ダト思ツテ間違ツテ飲ンダセイデ、ガキ共ノテンションガ上ガツテヤガル。

ガキト言ツテモ、リリィハ俺ヨリモ年上ダナ。

マア、酔ツテイル奴ハ新入りノ、二人ダガ……。

……コレガマタ面白い。

……ドウナツテイルカハ、想像ニ任セルゼ。

俺ハ酒ヲ飲ンデ、戦エナイ事ヲ忘レルトシヨウ。

……帰ツテキタラ、御主人ニ何サセヨウカ……。

……ン？

……人形ガ酒飲メルノカ疑問ニ思ツタ奴ハ、チャント「人形は酒が

飲める。」ト覚エテオクンダナ。

ケケケケケ。

056 (後書き)

前回のエヴァがかわいそうだったため、出番を増やしてみたW

気分屋何だよW

そう言えば、昨日コンビニに行ってきたので、ついでにマガジンを立ち読み……。

え？

エヴァ最強……。

防御無視っすか???

何とも、うろ覚えだけど、エヴァが最強過ぎた……。

そろそろ、エヴァが独自の魔法作らないと……。

って、あれ？

闇の魔法って、エヴァが弱かった時に作ったんだよね……。

あれ？

すでに十分強くなって無い??

あれ？

あれれ??

龍種相手に圧倒的なのに、闇の魔法が……。

まあ、30歳でリリースと出会ったんだから……今まで戦わなくても、おかしくはないけど……。

いや、会ううまでの20年で作っていそうな……。

……御都合主義?

……。

まあ、そろそろ作らせようか……。

057 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…????
- 十一人目…????

||||フェイト||||

……神様、私は悪い事をしましたか？

そう思いながら、私は村人に囲まれています。

理由はとても簡単でした。

……エヴァのように逃げたい……。

……けど、逃げられない。

「よくやってくれたっ!!」

「凄いわっ!!」

「アンタこの村の英雄だよっ!!」

そんな感じで、称えられています。

私がやった事ではないから、凄く居心地が悪い。

一緒に転生者二人も称えられている。

が、同じように微妙な顔をしていた。

……今思っただけで、この村の人って全員目が悪いのかな？

そう思ってしまう。

「どいてくれよう。」

そして、村人の一人が大きな袋を持ってこちらに近づいてくる。

一瞬、呆気にとられその袋を持った人を、私達は眺めると袋を私の前に置き「ギルドからの報酬だ」と言ってきた。

……報酬ってことはお金！？

……う、受け取れません。

と言おうとしたところで、私達の目的を思い出した。

資金を集めること。

一瞬「ギルドとは？」と、疑問に思ったけど言うに言えない状況。

「あ、ありがとうございます……。」

ありがたく受け取る事にする。

同時に、複数の討伐を依頼されてしまった。

……なんか、アレだね……。

……上手く使われてる気が……。

……まあ、お金になるのなら皆で手分けしてやればいいか。

|| || || リリイ || || ||

エヴァがフェイトを置き去りにして、戻ってきたらしい。

そのためフェイトが困ってそうなので、様子を見に行くと案の定困っていた。

「はいはい、どいたどいた。」

そう言いながら、人込みを分けてフェイトに近づく。

そしてフェイトの前に付くと、私の耳にモンスター討伐という言葉が聞こえた。

「討伐って、どういう事ですか？」

一瞬私を不審な目で見たが、フェイトが「リリイさん……。」「という、仲間だと思われたのか村長らしき人物が近づいてくる。

私はその人から詳しい話を聞く事にした。

するとこの村の付近はモンスターの出現が多く、ハンターと呼ばれる魔法使いがいるらしい。

別の村や町にも、ハンターはいるそうだ。

そしてモンスターを討伐すると、報奨金が出るらしい。

その報奨金は、依頼主やギルドと呼ばれる国家運営のモンスター討伐委員的な場所から払われる。

殆どは、国家から出るそうだ。

……意外とチャンス？

そう思いながら、私は討伐を複数引き受けた。

057 (後書き)

という事で、討伐クエストを複数受けました。

適当に戦って、数年たたせます。

というか、やけに村民の言葉が少ない気が……。

さて、その前に転生者達を回収しますか。

スカーレット姉妹をどうするべきか……。

2..2

で出せばいいのか、出さなければいいのか……。

というか、このままだったら出そう。

艦内から出られないお嬢様でw

058 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…????
- 十一人目…????

|||| はやて |||

なんか銀髪の女の人が出てきて、討伐を引き受けて行きよった。

なんかよう分からんけど、あの小さな子の父親なんかな？

そう思いながら、私は女性と村人との会話を聞いていた。

「……引き受けるけれども、その前に一つ良いかな？」

女性はそう言って村民を見た。

「私や仲間の八名全員は、不老不死だけどそれでもいい？」

……はえ？

……不老不死？

……あの、死なず老いずって言うアレ？

村人も私同様に啞然としている。

……というか、不老不死って意外と畏怖されとるような者やないか。

……今言って意味があるんかい？

そう思っていると、女性 は口を開いた。

「まあ、それでもいいと言うのなら全部の討伐引き受けるけど？」

|| || || リリィ || || ||

カノンから大体の事は聞いていた。

正義の魔法使いという、馬鹿が今後現れると言う事。

大分裂戦争で英雄が生まれると言う事。

麻帆等学園で騒動が起きる事。

それは全て未来の話。

エヴァンジェリンが高額の賞金首になるという事も聞いた。

そして「エヴァだけを賞金首にさせたくはない。」というのが全員の総意。

というか、全員が金首になりたいと言うのが総意だったりもする。

……まあ、賞金首って楽しそうじゃん。

そんな事を考えながら、村民とお話をする。

「魔法世界では不老不死や吸血鬼というのがどういう風に思われるか分からないけど、もし目を瞑るって言うなら全てのモンスターを刈り取ってあげるけど、どうする？」

そうすることで名を売り、エヴァの情報を手に入れた、正義馬鹿を釣って私達も賞金首になるという寸法。

どうせ、この中の誰かが情報をリークしに行くだろうしね。

……目指せ、超高額賞金首っ!!

……まあ、一応昔に正義馬鹿殺しちゃったから、私もお尋ね者になっただけだね……。

「もちろん、全討伐で出た報酬も半分ぐらいで良いよ。」

そうって、村民を揺さぶる。

今まで高額でモンスターを退治してもらっていたのが、一気にその半運の金額で退治を依頼できるのだ。

しかも私達は死なない為、確実に相手を仕留めるまでは戦う事ができる。

……これで釣れないようなら、人間かどうか疑うけどね。

……だって、国家から支払われるのも懐に入るんだよ。

……一種の横領臭いけど、揺さぶるにはちょうどいい。

……なぜ半分でもいいのかって？

……今見た全討伐報酬を足して半分にしても、かなりのお金になるから。

……さあ、どうする？

そういう思いで、見ていたら村民全員が泣きだした。

……何故？

……え？

……正直者の優しい人だって？

……え？

……どうしたことっ！？

……意味が分からないよ！？

そんなこんなで村民全員が賛成し、私達はお金を手に入れる仕事を見つけた。

058 (後書き)

え？

展開が早すぎる？

気のせいだって。

うん。

ホント。

気のせいだって。

基本村民は喋りません。

喋らせません。

モブですからWWW

賞金首って楽しそうだと思うのは、私だけかな？

もし、リリィ見たく最強種だったら賞金首になるのも楽しそうなんだけどな〜。

個人単体での戦闘技術。

巨大ロボはなし、神化なし、魔法あり、ISあり、特殊技能だけあり。

全員不老不死のため、1回だけ殺す事を目的とした場合。

咲夜||リリィ>紅音>エヴァ||束>フェイト>カノン||クリスカ>
イーニャ

的な感じ。

おそらく、結構違う気がするけど……。

というか、なぜ書いた……。

059 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

|||||なのは|||||

私は今アークエンジェルの中にいた。

実はリリイさん達と出会って、既に二十年経とうとしている。

時間が立つのが早いと言うのは、よく聞くが早過ぎる気がするね。

……まあ、気にしないで貰えると助かるんだけど……。

……えーっと、何処から話せばいいのかな？

……順を追って説明したいんだけど、尺に入るかな？

……まあ、いいや。

私とはやてちゃんは、二十年前にこの艦に乗り込んだ。

つまり、転生者の軍隊？

それに参加しちゃいました。

……まあ、転生したてで行く宛ても無かったしね。

……その間、色々あった。

……色々、ね……、あつたんだよ。

……聞かないでね。

……私と束さんの戦闘記録。

……心臓に悪いから。

最初の頃はリリイさんと村長の約束通り、村を害するモンスターを狩っていた。

十年たつと、村は少しだけ平和になったけど些細な被害はある。

また十年かけてそれらを無くすと、今度は大型のモンスターが出てきたのだ。

それと、大都会の自称正義の魔法使い。

なんか管理局に似てる気がする、そんな人達が私達の噂を嗅ぎつけてやってきた。

どうやら、私達がこういう人間か見に来たらしい。

不老不死と吸血鬼の混合部隊だと知ると、一気に私達は賞金がかけられた。

つまりモンスターと私達を殺そうとする魔法使いが、村を襲うようになったのだ。

村を守るようにモンスターと正義の魔法使いを殺していくうちに、私達は変な称号をかなり与えられていた。

……え？

……話が早すぎる？

……二十年たてばこんなもんだよ？？

……人や情勢が変わるのには、十分な時間だと思うけど？

さて、結構村では英雄扱いだけど、外に行けば賞金首だ。

しかも魔法世界だと言うのに、賞金はドルでつけられている。

……まあ、知らない通貨よりは知ってる通貨の方が良いから、良いんだけどね。

……後十年ほど、戦かわないと平和になりそうにないです。

……そんな感じ？

——篠ノ之リリィ——

称号…破壊天使、不老不死軍団のトップ、大量殺戮者、出会えば即死、というか魔法とか物理攻撃受け付けないんですけど、なんか身体が変わってるんですけど

賞金…7・000万\$

——篠ノ之束——

称号…不思議な国のお姫様、破壊天使と対をなす者、実戦で作った武器をテストするのやめてくれない

賞金…5・400万\$

——十六夜咲夜——

称号…タイムストッパー、メイド長、メイドしてるからか戦場でめったに見ないんですけど、というか普通に町で買い物している気が、なんかナイフが兆弾するんだけど

賞金…3・900万\$

——エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル——

称号…闇の福音、不死の魔法使い、悪しき音信、人形遣い、禍音の

使途

賞金.. 6. 200万\$

——カノン・メンフィス——

称号.. 赤い鬼神、

賞金.. 3. 000万\$

——真壁紅音——

称号.. 自称神（笑）、白い鬼神、出会ったら面白い事を要求してくる不思議な人、たまに殺すのが飽きたと言って逃がしてくれると時がある

賞金.. 2. 800万\$

——フェイト・T・ハラオウン——

称号.. 最速神、不思議な魔法使い、魔王の嫁

賞金.. 3. 800万\$

——クリスカ・ビャーチェノワ&イーニャ・シェスチナ——

称号.. 紅の姉妹、姉妹なのにファミリィネーム違う

賞金.. 2. 700万\$

——高町なのは——

称号.. 魔王、白い悪魔、逆らったら死ぬ、逆らわなくても死ぬ

賞金.. 4. 400万\$

——八神はやて——

称号.. 長距離魔法殲滅使い、独特な方言、敵が見えなければ大体八神のせい

賞金.. 5. 000万\$

059 (後書き)

一応、2・99kb

ギリギリですねwww

危ない危ない。

称号は、適当。

急いで作ったため、本当に適当です。

こう言う称号があったら、良いな〜見たいなのがありましたら、教えてください♪

なぜか全員日本円にして億を超えてる……。

それほど、危険という事ですね。

技術力とか、一人で古龍種を碎いたし……。

……÷10でも良いんじゃないかな？

かなり急いでいます。

ではっ!!

060 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

数十年前に現れた不老不死の軍団について、ここに記す。

おそらく軍ができたのは、半世紀ほど前の事であろう。

確認されているだけでも、エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルが存在しているので、一世紀ほど前の人間がいる事は確実である。

十一人だけの軍であり、その全員が不老不死である事が確認された。

旗艦はアークエンジェルと呼ばれる、魔法とは全く別の最新鋭科学技術の塊であり、どの戦艦でも太刀打ちができない。

現に軍隊を動かし殲滅戦を行ったが、アークエンジェルによって殲滅隊の旗艦と護衛艦、巡洋艦総数三十四隻が撃沈、航行不能にさせられた。

こちらからも魔法などの攻撃を行ったが、ことごとく回避され当たったとしても無効化される。

結果として、アークエンジェルは無傷で殲滅隊の艦隊を壊滅させたのだった。

不老不死の軍団について、大体の事が纏まったため以下に記す。

・篠ノ之リリィ

旗艦アークエンジェルの艦長であり、不老不死軍団のトップ。

自身も戦闘に参加するなどして、戦火を上げている。

基本はフリーダムと呼ばれる20mくらいの鬼神兵らしき機械を使うか、その姿に自身がなるかして戦う。

その他にも、刀を持ち戦う姿を確認されている。

殲滅隊の大半が彼女によって殺害され、死亡人数は二十年間で数十万人にも及ぶと想定。

理由として攻撃を全身に受けた場合、その者が何も残さず消えてしまった為、詳細な被害人数は分からない。

しかし、二十年で数十万人という驚異の数は人々が恐れるには当たり前の数だ。

ただしモンスターの討伐数は、确实と言っても良いほどに集計された。

こちらが監視し続けた結果であるのだが、監視に気が付かれている節がある。

古龍種と呼ばれる、モンスターを一人で倒す。

その数三十九匹。

一匹だけでも軍を動かさなければならぬと言うのに、彼女は一人で戦い勝利している。

幻獣亜目キリンと戦い討伐せずに共に寝たり、霧龍亜目オオナズチの擬態能力を無視して攻撃し殺害。

鋼龍亜目クシャルダオラの風を無視し斬りかかり、炎龍亜目テスカト科のナナ・テスカトリとテオ・テスカトルの二体を同時に切り殺すなど、無謀とも言える事を実行している。

ラオシャンロンを刀の一振りで、縦に切り裂いたのを確認した。

一番問題なのが、伝説とまで呼ばれる古龍。

黒龍ミラボレアスを隷属させている事だ。

どんな状況で隷属させたかは知らないが、ミラボレアスが彼女の元に降り立つと頭を下げたと報告を受けている。

上記の事を考え篠ノ之リリィに懸賞金7・000万\$をかけ、前代未聞の超高額賞金首とする。

今後軍団が公に出た場合、さらに懸賞金を上げる可能性がある事を追記しておく。

リンクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金7,000万\$

060 (後書き)

大体こんな感じ？

まあ、無理やり7・000万\$の賞金首にしたらこんな感じかな？

こんな感じなら、7・000万\$でも良いかな？

というか、7・000万\$自体があり得ない……。

せめて3・000万\$ならギリギリ納得できる範囲だと思うんだ……。

そう考えながら、7・000万ベリー（あれ？ 単位が変わった？
？）は変わらない。

ちなみに、ミラボレアスはカノンがザルヴァートルモデルでふんだ
黒龍です。

旧世界にいた黒龍です。

DEAD OR ALIVE

って、リリィ死さないじゃん……。

061 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

・篠ノ之束

同じ篠ノ之性を使っていることから、深い関係にあると思われる。

基本は研究をしているらしく、戦場にはたまにしか出ない。

出たとしても実検、開発などのテストケースを用いて戦闘している。

自身が危険と感じたら、レイジングハートと呼ばれる杖を使用することが確認された。

レイジングハートと同時に装着される服は、かの魔王「高町なのは」と同様のモノである事が確認されているが、攻撃誘導性能としては魔王の方が高く、出力の制限は篠ノ之束の方が高いと見受けられる。

殺人数はそれほど多くはないが、戦場で破壊天使と共に駆けめぐることから、高額の懸賞金をかける事が義会で決定した。

もともと開発したの物全てが私達には理解不能な物で、とてつもなく凶悪な物である。

アークエンジェルとは別に旗艦を一撃で消滅させるなど、不明点が多い。

モンスター討伐はしないが、散策という意味で闇の福音「エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル」と共に古龍が降り立つ城「レーベンスシュルト城」に良く向かっている事が確認された。

ちなみにこのレーベンスシュルト城と呼ばれる城は、旧世界にも同名の城があるそうだ。

さまざまな事を考慮した結果、4・400万\$に篠ノ之リリィの関係性を含め1・000万\$を加算し、5・400万\$の懸賞金をかける事にする。

リンクS

国際指名手配犯

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金 5・400万\$

・十六夜咲夜

青と白のメイド服で戦場をかけるのを確認された。

旧姓を篠ノ之と言い、篠ノ之リリイと篠ノ之束との関係性がある。

戦闘方法はごく単純、ナイフを使用した中距離戦闘を基本としており、ナイフを投げる斬るなどで戦う。

ただし、メイドという事が関係しているのか、めったなことでは戦場で見かける事はない。

おそらく旗艦アーケエンジェルの清掃や食事でも作っているのだろう。

メイドだから。

基本戦場より街中でのエンカウントが高い。

数日前も、村から数十キロ離れた町でカレー粉などを買っているところを目撃した者がいるそうだ。

メイドだから。

だが彼女が戦場に出た場合、何が起きたか分からないと気がある。

観察犯が見ていたところ、瞬間移動をした様に背後に回ったりナイフが手元に戻っていたりするそうだ。

直撃コースの攻撃も、同じように簡単に回避される。

おそらく瞬間移動と同等の能力が、彼女に備わっているはずだ。

篠ノ之リリイ、篠ノ之束の存在を考慮し、懸賞金を3・800万\$に設定する。

ただし、街中で出会っても戦闘はしないように。

戦闘はせずに彼女の姿を見続けろ。

アレは、良い女d……。

ランクS

国際指名手配犯

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金3,800万\$

061 (後書き)

書類……。

そんな書き方で良いのか……。

そんな感じで後3話ほど？

更新します。

……。
適当に書いていたから、この話に何を書いたのか覚えてなかったり

062 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

・エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル

誰もが知り恐怖する不死の吸血鬼。

幾度となく討伐隊を組まれたが、後少しの所で毎回逃している。

篠ノ之リリィと出会ってからは、魔法の開発などを専門とし実検をしているそうだ。

その魔法も、古龍を一撃で凍らせ二度目で粉碎するのを確認されている。

最近では「赤い鬼神」カノン・メンフィスのような動きが見える事から、彼女から体術などでも習っているのだろう。

「人情使い」という二つ名の通り、人形を従者とし戦闘をしているが、従者がいなくても十分驚異的な存在である。

術式を途中で固定し体内に取り込むような魔法を見た事があるが、おそらく実験段階の魔法であると監察官の総意で想定された。

その魔法がどのような効果を発揮するかは不明だが、今後脅威になるであろう。

向かってくる者は女子供でも、戦士と称え相応の攻撃を与える。

篠ノ之リリイには及ばないが、殺害数は軍団二位であり戦場で見かける事が多い。

軍団の中では唯一年齢が分かる人物で、1490年現在で九十歳を越えている。

もともとマグダウエルと呼ばれる家系に、エヴァンジェリンと呼ばれる女性がいた為簡単に年齢を割る事ができた。

外見は十歳程度の幼女であるが、魔力、知識、技術などを総合した場合、彼女にかなう者はいないであろう。

はっきり言って外見そのままの、お嬢様である。

イエスロリータ、ノータッチ！！

だけど、ババア！

という事で、篠ノ之リリイと不死の吸血鬼という事を加算して懸賞金6・200万\$に設定する。

ランクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金6,200万\$

・カノン・メンフィス

赤い鬼神の名で通ると思われる。

赤き鬼神兵らしきもので空を飛び、古龍を一突きし殺したりするのが目撃された。

基本的に戦場に出る場面は少ないが、出た場合は防衛線上に立つ所を数多くの人物に見られている。

赤い鬼神の中にいる女性が、カノン・メンフィス本人である。

軍団の中では特に秀でた事も無く、体術が得意ぐらいしか報告する事が無い。

ただし殺気や、視線、気配などには敏感で、観察犯が捕まったそう
だ。

その観察犯は、湖に逆さで入れられ放置されており、近くの紙には「犬神家」と書かれていたため、民衆に一種の恐怖をあおっている。

ちなみに、魔法世界の番組で「犬神家」と呼ばれる番組ができたが、おそらくこの事をモチーフにしているフィクション作品だろう。

何か違う気がするが、軍団の守りのかなめである。

彼女は戦闘に参加しないが、防衛線維持の役割を持っているため、懸賞金を3,000万\$に設定する。

それだけでも異例の超高額賞金がかけられているのは、彼女が不老不死で篠ノ之リリィ、エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルと関わっている為だろう。

リンクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金3・000万\$

062 (後書き)

エヴァは微妙に真面目に書いていた様な……。

あの城の入手方法が全く分らん。

作ったのか、何処からか持ってきたのか……。

そして書類……。

はっちゃけすぎだよ……。

というか、全員原作エヴァの懸賞金を越えてるんだよね……。

良いのかな？

時代は海賊？

1億ベリーの展開ですかね？

063 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

・真壁紅音

自称神を名乗る女性。

魔法使いの中では、かなり彼女を敵視しているものが多い。

戦場に出た場合、彼女の周囲は暗黒物質で消し去られう事が多く情報が少ない。

カノン・メンフィス同様の鬼神を駆り、防衛線上に立つ事が多いが基本戦場には出ない。

おそらくアークエンジェル内部で、篠ノ之リリイの代わりをやっているのだろう。

彼女と敵対した場合、低確率で逃がして貰える事があるが、逃げてきた物が言う言葉は「意味が分からない人でした。」だそうだ。

一応、不老不死ならびに篠ノ之リリイ、神を語った処遇で懸賞金を2・800万\$に設定する。

リンクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金2,800万\$

・クリスカ・ビャーチェノワ&イーニャ・シエスチナ

ぶっちゃけ、こっちの思考読んでるんじゃないとか言いようがない。

鬼神兵らしき機械を駆り、旗艦の防衛行動を主にしている。

そんなに戦場にはで無いので、機関のオペレーターでもやっているのだろう。

戦場に出た場合、旗艦アークエンジェル甲板上で篠ノ之東の実検装備を使い、艦対戦や防衛行動を行う為、アークエンジェルを落とす場合、彼女たちの鬼神兵を落とした方が良い。

ちなみに、攻撃をすると防衛されやり返される。

攻勢に移ると想像しない速度と起動で飛び回り、銃撃戦をしかけてくる。

生で彼女たちを見たとき、全員が鼻血を出したらしい。

おそらく一種の攻撃だろう。

懸賞金は軍団の中でも一番低く2・700万\$と設定されているが、超高額賞金である。

艦対戦の際、撃沈させた巡洋艦の大半は彼女達のせいである。

そのため、懸賞金がそう設定された。

リンクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金2,700万\$

・フェイト・T・ハラオウン

軍団の初期メンバーの一人。

その姿は半世紀前に酒場で酔い潰れていた女性と類似するらしい。

彼女の姿を忘れる人間がおらず、确实と言っても良いほどに彼女の存在が半世紀以上も前から存在している事を確認が取れた。

同時期に篠ノ之リリイも同酒場で確認されており、軍の手がかりになると思われている。

戦場では一振りの斧を持ち、その斧の形状を変えることで戦闘していた。

斧が鎌になったり、大剣になったり、双剣になったりと数多くの報告を受けている。

彼女が戦場に立つと、一瞬で姿が消え次に姿が確認できると、その周囲の人物が切り殺されているとの報告を受けた。

ごく僅かな人間が「超高速で動いている。」と言っていたため、おそらく彼女はかなりの速度で戦場をかけたと推測される。

初期のメンバーとしては懸賞金が低い。

だが、それは戦場で人を殺したと言う事が報告されないからだろう。

攻撃が直撃しても生きていると言うことから、彼女の懸賞金は3.800万\$と設定された。

ランクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金3.800万\$

063 (後書き)

詰め込んだよ……。

フェイトの懸賞金が、少ない様な……。

ま、いつか。

どうせ時代が立つにつれ、全員あり得ない感じになりそうだし。

アニメを見たからか、やはり長く書ける奴と書けない奴があるような……。

064 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

・高町なのは

二十年前に現れた魔法使い。

呪文詠唱もなしに高威力魔法を使い事から、高位の魔法使いか別体系の魔法を会得しているの物だと思われる。

そもそも彼女の魔法は属性がなく、桜色の魔法という事しか分からない。

篠ノ之束同様の杖と服装を持ち、戦場を駆けめぐる。

噂程度だが、篠ノ之束の声と彼女の声が同じように聞こえるそうだが、戦闘方法と何か関わりがあるのかは、不明であるが調査を続けて行く所存である。

魔王と呼ばれ、的である者に対して一切のためらいが無い。

一瞬で三十二人の魔法使いが一撃をくらい、死亡するなど戦闘能力は計り知れない。

戦闘方法は中距離から遠距離までの砲撃魔法を好み、近距離はフェ

イト・T・ハラOWNに任せたりする事がある。

その姿が妙に様になっている時があり、一部では古医中だとささやかれているそうだ。

殺害人数は軍の四番目であり、大規模魔法の際は周囲の魔力を収集し放つなどあり得ない事をやってのける。

篠ノ之束と共に戦場に出た際は、全力で退避する事が一番良い。

以上の事から懸賞金を4・400万\$に設定する。

リンクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金4・400万\$

・八神はやて

高町なのは同様、二十年前に現れた魔法使い。

戦場で見かけないが、実際は戦場にいる。

理由として、彼女の魔法は近距離から中距離の魔法が少ないからだろう。

彼女の攻撃は超長距離からの着弾炸裂魔法と呼ばれる、広域殲滅魔法と空間攻撃型の殲滅魔法が中心だからだ。

戦場で大型の殲滅魔法が起きた場合、すぐに戦域から離脱するのが良い。

彼女の攻撃は防ごうとしても、防ぎきれないのだ。

気が付いた時には、用長距離からの魔法が向かってきている。

殺害数は軍内三位と多く、殲滅魔法の威力がうかがえるようだ。

戦場判断や認識能力の意外と高いと観察犯から報告を受けている。

しかし、実際の戦場判断は篠ノ之リリイのもとで行われており、彼女は戦場判断を補佐する程度だろう。

何故かフェイト・T・ハラOWNと仲が良く、人前で胸を揉むなどセクハラ行為を頻繁にしている。

旧世界の関西弁を喋り、彼女の出身地が予想できているらしい。

彼女の広域殲滅魔法を危惧し、懸賞金を5・000万\$に設定する。

軍内で三番目に危ない人物だと、観察犯は言っているそうだ。

リンクS

国際指名手配

逮捕歴…0

DEAD OR ALIVE

懸賞金5.000万\$

064 (後書き)

さて、これで資料は終わり。

次話辺りから、モンハンスタートWWW

おそらく、動画を見ながらゲームとは違う動きをすると思う（モンスターが）。

最初は誰に戦わせようかな……。

カノン？

クリスカ&イーニャ？

065 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

|| || ? ? ?
|| || ||

僕は手元にある資料を見て、呆然とした。

資料に所々、不明点がある。

……特に「イエスロリータ、ノートタッチ。」とは何だ。

……そもそも、エヴァンジェリン。

……彼女は人形使いだろうか？

……なんで人情使いになっているんだい？

……打ち間違いでもしたのかな？？

そう思いながらため息をついた。

……ん？

……ああ、はじめましてと言うべきかな？

……僕の名前は……。

|| || カノン || ||

今日の依頼は、小型の種族を追い払いらしい。

アイルー、メラルー、チャチャブーだそうだ。

……ここ最近、こう言う事しかしてないな……。

そう思いながら、村の裏山を上る。

ちなみに、今回はクリスカが同行してくれているのだが。

「……どこからそれを持ってきた……。」

私はそういいながら、クリスカを見た。

ボディースーツではなく、エヴァが作った動きやすい服を着ている。

というか、リリィのスーツぽい物を着ていた。

だが、手にはどう見ても狙撃銃としか思えない物を持っている。

「束博士が作ってくれた。性能実験だと……。」

それを聞いて、私はため息をついた。

……前回の様にならないように……。

そう祈りながら、私達は指定ポイントに付いた。

「……私は遠くから狙撃する。」

そう言って、クリスカは私から離れて行く。

……仕方ない。

|| || || クリスカ || || ||

私がスコープを覗きこんだ時、あり得ない物が映っていた。

本来ならそこには、小さい生物がいるはずなのに見当たらない。

その代わりに、淡い緑の色をした火龍がいた。

……リオレイア？

一瞬唖然としながら、私はカノンに通信をつなげる。

束博士の真面目な作品。

携帯電話。

一応、リリィ博士がこの星の衛星軌道上に端末専用の機器を置きに行ってくれたから、使えるようなものだ。

「カノン、アレどうしたらいいと思う？」

『……私に聞くな……。』

そう言ってカノンも唖然とした感じの声を出していた。

「……やっぱ、排除？」

そう言うと、カノンは黙り「後は任せる。」と言って、通話を切った。

……丸投げしないで欲しかった……。

私は妹の携帯に電話をかける。

「もしもし?」

妹は寝ボケた様な声で、電話にでた。

……もう正午だけど……。

そう思いながら、チェルミナートルを持ってきてもらおうように言った。

065 (後書き)

まあ、そういう事で……。

カノン&クリスカ

だったのが、カノンが外れイーニャが入る感じスかね？

つまり、チエルミナートル（東改造型）VSリオレイア

既に戦術機という感覚が消え去っている感じの機体に仕上がっています。

戦術機の弱点潰して、さらに強化。

そんな感じ。

066 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

|||||リリイ|||||

「そうだ、草壁流を作ろう。」

私はそう言って、エヴァにふざけ半分で話しかけた。

対するエヴァは、眉をひそめ「なんだ、それは……。」と怪訝そうな顔をしている

私はエヴァに草壁流という物を説明した。

簡単に言うなら、陰陽道草壁流と言えば理解しやすいだろう。

高度の剣術や陰陽道で、名をはせたモノだ。

……この世界には、おそらくないだろうから作ったら面白いかな……。

……と。

そう説明すると、エヴァは「……面白そうだが、作る意味はあるのか？」と聞いてくる。

私はそれに対し「面白そうだから。」と答えると、何故かため息をつかれた。

「草壁流を作るのなら、同時に神鳴流も覚えてしまえばいいのではないか？」

突然そう言われた為、振り返ると紅音が立っていた。

「神鳴流？」

そう聞き返すと、紅音が長々しく説明し始めた。

簡単に言うと、この世界の未来で深くかかわってくるらしい。

……どうしようかな……。

|| || || なのは || || ||

「だから、リリィちゃんは私のだってっ!!」

「どうしてそうなるのかな？ 別にリリィさんにだって選ぶ権利は

あると思うんだよ。」

……はい。

現在私は、束さんと口喧嘩をしています。

普段は中が良いんですけど、お互い譲れない物があるところなる。

ちなみに、今回の譲れない物とはリリイさんの事だったりします。

……男の娘っていたんだね。

……私の好物です♪

「私達は夫婦なんだけど。」

そう言って、束さんはリリイさんを自分のモノだと主張しています。

その横をイーニャちゃんが駆けて行く。

「……何処行くの？」

束さんがそう言って、イーニャちゃんに聞くと「お姉ちゃんがレイアに合ったから、援護しに。」と言って、チェルミナートのコクピットに入って行った。

「……りょかい。」

私はそう言うと、右舷ハッチを解放し始めた。

||||イーニャ||||

外見は戦術機なのに、既に戦術機の域を超えた機体に乗る込む。

副座敷のコクピットは、火器官制処理などを分担している為かなり複雑だったりもする。

しかし、束博士は機体の内部フレームからコクピットいたるところ全てを、分解し改造した。

何と言うか、全く別の機体になっていたりもする。

まず第一に機体骨格はそのままだが、強度が高くなった。

TP装甲を別バッテリーで機体表面に展開し防御面を上げ、OSもリリィ博士が新しい物をインストールしてくれている。

はっきり言って、戦術機が玩具のようだ。

X M 3というシステムがM u v - L u vにはあったが、それも玩具と言われるであろう。

……「戦術機？ X M 3？ ナニソレ、オイシイノ？」的な感じだと言えは分かるかな？

……っと、早く行かないとお姉ちゃんが丸焼きになっちゃう。

不謹慎な事を思いながら、機体を立ち上げて行つた。

066 (後書き)

チエルミナートル

魔改造されてしまった。

一応、外見はそのままだから大丈夫かな……。

ただね、機動性や火力、装甲面。

ついでに言っちゃえば、管理人格なんかあったりして……。

リリーの思考を持った管理人格、オート設定戦闘……。

……ソレ、リリーが増えただけじゃ……。

11eyesとなぜか、ハーレムに足が伸びそうで伸びない状況に……。

ハーレムは無理。

書けない。

……多分……。

067 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

||||イーニャ||||

《跳躍ユニット接続。》

《対モンスター戦用、突撃砲背部マウント終了。》

束博士となのはさんの声がコクピットに響く。

……つくづく思うけど、二人の声って似過ぎ……。

そう思いながらも、お姉ちゃんがない部分をAI補正に切り替える。

このAI、基本的に最適なパターンをしてくれる為、私達が動かすより良いのかもしれない。

《対レイア戦闘用貫通弾マガジン、全突撃砲に装着。》

その声と同時に、カタパルトの左右からマウントされた突撃砲と同じ型の武器が出される。

自動的にAIが武器を手に取り、機体を屈伸させた。

《んじゃ、頑張ってね〜♪》

声が響いた瞬間に機体はカタパルトから押し出され、AIが跳躍ユニットを起動させお姉ちゃんがいる場所に向かって飛び始めた。

|| || || クリスカ || || ||

妹に電話してから数十分が立った。

カノンが帰ると言い、この場には私しかない。

そんな私を色々な危険が襲っていた。

リオレイアが翼を広げ、私に向けて突っ込んできたのだ。

「っ！」

長距離を走ったせいで当たり前のようにリオレイアは、胴体のバランスを取れなくなり自身の体重で耐れこむ。

私はそこを狙って狙撃銃で足の付け根を狙う。

行動が阻害出来ればと思い撃ったが、装甲の様な皮膚が狙撃銃の弾を弾いた。

リオレイアはゆっくり立ち上がると、私を見て口を開く。

……不味いっ！

そう思った瞬間、リオレイアは口から火球を放つ。

私は横に跳び回避するが、狙撃銃が火球に当たり破壊された。

……本当に不味い気が……。

呆然としながら、破壊された狙撃銃を見る。

そんな無防備な私にリオレイアは突進してきた。

一応不老不死と言われる種族のため、突進ぐらいはとうとう事はないが、流石に痛いのは勘弁願いたい。

だが願いは届かずに、リオレイアの突進を食らい私の身体はふき飛ぶ。

「ぐっ!？」

そして岩肌に肩をぶつけ、大量に血を流し始めた。

常人ならここで死亡確定だが、私はすぐに再生された身体で立ち上がり走り出す。

逃げ場所なんか、アークエンジェルぐらいしかない。

……妹……、早く来て……。

そう願っていると、遠くから聞きなれたエンジン音が響いてきた。

その音にリオレイアも気が付き、首を振りながら音の根源を探す。

徐々に音が近づいてくる。

「……おまたせ。」

そして、妹の声と共にチェルミナートルがリオレイアの前に降り立った。

067 (後書き)

さて、もう一部投稿します。

なんか、結構かけるね〜。

本編（IS）の方はあんまり進まないっていうのに。

テンションが乗らないからね〜。

そう言えば、「A C f a ×なのは」の方もあんまり……。

そして昨日の投稿回数が異常だった……w

068 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

||||イーニャ||||

私が付いたとき、お姉ちゃんの服に血が付いていた。

服も破けていることから、攻撃を受けたらしい。

……あれ？

……お姉ちゃんが神様から貰った能力に、身体強化って無かったっけ？

そう思いながらお姉ちゃんを見ると、AIが自動でリオレイアをロックオンする。

手に持っている突撃砲がゆっくりとリオレイアに向けられると、瞬間的に対りオレイア戦闘用貫通弾が銃口から吐きだされた。

対りオレイア用と言われるように、弾はリオレイアを貫通するほどの威力を誇っている。

もちろんリオレイアも、簡単に当たる気はない様だ。

後ろにジャンプしながら、翼を広げ空を飛ぶ。

そのため銃弾は、全部空を切った。

別にそれでもいい。

私は片方の突撃砲を地面に置き、お姉ちゃんの前に空いた手を置く。
お姉ちゃんがその手に乗ると、急いでコクピット付近までその手を
持ってくる。

コクピットを開き手を差し出すと、その手を握り副座敷のコクピッ
トの後部に乗り込む。

「悪い……。 」

お姉ちゃんがそう言うと、私は地面に落とした突撃砲を拾い上げな
がらコクピットを閉じる。

「別に大丈夫だよ。」と言いながら、機体をリオレイアに向けた。

私は後部シートに座ると、すぐさまリオレイアをロックオンし直す。オートでロックした場合、外された時の対処が数秒遅れる事がある。

……さて、その身体を無残な残骸にしてあげないかね。

そう思いながら、装備をチェックしていく。

近接装備がモーターブレードと、少しだけ頼りなさそうに思えるが問題ない。

いつも通りに排除するだけだ。

チェルミナートルが突撃砲をリオレイアに向け、対リオレイア戦闘用貫通弾を撃つ。

リオレイアは殆どを回避するが、身体と翼膜を数発貫通させられ墜落する。

「残弾数二十七。」

……かなりの数を使ったな……。

私はそう言うと、思い切りが良いのか手に持っていた突撃砲を捨て、マウントしていた突撃砲を展開する。

手に持った時には、リオレイアがふらつきながら立ち上がり始めていた。

「残弾数フル。」

その言葉が引き金になったのか、チェルミナートルの指が突撃砲の引き金を引く。

既に正確にロックオンをしていたため、撃ちだされる弾はリオレイアに吸い込まれるように向かって行った。

立ち上がりかけていたリオレイアの腹部をかするように弾が貫通すると、頭部、翼、脚部と射撃の反動で少しずつずらしながら撃って行く。

その全てがリオレイアの堅い皮膚を貫通し、血肉をかき分け体内から付き出る。

リオレイアが叫ぶが、弾が止まる事はない。

翼膜に穴という穴をあけられ飛べなくなり、腹部や脚部を撃ち抜かれ血を流しながらその身を横たえる。

至る所から肉が血と共に飛び出ているが、私達は気にしない。

リオレイアが絶命するまで私達は突撃砲を撃ち続けた。

その身に穴を開ける場所が無くなるまで……。

068 (後書き)

文字数が少なく、あっさりとした感じに。

まあ、事実あっさり殺しているんですけど。

突撃砲の次弾発射までのラグが、微妙に分からない……。

マシンガンだったら楽に書けるんだけどね……。

基本チェルミのまんま。

だけど、かなり違うのは束のせいWWW

今度マシンガン持たせてみようかな……。

069 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

||||束||||

イーニャちゃんが出撃した後、私となのはちゃんは艦内にある部屋に来ていた。

部屋の中央には魔法球。

ダイオラマ魔法球。

外部と内部の時間をずらしたり、広大な面積を誇る場所で戦闘や修行をしたりと便利な魔法ぐらしい。

ちなみにエヴァちゃん特性。

材料は神が持ってきてくれたそうだ。

それが複数接続された状態で、部屋の中央に置かれていた。

「私が勝ったらリリィちゃんに手を出さないでねっ！」

そう言うのと、私は先に魔法球の中に入っていく。

|| || 魔法球内会話録音音声 || ||

『だから、私とリリイちゃんは結婚してるって何度言わせれば気が済むのっ!!』

『たとえそれが本当だとしても、私は諦めないっ!!』

『諦めてっ!!』

『嫌っ!!』

『しつこいっ!!』

『リリイさんを手に入れるまでっ!!』

『リリイちゃんは物じゃないっ!!』

『知ってるよっ!!』

『くっ!! レイジングハート、ブラスターモード展開カードリッジフルリロード!!』

『っ！？ こっちだって、レイジングハートブラスターモード、カードリッジフルリロード！！』

『『スターライトッ！！ ブレイカアアアアッ！！』』

|| || || エヴァ || || ||

「それで私の魔法球を一つ半壊させた、と……。」

私は目の前に正座している二人に向かって、威圧的な雰囲気で喋る。

「馬鹿か貴様ら……。」

そう言ってため息を吐つく。

……馬鹿は死なないと治らないと言うが、不死者に適合する言葉はない物か……。

半壊しヒビが入った魔法球を見て、私は再度ため息をついた。

……直すのにどのくらい時間を割かれる事やら……。

再度魔法球内で発せられた言葉を録音した物を流すと、二人は気不味そうに頬を赤らめた。

「……で、言い訳はあるか？」

二人は「ありません。」と同時に言い、再度ため息をついた。

……ため息をつくと幸せが逃げると言うが、これはアレだな……。

……幸せが逃げているから、ため息をつくんだ。

……うん、絶対そうだ。

そう思いながら、私は二人を部屋から追い出した。

「そもそもスターライトブレイカーの撃ち合いで、ここまでなるのか……。内部に防御壁や結界を張ったはずなのだがな……。」

不思議そうに私は内部で起きた事を想像するが、上手く想像できない。

……今度の魔法球は、音声録音だけじゃなく映像録音システムも導入してみるか……。

……紅音とリリイに頼むか……。

そう思いながら、私は壊れた部分を探し始めた。

069 (後書き)

クリスカとイーニャが戦っている間に、こんな事があったと言う話。
ぶっちゃけ、呼んでる人は思っただろう。

「スターライトプレイヤーSLBを撃ちあったらどうなるか。」

それがこの結果だよ。

魔法球半壊したよ。

結界を内部から撃ち破ったよ。

あんたら、魔王だよ。

070 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

||||フェイト||||

今日の私は村から結構離れた峡谷に来ていた。

この峡谷は村と漁港をつなぐ重要な通路があるらしく、最近大型の飛龍が目撃されたらしい。

……しかも、見た事もない飛龍らしい。

その討伐のため、私は峡谷に来ていた。

……本来ならエヴァちゃんと一緒に来るはずだったのに……。

そう思いながら、楽できない事を恨む。

エヴァちゃんが来れない理由としては、数日前に束さんとなのはが魔法球内で戦闘し、結界や防壁を破壊し魔法球を半壊させたため、修理の為来れないそうだ。

少しだけなのは達を恨み、私は峡谷全体を見渡せる場所に向かって飛ぶ。

……さてと、飛龍ってだけで詳しい事が分からないんだよね……。

……事実、大半のモンスターは狩ってきたけど、アンノウンほども

んどくさい敵はないんだよ。

見つからないようにゆっくりと上昇し、周囲を見て再度上昇する。

目撃情報では、峡谷の色と似ているため錯覚だと思われたそうだ。

……保護色って奴かな？

そう思いながら、私は冷や汗を書いた気がした。

上昇して、いないと思ったのが運のつき。

目が合いました。

しかも、すぐ近くで。

……今日の私の運勢は、最悪らしい……。

|| || || はやて || || ||

今回は峡谷の近くにある、イーオスの集落を強襲するそうや。

なんや、イーオスの集落にドスイーオスが居ってな、漁港の人に迷惑をかけてるらしいんよ。

やから、ウチが殲滅するって事や。

……なんか、総合してウチの出番少くないか？

……次話から、ウチを主人公にした方が良いんとちゃう？

そう思いながら、イーオスの集落を確認する。

距離はそれほど遠くない。

今はウチが飛んで、集落にイーオスがどうか確認してるだけや。

……そういや、近くの峡谷のどこかにアンノウンがいるそうやな。

……そっちはフェイトちゃんが相手するそうやけど、大丈夫やろうか……。

……おっと、ウチはウチのすべき事をするだけや。

……集中、集中。

そう何度もつぶやき、ウチは集落にイーオスの群れを確認すると空間攻撃魔法を発動させる。

「ディアボリック・エミッション！」

ちなみに紅音に魔法少女リリカルなのはという作品を見せてもらうたんやけど、その中の登場キャラをウチに反省させたと知った時には絶望したもんや。

……だってあれやろ？

……バインド言う魔法あんのに、使わずに全部攻撃魔法。

……「お宅ら言う逮捕は、攻撃なんか？」と思わず聞きたくなってくるようなもんやったわ。

……「バインドってなんや？」って、思わず聞きたくなる。

……よくそれで時空を守る組織つー言っておれるもんやな、片腹痛いわ。

……しかも、自分のモチーフのキャラはふざけ過ぎとった。

……あん時はショックで数日間寝込んだな。

「……あ。」

全く関係ない事を思い出したら、集落が既に魔法で破壊されとうた……。

「……やり過ぎてもうたかな？」

そう言いながら、ウチは崩れかけた集落に降りる。

070 (後書き)

……フエイト？

20年そこにいるんだよね？

なんで「重要な通路があるらしく」と、疑問形？

そんなこんなで更新しておく。

071 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

|| || || 咲夜 || || ||

「カノン。これはいったいどういう事？」

私はカノンの後ろに付いて回る小さな生物を見て、啞然とした。

どう見てもアイルーとメラルーだ。

しかも、20匹づつの大所帯。

カノンは苦笑いすると、説明し始めた。

「この間の討伐に、こいつらを討伐するがあつたのを覚えているか？」

……確かにありましたね。

私は頷き、説明を続けるよう促す。

すると、何とも言い難い顔をしてアイルー達を見た。

「あの時リオレイアから助けたせいかな、今日まで私とクリスカを探していたそうなんだが……。」

「……討伐しに行ったのに、助けてどうするんですか。」

私は呆れながらアイルー達を見た。

カノンはどうしたらいいのか分からないのか、困った顔をしている。

しかもここは村の中。

討伐すべき対象がいる事に、村人は少々戸惑っていた。

だが誰も「討伐しろ。」と言う事は言わない。

……どうするべきなのでしょうかね……。

そう悩んでいると、足音が私の後ろから近づいてきていた。

「……。」

クリスカとエヴァだった。

アイルー達はエヴァを見ると一瞬ひるんだが、クリスカを見てホッとしたような表情をしていた。

||||フェイト||||

私はアンノウンと戦闘していた。

アンノウンの姿は意外にも大きく見える。

翼には長く尻尾の様な物が垂れており、尻尾は三つもあった。

黄色っぽい色をした腹部の皮膚に、赤褐色見たいな色が所々に見受けられる。

このアンノウンは帯電をしたりすることから、私同様の電気系の能力を持っているようだ。

……問題は攻撃方法。

……目の前の飛龍は私が地面に降りていると、地面スレスレを飛びながら口を開き攻撃をしてくる。

……雷撃なのか疑問に思ってくる。

……地面に当たっても、数秒間帯電してるし……。

かなり不思議な生物のようだ。

……というか、モンスター全般不思議生物だ。

そう思いながら、バルディッシュをアサルトフォームからハーケンフォームに変える。

遠、中距離から魔法を撃ってもらちが開かないため、中、近距離戦闘にしたのだった。

するとアンノウンも帯電した状態で、私に向かって蹴りなどの近距離戦闘に変更する。

攻撃パターンを変えると、今までの飛龍とは違い向こうも攻撃パターンを変えてきたのだ。

知能が恐ろしく高い。

……というか、近距離戦闘に近距離戦闘で挑むって……。

……もしかして、私挑発されてる？

「……ハーケンセイバー！」

バルディッシュを大きく振りかぶり、鎌のような魔力刃をアンノウンに向かって飛ばす。

しかしアンノウンは翼を大きく羽ばたかせ、高度を上げる事によって攻撃を回避した。

……かなり時間がかかりそうだ……。

そう思いながら、私はアンノウンの特攻を回避した。

071 (後書き)

ちなみに、何故こんなに更新しているのか全く分かりません。

まったく……。

朝から書きすぎでしょ……。

お休みだからってふざけ過ぎの様な……。

ま、一つ言えるのは……。

……家のなか熱いんですけど……。

072 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

|| || || フェイト || || ||

飛龍との戦闘に何とか勝利し、私は村に戻ってこられた。

すると私の目には、可愛い猫が二足歩行で歩いてる姿が映る。

それも沢山。

私は戦闘時に見せるスピードで、その猫の中に突っ込んだ。

……か、可愛い……♪

……ここは天国??

アイルーとメラルーに飛びつきながら、私はそんな事を考えていた。

|| || || カノン || || ||

「おわっ!？」

私は自分らしくない声で、後ろにいたアイルー達に飛びつく人を見た。

「……フエ、フェイト……。何を、やっているんだ……。」

かなり驚きながら、数十年の友を見た。

正直唾然となってしまう。

フェイトのこのような姿を、私は初めて見たのだから。

「ね、ね、カノン。この子達どうしたの!？」

テンションを上げながら、フェイトはアイルーを数匹抱いて私に聞いてきた。

私は少し引きながら、フェイトに対する答えを言おうとする。

だが、何故か言えなかった。

……誰か助けて……。

|| || || リリイ || || ||

「え？ 予定を少し早める？」

私は紅音が発した言葉を聞き、目を見開きながら聞き返した。

「いや、八万文字以上書いておいて、原作の「げ」の字もない……早く原作に入れと言われてな。」

そう言った紅音の顔は、微妙に黄昏ていた。

……食堂で黄昏た表情で変な所見ないでよ……。

そう思いながらも、水を飲み口を潤わせる。

「実際の、詰め込んでキンクリしても良いんだ。 だけどね、キンクリした内容が分からない、簡略化された場合だと、分からない場所も多いと思うんだ。」

「……メタ発言乙……。」

私は呆れながら、水を入れた容器を机に置いた。

「で、どうするの？」

私がため息をつき、そく聞くと紅音は「適度にキンクリする。」と言いだめた。

……いや、適度にキンクリって……。

……予想じゃ、大戦までに十万文字は越えると思うけど……。

「まあ、600年前に指定した結果なんだから、長くても仕方ないと思うんだけどね……。」

そう言って、紅音もため息をついていた。

|| || || 咲夜 || || ||

今回の私は討伐に来ています。

……ですが、私が戦闘した場合すぐに終わってしまうと言う……。

……ええ、時を止めて、刺し殺すと言う……。

……即死ですよね……。

相手は金獅子と名高い、ラージャンです。

大きな暴れ猿ですね。

……今じゃ、ただの死体ですけど。

そう思いながらナイフの血を拭いていると、突然携帯が鳴り始めた。

「……はい？」

私はナイフを仕舞い、携帯に出ると相手はお父さんでした。

……どうしたのでしょうか？

『……えーっとね、急ぐ用事もできたから、帰りに出来るだけ買い物してきてくれないかな？』

そう言って、電話は切れました。

……はて？

……どうしたんでしょう……？？？

072 (後書き)

ストレートはキツイです……。

確かに、既に八万文字……。

原作の「げ」の字も見えない。

少々キンクリしますか……。

それでも後数万文字は、行くと思いますけどね……
W

073 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

|| || || 束 || || ||

……マズイマズイマズイ!!

……リリイちゃんに新しい虫が付いちやった!!

そう思いながら、その虫というか人の顔を思い出す。

高町なのはちゃん。

はっきり言えば、もう一人の自分だ。

天才とか世界を敵に回したとかそう言うのではなく、単に中身が私と同じ。

……もし、リリイちゃんとなのはちゃんが並んだら……。

そう思うと、怖くて何も考えられない。

……ちゅちゃんとか、クラリゅとかはまだよかったよ。

……簡単にあきらめてくれたから。

……けど……、なのはちゃんはしつこい……。

……台所に蔓延る、あの気持ち悪い生物並みにしつこい……。

……あっ♪

そう思いながら、目の前にリリィを見つけ少しだけ気分が良くなる。

「リリィちゃん♪」

……少しだけ、気分転換に付き合ってもらおう☆

……というか、ベットにGO♪

|| || || なのは || || ||

……どうしたらいいのかな……。

そう考えながら、私は頭を悩ませていた。

かれこれ数年近くは、この悩みで頭を抱えている気がする。

やはりと言っても良いほど、私はリリィさんの事を考えていた。

……確かにリリィさんは男。

それは是認が知っている事。

……そして、本人が夫婦と認めている。

普通なら誰でも気が付くと思うけど。

……付け入る隙が無いな……。

そう結論を出したところで、転生後何千度目かのため息をついた。

……既成事実？

……いや、駄目だ。

……それだったら、既に東さんの方が咲夜さんを生んでいる分、リード率が高い。

……高いと言うか、意味がない。

……生きた年数？

……生前二十代後半に転生語の二十年足しても、東さんのリリィさんと共に生きた百年越えは無理……。

……結果。

……難攻不落の要塞を前にした、村人。

そう考え付いた瞬間に、私は髪の毛を手で掻き乱した。

……私に、魔王に出来ない事はないっ!!

「絶対攻略して見せるっ!!」

|| || || はやて || || ||

「なんや……、アレ……。」

そう思いながら、私はクリスカとイーニャと一緒になのはちゃんを見ている。

流石に二人も、啞然としている。

……啞然と言うか、呆然かな？

そう思いながら、私は「家政婦は見た！」的なテンションで、壁から少しだけ身を乗り出して見て見た。

……正確には、通路の曲がり角から顔を覗かせとる訳やけど……。

クリスカもイーニャも同じように、覗いていた。

……ノリが良いのか、やってみただけなのか……。

……まあ、どっちでもええか。

073 (後書き)

次話から簡単にキンクリを始めます。

100年ほど。

省略という形じゃないよ。

経歴？

歴史？

その時何が起きたか？

そんな感じで、100年ぐらい適当に説明します。

オリ展開というか神鳴流の出来た年が分らん。

というか、もう適当。

書き終わっているけど、適当過ぎてorz状態。

ま、さっさと投稿しますか。

074 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

|| || 経歴 || ||

1494年

・篠ノ之リリイが刀一振りで、古龍ミラルーツを殺害。
使用した刀剣は「真打・童子切安綱」。

・篠ノ之束が魔法無効化装甲を解析し成功。
対人用の魔法無効化機械を製造し、見事戦線に投入し無効化した。

・カノン・メンフィスがアカムトルムを殺害。
機体を使用し「ルガーランス」を敵胴体に刺した後、刃を展開させ
砲撃し殺害した。

・クリスカ・ビャーチェノワとイーニャ・シエスチナがウカムルバ
スを殺害。
ただし、殺害後に「寒さで凍死しかけた。」と本人達が言っていた。

1496年

・篠ノ之リリイが陰陽道草壁流を使用し始める。
ただし、陰陽道はそれほど技術はない。

・十六夜咲夜が艦内を清掃中、誤ってワルキューレの岩戸を展開。全員に知られ、緊急時に艦の全権を真壁紅音が請け負う事が決定する。

・エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルが魔法球を増やす。
モンスター数匹を凍りつけにし、魔法球内に転送したとの事。

・同時にモンスター魔法球内保護観察という暇つぶしを思いつく。
全員にモンスターの殺害ではなく、捕獲を指示し始める。

・村にミラボレアスが現れるが、被害はなし。
エヴァンジェリンが魔法球に移転させる。

1497年

・篠ノ之束がエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルの依頼で、魔法球内にレーベンスシュルト城の建築を始める。
篠ノ之リリイと篠ノ之咲夜も建築に参加。

・建築後、ミラボレアスがその周囲で羽を休ませるようになった。
実質的被害なし。

・フェイト・T・ハラオウンが篠ノ之束に機械工学を習い始める。
年内に自身が使用するデバイスの修理は出来るようになった。

・高町なのはが数度目の篠ノ之束との戦闘を引き起こす。
その際、魔法球ではなく捕獲したりオレウスが重傷。

・八神はやてが村に迫ってきた魔法使いを長距離から迎撃。
味方防衛対象損害なし、敵死者行方不明者多数。

1498年

・篠ノ之リリイが陰陽道草壁流を極める。
村に結界を張りそのためか、モンスターや魔法使いが大人しくなり始める。

・篠ノ之リリイが真壁紅音の元で神鳴流を習い始める。
気の使用方法是草壁流で少々かじっていたため、飲み込みが少々早い。

・十六夜咲夜がアイルーを保護する。
結果、魔法球内に数百匹のアイルーが生息した事が発覚する。

・クリスカ・ビャーチェノワが釣りをしているとガノトトスを釣り上げてしまう。
所持していた数本のナイフで殺害、村人にガノトトス料理をふるまう。

・高町なのはと篠ノ之東との間で再度戦争が起きる。
しかし、篠ノ之リリイがそれを阻止したため被害は起きていない。

074 (後書き)

レーベンスシュルト城は何処から来たのか？

分からな〜い。

賞金首時代の居城という事だったけど、勝手に改造W

歴史を改竄W

そしてリオレウス涙目W

075 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

075

〓〓〓経歴〓〓〓

1499年

・篠ノ之リリイが魔法世界から宇宙空間に出る。
同時にフリーダムで地図を作製。

・同年に篠ノ之束と共に地図を解析し、魔法世界が火星と言う事を結論付ける。

しかし情報が足りないため、正確な結論は出せないままだった。

・カノン・メンフィスが古城でミラボレアスと戦闘する。
何とか勝利するも、アンカーが破損するなどの被害を負った。

・クリスカ・ビャーチェノワとイーニャ・シエスチナが魚龍種を生きたまま捕獲し始める。
そのまま、魔法球内に転送。

1500年

・篠ノ之リリイの前にアーウェルンクスシリーズ（primum／
primum）が現れる。
勧誘だったが「誰の下に付くつもりはない。」と勧誘を拒む。

- ・篠ノ之束がアークエンジェルを点検し直す。

それと同時に、軽い改修をしハウス栽培ができる環境を整えた。

- ・エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルが魔法球を増設し始めた。

火山、砂漠、密林、古城、沼地、雪山、草原、峡谷などを作り上げる。

- ・数名でモンスターを生体に合った場所に移動させ始める。

だが、数匹が自由に動き回り魔法球内を転々としている。

- ・高町なのはを始めとする三人がモンスターをバインドで捕獲し始める。

数カ月で確認されている古龍を覗く全モンスターの捕獲に成功。

- ・八神はやてが古龍ミラバルカンと戦闘、勝利できずに撤退する。

その後篠ノ之リリィが現地に向かい、ミラバルカンを気絶させ捕獲する事に成功させた。

1501年

- ・篠ノ之リリィが古龍種を数匹つつ捕獲し、魔法球内に入れた。

そのため、全種モンスターが魔法球内に生存した事になる。

- ・篠ノ之束がアークエンジェルの回収を終了させる。

不明だった、ゲートの使用も真壁紅音の助言により完成した。

・十六夜咲夜が「コスモ・エンテレケイア完全なる世界」に属すると名乗るアーチャーの転生者と戦闘。

圧倒的な戦闘で転生者を殺害、不老不死のせいか再生中をし始めるが、篠ノ之束特性の氷結ナイフで転生者を封印、魔法球の雪山に結界を張り厳重に封印をした。

・これを気に完全なる世界と対立することとなる。

だが、篠ノ之リリイの前にプリームムが現れ必要に勧誘してくるのは変わらない。

・完全なる世界に転生者が入りこむ。

プリームムがその対応に追われ、鬱病（らしきもの）を発症した。

1502年

・篠ノ之リリイと篠ノ之束が、魔法世界が作られた世界だと理解する。

だが、特に興味も引かず放置する事に決定する。

・篠ノ之リリイが神鳴流の大半を会得する。

結果的に「二の太刀」が上手くいかないだけで他は出来る。

・イーニャ・シェスチナがドスガレオスの背に乗って、砂漠で遊ぶ。
ドスガレオスからしてみれば、振り落とそうと必死になっている。

・結界を再度張り直し、村から離れる。

三十二年にも及ぶ生活を終了させ、旧世界に帰還した。

075 (後書き)

なんか、早々に魔法世界の事に気が付いてるし……。

しかもキンクリ中に……。

というか、アーウェルンクスシリーズ（一番目）は産まれていていいのか……？

生きていていいのか？

作られていていいのか??

よく分らん。

増設した魔法球は、基本モンハンのクエスト場。

はやて、ミラバルカンに勝てず。

というか、魔法球内がモンハン世界になってる気が……。

いいのか、それ……。

そして、結構前に来ていたアーチャーの転生者は御退場いただきました。

프리미엄が人間臭くなってきた気が……。

076 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

1503年

・篠ノ之リリイの元にプリームムが現れる。
勧誘を続けるが、再度拒否し戦闘になる。

・プリームムは戦闘を通じて、勝てないと理解すると停戦を求めた。
しかし、篠ノ之リリイは「そちらが仕掛けてきて勝手だね。」と一蹴し、戦闘を続行。

・結果、プリームムの撤退で幕を閉じる。
完全なる世界で篠ノ之リリイを始めとする軍団には手を出さないように、決定が決まる。

・アークエンジェルは偽装鏡面を展開しながら、海上を航行。
進路を日本に向け移動する。

・篠ノ之リリイが神鳴流を完全に会得する。
なお神鳴流が無かった為、実戦投入はかなり先の事になるであろう。

1504年

・アークエンジェルが日本に上陸した。

道中、篠ノ之リリィと篠ノ之東、エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルが京都によるため、艦から離脱。

・篠ノ之リリィが京都から離れた場所で、草壁家を設立させる。

見込みのある物に名と草壁流を与えた。

・同時期に神鳴流と名乗る流派が現れる。

神鳴流の発祥は不明。

・神鳴流が草壁流に乗り込んでくる。

当時神鳴流は名が低く、噂になった草壁流を潰せば名が大きくなる
と思ったそうだ。

・草壁流の使用者として、篠ノ之リリィがそれを受ける。

当たり前のように勝利、神鳴流は篠ノ之リリィのもとで修業を積む
ようになった。

1506年

・アークエンジェルが世界樹を発見。

正式名は「蟠桃^{ばんとう}」と周囲の人々からは呼称されていた。

・十六夜咲夜が周囲の村人に、土地の買い取りを願い出る。

契約として、土地を買い取るのに金塊を与えと土地の所有権を貰い、
後はそのまま村人にとっては変わらない生活ができるように配慮
した買い取りとなった。

1521年

・エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルがアークエンジェルに合流。

こちらに携帯用の衛星が無かったため、迷子になっていたそうだ。

1533年

・篠ノ之リリイが草壁流と神鳴流の発祥者となる。

以後、草壁流には己の妖刀七刀を模倣し作り上げた妖刀と、神鳴流には束が作り上げた刀剣が置かれる事となる。

・この頃から、草壁流と神鳴流が魔を払う存在として認知され始めた。

時代は戦国時代だったため、大半が戦場に行き人を切る行為を行い始め、別の意味でも名を馳せた剣術名になり始める。

・もちろん破門にした。

そのため篠ノ之リリイが戦場に赴く事が極稀に合った。

・アークエンジェルに乗員していた数名で、小さな私塾を開く。
金銭入らずで、知能を与えると周辺村民からあがめられていた。

1535年

・篠ノ之リリィと篠ノ之束は、なぜか後の小田信長の養育係とされてしまう。

めんどくさがりながらも、後に名をはせる人物の養育に少しだけ楽しんでいた。

・真壁紅音が世界樹周囲地下数百メートルにアークエンジェルの格納ドックを建造。

そこから、周囲数十キロにわたって地下が要塞化していった。

076 (後書き)

なぜか小田信長が……???

気分で入れてみましたw

結局リリィが草壁流と神鳴流の使い手に……。

もう、ほどほどにしておこうよ……。

で結局はテンプレ的に世界樹を確保する、っと。

まあ、そうでもないし原作介入が困難ですからね。

蟠桃も最初からそう呼ばれてる状態。

もう、ネギま世界を蹂躪し過ぎな気がする……。

077 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて

1552年

・篠ノ之リリィと篠ノ之束は小田信長の養育係から外される事になる。

理由として、老いない為に物の怪の類とされ狙われ始めたからだ。

・この事に小田信長が反発したが、大半の者が打首にすべきと言います。

そのため迷惑がかからない様、篠ノ之リリィと篠ノ之束は姿を消した。

1553年

・篠ノ之リリィと篠ノ之束がアークエンジェルに帰還した。
同時に篠ノ之束の妊娠が発覚する。

・高町なのはがここぞとばかりに、篠ノ之リリィに迫る。
だが、ことごとく回避される。

1555年

- ・篠ノ之束がアークエンジェル艦内で出産。双子であり、普通の人間であった。

- ・咲夜より薄い青色の髪と何故か金髪。そのため、咲夜が「レミリア」と「フランドール」と名付けた。

1556年

- ・産後太りを気にした篠ノ之束が、ダイエットを始めるが全員がそれを否定。

- 一部の人間からは「なんでそんなにスタイルが良いの？」と聞かれ、一種の大騒動が起きた。

- ・高町なのはが落ち着いていた衝動が解き放たれ、数十度目の篠ノ之束との戦線が切って落とされる。

結果、高町なのはが背後からの攻撃で死亡扱いを受け敗退。

1560年

- ・レミリアとフランドールに教育を施すも、フランドールが逃げ出すという結果が起きる。

数時間後に、魔法球内の古城に迷い込んでいたところをミラボレアスによって発見された。

1563年

・レミリアが中学問題辺りを理解し始める。
反対にフランドールは、ようやく文字を読み書きできるようになった。

1567年

・魔法使いがレミリアとフランドールを誘拐。
エヴァンジェリン・A・Kマグダウエルと同じように、吸血鬼になれる。

・犯人不明のまま真夜中に、レミリアがフランドールをおぶって帰宅した。

術式で吸血鬼化されたのかは不明。

1568年

・レミリアとフランドールの背から羽が生え始める。
仕舞う事は無理だったため、村には出せない状態だった。

・吸血鬼のスペックを図るため、篠ノ之束はレミリアとフランドールの状態を確認した。

結果として、エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルと同様の状

態と判明。

1570年

・篠ノ之リリィは十全な準備を終え、世界をめぐり始める。
目的は二女、三女を吸血鬼化させた犯人探し。

1571年

・レミリアが大学卒業程度の学力を身に付けた。
フランドールは嫌々と勉強をするため、小学校卒業程度。

・同時に性を篠ノ之と名乗る事が無くなった。
もともと名乗ってはいないが、性を「スカーレット」と名乗り始める。

077 (後書き)

……え？

束が二度目の出産？

いや、しない方がおかしいけど……。

なんで、スカーレット姉妹？？

束からは東方キャラでも生まれるの……？

まあ、最初はただの人間。

ただし、大物w

吸血鬼化はエヴァと同じよう（でも、少しだけ違う方法）にしました。

これにより、不老不死化。

最終的に篠ノ之ではなく、スカーレットを名乗らせました。

というか、出すか出さないかで、同票のままで終わるって……。

考えるのがめんどくさい、出そう。

結果、東方の外見にネギまの吸血鬼が入りました。

078 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…クリスカ・ビャーチェノワ

九人目…イーニャ・シエスチナ

十人目…高町なのは

十一人目…八神はやて

十二人目…レミリア・スカーレット (正式性…篠ノ之)

十三人目…フランドールスカーレット (正式性…篠ノ之)

1572年

・篠ノ之リリィが旧世界での探索を終える。
同時に魔法世界へ再度足を踏み入れた。

・私塾を開いていた者達が村人から「老いない、頭が良い、人付き合いが良い」とされ、不老不死を無視した付き合いが定着し始める。
ほぼ、神様扱いを受けていた。

1574年

・レミリア・スカーレットとフランドール・スカーレットが魔法世界で懸賞金指定を受ける。

スカーレット姉妹が篠ノ之の子と判明されているため、懸賞金がお互い1・500万\$と異例の設定を受けた。

・篠ノ之リリィがその事を知り、捜査し始め情報部を壊滅に迫いやる。

だが、情報がリークされた物だと知り再度捜査をし直す。

1575年

・篠ノ之リリイの前にプリームムが現れる。
戦闘をするかと思えば、取引の誘いだった。

・篠ノ之リリイの方は、プリームムへ近接格闘の戦技教導。
プリームムからは数点の魔法具の譲渡。

・取引を成立させ、数ヶ月間戦技教導をした。
終了時に使用方法と目的が違う魔法具五点を、プリームムから得る。

・同時に完全なる世界に、不老不死の人間が入り込んでいる事に愚痴られる。

酒場で無表情で愚痴を綴るプリームムと、それを聞く篠ノ之リリイの姿があったそうだ。

1577年

・篠ノ之リリイがアークエンジェルに戻った。
しかし犯人を捕まえる事ができずに終わる。

・携帯電話を使用するため、専用の機械を衛星軌道上に置きに行く。
今現在、衛星軌道上に出ようとする場合、アークエンジェルに大型スラスターをつけるか、リリイ（フリーダム状態）が無理やり大気圏を突破するしか方法が無い。

・スカーレット姉妹がその頃魔法球内で、エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルを師に、吸血鬼の特徴把握と己の能力を制御し始

めるようになる

ただし、フランドールは能力を使えるも、使う場を弁えなかった為に篠ノ之束特性のリミッターをつける事になる。

1582年

・篠ノ之リリィと篠ノ之束が本能寺の変で死に逝く織田信長を見届ける。

織田信長の方も篠ノ之リリィと篠ノ之束に気が付き、大きな笑い声を上げ死んでいった。

1587年

・篠ノ之リリィが伊達正宗と出会う。

隻眼のため、ラウラ・ボーデヴィツヒを思わせ助言する。

・妖刀を六刀持つなどして遊んでいるところを、伊達正宗に見られる。

その後伊達正宗が、六刀持って戦えるような刀を所望したため作り上げる。

1589年

・魔法使いの一人が、真壁紅音を目撃したと本国に伝える。
そのため、軍隊が極秘裏に偵察をし始めた。

1590年

- ・魔法使いが村に潜入。
すぐさまクリスカ・ビャーチェノワによって殺害された。

- ・しかし、世界樹と不老不死軍団がいた事が魔法世界に知れ渡る。
そのため、結界を張って殺害を試みる動きが魔法世界に出来始めた。

1596年

- ・エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルが数多くの魔法を作り上げ、実戦に投入できるようにさせた。
そのほかにも、得意でもない系統の魔法に手を出し始める。

1598年

- ・幻術魔法をスカレット姉妹が会得する。
そのおかげで翼をかくす事ができ始め、外に出る事ができるようになった。

- ・しかし、まだ日光体勢が整っていない。
外出は夜間時が多い。

1599年

・プリームムが篠ノ之リリイの前に現れ、魔法世界の情勢を伝える。主に伝えた事は「1600年に聖域を占拠している、悪の魔法使いを駆逐する。」との事。

・その駆逐に村民が入っている事。
そのため、篠ノ之リリイは世界樹周辺に結界を張り巡らせる。

1600年

・篠ノ之リリイを始めとする者達が、アークエンジェルと共に魔法世界に現れる。
そして、戦争が始まった。

078 (後書き)

……リリイとプレミアム……。

お前ら本当は仲いいでしょう？

村人の評価が、魔法世界と同じ気がする……。

そして結局はスカーレット姉妹も懸賞金指定。

079 選択肢？（前書き）

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜（旧姓…篠ノ之）

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス（別名…羽佐間カノン）

六人目…真壁紅音（別名…神）

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…クリスカ・ビャーチェノワ

九人目…イーニャ・シエスチナ

十人目…高町なのは

十一人目…八神はやて

十二人目…レミリア・スカーレット（正式姓…篠ノ之）

十三人目…フランドールスカーレット（正式姓…篠ノ之）

079 選択肢？

|||||リリイ|||||

私達が転移した場所は、こちらに派遣する軍を収集している目の前だった。

と言っても、距離にして7・000はあるのだが。

それでも敵軍は私達に気が付いていないのか、動く気配が無い。

「咲夜、レミリアとフランをお願いね。」

そう言って、咲夜にレミリア達を託す。

……いくら四十年生きているとしても、私にとってはまだまだ子供。

……特にフランなんかは、精神的には中学生？

……なんて思う時もある。

……逆にレミリアは、何処かの叔母さんみたいに思考が……。

そう思いながら、艦橋で敵艦隊を見る。

どうやらこちらに気が付いたようだ。

全員所定の位置に座る。

私は艦長席。

艦長席がどうやら私の定位置と何時決まったのか、疑いたくなる。

だが、ブリッジ中央にある椅子に私は座った。

今現在、ブリッジは八名しかない。

理由としては、副長席の意味が無いのと管制が必要無い戦闘だからだ。

副長席は当たり前のように副長が座り、艦長の負担を減らすために戦闘指揮をとる。

しかし、リリイにとって副長分の指令は負担にならない。

結果、束はブリッジに座る事があまりない。

……たまに座るけどね。

束がいないうちに少し寂しさを感じながら、リリイを口を開く。

「対艦隊戦闘用意。敵陣に転生者がいた場合情報が漏れている場合もある。特殊兵器や光学兵器の使用を想定し、アンチビーム爆雷を発射。それと同時に魔法無効化装甲を完全作動させる。転生者が発見され次第、完全回避を心掛けるように。」

そう言いながらフェイトを見ると、正面を向きながら頷いている。

索敵は誰でもできる場所のため、誰がいるかなと思いつながら見ると紅音が座っていた。

……ちやつと待て神様。

……索敵いらなくないかな？

そう思いながら、ツツコミを抑えて正面を向きなおす。

丁度、艦左右に四門づつある多目的射出機からアンチビーム爆雷が発射され爆発。

艦に粒子状の物が覆う。

これで大抵のビームは吸収攪乱がおき、減衰する事ができる。

問題は、アークエンジェルも同様の減衰が起きるのだ。

……まあ、用心した事に問題はないはず。

敵に転生者がいない場合、大抵の艦隊主砲は魔法。

無効化装甲で事足りるのだ。

「ゴットフリート、バリアント一番二番起動。 艦尾ミサイル発射管一番から十二番スレッジハンマー装填。」

そう命令を出すと、艦前方に内蔵されている主砲がせり上がり砲身を伸ばす。

艦尾両舷からも外に向かってせり出し、敵艦隊に向かって180°回転したのちに砲身が伸びる。

「イーゲルシュテルン全門、ヘルダート起動。接近してくる魔法使いがいなくても限らない。周囲確認厳につ!!」

着実に戦闘状態を作り上げていく。

敵艦との距離が近づいて行く。

「撃てっ!!」

そして私の声にアークンジェルと敵艦隊の主砲が火を噴き交差した。

079 選択肢？（後書き）

今回は篠ノ之家族はリリィ以外ブリッジにいません。

あ、艦橋と書いてブリッジと読みますよ？

さて、軽く艦対戦を書いた後にまたキンクリしましょう。

問題は大战までキンクリするか、なんですよ。

第一、あの大戦でかなり選択肢でそうだし……。

今のうちに選択肢を出しておく？

ま、別にその時になったらで良いかな？

でも、一応。

選択肢

赤き翼対する対応

1…完全敵対

2.. 関与せず

3.. 友好的接触

関与せずに至っては、基本無視と言う感じですね。

戦闘はただ単にあしらうと言う様な……。

完全敵対の場合、赤き翼に生傷が増えます。

ライフメーカー並みにラカンの腕が吹き飛んだり、リリィの剣撃でナギの足など四肢が斬り飛ばされたりします。

まあ、魔法で治るんでしょうけど。

友好的接触は、まあ、完全にアレですね。

ライフメーカーフルボッコフラグ……。

あれ、で別に全てに関してライフメーカーフルボッコなんじゃ……。

まあ、気にせずに……。

選択肢で、未来が変わる気がする。

080 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドールスカーレット (正式姓…篠ノ之)

||||リリイ||||

敵の主砲がアークエンジェルの左舷ハッチ部分に着弾するが、飛散し無効化させる。

魔法無効化装甲の主な役割としては、使用している魔力を完全拡散させる物。

そのため魔力を伴った攻撃は、あらかた無効化できる。

ただし近距離で、大魔法使用された場合には被害は受けるのだが。

遠距離からの攻撃を無効化装甲で押さえた場合、点ではなく面に拡散する為無効化される。

そのため近距離からの出力には面ではなく、ほぼ点で受け止めることとなり装甲が耐えられなくなってしまう場合もあるのだ。

ラミネート装甲と同じ無効化方法なので、ビームと魔法が装甲面で拡散され無効化されていると思うてくれればいい。

ラミネート装甲も、ビームの直撃を排熱が追いつく限りは無効化し続ける。

……そう考えると、アンチビーム爆雷は必要だったかな？

ゴットフリートで大きな穴をあけられ、轟沈していく艦を見る。

「巡洋艦から誘導魔法接近っ!!」

陸地の境目と言う事で、アークエンジェルの下は海面。

海上用の巡洋艦などが、近くの港から出っ張ってきたのだろう。

ここでミサイルなどが出ないあたり、魔法使いの魔法が優秀である
と知っている物が多いのが分かる。

……って、まだミサイルとか軍隊に配備とかされてないね。

……いけないいけない。

少しだけ魔法の接近を無視しつつ、私は指示する為に口を開く。

「イーゲルシュテルンで弾膜を、同時に艦首下げ20、ゴットフリ
ートを巡洋艦群に照準。」

そう言うがイーゲルシュテルンは、ほぼ自動で弾膜を張る。

言う意味が少しなかったりもするのだが、気にせず私は指示を出し
た。

アークエンジェルが海面に船首を下げる。

「てえっ!」

「撃て。」の「て。」しか言えていないが、しっかりゴットフリートが火線を伸ばし巡洋艦数隻を破壊しながら海水を叩く。

「艦首上げ20、この高度を維持したままスレッジハンマーとバリアントで巡洋艦に対応。」

「艦後方から高エネルギー反応っ！ 直撃コースですっ！！」

なのはの声がブリッジに響くと、フェイトは瞬間的に艦を射線上から外す為、腕を動かす。

ただ横に移動するのには時間がかかるため、艦前方右舷スラストを下に向けてアークエンジェルを浮かすように移動させる。

すると移動した直後に、大出力の魔法がそこに通過した。

それを見て少しだけ咂然となるも、クリスカが「艦後方映像出します。」と言って、ブリッジ後方の大型モニターに映し出したおかげで我に帰る。

……私達の出現は相手側にとって、イレギュラーな事態のはず。

……それなのに、私達の後方に配置している？

さまざまな考えが頭をよぎりモニターを見ると、そこには一人の男が腕を構えてアークエンジェルを見る姿があるだけだった。

080 (後書き)

しまった。

昨日の夜……というか、今日の朝に投稿しようとしてされてなかった……。

仕方なしに、今投稿し始める。

081 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…クリスカ・ビャーチェノワ

九人目…イーニャ・シエスチナ

十人目…高町なのは

十一人目…八神はやて

十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)

十三人目…フランドールスカーレット (正式姓…篠ノ之)

|| || || ?? ? ? || || ||

俺は目の前に突如現れた艦を見て、すぐさま移動をする。

……アレを落とせば、原作までに有名の英雄になれる。

……そうなれば、麻帆良に簡単に入れるし、ネギを強化することもできる。

そう言うじゃ念を抱きながら、俺は魔法を撃った。

……俺の魔法は最強だ。

魔力や気を神の力で最大にしてんだ、最強以外の何でもない。

完全にこちらに気が付いていない事を確認し、撃ったのだ。

しかし、あの艦はそこらの艦とは違い簡単に魔法を回避する。

……そう言えば、何年か前に艦対戦で一艦に負けたと、どこかのお偉いさんが嘆いてたな。

……なら、完全に落としてやる。

|| || || リリイ || || ||

私はモニターでその姿を見た瞬間、気が付いた。

……転生者。

私の腰が自然と席から離れる。

……艦が不安定な状況を維持しているのにもかかわらず……。

おかげで、艦橋内で転びそうになった。

艦の姿勢がもどされた為、完全に転ぶ事は無かったが、転んだら転んだで恥だとおもう。

しかし、転生者の参戦に少しだけ戸惑いができた。

……問題はあの転生者の能力。

……厄介なのでなければいいんだけど。

そう心の中で呟くと、私は席を立った。

「リリース？」

カノンがその姿を不思議そうに見て、私の名を呟く。

艦橋にいる全員が私を見て、不思議そうな顔をしている。

その間にも、小さな魔法が艦に当たり飛散していった。

「……私が転生者の相手をする。指揮は束にとらせるから。」

そう言うと、なのはが「だ、だったら私が行く！」と言いだした。

……まあ、魔王様なら誰が相手でも大丈夫……。

……だよね？

|||||なのは|||||

私は艦橋から出ると、頬を緩めた。

……にゃふふ。

……リリィさんに良い所見せれるな〜♪

そう思いながら、邪念を抱いていた。

過去に束さんと戦って、リリィさんへのアプローチを完全封印された私。

だけど、それであきらめたら魔王の名が泣く。

それに未だ胸の中には、リリィさんへの思いがある。

……だから、少しづつ良い所見せつけないと♪

邪念を通り越してる気がするけど気にしない。

私はレイジングハートを握り締め、艦橋をつなぐエレベータから降りた。

……そしてそしてっ！

……戦闘が終わったら、リリィさんから〜！！

……（リリィさん）「なのは、凄かったよ。御褒美を上げないからね。」

……
（私）「……そ、そんな。べ、別に……。」

……
（リリイさん）「なら、いない？」

……
（私）「いるっ！　いますっ！！」

私はもしかしたらと言う期待を胸に、格納庫にスキップしながら移動し始めた。

……妄想？

……いや、愛の想像だよっ！！

081 (後書き)

なのはもちつけ……w

妄想するな。

しかも、微妙に…… (汗)

082 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…クリスカ・ビャーチェノワ

九人目…イーニャ・シエスチナ

十人目…高町なのは

十一人目…八神はやて

十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)

十三人目…フランドールスカーレット (正式姓…篠ノ之)

|||||リリイ|||||

「……本当に、なのはちゃんでええんか？」

はやてが私を見上げながら、そう聞く。

……そう言われると、不安が大きくなる。

……余り聞きたくないかも。

巡洋艦が魔法を放つがアークエンジェルに当たらず、逆に艦尾ミサイル発射管からスレッジハマーを受け轟沈。

……さすが、百年以上アークエンジェルを操舵したフェイトの腕。

……ほとんどの魔法を回避している。

さすがにこればかりは不老不死でなければ不可能な事かもしれない。

艦を操舵する者は熟練者が多いのは基本。

それまで育つのに、おおよそ三十年生きなければ不可能だ。

そして艦を操舵する期間は、それより短い。

老化などの身体的スペックが落ちる事により、危険度が増す為である。

そう考えると数年から数十年操舵した物の腕と、数百年以上操舵した物の腕の違い。

戦場ではどちらが有利かは、いわなくても分かるだろう。

「右舷カタパルト開きます。」

イーニャの声が私の耳に届く。

「……システムオールグリーン、進路クリア。 高町なのはの戦闘態勢確認。 ……発進どうぞ。」

《高町なのは、行きますっ！！》

スピーカからなのはの声が漏れる。

それを聞くと、私は敵艦隊を見つめた。

「高町なのは出撃後、敵主力砲撃艦隊を潰す。 ……ゴットフリート照準、巡洋艦へのミサイルはレーザー誘導で指定！」

|||||なのは|||||

……バリアジャケット装備、エクシードモード展開。

……カードリッジ予備確認、不老不死対策用カードリッジ装填。

「……よし！」

全てを確認すると、私はカタパルトに足に乗つけた。

カタパルトには巨大なロボットサイズと、人専用の押し出し機がある。

……相変わらず、少し慣れないな……。

そう思いながら、私は身構えた。

《……システムオールグリーン、進路クリア。 高町なのはの戦闘態勢確認。 ……発進どうぞ。》

イーニャちゃんの声がスピーカーから響く。

「高町なのは、行きますっ!!」

そう叫び私はカタパルトから押し出され、戦場に出た。

射出の勢いを殺さず、ゆっくりと回りアークエンジェル後方にいる
転生者に向かって飛んだ。

《マスター、目標との距離1. 300》

レイジングハートが詳細な情報を教えてくれる。

……リリィさんの為にも、さっさと終わらせなくっちゃ。

……そして御褒美御褒美♪

《（……浮かれ過ぎです。）》

……聞こえてるよ？

082 (後書き)

……なのはガンダムW

Gガンダム事グラハムガンダムではなく、Nガンダム。

そう言えば、高校時代にOガンダムにならってNガンダムって作ってたな。

NⅡニート

083 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドールスカーレット (正式姓…篠ノ之)

||||なのは||||

「……シュートッ!!」

射程距離に入った瞬間、私はアクセルシューターを転生者に向けて放った。

上、前、左右から三十個の誘導弾が襲いかかる。

しかしやはりというか、転生者はシールドを張って防御した。

……シールド系魔法。

……しかもこの世界のタイプ……。

少しばかり、考えながら私は降り立つ。

アクセルフィンが桜色の羽となって舞う。

「……お前。」

「……はじめまして、そしてさようなら。」

相手が何か言おうとしていたが、私はそう言って三十二発放ったウチの二発を後方から襲いかからせる。

「っ!？」

転生者は咄嗟の判断で回避するが、回避しても誘導して追いかける。

……最大同時誘導数の底上げも神にしてもらえれば良かったかな。

……だって、三十二発ってStrikerSの時の、高町なのはじやん。

……成長してないよ、私……。

そう思いながら、レイジングハートの先端に高密度魔力刃ストライクフレイムを形成させた。

……まあ、少しは成長もしてるしね。

そう思いながら、私はストライクフレイムを転生者に向かって付きつけた。

ストライクフレイムはA・C・Sドライバーと呼ばれる高速突撃による、殲滅突破技術にしか使用する事が無い。

しかし私は、拘束突撃ではなく近距離戦闘用に昇華してみた。

はっきり言えば、レイジングハートの槍化だね。

……別に、それほど使用目的変わってないけど……。

……そう言えばA・C・Sドライバーからエクセリオンバスターっ

て、なんか牙突から牙突零式のコンボに似てない？

そう思いながら、私レイジングハートのストライクフレームで突き刺すが回避される。

……そう言えば、ストライクフレームってどういう意味だっけ？

……あ、アクセルシューターでさらに追い込めばいいっか♪

|| || || ??? ? ? || || ||

私は今信じられない光景を見ていた。

白亜の巨艦が、我が軍隊を壊滅させている光景。

「ディートリツヒ轟沈！ 並びに、フレームズ沈黙っ！！！」

数多くの衛生を集め決戦に向か追うとした瞬間、その相手が目の前に現れ蹂躪していく。

こちらからの攻撃は殆ど回避される。

当たったとしても無傷。

……こんなバカな話があるかつ!!

「ユーリカ、チャーリー航行不能、フルム、エルベト、クリーン転覆！ ミューラ沈黙っ!!」

数秒で、何隻も戦闘行動が取れない様にされる。

……忌々しい、賞金首共目っ!!

そう思いながら、戦闘不可になっていく艦の名前を聞いて行つた。

083 (後書き)

選択肢

赤き翼対する対応

1..完全敵対

2..関与せず

3..友好的接触

原作20年前になるまでだからね。

ちなみに、何時20年前に行くか分からないW

084 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドールスカーレット (正式姓…篠ノ之)

・戦後

この戦争は、魔法世界では禁断の事件として被害者たちの記憶に残る事になった。

しかし、書類などの記録からは抹消されるため、知っている物は極一部の者たちだけであつた。

魔法世界ヘラス帝国の権力者が、旧世界に大艦隊を用いて進軍しようとした。

目的は大魔力を内に秘めた神木の確保と、その周辺を住みかとする不老不死軍団の封印である。

しかし、その情報はリークされ逆に魔法世界にアークエンジェルを呼び出すと言う事に繋がってしまった。

その結果、魔法世界ニヤンドマの軍事力がアークエンジェルによって壊滅に追いやられる。

その後ヘラス帝国の支配権だったニヤンドマは、メセンブリーナ連合に吸収される事となった。

この事件のせいか、イレギュラー対策のため巨大要塞グレートブリッジの建造をメセンブリーナ連合は早める事となる。

そして民衆の混乱を抑える為に情報管制を引き、事件は闇に葬られることとなった。

巡洋艦の甲板上で、数人による大規模魔法使用を確認している。

・被害

旗艦ヴォーパールの轟沈を始め、艦十八隻が大破、轟沈、七席が使用不可に計二十五隻が被害を受ける。

海上艦に至っては、数が多過ぎる為に轟沈艦の正確な情報が得られなかった。

ヘラス帝国の鬼神兵も戦闘終盤で戦域に投下されるも、フリーダムが駆逐。

投入された二体を完全に消滅させられるなど、大打撃を受けた。

この戦闘で投入された戦艦は1600年当時、ヘラス帝国が保持していた六割の軍艦である。

・旗艦ヴォーパール…轟沈

- ・僚艦ドルスカ…航行不能
- ・僚艦チックファイ…航行不能
- ・僚艦ミルギータ…大破
- ・僚艦ミューラ…大破
- ・僚艦シーラ…轟沈

- ・護衛艦ディートリツヒ…轟沈
- ・護衛艦フレイムズ…大破
- ・護衛艦ユーリカ…航行不能
- ・護衛艦タジマ…轟沈
- ・護衛艦マグリフ…轟沈
- ・護衛艦ドゥー…轟沈
- ・護衛艦チャリー…航行不能
- ・護衛艦リッテ…轟沈
- ・護衛艦ムサムシ…大破
- ・護衛艦タイト…轟沈
- ・護衛艦リュクセルバ…轟沈
- ・護衛艦ムラクモ…轟沈
- ・護衛艦ジュックラモス…航行不能
- ・護衛艦リアスガ…大破
- ・護衛艦バレット…大破
- ・護衛艦スナイプ…航行不能
- ・護衛艦ミット…航行不能
- ・護衛艦ライゼルベント…轟沈
- ・護衛艦リュクス…轟沈

- ・巡洋艦フルム…転覆
- ・巡洋艦ジー…轟沈
- ・巡洋艦カカ…轟沈
- ・巡洋艦エルベド…転覆

- ・巡洋艦ミシエル；転覆
- ・巡洋艦アサク…転覆
- ・巡洋艦クリーン…転覆
- ・巡洋艦ミック…轟沈
- ・巡洋艦セレブ…轟沈
- ・巡洋艦ムシ…大破
- ・巡洋艦ディー…転覆
- ・巡洋艦ボルザード…転覆
- ・巡洋艦ディアス…転覆
- ・駆逐艦アンスー…轟沈
- ・駆逐艦バーク…轟沈
- ・駆逐艦アダマス…轟沈
- ・駆逐艦ギッド…轟沈
- ・駆逐艦ゼロ…大破
- ・駆逐艦イニアクティ…轟沈
- ・駆逐艦ネオ…転覆
- ・駆逐艦ユウン…大破
- ・駆逐艦シュニア大破
- ・駆逐艦レルバランス…轟沈

084 (後書き)

はい、歴史改竄。

25巻後半に乗っている地図には、ニヤンドマはメセンブリーナ連合。

まあ、ここではヘラス帝国領にして、メセンブリーナが奪った事にしてみました。

ついでに、この頃になって巨大要塞グレートブリッジの建造をさせてみる。

ネギまも「魔法世界」歴史表があればいいのに……。

……まあ、合っても改竄するけど。

私は艦対戦時に使用される艦隊の総数を知りません。

艦対戦も知らないんですけどね。

とりあえず、適当に並べてみたw

実際の被害は、アークエンジェル相手にしたらもつとあるような気もするけど、配備数も考えないといけない気が……。

そう考えると、配備艦数が多い気も……。

次話から、またも歴史表になるかと思えます。

選択肢

赤き翼対する対応

1..完全敵対

2..関与せず

3..友好的接触

085 おまけ？（前書き）

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜（旧姓…篠ノ之）

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス（別名…羽佐間カノン）

六人目…真壁紅音（別名…神）

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…クリスカ・ビャーチェノワ

九人目…イーニャ・シエスチナ

十人目…高町なのは

十一人目…八神はやて

十二人目…レミリア・スカーレット（正式姓…篠ノ之）

十三人目…フランドール・スカーレット（正式姓…篠ノ之）

085 おまけ？

ⅡⅡⅡ 経歴ⅡⅡⅡ

1600年

・ヘラス帝国占領地ニヤンドマがメセンブリーナ連合の占領地となる。

これにより、ヘラス帝国の国土が8%減った。

・ヘラス帝国内部で戦闘に使用された艦隊の使用不可能数が多いため、メセンブリーナ連合に対しての警戒が強まる。
逆にメセンブリーナ連合はこれを気に、巨大要塞グレートブリッ
ジの建造に力を入れ始めた。

1601年

・事件の発端が帝都守護聖獣が旧世界の世界樹を感じた事が発端と判明する。

魔力的ラインが極僅かだが通じたため、ヘラス帝国が世界樹・蟠桃の位置を調査派遣した事が、事の始まりと考える者が多くなる。

・派遣調査と同時に真壁紅音を発見したとの公式記録が、ヘラス帝国議会で公表される。

しかし、事件同様闇に葬られることとなる。

- ・ヘラス帝国は旧世界の世界樹・蟠桃とアークエンジェルとの接触を禁止する事を議会で議論。

大多数の者たちの手によって、賛成され接触の禁止は承認された。

- ・フェイト・T・ハラOWNが機械工学を極める。

アークエンジェルの整備を篠ノ之束に託される事が多くなった。

1607年

- ・篠ノ之束が独自にアンドロイド技術に手を伸ばし始める。

同時に人の生体を、転生後初となる分析を始めた。

1609年

- ・篠ノ之束がアンドロイド技術の骨組みを作り上げる。

基本構造に人工筋肉などを用いることで八割以上、人と同等の身体を作り出す。

1610年

- ・篠ノ之リリィが京都を訪れる。

その際、草壁流を訪ねている。

・カノン・メンフィスが散歩に出かけ、襲われる。
相手は野党のため、当たり前のように瞬殺された。

1611年

・篠ノ之リリィが草壁流と神鳴流の修業に参加する。
同時に書物を数点書き、それぞれの流派に渡す。

1620年

・レミリア・スカーレットが日傘を持ち世界横断をし始める。
篠ノ之リリィと篠ノ之束が、レミリア・スカーレットの携帯電話に
GPS機能を搭載させた。

・高町なのはと篠ノ之束の冷戦が崩壊する。
魔法球内で三日にもわたる戦闘を続け、お互いにスターライト・ブ
レイカーの使用で相打ちと判定。

・キリシタンが篠ノ之リリィと接触する。
もちろん篠ノ之リリィは放置、しつこい為殺害した。

1622年

- ・幕府がキリシタンを多数処刑する。

篠ノ之リリィは幕府の中枢を実質的に握ってはいなかったものの、城内に入る事を許されていたため、処刑を見ていた。

- ・フランドール・スカーレットが魔法球内を探索し始める。

大抵のモンスターは野生化しているが、捕獲した初期モンスターが理性的な対応をしていた為、怪我を負わなかった。

1634年

- ・衛星軌道上に災厄と思われる物体が出現。

篠ノ之リリィが討伐に向かい、災厄と思われる物体は消滅した。

085 おまけ？（後書き）

|||| おまけ |||

「こ、ここは……。」

そう言ってリリイは、ふらつく頭でアークエンジェルから見える風景を目を細めて眺めた。

そこには建物などが無く、荒野に金属的な歪な物が空に向かって伸びている。

「重力場干渉……、当艦に被害なしっ！！」

そう言って、はやてが艦の状況を報告してくれる。

「……重力場干渉。私がいるのになぜ起きたんだ……。」

紅音がそう言って頭を悩ませる。

神である紅音が、分からない事が起きた。

それはつまり、リリイ達には原因が不明な事。

リリイは状況を確認する。

「……あ、ああ。」

だが、そんなリリィの耳に気が擦れる程度の、小さな声が聞こえた。

その声ができる方向はリリィの前と、下の方から。

クリスカとイーニャだった。

「ど、どうしたの……?」

「っ!? 十一時から一時方向、当艦に向けて高エネルギー体が急速接近っ!!」

そう言った瞬間に、艦橋になのはの声が響く。

それを聞くとリリィが「回避っ!」と言って、フェイトに指令を出す。

すでに、なのはの声が艦橋に響いた瞬間にはフェイトは舵をきり、高エネルギーを回避していた。

「っ!?!」

全員が艦前方から来る、高エネルギー体の光りに目を細める。

アークエンジェルが高エネルギー体の射線から外れたため、その光は空を切りはるかかなたに飛んで行った。

「熱量推定っ! レーザーだと思われまっ!!」

なのはがそう言った瞬間に、副長席にいた束が「アンチビーム爆雷発射!！」と指示しレーザーに対しての処置を取る。

多目的射出機からアンチビーム爆雷が発射され爆発し、粒子が艦を包む。

「再度レーザーがっ!！」

そう言った時には、艦が回避行動を取り始めている。

フェイトは服操舵のクリスカが驚愕し動かない為、手をかなり動かし艦前方のスラスターを片方だけ吹かし、横に艦をそらす。

艦の尾翼にレーザーが触れるが、アンチビーム粒子とラミネート装甲で無効化した。

カノンが「レーザー砲台とおもしき物体を発見っ! モニターに移すっ!！」と言い、モニターが光学カメラで捉えた映像を映し出す。

そしてモニターに映されたのは、薄い水色をし目のように二つの球体を身体が一番上に付けている物体と、球体の一つしかない薄紅色の物体だった。

それを見た瞬間、艦橋にいる全員が息をのむ。

「おぞましい……、化物が……。」

エヴァンジェリンがそう皆の思いを代弁する。

「なお、高エネルギーがっ!！」

その声と時を同じくして、モニターに映った物体の目が光り出す。

「回避しつつ、迎撃用意っ!!」

そう言って不測の事態の為、リリィは紅音を見る。

お互いの目が合わさり頷く。

「……ワルキューレの岩戸を展開。」

リリィが艦長席を離れると、紅音がそう言う。

レーザーを回避しているため、艦が傾きバランスを崩す。

だが、不測の事態の対処の方が優先。

艦長席が後ろに下がり、席があった下から一人が入るくらいのカプセルがせり上がり出現した。

ワルキューレの岩戸である。

紅音が全ての指に指輪に似た物をつけ、そのカプセル内に入ると艦のシステムすべてを紅音が使用し始めた。

ゴットフリートやバリエーションなどが起動していく。

「全員出撃用意っ!!」

そうリリィが言うと、艦橋にいた全員が席を離れカタパルトに向か

うため、艦橋の後ろに付いているエレベータに乗り込む。

しかし、クリスカとイーニャはモニターを凝視し続け、動こうしなかった。

「……なんで……。」

モニターを見てクリスカが呟く。

モニターには、新たに像見たいに鼻が長い物体や赤い手とおもしき物が複数ある物体が出現していた。

数は一万を超すだろう。

それを見て、クリスカが歯ぎしりをして大きく口を開き叫んだ。

「なんでこんな所にいるっ！ BETA^{ベータ}!!」

滅び行く世界に舞い降りた大天使たちの物語。

その世界でリリィ達は、一体何を見るのだろうか。

それは、誰にも分からない事だった……。

086 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)

1637年

・ヘラス帝国の軍事力が回復。
これにより、メセンブリーナ連合に対する警戒度が低下する。

・篠ノ之束がアンドロイドに関する研究を終了させた。
しかし、アンドロイドの完成はさせなかった。

1639年

・メセンブリーナ連合が巨大要塞グレート・ブリッジを完成させる。
それと同時にヘラス帝国に対する軍事行動が見られるようになっていく。

1642年

・篠ノ之束とフェイト・T・ハラオウンがアークエンジェルの大規模改修を始める。
これにより、高町なのはが篠ノ之リリィに対しアプローチをする回

数を多くし始めた。

1644年

- ・アークエンジェルの大規模改修を終える。
空間作用系魔法や歪曲攻撃に対する装甲システムを搭載した結果となった。

- ・篠ノ之束が量子理論と魔法理論に関する研究を始める。
IS技術を魔法理論に組みこむ実検を数度行い、大爆発を起こした。

1650年

- ・核エンジンの製造に使われる物質を八神はやてが発見する。
そのため篠ノ之リリイが、戦術機Su-37UB チェルミナートルを改修。

- ・Su-37UB チェルミナートルの改修が終了。
TP装甲用のバッテリーと機体駆動用の動力を核エンジンに変更。

- ・それに伴い、Su-37UB チェルミナートルの機体武装に格納型小型ビールライフルを内蔵させた。
ハイパーカーボン製ブレードは撤去され代わりにビーム発生装置を装備、ビームサーベルの使用が可能となる。

1664年

・44年ぶりに、レミリア・スカーレットがアークエンジェルに帰還。

帰還時は正午で日は出ていたが、レミリア・スカーレットは日傘を指してはいなかった。

・フランドール・スカーレットが喜びのあまり、はしゃぎだす。
しかし止める者はおらず、イーニャ・シエスチナもフランドール・スカーレット同様はしゃぐ。

1670年

・プリームムが再度勧誘に現れる。
しかし、当たり前のようにそれを拒む。

・篠ノ之束が量子理論と魔法理論に関する研究を終える。
しかしこの研究は役に立つ部分が主に戦場だけと言う事で、極秘裏に管理することとした。

1677年

・篠ノ之リリイが機械頭脳に使用するAIを開発し始めた。
篠ノ之束のアンドロイド研究を偶然発見し、いつでも研究が再開できるようにするためである。

・ヨーロッパ「ドラスベニア王国」と呼ばれる国の王に、ヴェラー
ドと呼ばれる男になる。

後に「金色の魔王」との名で馳せる。

1683年

・ヴェラードの噂を調べる為、篠ノ之リリイがドラスベニアに入国。
同時にリゼロッテ・ヴェルクマイスターもドラスベニアに入国する。

1691年

・草壁流に鬼の血が混じり始める。
鬼の血を体内に入れたわけではない。

・リーゼロッテ・ヴェルクマイスターとヴェラードが会う。
篠ノ之リリイもその場に居合わせる。

・篠ノ之リリイが噂の元凶が、片方の金色に光る目の原因だと気が
付く。

戦場で未来を見通したような状況から、未来を知るような能力だと
考える。

1692年

・リーゼロッテ・ヴェルクマイスターが篠ノ之リリイを殺そうと襲いにかかる。

暗黒魔術を使用し攻撃するも、篠ノ之リリイの存在が暗黒魔術に等しく魔法無効化装甲も発動していたため、有利に戦闘を行う。

・リーゼロッテ・ヴェルクマイスターがビームを受け半身が吹き飛ぶ。

しかし不老不死のため回復する。

1700年

・メガロメセンブリア元老院が、旧世界に魔法学校の樹立を提案。最終的に旧世界、世界樹・蟠桃を手に入れようと画策する。

・篠ノ之リリイがアークエンジェルに帰還。

文献を調べ、魔法具の文献から「劫の目^{アイオン}」と呼ばれる物の存在を知る。

086 (後書き)

前回の「おまけ」は、ただ思いついただけの「おまけ」ですよ？
続きは考えていません。

ちなみに「M u v - L u v」のお話です。

……しかし、リリィ達が言った瞬間BETAが滅ぶような……。

さて、今回から一気に大戦まで経歴で飛ばします。

ちなみに、作者の妄想と歴史改竄などが多く見られます。

あとネタ。

今回はドラスベニア王国、リーゼロッテ・ヴェルクマイスター、劫
の目……。

まあ、l l e y e sですね。

うん。

087 (前書き)

一人目…篠ノ之リリイ

二人目…篠ノ之束

三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)

四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)

六人目…真壁紅音 (別名…神)

七人目…フェイト・T・ハラオウン

八人目…クリスカ・ビャーチェノワ

九人目…イーニャ・シエスチナ

十人目…高町なのは

十一人目…八神はやて

十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)

十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)

1703年

・篠ノ之リリィが機械頭脳として人工的な人間同等な思考を持ったAIを完成させる。

しかし篠ノ之束が再開するまで、AIは厳重保管される事となった。

・富士山が噴火した為住む場所を失った者達が流れ着く。
無下に扱う事はせず、分け隔てなく接した。

・関東地震の影響が、少なからず伝わる。

当時の建物は木造建築だったため、半壊する建物が多かった。

1709年

・エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルがレミリア・スカーレットの要望に答え、魔法球を作り与える。

レミリアは魔法球内に別荘、紅魔館こうまかんを建築。

1711年

・メセンブリア連合とヘラス帝国が史上初となる、同時賞金首を指定。

篠ノ之リリイ他十二名の懸賞金が上がる。

・篠ノ之リリイの懸賞金が8・400万\$に上がる。

「死天使」と称号が付け加えられる。

・篠ノ之束の懸賞金が6・000万\$に上がる。

「偽りの白い悪魔」と称号が付けられる。

・十六夜咲夜の懸賞金が4・500万\$に上がる。

「PAD長」と称号が付けられる。

・エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル
の懸賞金が7・000万\$に上がる。

「神祖の姫君」と称号が付けられる。

・カノン・メンフィスの懸賞金が3・600万\$に上がる。

「絶対防衛者」と称号が付けられる。

・真壁紅音の懸賞金が3・000万\$に上がる。

「ストーリー・メイカー」と称号が付けられる。

・フェイト・T・ハラオウンの懸賞金が4・500万\$に上がる

「槍の雨を降らせる女」と称号が付けられる。

・クリスカ・ビャーチェノワの懸賞金が3・100万\$に指定される。

「プロジェクトン」と称号が付けられる。

・イーニャ・シェスチナの懸賞金が2. 900万\$に指定される。
「リーディング」と称号を付けられる。

・高町なのはの懸賞金が5. 100万\$に上がる。
「星光破壊」と称号を付けられる。

・八神はやての懸賞金が5. 500万\$に上がる。
「魔法使い殺し」と称号を付けられる。

・レミリア・スカーレットの懸賞金が3. 700万\$に上がる。
「運命を操る者」と称号を付けられる。

・フランドール・スカーレットの懸賞金が2. 500万\$に上がる。
「Unknown」と称号を付けられる。

1715年

・世界樹を中心に、対魔法使い用のシールド「ヴェルシールド」の生成機器を設置する。

第一と第二ヴェルシールドを設置し、アークエンジェルに搭載されているソロモンと併用することで、自動的に展開するように設定した。

087 (後書き)

まあ、関東地震はこの時期にあったはずですよ。

紅魔館や懸賞金上がるなど、ふざけていますね。

世界樹地下が基地化している気が……。

088 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)

1716年

・世界樹地下周辺に巨大動力炉を増設。
液化天然ガスの補給ラインと保存場所、水道水の確保のため濾過装置も作り町作りを起こしていく。

・世界樹自身が大々的に発見されないように、偽装鏡面を張っている為1716年日本の歴史から世界樹周辺の村が消える。
極稀に神隠しにあうと言う事が江戸の町で噂になるが、正確な調べには乗っている。

1720年

・世界樹周辺の建築物を一部潰し、レンガ製と木造建築の建物設計。
建物内部は、昭和以降に存在する一軒家タイプと同様に水道やガスなどを使用している。

・私塾用の建物を立て、そちらに移る。
クリスカ・ビャーチェノワと八神はやて、カノン・メンフィスが外来語の習得を進め、一部授業に英語を入れ始めた。

1727年

- ・最小限のガス管と水道管を設置し、複合住宅と一軒家を完成させる。

複合住宅が一軒家より多めに建造された。

- ・テストとして世界樹周辺の村民に化し与え、有用性を確認。八割以上の村民が満足したため、ゆっくりと都市計画を起こしていく。

1729年

- ・都市化計画の六割が終了。

世界樹から半径数百メートルだが、水道やガス管などの設置が終わる。

- ・メセンブリーナ連合が世界樹を探す。

しかし、見つからずメセンブリーナ連合トップは混乱する。

1730年

- ・真壁紅音が一時帰還。

転生者の状況を調べるため、神の座に戻る。

1732年

- ・各地で百姓一揆や打ちこわしが起こる。
しかし、世界樹の町は何も起きない。

- ・対魔法使い戦闘用に対迎撃システムを製造。
舗装した通路などに埋め込む形でマシンガンなど設置する。

1733年

- ・世界樹周辺を麻帆良と総称する。
1キロにも満たない町だが、都市と村民が名乗るようになった。

1745年

- ・メセンブリーナ連合とヘラス帝国が開戦する。
1600年当時より大きくヘラス帝国は軍事力を増設させたため、
開戦当初はヘラス帝国が有利に戦っていた。

- ・メガロメセンブリア元老院が設立。
他国とほとんど変わらなかったメガロメセンブリアの国家体系を徐々に変えて行く。

・篠ノ之リリィが京都に赴く。

その際に草壁流と神鳴流、それと同時に飛天御剣流と戦闘になる。

1760年

・麻帆等の出生率が下がっていく。

そのため麻帆等の人口が減っていった。

・ヘラス帝国が中立国アリアドネーにまで支配権を伸ばす。

しかしアリアドネーの反発と、優秀な魔法使いの総数がヘラス帝国を上回り防衛し続ける。

1790年

・麻帆等の人口が50未満となる。

そのため若者は麻帆等を出て、老人は余生を麻帆良で生きた。

1796年

・麻帆等の人口が0となった。

そのため都市として機能しなくなり、ただの世界樹周辺地名が麻帆等と残っただけとなる。

088 (後書き)

おいっ!?

麻帆良っ!?!?!

なんか、時代が250年ほど進んでないっ!?

水道管って……。

御都合主義……。

で、結局誰もいなくなった、と。

089 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…K O S - M O S

089

|| || || 経歴 || || ||

1799年

・メセンブリーナ連合の魔法使いが麻帆等に辿り着く。
クリスカ・ビャーチェノワの追撃を逃げ切り、魔法世界に詳細な情報を出す。

1800年

・麻帆等に張り巡らせたガス管などを回収。
数メートル埋め立てる。

・世界樹を境に坂ができる。
墓地は坂の下にある為、無事。

・メセンブリーナ連合とヘラス帝国の戦闘が沈静化。
メセンブリーナ連合が劣勢のまま静かになる。

1814年

・篠ノ之束が思いつきで、ナノマシン開発に乗り出す。
それと同時に、完成凍結していたアンドロイドの研究を再開する。

1818年

・篠ノ之リリイが篠ノ之束にAIを譲渡する。
そのため実検が飛躍的に進むこととなった。

・篠ノ之束がアンドロイドとナノマシン開発に成功する。
同時にアンドロイドにナノマシンを装備させ実験を行う。

・アンドロイドが正常に稼働。
開発コードを取り、名称を「KOS-MOS^{コスモス}」と名付ける。

1834年

・篠ノ之リリイが魔法世界に襲来。
アリアドネーの警備隊に見つかり、戦闘をする。

・プリームムが篠ノ之リリイと接触。
情報役となっているプリームムから、魔法世界の情勢を聞く。

1840年

・メガロメセンブリアが魔法都市として麻帆良の世界樹に目をつける。
しかし篠ノ之リリィを始めとする不老不死がいる為、対応を慎重にする必要があった。

1841年

・真壁紅音が神の座から帰還。
同時に篠ノ之リリィも魔法世界から帰還した。

・神鳴流が「妖刀ひな」で滅びかける。
篠ノ之リリィがいち早く気が付き、二日目にて「小烏丸天国」を使用し嚴重封印。

1847年

・アークエンジェル内に封印指定保管庫を設置。
一つに封印した不老不死を、一つに篠ノ之リリィが持たないとする妖刀を補完する為作られた。

・篠ノ之リリィが余りの爪に呪を刻む。
布都御魂劍、妖刀村雨丸、天叢雲劍を装備。

1851年

・プリムムから渡された魔法具を篠ノ之束が解析。
結果として、増産することと新しい魔法具を生産する事に成功する。

1853年

・生産した魔法具の一部が、フランドール・スカーレットの誤作動により転移。
そのため魔法具を搜索するも発見できず、生産した魔法具を「ロス
トロギア」と命名。

1856年

・真壁紅音とカノン・メンフィスが麻帆良地下500m範囲数キロ
にもわたり、防衛基地を建造。
ワルキューレの岩戸とソロモンの二号機を作り、KOS-MOSが
制御する。

・数百度目の篠ノ之束と高町なのはとの戦闘が勃発。
お互い余力を残したまま、戦闘を終了するという異常事態が起こる。

1861年

・篠ノ之リリイが転生者と戦闘。
封印を回避され劣勢だったが、何とか殺害と多重封印をし勝利。

・魔法世界に一部不老不死の魔法に「非殺傷設定」がある事を発見。
主に非殺傷を使用している、フェイト・T・ハラオウンの懸賞金降
格に話し合いが入るが、懸賞金はそのままの4・500万\$で固定。

089 (後書き)

KOS-MOS (Ver. 4) ……。

ゼノサーガですね。

ちなみにKOS-MOSとは、「Kosmos Obey Strategic Multiple Operation Systems (秩序に従属する戦略的多目的制御体系)」と言うことらしいです。

良いのかな？

なんか、M・O・M・Oの方が……。

でも、ゲームでM・O・M・OよりKOS-MOSしか見てなかったせいで、「あゝ、M・O・M・Oって、なのはのキャラっぽ勝った気が……。」と言う風に、漠然的な事しか覚えていません。

けっして、「邪神モツコス」と言うな！

私持ってるけど……。

アレは、酷い……。

そして前回と今回で、過去に送ってもらった刀剣や称号を使わせていただきました。

……少々称号の方は、弄ってしまいましたが基本は、いただいたままの通りです。

少しでも罪悪感がありますが、ありがとうございました。

090 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…K O S - M O S

1864年

・京都三条木屋町の旅館「池田屋」にて尊王攘夷派志士を、京都守護職配下の治安維持組織「新撰組」が襲撃した。
後の「池田屋事件」である。

・飛天御剣流の使い手「ひむら けんしん緋村剣心」と新撰組三番隊組長「さいとう はじめ斉藤一」
がその目を合わせる。
その場に篠ノ之リリイがいた。

1865年

・かざま ちかげ風間千景と名乗る青年が鬼と名乗り、篠ノ之リリイの前に現れる。
従者であろう二人と共に交戦、受け流され撤退した。

・風間千景の狙いが誤りであった事に気が付く。
篠ノ之リリイを女性の鬼と判断し誘拐しようとしたそうだ。

1866年

・エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルが不死殺しの魔法具を発見する。

そのためアークエンジェル内で魔法具が増産されることとなるが、安全使用の為一部不死には聞かないよう設定した。

1867年

・伊藤^{いとう}甲子^{かしたろう}太郎の一派が思想の違いから新撰組を脱退。
斉藤一がそちらに付くが新撰組の密偵として潜入した。

・新撰組内部で伊藤甲子太郎を暗殺する動きが強まる。
しかし殺害したのは篠ノ之リリィであり、新撰組最後の内部抗争はあっけなく終わる。

・新撰組が篠ノ之リリィを不審人物だとして捉えようとする。
だが格の違いから、新撰組は敗退した。

1868年

・鳥羽・伏見の戦いで篠ノ之リリィが緋村剣心と戦闘。
飛天御剣流どうしの対決となった。

・時を同じくして斉藤一とも戦闘。
牙突どうしの戦闘となる。

1871年

・ヴァチカン地下に旧世界の最大魔術機関「インデックス教皇庁・禁書目録聖省」が設立される。

同時に全世界の魔法を自身の元に置くため、封印を始める。

・禁書目録聖省の封印が始まり魔法世界の人間が気が付き、旧世界の魔法使いを魔法世界に避難させる動きを見せる。

そのため、旧世界と魔法世界の存在が魔法使いの間で認知され始めた。

1877年

・教皇庁・禁書目録聖省が旧世界の魔法体系の八割を封印する。

草壁流と神鳴流が封印対象となったが、篠ノ之リリイが戦闘し禁書目録聖省の封印指定の最重要人物として、篠ノ之リリイの名が乗る。

1881年

・メガロメセンブリアの人間が麻帆良を訪れることを、ソロモンが予言。

これに対し高町なのはを始めとする魔法使いは、臨戦態勢を取る。

・ソロモンの予言通りに、メガロメセンブリアの人間が麻帆良を訪

れる。

内容は「この土地を貸していただきたい」との事。

・この事に篠ノ之束は冷徹な対応で帰れと言う。

メガロメセンブリアの間人は、仕方なしに帰る事となる。

1884年

・教皇庁・禁書目録聖省が旧世界の文件で魔法世界の存在を知る。

同時に人体ではなく、人形を使用した使徒体型を設立させた。

・魔法世界で不老不死の軍団を「大天使隊」と言う呼び名が付けられる。

理由は期間の名が、アークエンジェルという事から。

090 (後書き)

えと、「るろうに剣心」「薄桜鬼」「11eyes」「蒼穹のファフナー」と、まあ……、複合し過ぎですね……。

薄桜鬼は……、名前だけ知っていると言う方の方が多いかと。

……一応作品に新撰組が出る為、この時代に登場させました。

教皇庁・禁書目録聖省は「11eyes」であり、「とある魔術の禁書目録」とは別物ですね。

いや……、別モノってわけじゃないけど……。

作品からして、組織体型も違うし……。

1889年

・メガロメセンブリアが、麻帆良の世界樹を手に入れる為に頭を悩ませる。

最終的に無理ではない事なら取引に使ってもよいとの事。

・メガロメセンブリアの人間が再度麻帆良に訪れる。

篠ノ之リリィが対応し、いくつかの条件をつけ貸し与える事に決定した。

・麻帆等の土地を化し与える際に、毎年度土地の使用金を払う事。
これによりアークエンジェルが資金が無くなる事は無くなる。

・麻帆等の最終決定権は篠ノ之リリィが持つ。
しかし学校などの学園長、指導者、教員などは任せる。

・麻帆等の設計は任すが、建築など全てを請け負う。
相手に負担させず恩を軽く売る一方、麻帆良地下を自由に弄らせない為。

・麻帆等の学校で教師をする事。
教員生活が長かったことから、篠ノ之リリィの願い。

・世界中の使用は許可するが、不当な使用をした場合殲滅する。
世界中の魔力を使用し、戦闘をした場合の被害が大き過ぎる為。

・魔法に関する結界を張るのを許可する、ついでに不老不死を受け入れる結界を張る事。

篠ノ之リリィが教員をした場合、どう考えても年を取らない存在が浮き出る為。

・魔法使いが問題を起こした場合、最悪殺害を認める。
暴走し一般人を負傷させない為、と薬味苛め。

・そちらからの干渉は一切受けない。
しかし麻帆等に関しての重要事項である場合は例外とする。

・それら全てを持ち、メガロメセンブリアは麻帆等の土地を借りる事に成功する。

翌日には建築設計などの図面が送られて、資材も搬入された。

1890年

・麻帆等学園都市が完成する。

魔法使い数名が篠ノ之リリィ達に気が付き、声を荒げ戦闘を開始しようとするが同僚によって抑えられる。

・魔法使い数名が暴走。

篠ノ之リリィに向かい戦闘行為を取ったため、四肢を斬り飛ばすなどをして無効化。

1903年

・教皇庁・禁書目録聖省が黒羊くろしだ齒家かなえを滅ぼす。
唯一の生き残りである「黒羊くろしだ齒鼎かなえ」は、皇庁・禁書目録聖省を欺きながら逃走を続ける。

1939年

・第二次世界大戦が起こる。
ナチスドイツの裏側に、魔術結社「トゥーレ」が設立する。
・魔術結社トゥーレが禁書目録聖省と対立する組織を発見。
アークエンジェルと呼ばれる存在を調べ始める。

・草壁流から破門者が出る。
名は「草壁くさかべ遼りょういち一」。

091 (後書き)

御都合主義と言うか、取引内容があんまり思いつかなかったんですよね……。

黒羊齒鼎や草壁遼一も11eyesですね。

黒羊齒鼎に至っては不老ですし……。

まあ、思いつく限り書き続けますよ。

092 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…K O S - M O S

1940年

・教皇庁・禁書目録聖省が麻帆等に侵入。
戦闘を行い一般人を死亡させるなどの事件を起こす。

・一般人死者四十一名。

「相坂さよ」が魔法を受け死亡。

・事件に対し篠ノ之リリィ以下十二名が魔法使いと共闘。
魔法使いとの間に、不老不死の考えが微かに変わる。

1942年

・教皇庁・禁書目録聖省に対抗するために、トゥーレ全員が篠ノ之リリィと接触する。

トゥーレで色欲ベギールの名を持つリーゼロッテ・ヴェルクマイスターが、交渉せずに篠ノ之リリィを挑発するが無視。

・トゥーレが篠ノ之リリィを敵対勢力と判断し、戦闘をするが篠ノ之リリィに対しリーゼロッテ・ヴェルクマイスターを含む七人を抑

え込む。

リーゼロッテ・ヴェルクマイスター、ヴァルター・ディートリヒ、ソフィア・ミーズリー、フリー・マンチユウ傳満州、コルヴァス・メルクリウス、黒羊齒鼎、アイナス・レーベンハイト。

・草壁家から破門者が出る。

名を「草壁操」くさかべ みさおと言ひ、草壁に奉納されている草壁七宝の模倣された妖刀、蜘蛛切と鬼切を持って行った。

1945年

・リーゼロッテ・ヴェルクマイスターが大規模魔術「奈落墮とし（ケエス・ピュトス）」を発動。

「奈落墮とし」が成功した場合、地球上に人が住める状況ではなくなる。

・草壁を破門された草壁操と、リーゼロッテ・ヴェルクマイスターを討伐する為派遣された禁書目録聖省の六人の使途が戦闘。

虹のゲオルギウス、聖骨のセバステイアヌス、リョウガ龍骸のイレエネ、書架のベネディクトウス、書架のスコラティカ、せんつい戦槌のサムソン。

・篠ノ之リリイと黒羊齒鼎が戦域で遭遇。

篠ノ之リリイは阻止へ、黒羊齒鼎は後方で観察。

・篠ノ之リリイが鬼切と雷切を持ち、草壁流を使用しながら戦場へ参入。

結果、不老不死の魔法使いリーゼロッテ・ヴェルクマイスターの重要機関、「クリフオート虚無の魔石」を破壊し殺害に成功する。

・禁書目録聖省が篠ノ之リリィに刃を向ける。
だが一番刃を向けたのは、同じ草壁流を扱う草壁操だった。

・篠ノ之リリィの存在を知ると、草壁操が否定。
その後戦闘を行い、全ての草壁流剣術「忌剣」と草壁七宝の元となった妖刀を使用し勝利する。

1946年

・草壁操と虹のゲオルギウスが失踪、禁書目録聖省内で死亡を残りの使途五名が進言。

草壁操が虹のゲオルギウスに思いを伝えた為に起きた結果である。

・篠ノ之リリィと黒羊齒鼎が密会する。

トゥーレは重要人物を半数以上失った結果、黒羊齒鼎は篠ノ之リリィに頼る事にした。

・黒羊齒鼎がリーゼロッテ・ヴェルクマイスター、トゥーレを半脱退。

学園教師として麻帆良に身を寄せる。

092 (後書き)

基本今回は、「相坂さよ」の死亡と、11eyesのシナリオですね。

ここで、「廚二病乙」とか言ったやつ表に出ろ。

アレはあれで面白いから……。

でもまあ、実際にはここで……ねえ。

なんか、鼎が仲間になりそうですけど、これ転生者じゃないしね……。

けど、そうするとKOS-MOSはどうなるんだと言うオチ……。

……どうしようかな。

……うん。

未定！

093 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

093

|| || 経歴 || ||

1947年

・呪縛霊として存在していた相坂さよを捕獲。
外見は相坂さよだがKOS—MOS同様のアンドロイドに入れ、復活させる。

1950年

・麻帆等のワルキューレの岩戸を整備するため、内部で制御していたKOS—MOSが出る。
九十四年ぶりに外へ出た。

1958年

・篠ノ之束が魔法世界の事を旧世界から観察する為に作られた監視衛星、ヴァイキング一号が旧世界方面の火星地表で「Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race (BETA)」を発見。

クリスカ・ビャーチェノワとイーニャ・シエスチナがBETAを説明し、秘密裏に消滅させる為作戦を開始する。

・BETAとは「人類に敵対的な地球外起源種」。
MUV-LUVの世界に存在する敵である。

・篠ノ之リリイがフリーダムを駆り、火星に到達。
BETAを消滅させるため攻撃を開始する。

・クリスカ・ビャーチェノワとイーニャ・シエスチナが、チェルミナートルでフリーダム専用装備「ミーティア」を運び火星に到着。
フリーダムがミーティアとドッキングをし、BETAの消滅速度を速めて行く。

・チェルミナートルが地球に帰還。
再度宇宙に上がった時は、篠ノ之束特性BETA迎撃、警戒用ユニットをアークエンジェルが保持し、地球、火星、月などの衛星軌道上に設置。

・麻帆等学園学園長に近衛近右衛門が就任。
篠ノ之リリイがいない間に、麻帆良学園の敷地増設や図書館島と呼ばれる危険場所を作る。

1959年

・地球に残っているKOS-MOSがこれに気が付く。
学園長の為、殺害しては一般人周囲が怪しむと想定、篠ノ之束特性の呪いの魔法具で頭部を伸ばし常に激痛が走るようにした。

・アークエンジェルが地球へ帰還。
学園長の骨を折るなどして病院へ送り、図書館島などの危険個所を
チェックし始める。

1968年

・ナギ・スプリングフィールドが誕生。
それと同時に転生者が複数入りこむ。

1971年

・篠ノ之リリイが地球へ帰還。
BETAの殲滅を真壁紅音が確認した。

1973年

・高畑・T・タカミチが誕生。
数名転生者が入りこむ。

1978年

・ナギ・スプリングフィールドが「まほら武道会」に参加。
教員の参加が不可能だったため、篠ノ之リリイは参加せず優勝を飾

る。

・ナギ・スプリングフィールドが篠ノ之リリィに目をつける。
魔法を使用したため、関節を外すなどして放置。

1982年

・世界樹が発光する。
篠ノ之束とレミリア・スカーレットが発光年度のデータを集め終え、
二十二年周期で発光する事を確認した。

・魔法世界で大戦が起きる。
学園の事をワルキューレの岩戸と同期させたAIに任せ、アークエンジェルは魔法世界に移動する。

093 (後書き)

さよ復活。

と言う事で、エヴァ同様に仲間に入れておく事に……。

身体がアンドロイドですしね……。

つか、MUV－LUV……。

結局、ここにきて出現するか……。

結局地球に来る前に、対策やら攻撃を受け消えちゃったけど……。

そして学園長という馬鹿が登場。

これが害悪になるか、ただのボケ老人になるかは未定。

というか、頭部が生まれつきは怖い……。

だから呪いをかけて、ぬらりひょんにWWW

そしてついにナギ生誕。

というか、リリィと会ってるね……。

ちなみに今まで、世界中の発光の事を忘れていましたWWW

と言う事で、二十二年ごとに会ったと言う事にして置いて……。

適当過ぎたかな？

ごめんね。

短時間で書いたら、こんな事になっちゃった……。

一一六 選択肢？決定（前書き）

記念すべき100分目です。

キリが良い感じで大分裂戦争に章が入りますが、その前にキャラクターを整理しましょう。

大体「フェイトの説明がまだない」や「クリスカとかイーニャって？」て感じになるでしょうし……。

まあ、軽い説明です。

能力も目立つ物を簡略化させて、書いています。

一一六 選択肢？決定

名前…篠ノ之リリイ

性別…男の娘

年齢…二十歳（六百歳後半）

能力…フリーダム化／不老不死／災厄

性格…基本真面目

備考…束を守ることを第一に生きる

出展作品…作者別作品主人公

名前…篠ノ之束

性別…女性

年齢…二十七歳（六百歳後半）

能力…天才／天災／不老不死

性格…基本テンション高い

備考…天才的な頭脳を持つ不思議な女性

出展作品…IS（インフィニット・ストラトス）

名前…十六夜咲夜

性別…女性

年齢…十代後半（六百歳前後）

能力…時間干涉／メイドスキル／不老不死

性格…基本冷静

備考…リリイと束が生んだ一人目の愛の結晶

出展作品…東方Project

名前…エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル
性別…女性

年齢…十歳（六百歳前後）

能力…吸血鬼／人形使い／不老不死

性格…原作通り

備考…リリィ達と出会った事で強さが原作以上に上がっている

出展作品…魔法先生ネギま！

名前…カノン・メンフィス

性別…女性

年齢…十代後半（六百歳前後）

能力…軍事行動／不老不死

性格…基本一般人よりやや軍人

備考…ザルヴァートルモデルが無いと軍人程度の戦闘しかできない

出展作品…蒼穹のファフナー HEAVEN AND EARTH

名前…真壁紅音

性別…女性

年齢…三十一歳（推定一億歳）

能力…文字を操る／フェストウム化（紅音のみ）／不老不死

性格…自由人

備考…一応神様

出典作品…蒼穹のファフナー

名前…フェイト・T・ハラオウン
性別…女性

年齢…十九歳（六百歳前後）

能力…別体系魔法使用／不老不死

性格…基本真面目の優しい苦勞人

備考…読者のイメージがStrikerSの方で固定されてそうなので外見年齢変更

出典作品…魔法少女リリカルなのはStrikerS

名前…クリスカ・ビャーチェノワ
性別…女性

年齢…二十代中盤（五百五十歳前後）

能力…軍事行動／不老不死

性格…基本真面目

備考…カノン同様に機体が無い場合は軍事行動しか取れない

出典作品…Muv-Luv Alternative Total
Eclipse

名前…イーニャ・シエスチナ
性別…女性

年齢…十代中盤（五百五十歳前後）

能力…不老不死

性格…基本優しい

備考…軍事行動以前に戦闘能力皆無
出典作品…M u v - L u v A l t e r n a t i v e T o t a l
E c l i p s e

名前…高町なのは
性別…女性
年齢…十九歳（五百五十歳前後）
能力…別体系魔法使用／不老不死
性格…基本優しい
備考…束とリリィの取り合いをしているけどそれ以前にリリィが振り返らない
出典作品…魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s

名前…八神はやて
性別…女性
年齢…十九歳（五百五十歳前後）
能力…別体系魔法使用／不老不死
性格…不明
備考…生前の記憶が無い
出典作品…魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s

名前…レミリア・スカーレット
性別…女性
年齢…十二歳（四百二十七歳）

能力…吸血鬼／運命を操る能力
性格…基本真面目だがカリスマブレイクしかけている
備考…リリィと束が生んだ二人目の愛の結晶
出展作品…東方Project

名前…フランドール・スカーレット
性別…女性
年齢…十二歳（四百二十七歳）
能力…吸血鬼／ありとあらゆるものを破壊する程度の能力
性格…子供っぽい
備考…リリィと束が生んだ三人目の愛の結晶
出展作品…東方Project

名前…KOS-MOS
性別…女性型アンドロイド
年齢…十八歳前後（百六十四歳）
能力…空間転送技術内武装／耐水性
性格…リリィと束の命令を忠実に聞く
備考…束が身体でリリィがAIという風に作った為かアンドロイドより人間に等しい
出典作品…ゼノサーガ エピソード？「ツアラトウストラはかく語りき」

名前…相坂さよ

性別…女性（身体のみ女性型アンドロイド）

年齢…十五歳（五十七歳）

能力…耐水性

性格…原作三十巻以降

備考…呪縛霊としてリリイに見つけられたのは一年もたっていない頃

出典作品…魔法先生ネギま！

名前…黒羊鹵鼎

性別…女性

年齢…十八歳（百歳前後）

能力…固有結界／魔術／不老

性格…リリイ達以外に対してはミステリアス

備考…リーゼロッテ死亡に対しトゥーレを半分脱退しリリイに匿ってもらう

出典作品…11eyes CrossOver

一一六 選択肢？決定（後書き）

基本的にこんな感じですね。

黒羊歯鼎については、半分仲間と言う感じでしょうね。

そのうち、入る可能性もあるでしょう。

さよは、既に身体を得ているので現Sか腕どう出るかは分かりませんね。

と言うかりリィ以外男いないため、ハーレムじゃん……。

束ルート固定だけどWWW

さて、こんな感じで大分裂戦争始まります。

094 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

|||||リリイ|||||

何時眠っていたのか気が付かない。

私って眠っていたつけ、そう思いながら目を開ける。

しかし、目を開けなければ良かったと思ってしまった。

目に映った光景が夢だと信じたかった。

……いや、夢でも困るね。

……現実と言う事は、さらに困るんだけどね……。

現実逃避をしたいが、肌に感じられる感触がそれを阻止する。

……たしか、原作近くなって……。

……大分裂戦争で、転生者が多くなってきたから……。

……排除しようと、魔法世界に来たのは覚えているんだけど……。

……目に映った光景は覚えていないよ。

そう言う思いで、もう一度良く見る。

背中感触から、ベットに横たわっているのは理解できている。

しかし、右腕と身体の上から感じる人肌は理解できない。

いや、右腕の方の人肌。

つまり束が裸で私と一緒に横になっている。

……ソレは良いとおこうか。

そう思い、一番の問題を見る。

「……なんで、なのはまで……。」

そう言って、開いている左腕で頭をかいた。

しかし、何も思い出さない。

……なぜ、なのはまで……。

……なんで……。

……裸で私の上で寝てるんだろう……。

胸をリリースに押し付けシーツの代わりにほどけた髪を纏い、穏やかな寝息を立てて寝ていた。

普通ならヤッてしまったと言う風に答えが出るのだが、リリースは認めたくないのかその答えを無視し続ける。

……何も起きていない。

……何も起きてない。

そう何度も自分に言い聞かせ、状況を整理する。

しかし、何も整理できない。

ゆっくりと部屋を見渡すと、何故かKOS—MOSと目があった。

「……。」

「……。」

お互い無言で見つめ合い、無言で私は目をそらした。

……なんで、KOS—MOSがここにいるっ!?

一瞬だけ、脳内が混乱したのはをベットに落としてしまう。

だがなのはは起きる気配が無く、眠ったままだ。

それを見て、KOS—MOSは部屋を出ようとドアに向かう。

「昨夜は、お二人とお楽しみでしたね。」

そう言って、KOS—MOSは出て行った。

……お二人と……。

……お楽しみ……。

その言葉を何度も頭の中で反復する。

……お楽しみとは、ヤッてしまった的な状況に言うよね……。

……お二人と？

そう頭の中で整理し、束となのはを見る。

……え？

もう一度見る。

……嘘……。

一瞬だけ、目の前が暗くなった気がした。

094 (後書き)

……まあ、夢の中でこんな感じでシナリオが進んだのでw

なのは が ゴール した のか な？

あれ？

束固定ルートから外れた??

095 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

|| || || リリイ || || ||

……何もなかった。

……そう。

……何もなかったんだ。

そう呟きながら、着替えて部屋から出る。

そしてゆっくりと歩くと、向こうからエヴァがやってきた。

「……昨夜は束達とお楽しみのようだったそうだな。」

すれ違いざまに、エヴァはそう言ってきた。

……この世に神はいない……。

……いないんだっ!!

私はそう心の中で呟き、艦内を走りどこかに行った。

|||||なのは|||||

「う……?」

……朝……?

私はゆっくり目を開ける。

周りを見て、束さんがいた事に驚きつつも、自分の格好を見て何か納得した。

……束さんと私の間に、一人分のスペース……。

そう思い出し、咲夜起きた事を思い出した。

……「よし、それならその願いをかなえてやろう!」

……そう言っ、私の前に立つのは紅音さんだった。

……私がリイさんとの距離を縮めたいと、呟いていた時に紅音さんが私の愚痴を聞いてくれたのだ。

……そして……。

……気がついたら、こうなっていた……。

……アレ？

……なにこの状況。

……え？

……アレ？

「……どういう事？」

|| || || 束 || || ||

「……どういう事？」

近くで私の声が聞こえた。

……いや。

私に似た声が聞こえた。

……というか、そんな声を出せる人なんか一人しかいない。

そう思い起きあがると、目の前には裸のなのはちゃん。

そして、私も裸。

……え？

「……どういう事？」

結果、私もなのはちゃんと同じ結論に至った。

|| || || リリイ || || ||

私の前には紅音がいた。

結局、私は食堂でアルコールを浴びるように飲んで忘れようとした。
そんな時に、私の前に紅音が現れ愚痴を聞いてくれたのだ。

「……まあ、元気出しながら。」

そう言って私を励ましてくれるんだけど、何か裏がある気がする。

紅音はワインを私のグラスに注いでくれた。

私はそれを一気に飲み干す。

「……仕方ないよ。　なのはちゃんともヤツちゃったんなら責任取らないと。」

「そう言うけど、責任って。　どう取るん……。。」

若干、はやてってぱく関西弁が混じった気がした。

「うーん。　束と同じように愛をそそぐ？」

「できたら苦労しないって。」

そう言って、空のグラスを机に置く。

「リリイちゃんっ!!！」

「リリイさんっ!!！」

タイミングが良いのか悪いのか。

束となのはが、服も着なずに食堂に飛び込んできた。

……この世に神などいない……。

「目の前にいるんだけどね。」

……それでもいないんだよ。

095 (後書き)

……どういふ事？

ふざけていますが、どういふ事？？

このお話はうやむやに終わらせようとしているけど、本当にどうしようかな……。。

096 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

|||||リリイ|||||

「リリイちゃんっ!!」

「リリイさんっ!!」

二人の声に、私は瞬間的に土下座してしまった。

自分でも見事な土下座だと思う。

「リリイちゃん、なのはちゃんの処女網が無くなっちゃったんだ。」
「

「どういふことか理解できるかな、なの。」

私は土下座している手が震えるのを抑えて、必死に床に頭をつける。

……オワタ……。

……もう、ネットスラング思いっきり使っても良いよね。

……え？

……十分に使っていた？

……サーセンw

「この事について、紅音が原因だって分かってるんだけどね♪」
そう束が言うと、紅音は「え」？」と気不味そうに頬をひきつらせた。

「なのはちゃんから聞いたよ？ リリィちゃんとの仲を縮めた言っ
て愚痴を言ったら「叶えてあげるって。」言っただよね？」

その言葉に、私は唾然とした。

「……あ、あははは。」

そう言うのと紅音の声が聞こえなくなった。

席の反対側である分、机が邪魔して横目で見る事が出来ない。

おそらくテレポートでもしたのだろう。

……卑怯だ、テレポート。

「……さて、リリィちゃんにこれからの選択肢を上げる。」

そう言って束は私の頭を両手で掴み、私の顔を上げさせた。

「まず一つ、これから私だけ愛する事を再度誓って一年ほど魔法球
内で確かめる。」

「あ、ずるいっ！」

なのはが束の発案に対し、批難するが束は気にせず私の目を見て口を開く。

「二つ目、仕方ないから私達を魔法球内で……、そうだね。五ヶ月愛して貰う？」

その言葉に私は哑然とした。

反対になのはは喜んでいたけど……。

「三つ目、シテしまった事は仕方が無いから責任を取る為二つ目を実行する??」

……それって、結局は二つ目じゃん。

「四つ目、今日の事を忘れて私だけを愛し続ける。」

……結局一つ目だね？

「……さあ、どれを選ぶのかな？」

「……。」

そう言う束の顔は笑顔。

だけど選択を間違えたら、その表情が一変して阿修羅に変わってしまふ気がした。

反対になのはも同じだ。

選択を間違えたら、色んな意味で不味い。

……個人的には一つ目と四つ目しか選べない。

……けど、なのはに対し責任を取ると言う事は……。

……そう思い、私は頭を悩ませ続けた。

「……ねえ……。」

「なに？」

私がそう言うと、束はいつもの表情で聞き返してくれた。

「……お願いだから、服着てください。」

結局、ヘタレ主人公並みの事しか言えないのだった。

096 (後書き)

さて。

なのはに対して、責任を取るかとらないか。

別にどっちでもいいけど、責任取るつもりなら全員と……。

て、感じになりそうだねwww

おそらくならないけど……。

ヒロインは、ゆかりんボイスだけで十分だお！

事実、「IS」は束、「りりなの」はなのはだしね……。

097 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

|| || || ?? ? ? || || ||

……俺は今「赤き翼」の陣営にいる転生者だ。

そう心の中で言い、俺はナギとアル、詠春、ゼクトを見る。

詠春がカセットコンロと鍋を取りだし、食事の準備をし始めた。

俺はそれをボーっと眺める。

……神にキングクリムゾンと身体、魔力を強化してもらい、俺は「ネギま」の世界に辿り着いた。

キングクリムゾンは、数十秒まで時間を消し去る事ができる。

消し去った時間を自由に行動出来たりして、まさに無敵っ!!

……まあ、問題は制限で使用時に「キングクリムゾン!」と叫ばなければいけないところだろう。

……別に叫んだところで、能力を理解出来る奴は分からないだろうが。

……能力の事は置いておくか。

……時代はナギ達が活躍し、英雄になる大戦時。

……俺はその時代に転生した。

……しかし、俺にとっては思ってもみない事が起きる。

……赤き翼に見た事もない奴が入っているのだ。

そう思い、俺は知らない二人見る。

一人は青髪の男。

……俺が一番最初にナギの仲間になったから、こいつが入った当時の事を覚えている。

……実力を測る為と言ってナギが戦い、その時に能力を見た。

……まさかの東方の「運命を操る程度の能力」だった。

レミリアス・カーレットの能力。

文字通りに運命を操る能力だ。

……ナギの魔法が当たらない。

……どんな事をして、当たらないのだ。

……俺がキングクリムゾンをして不意打ちで攻撃しても当たらなかった。

……アレはどう考えても、運命論を弄っているような能力でしかない。

……そう考えると自然的に「運命を操る能力」になり、たぶん「全ての攻撃は自身には当たらない。」とでも弄っていたのだろう。

……なかなかのチートだ。

……女の方はよく分からない。

……ただ、魔力が多い魔法使いとしか言えない。

……ま、女だしナギ狙いだろう。

……俺がアリカを手に入れる障害にはならない。

……むしろ良いカードだった。

|| || || ナギ || || ||

俺は肉を箸で掴み、鍋に入れようとする。

……さっさと肉食いたいし、入れっか。

「あっ!？ ナギおまつ……。なに、先に肉を入れようとして
るんだよ。」

しかし入れようとした瞬間、詠春に見つかった。

「良いじゃねーかよ、旨いモンから先でよ……。」

俺はそう言って、肉を鍋の中に放り込んだ。

青春が文句を言っているが、聞き流す。

……腹が減ってんだよ。

……入れる順番なんて、知るか。

097 (後書き)

ボツ話

だけど仕方なく入れ込む。

なんか、強引に始まったけど仕方ない。

仕方ないんだよ。

098 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

|||||ラカン|||||

「嬢ちゃん、そこどいてくれないかな？」

俺は目の前にいる、青い髪をした女を見てそう言った。

女は身体の所々に白い防具みたいなのをつけている。

良い女だが、感情が薄い気もしなくはない。

人形のようにも見えるが、人形じゃないな。

……何にしても、イイ女。

そう思いながらも、俺は女に殺気をぶつける。

しかし、女は俺の殺気を受け流す。

……なにもんだよ。

警戒しながら女を見ると、女は俺を見て口を開いた。

「別に貴方と敵対するわけではありません。」

そうやってきた。

その言葉に俺は少しだけ眉をひそめる。

「貴方の目的が、オスティア回復作戦の失敗などをさせた元凶。赤き翼の殺害が目的なのは分かっています。」

……おいおい。

……俺は一人で赤き翼って言う奴らを叩きに來たんだぜ？

……まさか援軍がいらないって言う、俺の言葉が聞こえなかったのか？

「私はあの中の三人の殺害を宣言しに來ただけです。ちなみに可能ならば殺害せよとも受けています。」

そう聞くと、俺は警戒を解いた。

どうやら俺とは別の依頼を受けた女のようなだ。

「私達は同じ目的でここにいます。ですので、先に頂いても良いですか？」

「……いいぜ。」

俺はそう言うと、女に先を譲る。

……別にレディーに先を譲るってわけじゃない。

……食事を邪魔するのが、嫌だったわけでもねえ。

……正々堂々真正面から戦ってみて言わけだ。

……なんとなく譲ったと言うのが、本音だな。

女は振り返り、崖下にいる赤き翼に向かって行った。

……と言うかパンツ見えそうじゃね？

|| || K O S — M O S || ||

……誤差修正。

ガトリングを構え、赤き翼にいる三名の転生者に向ける。

「ここで死んでもらえると助かる。」と思いながら、トリガーに指をかけた。

大型のガトリングには、三連のガトリングが三つ付いている。

数週間前にバージョンを上げたため、追加された武器。

そのため少しだけ不安だったりもするが、私を生み出してくれた父の発明を信じないわけがない。

……最悪「D・TENERITAS」を使ってでも、殺しておくべきでしょうか。

そう思い引き金を引く。

無数の弾丸が転生者に正確に向かう。

青髪の男性には外れたが、女性には魔法壁で防がれました。

もう一人の男は、何食わぬ顔で食事しています。

「流石ですね。」

そう言って、私を見上げる七人の顔を見た。

ナギと詠春呼ばれる男性が、私を見て顔を赤らめています。

……なぜでしょう？

……それよりも、やるべき事があるのでした。

「はじめまして。 任務でその三名を排除宣言をしに来ました。」

そう言ってガトリングを空間転送技術で仕舞い、転生者三名を指差

す。

……仕留められなかったですし、予定通り宣言するだけにしておきましよう。

……D・TENERITASを撃った方が良い気もしますけど……。

「今後、貴方方三名は神によって殺されます。それまで、余生をお楽しみください。」

ナギと呼ばれる男性が何か言っていますが、彼は対象外です。

私は一方的に喋り、母の作り出した魔法具「転移指輪」を起動させその場から去りました。

098 (後書き)

実は、強引に進めた結果。

この話は、アレから数日後と言う結果になってしまいました……。

なのは……。

どうなったの……???

と言う事で、アークエンジェル、赤き翼にケンカを売る。

3名だけに。

基本は無視ですよ？

けど、当初の目的が転生者の殺害ですから……。

一応、原作メンバーはあしりますが、転生者メンバーはあしらうどころか殺します。

099 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

||||アルビレオ||||

「先ほどの彼女は一体なんだったのでしょうか……。」

そう思いながら、私はお鍋から野菜を取ります。

……ふむ、神ですか……。

彼女が言っていた事を思い出し、私は三人を見ます。

……彼らたちはナギ以上に強い力を持っています。

……先ほどの女性がもし神に頼まれて三人を消しに来たのなら、お話としては三流ですね。

……あり得ないお話でもないでしょうし、頭の片隅にでも入れておきますか。

私は再度、お鍋にお箸をつけお肉を取ります。

「き、気にしない方が良いぜ。」

ナギがそう言いながら、お肉を口に入れます。

……囙んだのは、おそらく先ほど彼女のパンツを見てしまったから

でしょう。

……フッフ、顔も赤いですしね……。

「……気にしてないが。」

「……俺もだ。」

「私でもありますね。」

そう言いますが、彼らの顔は何か考えている顔です。

……それにしても、先ほどの彼女。

……何者だったのでしょうか？

|| || || 束 || || ||

「……ん？」

格納庫の一部が光り出し、そこからKOS—MOSが現れた。

私はそれを見て「おかえり♪」と言いながら、ドライバーを握った手を上げる。

転移指輪が正確に起動したのだろう。

……正確に動くとは思ってもみなかったけど……。

私はKOS—MOSが完全に戻ってくると、立ち上がり近づいた。

……KOS—MOSも私の娘みたいな子。

……心配はするんだよ……。

転移し終えたKOSⅡMOSは不思議そうに私の後ろにある物を見る。

「何を作っていたのですか？」

「ん？ アレ？」

私はそう言って、今まで弄っていた物を指差さす。

KOS—MOSは頷き、私を不思議そうに見つめた。

巨大な白い機体。

フリーダムとチェルミナートルに並んで、その機体は経っていた。

「アレはね、KOS-MOSの専用機だよ♪」

私はそう言って、KOS-MOSの方を向いた。

「私の……？」

KOS-MOSは不思議そうに私を見る。

……私そんなに可笑しなこと言った？

……ま、別にいつか。

「この機体はね、試作だけど基本ISとIMSの様な機体構想で作ったんだ☆」

私はKOS-MOSに自慢するようにそう言葉を投げた。

KOS-MOSは微妙な表情をしていたけど。

……それにしても、リリィちゃん……。

……KOS-MOSは本当にAIで動いてるんだよね？

……アンドロイドか疑っちゃうんだけど……。

そう思いながら、私は更に口を開く。

外見は自分で作った事には、何も突っ込まない。

「ISの反重力力翼と流動波干渉にフリーダムとチェルミナートルの機体スペックを合わせた機体。」

私はそう言って、両手をその機体に向けて広げる。

「E・S・ディナ！」

099 (後書き)

原作メンバーの口調が良く分からない……。

そして転生者の名前が無いのは、いつもの事なのだろうか……。

まあ、気にしないで置いておこうかな……。

基本KOS-MOSは「邪神モツコス（エピソード？の限定フィギュア）」でなければ、全部バージョン美人ですからね。

まあ、私的には？の最終状態が一番好きですけどね……。

100 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ

|| || K O S — M O S || ||

そう言って母は機体に向かって手を広げました。

「まあ、そんな事はどうでもいいですけどね。」

ですが、私はそれを受け流します。

左から来たパンチを左に受け流すように。

……受け流せませんけどね。

……右になら受け流せますが、左には無理です。

少しだけ母の肩が下がった様に見えました。

|| || リリイ || ||

「私を殺してくれ。」

金髪の女性がそう言い、私は女性が持っていた聖剣を受け取る。

聖剣が災厄としての私と反発するが、それでも私は持った。

「……五百年も生きて、これ以上無間地獄を歩む気はない。」

女性は、目を瞑るそう呟く。

「だからこそ、私を輪廻の話に戻す為……。殺して欲しい。」

とりあえず、私は剣を構える。

「不老と言うのは、人類の夢でも本人にとっては地獄だな……。」「

その言葉を最後に、女性に剣をつき立てる。

セイバーの転生者は長い生涯を終えた。

……不老不死じゃなかったかと思ったが、不老だったようだ。

身体が灰になり、女性が消えて行く。

私が持っている聖剣エクスカリバーも、同じように灰になって行った。

「また、輪廻を廻って出会おう……。」

そう呟き、私はアークエンジェルに帰還した。

|| || || はやて || || ||

あいも変わらず、ウチは雑用や。

周辺地形の変化や、ここ数百年の歴史を調べたり……。

……なんちゅうか。

……ウチ、目立ってないな……。

そう思いながら、飛んでいると一人の女性と目があつた。

薄く青が掛った銀の髪、それに赤の瞳。

私はそれを知っている。

見た事がある。

……しかし、ソレは現実にはおらへん。

……つまり転生者ちゅう事や。

本来なら敵対するべきなんやろうけど、私の身体は自然と動いておった。

「リインフォースっ!!」

「我が主っ!」

そう言っつて、私らはお互い抱き合う。

……いや、ノリのいい子でよかったわ。

……もしかしたら、拒絶されかねなかったからなく。

……安心安心や。

紅音さんから見せてもらうたアニメの登場キャラ。

ウチのユニゾンデバイス。

それが今抱き合っている女性や。

……さて、急展開過ぎやな……。

……どないしょ……。

……まあ、リリィさんやったら一人くらい仲間が増えても何にも言わへんかな？

そう思いながらリインフォースと抱き合い、なんとなく涙を流していた。

涙が流れたのは、アニメのせいだと先に言っておく。

……絶対、アニメのせいやからなっ！！

100 (後書き)

いやね、赤き翼が入ってきた戦闘が巨大要塞。

というか、原作で分かるのは巨大要塞ぐらいなんですけど……。

あと、完全なる世界……。

もう、適当に進める事にした。

101 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||フェイト||||

はやてが知らない女性を連れて戻ってきました。

というか、完全に転生者と分かる外見です。

……私達と同じ系列のアニメ……。

そう思いながら、女性を私は見た。

「ここに住まわせて下さいっ!!」

「いいよ。」

「」「」「軽っ!?!」「」「」

女性の深々と下げた頭と言葉を聞き、リリィは簡単に許可を出した。

……そう言えば、クリスカ達の時もこんな感じだったね……。

……そんなわけで、リインフォースが仲間になった……。

……アレ?

……これ、何人仲間に来るの?

|| || || リリイ || || ||

……そう言えば、一応主人公だっけね……。

そう思いながら、全員を格納庫に集める。

というか集めた。

「さて、私達の目的は転生者の殺害と言う事です。」

紅音がそう言って、何処から持ってきたのか分からないホワイトボードに文字を書いて行く。

ホワイトボードについて、誰も聞かないのは既にお約束なのだろう。

……といいより、半分以上の仲間キャラの口調が同じ件について。

ふざけ半分聞いていると、めんどくさい事を聞いた。

「数百年前にメセンブリーナ連合に吸収されたニヤンドマやアルギューレ大平原、シルチス亜大陸が一番の激戦区。だがおそらく、帝国は大規模転移魔法を実戦に投入して巨大要塞グレート・ブリッジに進軍するはずだ。その時が一番の転生者が集まる大戦となる……。」

そう言うのと、ホワイトボードを一回転させ裏のボードに変える。

すると裏には魔法世界の地図が書かれていた。

「今現在赤き翼はアルギューレ辺りにいるだろうが、この戦線では連合の兵士では維持ができない。確実に出てくるだろう。」

唯一、原作を読んでいたカノンが何度も頷く。

……いや、二次小説でしか知らないのか。

……だってカノン、原作五巻までしか読んでないって言ってたし……。

「赤き翼にいる三名の転生者をここで消滅させる。不吉の入れ墨を背負った男がくるやら、王の力を持った物がくるやら、そこら辺は気にしなくていい。」

「」「」「いや、それ誰？」「」「」

むしろ全員、不確定要素の二人が気になるようだった。

……というか、不吉の入れ墨って……？

「賞金首を狩って金を儲けている黒猫と、ブリタニア皇帝？」

その言葉で、数人が何かに納得した。

その中に一人に私も交じっている。

「シルチス亜大陸が現在の戦場で、連合が領土を広げている。」

そう言うと、ホワイトボードにシルチス亜大陸の黒い部分。

つまり帝国領土を指している場所を、連合領土の白に少しだけ塗りつぶす。

おかげで、蛇のように細い帝国領土の黒い色が残る。

今後数年で、その黒い部分も消え去るだろう。

「だが、今は関係ない。本艦の目的は転生者の殺害だけだ。攻撃してくる物は適当にあしらっておけ。まあ、艦隊は潰すけどね
wwww」

101 (後書き)

黒猫とかブリタニア皇帝とか気にするな。

おそらく魔改造されていても、リリィ達なら大丈夫なはず。

と言う訳で、おそらく次話からグレートブリッジ戦闘にWWWW

え？

早すぎる？

気にしなさんなってっ！

102 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||リリイ||||

……本来なら、この程度の語り部はカノンにやってもらいたいのだがね……。

……だって、カノンの出番少ないじゃん……。

……そう考えるなら、救ってもさよの出番すらないよね……。

そう思いながら、私はフリーダムによりかかる。

……ここで説明しておくでしょう。

……今まで説明した為師が無かったからね。

私のフリーダム形態を束と解析し、データー上同型のフリーダムを作ったわけ。

……あ、IMSサイズじゃないのであしからず。

……コクピット、ビーム兵装、核動力、対戦艦戦闘なんか楽勝と言う状態。

……まあ、私がフリーダム化しても同じなんだけどね……。

……ただ、攻撃の小ささが……。

……もういいや……。

ちなみに、現在グレート・ブリッジの北側。

……地図だと北は下のはずだから、メセンブリーナ連合領かな？

……とりあえず、今アークエンジェルはそこら辺にいる。

そこから戦場に飛び出ると言う訳だ。

すでに赤き翼も戦線に出ており、ヘラス帝国側に甚大な被害を与えている。

……まあ、昔いた村はヘラス領だから少しは支援してあげても良いんだけどね。

そう思いながら、私はフリーダムから腰を離しカタパルトに近づく。

今回の出撃は数人で行う。

私、東、レミリア、KOS-MOS、なのは、はやて、リインフォース。

残りの九人は艦内で、お仕事をしてもらう。

……あ、二人ほど何も出来ないけど……。

……フランとさよは……。

おそらく艦長席には、紅音が座っているだろう。

……エヴァも出たいと言っていたけど、今回だけは広域殲滅を一気にするから、エヴァの出番は少ないんだ……。

……今度までに取っておいてね。

《カタパルト接続、進路クリアー。カタパルト一番、篠ノ之束、高町なのは。カタパルト二番、八神はやて、リインフォース……、以下四名発進どうぞっ！》

イーニヤの声がカタパルトに響く。

その瞬間に、全員がカタパルトに押し出され外に出て行った。

《広域殲滅終了と同時に、篠ノ之リリイ、十六夜咲夜、レミリア・スカーレット、KOS-MOSは発進。スタンバイお願いします。》
》

その声に誘導され、私はカタパルトに足をつけ、そこから見える戦場を眺めた。

……さあ、どんな行動を起こしてくれるかな？

……転生者……。

……紅音の領域に無断で侵入し、許可を得ずに蹂躪した。

……その罪、数え、己の命で払え。

……ん？

……私？

……紅音が作ったストーリーだから、適用されないんだって。

……流石、御都合主義。

……転生者をフルボッコにする為に作られた樂園だね。

……後葉味。

……当初のキャラと激しくぶれてる？

……気にしないでおいでね。

102 (後書き)

……いま、転生者一人殺した所まで書いて少し罪悪感が湧いた……。あのまま生かしておけば、なんか酔う分からんラブコメが出来てただろうに……。

しかも、最後を死で飾るとか。

そこで本音とか……。

サブキャラで、視点当ててない奴に感情移入できっかつ!!

と書いたところで、まだ数話先のお話ですので分からないでしょう。

そんな葛藤と同時に、その話まで投稿します。

怒らないでねw

103 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||リインフォース||||

私は今、主はやてのそばにいる。

……む、自己紹介が遅れた。

……リインフォースの転生者だ。

……名前は、紅音が明かすなと言っていたから言わないがな。

カタパルトと呼ばれる場所から打ち出され、私と主、篠ノ之と高町は近くに滞空している。

「リインフォース、もう一度聞くけどホンマに闇の書使えんのか？」

主が心配そうに、私に聞く。

何度目になるだろうか、私は主の心配を否定する。

「大丈夫です。暴走もきませんし、大抵の魔法も使えます。」

私はそう言って、主を安心させる。

転生者と言えど、他の転生者を主と呼ぶのはどうかと思うだろう。

……暴露すれば、神様になのはの世界に送ってもらい、Strike
erSで復活を遂げようと思っていたのだ。

……ああ、主はやて、かわいすぎる♪

……リインフォースがカワイソス！

……なら、リインとして生まれ変われば、ハッピーじゃない？

……と言う事で、生前の口調をリインフォースの口調に強制的に変
換してもらう術をかけてもらい、私は転生した。

……ちなみにこの術、脳内で考える事には適応されないらしい……。

……気にしないけど……。

……転生者の主を主と認めたくないが、なぜかこの主はやては主と
認めたくない。

……この世界の神とやらに聞いたら、記憶が無いから限りなく原作
に近いと言っていた。

……つまり「ネギま！」版主はやてと言う事だ！

……しかも魔法や強さはなのは基準！

……私は神に恵まれているのだろうか……。

……さらに行きついた先は違えども、最強種勢ぞろい！

……私の楽しみが増えましたね♪

一種の百合発言を抑え、私は戦場を向く。

そこには、雷の暴風が戦場をひきさいていた。

篠ノ之と高町は既に戦闘状態なのか、お互い同じ武器と服を着ている。

「最初っから全力で、全ブラスター解放する？」

「その方が良いと思うよ☆」

何やら不穏な空気が流れたが、気にしないでおいておこう。

戦域も近付いてきた。

再度主はやてを見る。

主はやても、真剣な票序ながらも笑顔で私を見てくれたいた。

「ほな、行こうか。」

その言葉に、私は胸が熱くなった。

……ついにこの時が来たっ！！

胸が高騰するのを抑え、私は闇の書を胸に押さえつけた。

私が神に願ったのは、主はやたとユニゾンをした直後から、主はや

ての寿命分生き続けること。

つまり私の死は、主はやてとリンクしている。

後はユニゾンデバイスとしての機能、闇の書を全魔法完全收拾した状態での使用。

主はやてが不老不死の為か、私も不老不死として生きる事になったのは誤算だった。

だが当初の目的は、達成したから良いとしよう。

高鳴る胸を押さえつけ、私と主はやては叫んだ。

「「ユニゾン、インッ!!」」

103 (後書き)

とりあえずユニゾン。

闇の書を保持。

なに、その一種のチートw

しかも神様印の闇の書って、都合が良い魔法を収集してるよね。

というか、SLBが……。

104 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|||||はやて|||||

ユニゾンして、身体の中に何かが入り込んでくるのが分かった。

嫌な気分にはならない。

むしろ心地いい。

そう思いながら、閉じていた目を開き戦場を見る。

茶髪がユニゾンした事によって、白髪に変わっていた。

「さて、行きますかっ!!」

……ウチが主人公になれる日が近づいてんのかな？

そう思いながら、束さんとなのはちゃんに呼び掛ける。

二人とも周囲にブラスタービットを展開し、今にも危険な魔法を打とうとしていた。

……えらい怖いが、撃ちも今から同じ魔法を使うんや。

そう思いながら、闇の書を捲った。

「行くでっ!!」

そう言うのと、私達全員は戦場に向けて魔力を溜めた。

||||ナギ||||

俺達は今、グレートブリッジ奪還作戦に参加していた。

敵兵に「連合の赤毛の悪魔」と言われ、味方には「千の呪文の男」と言われ称えられているが、俺にとってはそれはただの飾りだと言う事に気が付いている。

麻帆良学園にいた銀髪の女。

アイツが俺を簡単にあしらってから、少しだけ成長した気がした。

主に精神面で。

俺より強い奴に魔法を使って挑んだが、体術だけであしらわれた。

だから、お師匠ができてまず最初に教わったのが冷静になる事。

いつかあの女に勝つために、身につけたスキルだった。

だからこそ、俺は冷静に見ていられる。

……それでも良く馬鹿にされるけどな！

……まあ、今言ったところで何にもならない。

戦場から遠い空。

そこにある、桜色の魔力星を。

「なんだ、アレはっ!!」

詠春が叫ぶ。

だが俺は叫ばない。

肌で感じる危険な感じ。

「全員、退避しろおっ!!」

だから俺は、冷静で無い物の代わりに叫んだ。

|| || なのは || ||

「レイジングハート、エネルギー圧縮。」

「『……星よ、集え……。全てを打ち抜く光となれ……。』」

……なんでだろう。

……私だけの魔法が、二人も使える状態なんだけど。

……少し泣きたい……。

そんな気持ちになりながら、私は魔力を集める。

戦場は遠いが、拡散した魔力は多い。

さらに束さんのスターライトブレイカーは、アークエンジェルのエネルギーを使ったビーム砲撃。

収束砲を撃つのは二人だけ。

……反動の無いから私も全力で行ける。

そのため、私もはやてちゃんと同じくらいの桜色の星を作っていた。

「ブラスタービット、エネルギー装填完了っ！」

「『……貫け、閃光。』」

全員の桜色の砲撃が、臨界点にまで充填される。

アークエンジェルの前に、三つの星。

戦場から見たら、さぞかし綺麗なんだろう。

だけど、綺麗なんかじゃない。

この星は、戦場で作られた物を使って作られたのだから。

だからこそ、全員の準備が整った瞬間私達は目を合わせて叫んだ。

「「『スターライト・ブレイカ（アアアアッ！）』」」」

104 (後書き)

これは不味い……。。

ブラスターモードが二人。

単体が一人……。

これは酷い……。。

生き残るやついるかな？

105 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || || ゼスト || || ||

ワシは初めて見る魔法形態に驚いていた。

遠目で見て分かるように、あの魔法は聖霊の力を必要としていない。

完全に魔力だけで作られた、魔法。

赤き翼の中にも理解不能な奴らは居るが、目に映る魔法はそれを超えておる。

「全員、退避しろおっ!!」

そしてワシはナギの叫びに目を覚まし、最強防護を発動させる。
クラティシテール・アイギス

ラカンもヤツも、気合で防御する気か腕を前に出す。

その瞬間、目に映っておった魔法はワシらに向かって放たれた。

十一の光条が流星の如く戦場に飛来し、そのうちの一つがワシの元に向かってきよった。

一瞬だけ「面白い。」と感じ、どれほどの威力が見ようとしたのも束の間。

瞬間的に全防壁を破壊し、ワシに直撃した。

……幸いな事に、傷は負わなかったがの……。

|| || || ラカン || || ||

「ゼストに直撃したよな。」

そう思い、ナギにお熱の女を見る。

しかし、女は俺の言葉を聞いていないのか微かに震えていた。

「……スターライト……ブレイカー……。」

聞いた事のない言葉だな。

……もしかしてっ！

俺はそう思い、女の肩を掴もうとした。

だが、腕が動かない。

「……さて、宣言通りに殺しにきたよ……。」

その声が俺を聞こえた瞬間、俺は何か縛られた。

「なに者だっ!!」

後ろからの声に、俺は叫び振り返る。

女は相手を見ていたのか、先ほど以上に震え始めていた。

そこには白で統一された服とロングスカートと、ナギみたいな木製ではない杖を持った女が飛んでいる。

「……知らなくていいよ。」

「待てっ!!」

女はそう言うと、何も出来ない俺の横に降り立ち女に近づいて行く。

……止めろっ!!

……そいつが何をしたッ!!

だが、俺の思いが通じるわけでもなく、女は杖から先ほどの砲撃と同じ色の何かを先端に展開し、怯えている女に向かい狙いを定める。

「ヤメロッ!!」

俺の脚と腕に何かが巻かれているせいで、満足に動く事ができない。

何時もなら簡単に気合で壊せるんだが、何故かこれは壊せない。

いつも見ていた女の顔が、どんどん歪んでいく。

涙で顔が濡れ、いつもの態度が消えていた。

そして白い女は、杖を動かしやがった。

「カスミッ！！」

怯えているせいか、女……。

カスミは無抵抗に心臓を突き刺され、俺はそれを見ていることしかできなかった。

105 (後書き)

うん。

原作キャラの崩壊が始まりました。

いわゆるキャラ崩壊です。

というか、ゼストの喋り方が少ないせいであんな感じに……orz

ラカンも微妙な感じになってますしね……。

最後の最後で、赤き翼の女転生者に名前をつけてしまった……。

しかも、次話で何か起きるし……。

良いのか、それ？

106 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|||||なのは|||||

筋肉ダルマ。

確かラカンと言う名前だっけ？

……原作のキーキャラクターだから、殺しちゃだめなんだよね？

……まあ、転生者以外はあまり殺さないけど。

彼が転生者に近寄り、唾然としていた。

「……あ、悪魔……。」

転生者が私に向かってそう言う。

……ここに来て初めて言われたかな？

……いつも呼称は魔王だったし。

そう思いながら、外見が違うのにもかかわらずヴィータを思い出す。

「悪魔でいいよ。 批難しても良い。 悪魔らしいやり方で、貴方達転生者を滅ぼすから。」

そう言って私は戦場に飛んだ。

|| || || カスミ || || ||

……瞼が重い……。

……さつさと閉じて、楽になってしまいたかった。

「カスミッ！　おい、カスミっ！！」

だが、うるさい筋肉馬鹿の声が頭に響く。

……なんで、いつもみたく……、魔法を使わなかったんだろう……。

……なんで、高町なのはがいたのだろう。

そう思いながら、私はラカンを見た。

目を動かすのだけでも、かなりしんどい。

「おいっ！　今アルの野郎がこっちに向かってきてる、だから死ぬなっ！！」

そう言って筋肉馬鹿は私に命令してくる。

だけど無理だろう。

治療をしたところで、私の身体は私が一番よく分かっている。

……そうだ、死ぬ前に言っておかないと……。

そう思い、ゆっくりと口を動かす。

「……悪魔……には……きおつけ、ろ。　あれ、は……おまえ、たち、が、束になっても……敵わな……い。」

僅か数文字を言うだけで、かなり時間を使ってしまった。

馬鹿は驚きながら、私に向かって「喋るなっ！」と命令してくる。

……死ぬ最後まで、命令？

そう思い、私は笑ってしまった。

死ぬ間際になって、なぜか恐怖は無くなっている。

「ふ、ふは、……ははあ……っ……。　……最後、まで……。　……命令？」

私はそう言って、馬鹿を睨む。

最後までいい穏やかに死なせて欲しい。

「クソっ!! アルの野郎はまだかつ!!」

既に私の頭の中には私のハッピーエンドではなく、この世界で出来た友人を案ずる気持ちが残ってはいなかった。

「私は……誰の命令も聞かない。……たとえば、誰が、相手だったとしても、ね……。」

「カスミッ!!」

途切れ途切れ言う。

……辛い……。

いつも泣きそうにないラカンが、今だけは泣きそうだった。

私はそれを見て、ゆっくりと手をラカンの頬に伸ばす。

……ごめん。

だけど、その手は途中まで上がると力無く地面に落ちた。

……お前の、その誰よりも優しいところが……。

……ナギよりも……。

……好きだったよ……。

赤き翼所属

カスミⅡバージナスク

巨大要塞グレート・ブリッジにて死亡。

106 (後書き)

だから今まで視点が無かったキャラが、初めて視点に出たのがすでに死亡間際。

それでこんな話って、おもしろくないわっ!!

せめて数回、心理描写入れんかつ!!

ナギとラカンを見てドキドキせんかつ!!

ウチは意外にも起こつとるでっ!!

もちろんウチ自身にな!!

と言う事で、d g d g 回でした。

ぶっちゃけ、この転生者良い子じゃない?

そう思いながら、舐めをつけて殺した、と。

一応外見は、皆さまにお任せしますよ。

……これじゃあ、どっちが悪訳なのやら……。

……もちろん、なのはの方だよね!

ん？

誰か来たようだ。

カスミⅡ バージナスク

魔力はナギと同等。

使用属性は水だが、他にも色々使える。

殆どの魔法が使えるスペシャリスト的な状況で転生。

ナギをアリカから奪おうとしていたが、死亡した。

107 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || || 紅音 || || ||

……なんか、全読者が起こりそうな展開が起きた気がする……。

……いや、絶対怒ってるな。

……ほんと、サーセンw

……私も理解できないけど、起きてしまったのは仕方が無い。

……ホントにサーセンw

「紅音さん、何でも感動できるような話にも順序がありますから、いきなりあんな状況になっても、全員首を傾げるだけですよ？」

フェイトの言葉が私の胸に突き刺さった。

|| || アル || ||

私が付いた時には、カスミには息がありませんでした。

ラカンについた高速魔法も、私が近付き解析した瞬間砕けましたし。

本当に何者なのでしょうかね、あの艦は。

そう思いながら、私はラカンの方に手を乗っけます。

「……ラカン。我々にはするべき事があります。」

そう言うと、ラカンは私のロープを引っ張りカスミのそばに叩きつけます。

……もちろん痛いですよ……。

「分かってる……。」

震える手で、ラカンは私のロープを握り締めます。

「分かってるさ……。」

覇気が無い声ですが、憎しみは混じってますね。

……ふむ。

「もしかして、彼女の事が好きだったんですか？」

私はそう言い、ラカンの手を解きます。

普段なら否定や攻撃が入るのですが、なぜか今回はどちらもありません。

……そつとしておきますか。

そう思い、私はその場を離れました。

|| || || 詠春 || || ||

もの凄い砲撃があった後、私とジーナスのそばに一人の女の子が日傘を指して歩いてきた。

薄青い髪が風になびき、その背後からは砲撃に巻き込まれた者の叫びが聞こえる。

「……どうしてこんな所に……。」

「止めろ詠春。」

彼がそう言うと、私は彼を見た。

いつも何処余裕がある顔は、今では見ることも無く驚愕し、少しづつ下がっている。

「どうしたんだ？」

そう言うと私の視界が反転し、目の前が暗くなった。

|| || || ジーナス || || ||

……不味い。

……不味いっ!!

そう思い、俺は焦った。

俺の天敵が目の前にいるからか、体中から汗が流れ落ちる。

……俺の能力は、運命を操る程度の能力。

……武器が無くても、十分な能力だ。

……だが、あの神はその能力に制限をかけた。

……それでも問題無いと思い、赤き翼に入り余裕で戦闘していた。

……だが、その余裕が目の前に少女によって壊される。

詠春が気絶し、俺は完全に恐怖した。

「……レミリア・スカーレット……。」

俺の能力を持っている、吸血鬼だ。

107 (後書き)

真面目に謝罪しようよ……。

すみませんでしたー。

やりたくなっちゃったんですうー!!

アレ乗せたせいで、何人かが不満を出してお気に入りから外しましたしー!!

سنマツセンデシター!!

とまあ、謝罪はこれまでに置いて。

次話からは真面目に書こうかな……。

うん……。

ホント、真面目に……。

108 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

レミリア

なんとなく同じにおいを辿り、散歩がてら探しに来ただけど。
 どうやら当たりの様ね。

……無様に震えちゃって。

とりあえず、めんどくさい事はしたくないのよね。

「な、なんでこんな所に……。」

……あら？

……意外にも喋れるようね。

……多少驚いたわ。

……咲夜を呼んで、フライにでもしてもらおうかしら？

……もちろん作るだけよ？

……食べる訳無いじゃない。

そんな事を思いつつ、私はゆっくりと近づいた。

どうしてやろうかしら、と悩みながら子ネズミをいたぶる様を考えを張り巡らせる。

日傘を回し、優雅に目の前にいる犯罪者の判決を決めようと目を細めた。

その瞬間、気絶したはずの剣士が私の日傘を叩き斬る。

「っ!？」

「よしっ!！」

目の前にいる男がそう言って、握りこぶしを作った。

「レミリア・スカーレット! お前は吸血鬼、直射日光に弱いっ!
! 直射日光を浴びさせ続ければ俺の勝ちだっ!！」

そう言い、後ろの男は私に剣を構えた。

「油断したが、今度は容赦しないっ!」

片方は高笑して、何かに入り浸ってる。

……というか、なんで笑っているのかしら？

……吸血鬼が日光に弱いって、フランじゃあるまいし……。

少しだけため息をついた。

……お父様。

……早く帰りたいです。

……と言うか帰っていいですか？

メガネの男が動く。

日本刀は美しいと、お父様が言っていたけど事実美しい。

その刃、片刃によって峰が一定の線を引き太陽を映しだす。

「はあっ!!」

そう掛け声をかけ、男は日本刀を振った。

《——その刃は、私の身体を傷付けず近づいた瞬間に折れる——
——》

「別に私に当てても良いけど、折れるわよ？」

一応、気紛れで忠告してあげた。

……おそらく聞かないでしょうけどね。

刀は私に触れる直前に「パキッ」と折れた。

「ほらね。」

高笑いしていた男が、その音に目を丸くし口を開く。

「な、なぜ肌が焼け焦げないっ!!　なぜ、太陽のもとで平然とできるっ!!」

後ろの男も哑然としている。

だけどそんな事はどうでもいい。

「あなた、運命を操って気絶を無効化したわね？」

そう言って、剣士の方を親指で指差す。

「で、運命を操るにしても体力を使う分、何かしら制限が掛ってそうね。」

男の額から、大量の汗が噴き出していた。

……私は体力は使わないからね。

……適当にカマをかけてみただけよ。

……おかげで、さらに驚愕してるわ。

……当たりの様ね。

108 (後書き)

先ほど気が付いたのだけど、リインフォースではなく、リインフォースになっていた……。

何が起こった……orz

ちょっとばかりショックだった。

これからきおつけよう……。

ついでにレミリアの口調が統一されてないせいか、他キャラと同じ感じに……。

ま、カリスマブレイクは確定してるからいいか。

109 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜(旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス(別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音(別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || || 紅音 || || ||

「本編の方は真面目に文字が打ててるのが不思議よね。」

そう呟き、私は艦長席に肘かけた。

無事だった巡洋艦などが、魔法を放ち攻撃してくるが装甲で無効化される。

「やっぱ、これも真面目に書いた方が良いのかな？　けど、質より生産性だし。」

そう言いながら、私はあくびをした。

フェイト達は何と言ったらいいか、悩んでいた。

「高町なのは甲板上に着地。」

そうイーニャが報告してくる。

《なんか、変なドラマが始まったんだけど……。》

「……気にしない方が得策。」

そう言って、なのはは無視するように伝えた。

|| || || リリイ || || ||

「さて、これで大半の不老不死は殲滅できたかな？」

そう言いながら、戦場を歩き回る。

私の周りは、スターライトブレイカーが直撃したせいか、あたり一面焼け野原になっていた。

微妙に死んでいたり、死んでなかったりする者もいる。

……転生者は何処かな。

……多分、直撃しても元気なはずなだけど。

そう思い、後ろからの殺気に無意識で迎撃行動に出た。

少し横にずれ風切り音で距離を把握し、回転しながら避けて相手の

後ろを取る。

すると簡単に後ろを取れた。

見覚えのある赤毛の子供。

「ちっ!!」

舌打ちし振り返る。

妙に生意気そうな顔。

赤き翼のリーダー。

「ナギ・スプリングフィールドね。」

私に攻撃してきた、馬鹿の生をを呟きため息をついた。

ナギはそのため息を聞くと、頬を引き攣らせ私を睨んだ。

微かだが殺気も感じる。

……本人からしたら、最大の殺気をぶつけてるんだろうけど……。

「なんであんたがここにいる。」

ナギがそう聞いてきた。

とりあえず、真面目に答えてあげるかな。

「……KOS—MOSからお話を、聞かなかった？」

そう言うのと、ナギは眉をひそめた。

当たり前のように知らないようだ。

……まあ、名前を明かしてこなかったらしいし、仕方ないかな？

「薄青色の長髪の女性と言ったら分かる？」

そういうと、思い出してるのか目を瞑る。

……戦場で目を瞑るとか……。

……死にたいのかな？

そう思っていると、いきなりタコのように顔が赤くなった。

「あ、アイツの事かっ!!」

なぜ赤面しているのか、気になっていたが無視しておこう。

どうせパンツが見えたとか、そう言うセクハラだろうし。

「てことはっ!!」

そう叫ぶと、ナギは目を見開く。

「お察しの通り、あの三人とそれに準ずるものの殺害が私の目的だよ。……まあ、既に君達の一人は殺したけどね。」

109 (後書き)

いきなりメタW

ちなみに、質なんか考えていませんし、プロットなんかありません。

勢いですっ!!

勢いなんですよ……。

とりあえず、ナギを適当にあしらう。

というか、あしらっても向こうから執念深くきそうなんだけど……。

110 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||リインフォース||||

「さて、終わった事やし、艦の防衛に戻ろうか。」

主がそう言うのと、私は『そうですね。』と言って肯定した。

……ああ、やはり主はやては可愛らしい。

……その中でユニゾンしている私。

……すばらS……?

何かが近づいてくる。

『主はやて、何かが接近してきます。』

そう忠告すると、主の近くに黒い球体が現れた。

慌てることなく、後退し観察する。

「なんや、これは。」

『分かりません。ですが、重力場反応が異常値を示していると判断できます。』

私はそういいながらも、この攻撃を知っていた。

知っているからこそ、誰が近づいているのか分かる。

『主、様子見にブラッディーダガーを。』

そう言って、近づいてくる黒髪優男の顔を思い出していた。

|| || || レミリア || || ||

「ご無事ですか？」

「レミリアッ! !」

その声が私の上から聞こえてくる。

そして私の前後に降り立つ、似たような髪の色をした女性とアンドロイド。

「……咲夜はどうしてきたのかしら？」

不思議そうに首を傾げ、私は「まあいいわ。」と呟く。

K O S — M O Sを見て敵は驚いてるわね。

というか、片方は咲夜を見ても驚いている。

「P A D長!!」

男がそう言った瞬間、その男の首が飛んだ。

……咲夜ね。

……時を止めて首を切り落とすなんて、無残な事をするわ……。

そう思い、咲夜がいた場所を見ると何食わぬ顔で立っていた。

「誰がP A D長ですか？」

不自然に切れるのは、自分だと言っている証拠よ？

そう思いつつも、もう一人の敵を見る。

「ジーナス……くん？」

彼は少し唾然として、首なしの死体を眺めていた。

「ぬんっ!!」

そして少し震え、KOS—MOSめがけ折れた剣を振るう。

しかしKOS—MOSに利くはずもなく、簡単に避けられ逆に鳩尾を叩かれて気絶する。

「近衛詠春を無力化しました。」

KOS—MOSがそう報告してくれる。

……たしか、原作重要キャラで殺してはいけなかったわね。

そう思うと、少しやる気がうせた。

「……引き上げるわよ……。」

すでに目的は達成した。

後は別の人に任せましょう。

そう呟き、アークエンジェルの方に向かって歩く。

……後ろにメイドって、お嬢様っぽいわね。

……実の姉だけど……。

……KOS—MOSもメイド服着てくれないかしら？

遙か遠くでは雷の光と、お父様の雷切が雷を斬り周囲に衝撃波を幾つも作り出している。

それを見て、私は「……あそこには、絶対近づきたくは無いわね。」
と呟いたのだった。

110 (後書き)

一応、咲夜はレミリアの姉です。

そのため、メイドではなくメイドもどきです。

メイドなんですけど、紅魔館のメイドではありません。

だから、レミリアはお嬢様ではなく呼び捨てです。

そしてPAD長と言ったせいで、赤き翼の転生者死亡。

名前が適当と言わないで(＞＜)

適当だけど……w

詠春も何故か刀が破損。

どうせすぐに打ち直すでしょう……。

ジーナス・ノヴァ・エイリアス

運命を操る程度の能力にリミッターをつけられている。

その分、変えられる運命は限られている。

しかしレミリアが「運命を操る能力（「程度」ではなく、「操る」と完全化）」になっており、更に咲夜にPAD長と言った為、レツドカードで一発退場となった。

なお目的は不明。

111 おまけ？（前書き）

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜（旧姓…篠ノ之）
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス（別名…羽佐間カノン）
- 六人目…真壁紅音（別名…神）
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット（正式姓…篠ノ之）
- 十三人目…フランドール・スカーレット（正式姓…篠ノ之）
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

111 おまけ？

|||||リリイ|||||

ナギがいきなり千の雷を撃ってくる。

もちろん回避はせずに、PS装甲だけ身体表面に展開させ魔法無効化装甲で無効化した。

攻撃は爆発せずに、減衰し消滅。

「……雷ね。」

そう言いながら、冷ややかにナギを見ている。

……多分、冷ややかに。

「ゆるさねえ……。」

そう言って、冷静さを失ったナギは瞬動で距離を一気に縮める。

普通ならここで殴られるだろうが、私は普通ではない。

「かはっ!?!」

殴る瞬間の腕を掴み、捻ってナギの身体を地面に叩き落とす。

追加で脛骨辺りを強く踏みつけておく。

しかしナギは痛みをこらえ、手で踏みつけている足を振り払う。

もちろん、触れられる前に退いたけど。

「許さないのならどうしたの？」

挑発して、転生者へナギが増援に行く事を防ぐ。

……今のところ、なのはが一人殺したそうだけど赤き翼にはあと…

……ん？

(リリィちゃん♪ 咲夜がやったようだよ?)

束の声が頭に響く。

……どうやら咲夜が一人やったようだ。

……残りは一人。

報告が来るまで、ナギの相手をしておこう。

「どうした来ないの？」

さらに兆発するが、なかなか乗らない。

……仕方ない。

……こちらから攻めよう。

……えーっと、ナギは雷を使うから……。

そう思いながら、両腕を交差させる。

「かぎ牡籥とぎかけとぎ闔す総光の門　七惑七星しちわくしちせいが招きたる、由来艸阜ゆらいそつふうの勢……。

」

私の口が呪しゅを読み上げる。

ナギが警戒し、構えるが攻撃ではない。

「もんごく文曲くれいれい零零、急ぎて律令の如く成せ。」

爪が光り、掌から刀の柄が出てくる。

私の右手が柄を掴み、叫びながら引き抜く。

「千歳の儔、雷切……。」

そう引き抜き、右手に刀を持ち向かい合う。

雷切。

たちばな立花道雪が雷、または雷神を斬ったとされる刀。

元は「千鳥」と呼ばれる刀名であったが、雷を斬った後に刀名を改め雷切りとした。

そのせいか刀は常時帯電しており、電撃を放つ事などができるようになっている。

雷を放つナギにとって、雷切の存在は天敵であった。

「私を倒さないと、仲間がどんどん死んでいくかもね。」

一番付く必要性の無い嘘。

確かに死んではいるが、「どんどん」というほどではない。

それでもナギは目を見開き、覚悟を決めたのか私に向かって突撃した。

111 おまけ？（後書き）

|| || おまけ || ||

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる。」

これから起きる予言の一節だ。

ある世界での大規模な事件。

それは一種の終焉。

見たくはない未来への予言。

この一説に更に加わる一節がある。

「かの厄災の王が天使の羽を広げ、混沌を更に広げるであろう。祖は十八枚の羽で法を壊し、世界を壊す。」

この予言を見た者は思った。

この先、さらに世界は崩壊すると。

だからこそ、この未来を覆す為に手を打つ。

だからこそ、女性を知る事ができなかった。

その一説に続きがある事を。

「法は砕け散り世界は混迷の道へ進む。王は世界に新たな知能を与え悲しみに暮れる。束る者がいない王は立ち止まる事は許されず、罪を背負い行きつく先にいるのは魔王。王と魔王が交わりし時、世界は革新する。」

愛する者を失った百合が行きついた世界。

自身に打ち込んだ鎖が変化をし、その世界に波紋を起こす。

これは、百合が新たな咲場所を探す物語。

112 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

112

|| || || ナギ || || ||

……こいつっ！

俺は怒りにかられ、呪文を詠唱した。

「マンマンテロテロ 百重千重と重なりて、走れよ稲妻。『千の雷』
！！（ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラプサトー・
キーリプル・アストラペー）」

……さっきは何故か消滅したが、今度こそ当てるっ！

俺の仲間を傷付けたぶんを償えっ！

雷が女の周囲に直撃し減衰するも、グレート・ブリッジの一部と共に海に落ちる。

「へ、罪を償え。」

そう言うと、後ろからの衝撃に俺は意識を離した。

|| || || 咲夜 || || ||

それにしても、ここは血の匂いが激しいですね。

思わず鼻を摘んでしまいそうになる。

グレート・ブリッジの上は死体だらけで、生きている者を探す方が困難だった。

下に落ちそうな死体は、風や攻撃の影響を受け落ちる。

死体が落ち、海に落ちる音がした。

「咲夜。何か来るわよ。」

そうレミリアが言うと、私は一度時を止めて周りを見た。

すると不自然なくらい、時間軸の歪みが橋の上に生存している男から漏れ出していた。

……おそらく、同系統の時間を干渉ができる能力者。

……レミリアが気づいてくれてよかった。

……始末しておきましようか……。

私はその男に近づきナイフで心臓と頭を刺してレミリアの横に戻り、時間を動かし始めました。

少し後ろで悲鳴が聞こえましたが、レミリアは気にしないで歩きます。

「……流石ですね。」

K O S — M O S がそう呟くが、私は「何が？」ととぼけた。

|| || || アルビレオ || || ||

「先ほどの砲撃魔法、見事でした。」

私はそういいながら、女性に向けて魔法を放ちます。

ですが、彼女は私の攻撃を見切っているのか、簡単に回避していく。

……強敵ですね……。

……ナギ以上の力を持っているでしょうに……。

彼女が私を見下ろしているため、重力魔法を使う。

だが、それすらも簡単に回避された。

「……それはおおきに。」

女性はそういいながら、黒い羽根を羽ばたかせて空を飛ぶ。

……ふふふ、非常識極まりない集団ですね。

「おっとっ！」

……危ない危ない。

いつのまにか背後にあった、血色のナイフが飛んできましたよ。

……怖い怖い。

「あんた、えらく笑顔なんやな？」

女性は私の顔を見て、そう言ってきた。

「……まあ、これは生まれつきですかね？」

……生まれてから相手をいじる事をし続ければ、こんな感じにでもなるでしょう。

……一応、生まれつきと言う事で通るはずです。

「そか。」

そう言うのと、女性の周囲に先ほどのナイフが二十個出現した。

……本当に怖い人だ。

112 (後書き)

さて、なんか前回のおまけが微妙に気になってしょうがない作者です……。

「……いや、でも……。 あれは……、スカリエッティがかわいそうだし……。」

そんなこと考えながら、ディスクトップにある「SS」というファイルの中に……。

「ARMORED CORE for Answer×魔法少女リカルなのは」

「その他」

「世界とISと名もなき者へ」

「世界と魔法と愛すべき者へ（旧タイトル）」

「語られなかった、世界とISと名もなき者へ（世界とISと名もなき者へ 【語られなかった物語】）」

New↓「魔法少女リリカルなのはStrikers 無くした鎖と繋がる鎖」

……はい？

えーっと……。

馬鹿なんでしょうか？

首を締めたいんですか？？

なにせ、なのは系を1つ抱えているんですよ？

それなのに、なのは系を増やすとか……。

ホント……。

馬鹿なんじゃないかと心配になってしまいましたよ……。

あ、一応、私の事なんで他人事のように言っても、少しだけ凹む……。

まだ中身は何も入っていません……。

変な報告でした……。

113 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||フェイト||||

艦に向かってくる砲撃艦は、ほぼ消えている。

そのせいか、アークエンジェルの装甲が戦場で浮いていた。

傷が無く、白と赤の目につく巨艦。

誰も攻撃しようとすらない。

「……目標消滅を確認。 作戦終了です。」

クリスカの声が艦橋に響き、私は少しだけ艦を回頭させた。

「信号弾発射。 これより現空域から離れる。 左舷40度艦首下げ20。 全員を収容後、潜水する。」

……潜水航行か。

……副操舵席にクリスカいないから、意外と大変なんだよね。

そう思いつつも、命令通り艦を動かす。

メセンブリーナ連合もヘラス帝国も、どちらもこの戦闘での被害が大きい。

もちろん大きくさせたのは私達だ。

……誰かの恨みを、貰ってる……か。

左舷前方で、三色の光りが光り戦場に撤退を知らせる。

甲板上にいた束さんとなのはが一番早く戻ってきて、レミリアと咲夜、KOS-MOSがその次に戻ってきた。

そして次はリリィさん。

はやてにリインフォースが帰還し、カタパルトが閉じる。

その時には、全武装と隔壁が閉鎖され潜水状態に移行していた。

|| || || さよ || || ||

私はエヴァンジェリンさんに言われ、戦闘に行った皆さんに冷水で

絞ったタオルと飲み物を私にカタパルトに向かった。

……それにしても、未知の乗り物ですね。

「オイ、飲ミ物ガ零レソウダゾ。」

「え？ あっ！」

私はチャチャゼロさんの言葉で、手元を見ると確かに零れそうでした。

……ふう、危なかったです。

私は教えてくれた、チャチャゼロさんを見る

「ありがとうございます、チャチャゼロさん♪」

「ケツ、持ッテ行ッタ時二零レテリリイノ分ガ無イト、御主人ニ起コラレンダヨ。」

そう言ってチャチャゼロさんは私の横を、トテトテと歩く。

……それにしても、本当に未知の乗り物ですね。

……アークエンジェルは……。

「ダカラ、零レソウニナッテルゼ……。」

|| || || アルビレオ || || ||

「意外と酷い事になっていますね……。」

辺りを見て、私は呟いた。

連合も帝国も見境なしに、戦場に当たる様に初撃の砲撃を撃ったようですね。

グレート・ブリッジも数カ所当たったらしく、その個所が完全に瓦解している。

それを見て、少しばかり背筋が凍った。

……千の雷が玩具に思えるほどの威力ですね……。

そう思いながら、私はナギや詠春の姿を探した。

113 (後書き)

……えーと、懺悔っぽいですかね？

これから少し弱ります。

リリイが私の中で「僕が考えた凄いヒーロ」的な感じになりかけています……。

色々暗躍し過ぎです……。

短編とノクターン除けば、ISとネギま！に出てるんですよ……。

ACfaでも「レイヴン・アナトリア」と言う風に、男性主人公を使用したのに、またもリリイですよ……。

なのはstSにリリイを送っていいものやら……。

そう考えながら、自己嫌悪に陥っていますね……。

どれだけ「リリイ」に愛着わいたのか……。

「もう、私が書く作品の基本主人公はリリイで通そうかな…… (泣)」

そんな感じで、少しだけ弱っています。

114 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||ゼクト||||

……それにしても、グレート・ブリッジと一体化とは流石に悲しいかの？

あの砲撃を防ぎ切れず、ワシの身体はグレート・ブリッジに埋まってしまった。

ここから戦場は半分しか見えないが、あの砲撃だけでここまで戦場が崩壊するとは。

「まだまだわしの知らぬ魔法があると言う事かの……。」

そう言い、ため息しか出なかった。

「おや？ その声はゼスト。」

「む？」

何処からか、アルビレオの声が聞こえた。

……何処にいるのだ？

……頭まで埋まって、顔を動かす事すら満足にできん。

そうやって悶えておると、アルビレオが飛びながらワシの前に現れた。

「……無事じゃったか。」

「貴方ですよ。」

ワシの言葉に、何故かアルビレオは皮肉で返す。

……この姿をどう見れば、無事だと言えるのだ。

……だが、無事でよかった。

そう心の中で呟くと、アルビレオの目が据わった。

「……現在、他のメンバーとの念話が通じなく、カスミ嬢バージナスが死亡しました。」

「なんじゃとっ!？」

カスミが死んだ。

その言葉はワシの心を荒らさせた。

……アヤツほどの魔法使いが……。

……一体どうやって……。

「心臓を一突きです。それ以外の外傷はありません。」

そう言うアルビレオはいたって冷静で、逆に不気味じゃった。

「……詳しい事は、その場に居合わせたラカンに聞いてください。」
アルビレオはようやくワシを引っ張り、グレート・ブリッジの一体化からワシを解き放った。

……それにしても、カスミが死亡したとなると……。

……やはり、あの時の女性かの？

……カスミとジーナス、ベルセルドを指差しておったしの……。

……ん？

……まさかっ!？

そう思い念話で呼び掛ける。

だが、誰も応答が無い。

「アルビレオッ、ジーナスとベルセルドはどうしたのじゃ!」

ワシは掴みかからんという勢いでアルビレオに聞く。

しかし、アルビレオは先ほどと同じような顔で口を開いた。

「落ち着いて下さい。まだ死亡したと決まった訳ではありません。」

「そうなのじゃが……。」

ワシらしくなく焦る。

共にした時は極僅かじゃが、それでも一応仲間。

落ちつけるわけが無かろう。

「こう言う時に私達が落ち付かなければ、ナギ達はどのようなのですか……。」

アルビレオの言葉が、アヤツを思い出させる。

「まずは冷静になり、ゆつくりと探すべきです。」

そう言うのと、アルビレオは周囲を見渡した。

114 (後書き)

ゼクトの喋り方、こんなのでいいのかな？

スターライトブレイカーを受け、壁と一体化w

そこら辺は、ゼクト補正？

原作キャラ補正？

まあ、良いかな？

気が向くまま行ってみようかな……。

115 選択肢？（前書き）

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜（旧姓…篠ノ之）
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス（別名…羽佐間カノン）
- 六人目…真壁紅音（別名…神）
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット（正式姓…篠ノ之）
- 十三人目…フランドール・スカーレット（正式姓…篠ノ之）
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

115 選択肢？

|||| 近右衛門 |||

『今から、その場にいる魔法使いで世界樹を制圧しろ。』

「ふおっ!？」

……いきなりの通信は、ワシにはびっくりじゃよ。

……しかも制圧……。

……わしゃ、死ぬかも……。

その思いを読みとったのか、電話の相手はこう言った。

『賞金首共はその場にいない事が確認されている。』

「なんとっ!？」

一瞬だけじゃが、久々に驚愕したかの。

『今なら簡単に奪う事ができる。』

その言葉を聞き「やり返されたら」と思うと、ワシ本当に死んだんじゃない。

仕方なく、魔法使いを集めよう。

数分後。

世界中の前に集まった魔法使いの前でワシは大きな声を出し喋る。

「と言う事で、今からこの学園を制圧する事になった。」

近右衛門の声が、辺りに響く。

当たり前のように全員がざわつく。

しかし、一部が「あたりまえだっ!」と言ってからは、全員が納得したかのように近右衛門をみた。

……本当にいいのかう？

……リリィ殿の事じゃから、こういう対策を取って無い訳じゃないと思うが……。

「今は夏休み。さらに一般人が学園にいない事は確認が取れていますっ!」

魔法先生が挙手をして発言する。

……リリィ殿もワシらを信用して、こう任せてくれておるのに……。

……ワシ、死にたくない。

その思いとは裏腹に、魔法先生が言葉を続けて行く。

「我らの手で、犯罪者が不法に占拠した場所を解放するのは当然の事ですっ!!」

一般的には、そうなんじゃが。

……なぜじゃろう……。

……物凄い殺気が、首筋にあてられてる気がする……。

近右衛門だけ冷や汗をかく中、全員の気持ちが一つになっていく。

「我らの手で、悪に正義の鉄槌をッ!!」

魔法先生の言葉で、全員が握りこぶしを作り腕を振り上げる。

……わしゃ、知らないぞ……。

……本当に知らないぞい……。

そんなワシの心境を知ってか知らずか、殺気が強くなっていく。

ワシ以外誰も気が付かない。

どんどん盛り上がっていくにつれ、殺気が強くなっていった。

……。

……こりゃ、ワシ死んだの……。

リリィ殿に比べ軽いが、一般的に見れば強過ぎる殺気。

殺気だけで、殺せそうな殺気。

「……あら、楽しそうねえ。」

その声で、全員が静まり返った。

……ワシ帰っても良いかのう？

……ワシは何もやって無いからの？

そう思うが、おそらく聞いてくれないんじゃないだろうな。

全員がその声の方向を見ると、長黒髪の女性がそこに立っていた。

115 選択肢？（後書き）

選択肢？

かなり先の事ですが、エヴァンジェリンを生徒として通わせるか。

このままいったら、おそらく呪いはかからないでしょう。

私的にはエヴァンジェリン先生（幻術使用の大人ヴァージョン）で言うのもやってみたい気がするんですがね……。

？・生徒にする

（基本的に原作の様な感じ）

？・ニートにする

（あまり表に出ない）

？・教員とする

（日本史とか出来そうじゃない？）

まあ、同時にアンケートも行きます。

生徒で登場させたいキャラいますか？

イーニヤとか咲夜（ギリギリ歳を誤魔化せるかな？）、カノン（咲夜と同じく）、レミリア、フラン、K O S－M O S（茶々丸みたいなのがいるしね……。）さよ……。など。

そうなる事で、色々と原作介入が楽になります。

116 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || || 鼎 || || ||

不審な感じがして探してみたら、人払いの結界を張っている場所を見つけた。

……今は学園内に人はそれほどいないわよね？

……念には念を入れて、て事かしら？

そう思いながら、私は気がつかれないようにその結界に入っていく。すると世界樹と呼ばれる木の下に、人が集まっていた。

「我らの手で、犯罪者が不法に占拠した場所を解放するのは当然の事ですっ！！」

その言葉が私の耳に届いた瞬間、殺気を少しだけ放ってしまった。

誰も気が付いてなさそうな物だから、そのまま先を出したままにしておく。

「我らの手で、悪に正義の鉄槌をッ！！」

おそらく彼らは魔法使い。

正義の名をかたる、暴力異能集団。

……禁書目録聖省と変わらないわね……。

……しかたない。

……オーダーがこう言う事の対処って言うのも合ったし、少しは匿ってくれてる分はお返ししないとね。

そう思いながら私は姿を現し、口を開く。

「……あら、楽しそうねえ。」

久しぶりの実戦。

少しだけ楽しみだったりもする。

一世紀も生きた魔女を相手にどれほど生きられるか。

もちろん、目の前にいる子ネズミが、よ？

全員が私を見て、臨戦態勢を取る。

しかし、私はとらない。

「話を聞いてたけど、「恩を仇で返す」て言うのが正義の魔法使いなのかしら？」

そう言って、私は苦笑する。

「っ！ 貴様何者だ！！」

……五月蠅いわね。

……私は何者だっていいじゃない。

そう思いながら、私は指を弾く。

すると、世界が反転する。

まるで鏡のように、左右が逆になった。

目の前にいる自称正義の魔法使いは、その事に驚きながら辺りを見渡す。

「ここならいくら壊しても、問題無いわよ。」

そう呟くが、誰も聞いてそうには無い。

固有結界。

ファンアズマゴリア
幻燈結界ではないけど、一種の隔離世界。

鏡の様な反転をした世界は、まるで世界の裏側の住人になった気分になる。

どうせ、初めて見る者に戸惑っているのでしょうね。

誰も喋らないし、動かない。

「貴方達の中に賢い人がいれば良かったわね。でも残念。」

……ようやく私の声が耳に入ったのかしら？

……いっそ弾けて、頭ごとなくなったら面白いわよ？

……だからこそせめて。

「私が愉快的オブジェにしてあげる。」

そう呟いた瞬間、早漏かしらね？

複数の魔法使いが、私に向かって魔法を放った。

……女の子に嫌われやすいタイプね。

魔法が私の足元を穿ち、土煙が舞った。

116 (後書き)

今回は麻帆良に残っている、リリイに匿ってもらっている黒髪美人さんの活躍話。

あの人、チートすぎるから……。

高重力魔術を受けても、相殺して何とか動くし。

ホント見ただけで、魔術を使ったりするし……。

流石、第二次世界大戦から生きてる魔女だとw

ほんと、アレはチートだよ。

117 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜(旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス(別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音(別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || || 鼎 || || ||

「ざまあみろっ！」

土煙の向こうで誰かが呟く。

……やっぱり早漏ね。

……死体も確認しないで、そう呟くなんて。

魔法って脆いわね。

そう思いながら、今受けた攻撃を解析する。

私に対する殺傷に必要な魔力は不十分。

攻撃方法、ダメ。

……期待ハズレね。

そう思いながら、私は小さな魔法陣を作る。

魔術。

魔法とは体系が違う、殺傷攻撃。

土煙に魔法陣が隠れているため、あちらは油断している。

私にとってみれば、ネズミの位置なんて心臓や毛細血管まで見渡せるのに。

そう思いながら攻撃を放った者の頭に向けて、少しだけの力で魔術を発動する。

極僅かな力。

私にとってホント極僅かな力。

それが閃光となり、魔法陣から放たれる。

「ぐぎゃあっ!？」

「ぼぐぎゃっ!？」

品の無い悲鳴が土煙の向こうから複数聞こえた。

まるでお話みたいな意味の分からない言葉。

けど、私の耳には聞きなれた言葉。

戦時中に頭を潰される時に、相手が良く言っていた言葉。

悲鳴も聞こえる時になって、土煙が治まった。

魔法使いが私を見て驚愕している。

「……あら？　愉快的オブジェになったわね。」

そう呟き、首なしの死体を見る。

首から噴き出る血が、その身体を鮮やかに彩っていた。

脊髄が少しだけ飛び出て、まるでキャンドルみたいね。

そんな姿を魔法使いは、啞然と見ていた。

「さっきより素敵よ？」

苦笑しながらそう言うと、私は空中に魔法陣をいくつも展開する。

それを見て、魔法使い達も呪文を唱え始めた。

……呪文を呟いている間に、攻撃されるの分かっているのかしら？

……私の攻撃、無詠唱なのよ？

そう思いながらも口には出さず、その姿を眺めた。

愉快的オブジェが自重によって倒れ、辺りに血をまき散らしながら倒れる。

……禁書目録聖省の方が頭が良いわね。

宿敵の存在を思い、私は詠唱が終わるのを待った。

「サギダ・マギカツ!!」

詠唱が終わったのか、私に向かって杖や腕を向けて叫ぶ魔法使い。
数多くの魔法が私に向かってくる。

「……舌嚙まないのかしら？」

エヴァンジェリンと共に開発した自動防壁魔術。

それが勝手に魔法を撃ち落としていく。

そして全て撃ち落とし終わる。

「馬鹿……な。」

全員が愕然としている。

「ホント、期待ハズレね……。」

そう呟き、いたぶる為に手加減した魔術を、上空の魔法陣から雨の
ように降らした。

117 (後書き)

サギダ・マギガの詠唱をかくのがめんどくさかった。

はい。

さて次話で溜めが無くなりますW

いま、東京ですもん……。

ノーパソ使って更新ですもん……。

ええ。

泊まりですから……。

ええW

118 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || || 鼎 || || ||

「^{ツォーレン}憤怒の黒羊齒鼎を知らなかったのかしら？」

そう呟き、魔術攻撃を止める。

紫の閃光が止み、辺り一体のクレーター製造が終わる。

憤怒の黒羊齒鼎。

魔法使いにはおそらく知名度が低い。

けど、魔術師には知名度が高い。

なにせ魔術の最大機関、禁書目録聖省に対抗した唯一の組織トゥーレの幹部なのだから。

……魔術で手加減と言ったけど、私の手加減は手加減なのかしら？

……やり過ぎたかしらね。

口には出さず、心の中で思う。

そこには腕無し死体や、足無し死体が量産されていた。

最初にいた魔法使いの半分以上が、死体となり果てている。

「……脆いわね。」

もちろん、魔法使いと言う存在の事よ。

障壁が紙の様に破られ、その肉体を削られ剃られていく。

そして出血大量とショック死。

……ホント、人間って脆いわね。

生きている魔法使いが私を見て怯えている。

おそらく、私の魔術の射線外にいたのでしょう。

その身体に魔術を受けた痕跡が無い。

「あ、悪魔だ……。」

「魔女……。」

次々に私への評価を口に出してくれる。

「恐怖で履いている物が濡れてるわよ?」

そう言うが、恐怖の方が強いのか気にしないらしい。

別に魔女とはよく言われていたし、私自身の美德として忍耐強さもある。

いちいちそんな言葉を聞く暇はない。

「さて、一応オーダー内容には殺害も可能って言われてるから、貴方達を殺す事にためらいは無いのよね……。」

そう私が言うと、生き残った魔法使いが一瞬だけ引き攣る。

私は目を閉じ、口を開く。

「別に私にとって、貴方達は変えの利く教師と生徒。世界に巣くう悪性のガン。像の行進の前に並ぶ蟻。」

そう言って殺気を放つ。

今度は全員が気が付いたのか、その表情が恐怖に染まる。

「人間は学べるから、すばらしいのよ?」

そう呟くと、頭の長い妖怪が前に出てきた。

……あら珍しい。

……妖怪が人前に現れるなんて。

……ぬらりひょん、だったかしらね?

ぬらりひょんが、生き残っている魔法使いの前に立つ。

つまり、私の一番目につく場所。

「何が望みかの？」

死体を前に、平然そうに喋る。

「意外ね。 全員、恐怖で引き攣って無様に死ぬ運命だったのに。」

そう言うのと、ぬらりひょん以外が目には涙を溜める。

……男の涙は気持ち悪い。

……もちろん、良い年行った男の涙よ。

「それは困るのう。」

「安心しなさい。 貴方のせいで、それが台無しになったのだから。」

118 (後書き)

ぬらりひょん存在をどうするべきか……。

これではただのぼけ老人……。

あくどいキャラにするべきか……。

それともボケ老人設定にするべきか……。

さて、どうしよっかな。

119 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜(旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス(別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音(別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||ナギ||||

「……ギッ！」

……五月蠅いなく。

……もう少し寝かせてくれよ……。

「ナギっ!!」

俺は仕方なく目を開いた。

五月蠅い詠春の声が、頭に響く。

「ふああ、っ!？」

大きなあくびをあして、周囲の惨状に目を見開いた。

血の色と空の色が視界を覆い、潮の香りと鉄の匂いが鼻に付く。

耳を澄ませれば、誰かのうめき声。

そして俺が何をやってたか思い出した。

「アイツらっ!!」

「もう遅い。」

俺が呟くと、ラカンがそう言ってきた。

ラカンの顔が妙に暗い。

「ナギ……。」

アルがゼクトと共に近づいてくる。

その手には、多くの紙が握られていた。

|| || || リリイ || || ||

「……何してんの……。」「

そう呟き、モニターの向こうにいる鼎を見た。

『あら、私は言われた通りに鎮圧しただけよ。』

「……それで死者が二十三人？」

『そうね、数え間違いをしていなければ。』

私の言葉に鼎が飄々と言い返す。

……あ、頭が痛い……。

……なんで死者を出すかな……。

……死者を出す行為は最低の場合って……。

そう思っていると、画面の向こう側の鼎は苦笑した。

『大丈夫よ。死体は固有結界内に土葬して置いといたから。』

「いや、それ大丈夫じゃない……。」

更に頭が痛くなった。

『一応、次に同じ事をしたら同じ事が起こると言っておいたわ。』

その言葉に、頭が痛いを通り越して死にたくなった。

『ふふふ、別に殺したのは私なのに、なんで貴方が悩むのかしら？
稀代の殺人者さん。』

その言葉で、私は通信を切った。

……泣きたい。

|| || || アルビレオ || || ||

三人が死んだ事を確認した私は、その事をナギ達に話す。

やはりと言っても良い様に、ナギは怒りましたね。

「くそっ!!」

……やはりナギには言わなかった方が良かったかもしれませんね。

……私達のリーダーと言っても、仲間の死に感情が揺らぐようではリーダーは務まりません。

……まあ、そこがナギらしいんですね。

「おそらく奴らの目的が、この戦争への介入ではなく三人の殺害だ

ったと言う事は理解出来たな？」

ゼクトの言葉に全員が、しんみりとした表情で頷く。

「今まで情報をやり取りしていた、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバ
ーグに女性の顔写真を送って調べてもらいましたら、このような物
を送られました。」

そして私は手に持っていた紙をナギ達に見せました。

十三枚の懸賞金首の乗った紙を。

119 (後書き)

2回目のタイトル変えです。

本当にすみませんが、なんかタイトルからどんどん離れて行く気がするので変えました。

1..世界と魔法と愛すべき者へ

2..篠ノ之夫婦が魔法世界に殴りこみ

3..転生者がネギまの世界に入り込んだようです

結局、3が一番安定してるんだね」と判断。

まったく、変え過ぎな気がするよ……。

さて、ここいらで問題。

リリィと仲が良いプリームムは死ぬべきか、死なざるべきか……。

どうするべきかな……。

120 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|||||リリイ|||||

私の前に、白髪の男が座っていた。

部屋は私の私室。

束にも席を離れてもらい、二人で話す。

「敵艦に乗り込んでくるって、どういう神経してるの？」

プリームム。

完全なる世界と呼ばれる組織の幹部らしい。

付き合いはかなり長い分、意外と気の知れた同性。

「……良いじゃないか。」

そう言いながら、二百年物のワインを開ける。

「そう言って秘蔵のワインを開ける、その心が知れないよ……。」

「魔法球で作っているんだろう？」

そう言って、ワイングラスを二つテーブルに置く。

プリームムがボトルを傾け、グラスにワインを注ぐ。

半分にも満たない量を入れると、ボトルを上げて入れるのを止めた。

……妙に様になってる……。

……ま、当たり前か……。

「ならいいじゃないか。」

グラスを持ち、私の方に向ける。

それを見て、私もため息をつきながらグラスを持ってプリームムの方に向けた。

「……。」

無言で乾杯する。

理由が分からないが、私もそうしてしまった。

……はあ、なんでこんな事になってるんだろう……。

その思いを知ってか知らずか、プリームムは私を眺めていた。

「で、何しに来たの？」

「……なに、取引しに来たんだよ」

そう言うと、ワイングラスを傾けて残っていたワインを飲み干す。

「君の力をこの世界を救うのに貸して欲しい。」

|| || || アルビレオ || || ||

「彼らは生粋の人間ではありません。」

「それは間違いないぜ。」

途中で赤き翼に参加したガトウが同意する。

そして広げられた資料は、机を覆うほど多い。

「奴らは不老不死の軍団だ。」

そう呟き、ガトウは机から資料を取る。

「奴らは公に出てきたのは今から約四百年ほど前だが、その存在が

出てきたのはその百年前、初めて確認されたのは更に百年前だそう
だ。」

そしてナギに資料を渡した。

渡され目を通した瞬間に、ナギは目を見開く。

「……アークエンジェル。」

そう呟くと、詠春も資料を横から見て驚く。

「……篠ノ之……だ、と。」

「ええ、詠春。彼女は旧世界ではかなり有名ですからね。文献
に乗らない方がおかしいくらいですし……。」

「そして未知の技術、大量殺人、戦争介入。数多くの謎を持ち、
超S級の指名手配犯。」

私が詠春の呟きを理解し、そう言うときガトウが更に付け加える。

そして神妙な顔で、口を開きました。

「……はっきり言うが、奴らには関わらない方が良い。」

「私達が生きているだけでも、奇跡なのです。」

ガトウと私がそう言う。

詠春は理解しているのか、微妙な顔で私達を見た。

ですが、ナギとラカンだけは違うようですね。

「……確かにかかわらない方が良いかもしれないんだろう。」

「……だろうな……。」

そう呟きますが、その後の言葉が手に取るように分かりますよ。

「……だけどよ、それじゃカスミとジーナス、ベルセルドが報われねえ。」

「……だから……。」

そう言いながら、ナギは資料を握り閉めた。

「俺は奴らを殺す。」

その目は殺意に湧いていた。

……ナギ、ラカン……。

……相手は不老不死なので死にませんよ……。

ツツコミはせずに黙っておくのも、面白いでしょう。

120 (後書き)

暴露します。

本編で未来のリリィが出ました。

……そのリリィが主人公として、なのはS t S再構成シナリオを描き始めました…… (笑)

1話更新が、9月1日w w w w w w w w w w w w w w w w

首締めるなw

さて、あとがき本文。

「ネギま!」って、あんま受け付けないと言うか、書く気がおきないと言うか……。

根性折れましたw

……嘘ですよ。

原作に無かった部分を捏造する気が起きないんですよ……。

どう展開させようか、どう戦闘を書くか。

この後に、何が起きましたっけ？

アリカ？

どうでもいいから、カットしようかな……。。

121 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|||||リリイ|||||

赤き翼は完全なる世界に辿り着くのに、それほど時間がかからなかった。

プリームムに対し、私は協力はしないと言いつかれたが、助言はすると言っておいた。

それでも私は、精神年齢だけなら万に近いからね。

全ての事項に対し、数分もすれば解決策を見つける事ができる。

そんなこんなで、赤き翼が指名手配されるは、ガトウやタカミチ、クルトにアリカやテオドラが赤き翼に参加した。

歴史通りに事は進む。

問題は私達だ。

魔法世界の魔力枯渇に対しても、解決策は見つけてある。

もちろん、無理やりな方法でだが。

「くっ!？」

「ぬははは、甘い、甘すぎるぞお前らっ！　それでよく最強の魔法使いと言えたな！！」

……エヴァ……。

……久々の出番だからって、はしゃがないで……。

そう思いつつも私は墓り守人の宮殿へ足、というか身体を向けた。

何があったか簡単に説明すると、以下の様になる。

完全なる世界が認知され始め、戦闘準備を始めた。

赤き翼とサインをねだる者達の前に現れ、挑発と種明かし。

殺気に向けられる中、戦争に対しての心構えをサインをねだっていた小娘に言い聞かせていたら、赤き翼が攻撃を始めてきたため抵抗に受け流す。

敵陣から悪魔や転生者群が出てきたために、近くにいたエヴァに赤き翼を頼みフリーダム化しミーティアを起動させ、瞬間火力で悪魔を薙ぎ払った。

……ローエングリーンで薙ぎ払った方が早かったかな、と今さらながら後悔してるのは内緒。

がんばって私達を殺そうとしているけど、簡単に反撃を受け死んでいく。

昔鼎が言った言葉に「人間は学べるから、すばらしい。」とあるが、

目の前の惨状を見たらそれが良く分かる。

……まあ、相手の大半は悪魔だけど……。

そんな事を思いながら、フルバーストしつつ宮殿内に入っていく。

転生者を殲滅しながらも、私は進んだ。

これくらいなら、最終形態を使わなくても余裕。

「……やあ。」

そう言いながら、私の進行を止める者がいた。

「……プリームム……。」

そう呟き、フリーダムとミーティアの展開を止め降り立つ。

プリームムの周りには仲間がいる。

だが、私は一人だった。

「……どうしても邪魔をするのかい？」

プリームムはそういいながら、苦笑していた。

感情豊かな子になったと思いつつも、私は火車切広光を取りだす。

「邪魔して欲しいんでしょ？」

「……。」

プリームムの周りが構え始める。

それに対し私は瞬動と併用し刀を振るった。

「……忌剣、夜駆け。」

振るい終ったあとに言い放ったせいとか、何が起きたか理解できないようだ。

数人の身体が横にずれた。

草壁流。

京都神鳴流と同時期に発生させた流派である。

「……やはり君は退屈をしそうにない。」

そう言いながらプリームムは、仲間を下がらせた。

それも無理やりだ。

「……これほど底が知れず、僕が楽しみにできる事があれば、それは全て君に関わる事だ……。」

そう言って、プリームムは私に向かってきた。

「戦ってくれるかい、美しき女^{ひと}?」

121 (後書き)

悩んだ結果がこれだよっ!!

結局、うやむやにして最終局面。

……なんてめんどくさい……。

ついでに、プリームムがこのままフェードアウトしそうな勢いなんですよ……。

……というか、プリームムって属性何？

テイルと同じで、地？

25・26巻で見る限り、そうとしか感じられないんだけど……。

ちなみに、マガジンは玉にしか読まないから、25巻以降は之展開は、あまり知らないよw

アーウェルンクスシリーズ凍結からは読んでるけどね……。

最終形態の能力、本編より先に出していいのかな……。

122 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || フラン || ||

「……全部やっていいの？」

「いいわよ。」

私はお姉様に聞く。

……今まで自由に遊べなかったけど、今日は遊んで良いんだって♪

私は目を細め、遊び相手を選ぶ。

「……言っておくけど、遊びじゃないからね？」

お姉さまがそういう。

「わかってるよ。戦争^{あそび}でしょ？」

「……読み方間違ってるわ……。」

……やだな。

……わざとに決まってるじゃん♪

軽く遠くの玩具^{てき}を睨みつける。

……簡単に壊れたら、やだな。

……でも、玩具はいっぱいあるし♪

「ならこれだけは言わせて……。」

……ん？

「帰ってきたらお勉強ね。」

|| || || レミリア || || ||

気がついたらフランがいなくなってる。

どうやら、私が話している間に行ったようね。

……どれだけ勉強嫌いなものよ。

「…………ふう。」

「お嬢様。」

……咲夜ね。

「こちら準備が整いました。」

「ん、分かったわ。」

……それにしても、姉にお嬢様って言われるって、何かこそばゆいわね。

……変な感じ。

「代々、貴族に使える執事とかは、その貴族の第一子しかできないという、崇高な言い伝えがありますので。」

私が考えていたことに、咲夜は返答する。

……心を読まないで欲しいわ。

「……無理ですね。メイドには読心術の心得がありますから。」

……初耳なんだけど……。

「初めて言いましたから。」

私が思ったことに、次々返答していく姉。

私にできないことを平然と行うからか、この姉、万能である。

……と、思ったら反応するのよね。

「ええ。」

……ほら……。

「お嬢様の口を動かすという、無駄な運動をしないよう……。」

「いや、喋らせて。先手を打たないで。出番とらないで。」

「……かしこまりました。」

……ふう。

……これで、キャラが食べられることはなくなったわ。

そう思いながら、私は羽を展開する。

「気をつけた方が良いわね。 咲夜とだから大丈夫だと思うけど……。」

「そうですね。」

昨夜はそう言いながら、私に槍をさし出す。

赤く、歪な槍。

「……なにこれ……。」

「珍百景ですか？」

……違うわよ。

……確かにあれ面白いけどね。

……毎週見てるけどね。

「そうじゃなくて、その私に差し出してる槍よ……。」

そう言うと、咲夜は納得したのか槍を見る。

「お父さんから、お嬢様にプレゼントだそうです。」

その言葉に、私は直ぐ様槍を貰う。

……Spear the Gunnir?

槍に彫られた文字を読み、私は首をかしげた。

122 (後書き)

えーっと、25日ぶりですかね？

ネタが浮かばなかったせいで、ほぼ更新が……orz

というか、この25日間、東方もマブラヴもなのはもファフナーも……。

どれみてもテンションが上がらなかったただけなんですけど。

ネギまは、いつも上がらない。

エヴァが活躍すれば、テンション上がるけどwww

で、東方のMADみてテンションが上がり更新、と……。

まあ、そんな感じです。

フラン&レミリア&咲夜というお話。

まあ、フランは頭良くなっていますが、行動パターンは、ねw

レミィは……、少々カリスマブレイク。

原因は咲夜w

さて、戦闘を書くのはいいんですけど、戦闘ネタが切れてる為、少々キンクリしましょうか。

気がついてたら、プレミアムは負けていたてきなW

では、この調子でまたここで会えることを祈り。 ノシ

……「ノシ」、久しぶりに使ったな。

123 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || || 咲夜 || || ||

「ま、ありがたく貰っておくとするわ。」

そう言うとお嬢様は槍を何処かに仕舞われた。

魔法の一種なのだろう。

傘一つしか持っていないように見える。

「……さて、敵に出会うまでは、何かお話でもしながら行きましようか。」

そう言うとお嬢様は傘をさし、歩き始めた。

もちろん私は、その斜め後ろを歩く。

「……ネタ。」

そう、唐突にお嬢様が言う。

……困りましたね……。

お嬢様は、何か日常会話するとき、きっかけがない場合はこういうのだ。

つまり、話すことがないということである。

……うーん、何かありましたっけ……。

そう思いながら、お嬢様の後ろを歩く。

暇なのか、お嬢様は日傘を歩きながら回していた。

戦場でなければ、かなり良い感じだっただろう。

……そういえば……。

そんな時、私の脳裏に懐かしい光景がよぎった。

「そういえば、お嬢様。お母さん達の昔は、どの位知っていますか？」

「ん？」

お嬢様は空いている手を、顎にあて考える。

そして少し考えたあと、ゆっくり口を開いた。

「そういえば、昔の事は全然知らないわね。」

……そうだろうと思いました。

私はそんなお嬢様を見て、思い返す。

「では、不肖ながら私が知りうる、お母さん達の事を、お教えしましょう。」

|| || 会話 || ||

「今からおよそ650年もの昔のことですね。」

「そうなるわね。」

「私が生まれた世界……、つまりお母さんとお父さんがいた世界に、ISと呼ばれる（ry」

「……（ry、って……。」

「そして、お父さんが七歳のとき、お母さんと出会ったんです。」

「……へえ〜。」

「……そして、その世界で言う白騎士事件というものを、お越ししま

した。」

「……。」

「……お父さんは、前の世界では最強と言われるほどの人で、一人で世界征服できると言われるほどでした。」

「……同感ね。」

「……そんなお父さんは……（ry」

「まあ、千冬さんやラウラさん、シャルロットさんには、本当にお世話になったもんですよ……。」

「……お母様達にも、幼馴染っていたのね。」

「ええ、しかもお父さんが行かせた小学校の先生が千冬さんだったんですよ。本当、あの時ほど啞然としたことはなかったですよ……。」

「……今も昔と変わらず、過保護というわけね。……それにしても、まだ姉がいたなんてね。」

「養子ですけどね。まあ、【ピーーーーーー】……。」

「咲夜……、今のは不味いわ。一応、まだ向こうでは知らない出来事なんだから……。」

「そういえば、そうでしたね……。失念しました。」

「……ところで咲夜……。」

「はい？」

「……ここ、どこかしら？」

123 (後書き)

お風呂に使ってたら、思いついたWWW

そんな感じで、咲夜の昔話ですね。

最後らへん、ISのネタバレ入れそうになって、慌てて修正したけどW

今日また出来てよかった……。

そういえば、プレミアムをどうしようか的な選択肢があったような？

なかったっけ？

???

124 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||フェイト||||

私は艦を徐々に激戦区付近に近づけていった。

数人ほど先に行ったが、行かなかったものもいる。

「左舷後方から熱量大や！」

はやてがそう言うのと、私は梶を切りアークエンジェルを動かす。

黄色い光が間の横を通り抜けていく。

「まだまだくるでー！ 前方からやー！」

「知ってるー！」

そう叫びながら、私は艦首を上げ避け続ける。

……流石に前は見えるから、言われるより先に動かせるって。

……まあ、出番も欲しいよね。

「バリアント一番照準っー！」

紅音が叫びながら指示を出すと、クリスカがキーを叩き操作してい

く。

「七時方向から熱源接近、……魔法使い総数47人!!」

「イゲールシュテルンの火器をこっちに回してっ!! 目視で当てる!!」

「バリエント照準完了!」

様々な声が入り乱れる。

それでも私が行うことは変わらない。

|| || || リリイ || || ||

「……酔った。」

「はっ。」

ぐるぐる回りながら戦っていると、気持ち悪くなってきた。

|| || || レミリア || || ||

「咲夜〜！　ここどこ〜！！」

……周りに人一人いないんだけど。

「……冷静に携帯使いましょうか。」

|| || エヴァ || ||

「飽きてきたな……。」

赤き翼を前に、私はそう思った。

実力があるのだが、いかんせ前衛の二人が突出しすぎているせいで、面白みがない。

魔力にモノを言わせた攻撃など、私にとってつまらないものだ。

|| || フラン || ||

「ぎゅっとして、どっか〜ん!!」

そう言うと、私の手の中に敵おもちゃの中核を移動させ、握りつぶす。

私は「目」と言ってるけど、他にも呼び方はあるらしい。

「点」とか。

……まあ、いいや。

目の前で、中核を握りつぶした物が倒れていく。

……説明欲しい？

……中核、そのおもちゃに大切なもの。

……無くなる、壊れる。

……おもちゃが同時に壊れる。

……おけけ？

適度なところで、肩を伸ばし息を吐く。

……あ、そういえば♪

「確か……。」

そう言うのと、私は適当な場所に手を入れた。

空間が歪み、私の荷物がある場所へ手が伸びる。

「……あつた〜!!」

手を引き抜くと、一緒にスペードのような形をした槍か杖が出てくる。

「えっへっへへ☆」

……実は、ここに来る前にお母さんから貰ったんだよね♪

数回ほど、回すと肩に乗せる。

「さて、誰もいないよね……。」

……お姉さまがいると、厄介だしね……。

誰もいないのを確認すると、私は唇を歪める。

「今はふざけた態度をとらないで置いておこうと。……月夜じやないからあまり力でないけど……。」

そう言いながら、槍を構える。

「どれだけコインをつもうとも……、コンティニュー出来ないのさ

!

124 (後書き)

久しぶりの投稿です。

なんとなく、東方より……。

ちょっとだけ、フランのかしこさを上げました W

3人ほど、ギャグテイスト (笑)

……そういえば、フランのアレって「レーヴァテイン」でいいのかな？

125 (前書き)

とりあえず適当に進めたら、まさかの……w

なんで、（ ^ ω ^ ） どうしてこうなった！
w

レミリア

「咲夜……。」

「お嬢様、言っではいけませんよ。」

泣きそうになりながらも、咲夜は耐えろという。

……本当に泣きそうなんだけど……。

……そんなわけで、絶賛迷子中です。

……ぐすん。

先程まで、普通に飛んで目的地に向かっていたのに、いつの間にか竹林っぽい場所にいた。

しかも、私が運命を操っても無効化されている。

本当に理解ができないわ。

……という訳で、泣いていいかしら？

「ダメですよ。」

……そういえば、メイドは読心術がデフォだったわね。

「はい。」

そんなわけで、泣こうにも泣きづらい状態。

……はあ。

……400歳越えて、迷子になるとは思わなかったわ。

そう思いながら、歩き続ける。

……後で怒られそうな気がするわね……。

「……ん？」

そんな時、咲夜が立ち止まった。

「どうしたのよ、昨夜……え？」

私も啞然とした。

……だって。

……こんな人が来そうにもない場所に、焼き鳥屋の屋台って……。

……普通考えられる？

|| || 咲夜 || ||

……どうしたらいいのでしょうか？

焼き鳥の屋台があるということは、人がいる可能性もありますよね。

けど、逆に不自然すぎて罠のような気がします。

……ああ、しかも焼いてる途中なのか、焼き鳥が焦げそうです。

仕方なしに、屋台に近づいてみることにしました。

「……ん？ 客かい？」

そんな時でした。

声が聞こえたのは。

「っ！」

私はいそいで、お嬢様の周りを見たあとに、周囲に気を配ります。

しかし、当たりに人は見当たりません。

「ここ、ここ。」

そういう声が聞こえますが、姿が見当たりません。

本当に……。

「……こつらしょ、つと。」

……いました。

私たちから見えない、屋台の死角に横になっていたようです。

「こんなところに来るなんて、暇人か？」

「いえ、迷子です。」

素直に話しておきましょう。

もしかしたら、出口に案内してくれそうですね。

「あゝ、ご愁傷さま、と言っておく……。」

そう言うのと、焼いていた焼き鳥を食べ始めました。

……そういえば、日も真上ですしお昼ごろなんでしょうね。

「数百年ぶりの客だから、少し期待したんだけどな。」

その言葉に、私は身構えました。

数百年という言葉を使う者は、転生者ぐらいしかいません。

左足のホルダーに入れている、ナイフの柄を握り相手を見ました。

「……食ってくかい？」

しかし、相手は気にした様子もなく、私たちに焼き鳥の櫛を見せて問いかけてきます。

……いったいどう反応すればいいのでしょうか……。

125 (後書き)

迷子の迷子のおぜうさま W

あなたの…… (r y

ということ、何故か焼き鳥屋にありました W

さてさて、誰が出てきたのかな？

126 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

||||フラン||||

「命の保険はかけた？　かけてない？　じゃあ、生命保険会社に行つてこなくっちゃね。いいところ教えてあげようか？」

そう言いながら、私は手を握ったり閉じたりする。

……て、意味同じだね。

……ま、弱い奴ほど良く群れるから、そこに大きなのを撃てばいいだけ。

……いちいち「ぎゅっ」として、どっかゝん」、しなくても良いというわけ。

……ココだけの話、お姉さまは私を頭の弱い子だと思ってそうだけれど、それほど頭悪くないよ？

……え？

……もしかして、あなたたちも思ってた？

……泣いちゃうよ？

そう思いながらも、私は殺す手を止めやしない。

槍を振るいながら、赤いレーザーを放つ。

もちろん標的は、おもちゃの大群。

……ストラクイク♪

レーザーが大群を焼き払う。

そして取りこぼしたおもちゃは、核を握りつぶしてレットカード。

一発退場のさようなら。

「化け物めっ!!」

……ん？

声がした方を向くと、魔法を撃とうとしている古いおもちゃがある。

少しイラついたから、その魔法の核を握りつぶして発射前の魔法を暴発させた。

見事に、暴発した魔法が古いおもちゃの顔を焼いていく。

「女の子にそんなこと言っちゃ、嫌われるよ？　でも、これからは大丈夫だよ♪」

私は燃えるおもちゃを見ながら、そう言った。

「その余計なことを言う口を、私がふさいであげただから♪　よ

かったね、これから皆に好かれるかもよ？ あははははは♪」

|| || || レミリア || || ||

「じゃあ。この作品にちなんで「ネギま」を二本ね。」

「飲み物は何が欲しいんだ。」

「できたら紅茶、があるわけ……。」

「あるぞ。」

「あるのっ!？」

そんなわけで、昼食をとるために屋台に腰を下ろした。

ついでに後ろで待機しようとしていた咲夜も、無理やり座らせる。

……お父様っぽい、雰囲気があるわね……。

そう思いながら、焼き鳥を焼きながら何処から出したかわからない
ティーポットで紅茶を入れる、屋台の店主を見る。

驚くことに、言葉使いが男っぽいから男性だと思っていたけど、店
主は女性だった。

しかも、長髪で白髪。

「ほらよ。」

そう言って、紅茶を渡してくる。

「なんか、外が騒がしいが祭りでもあるのか？」

「は？」

その言葉に哑然としてしまった。

外は数年にもわたる戦争をしているのだ。

それを祭りという目の前の店主は、一体何なのだろう。

はっきり言って謎だった。

126 (後書き)

フランのかしこさが、飛躍的に上がりました。

チート薬草でも使ったのかな？

現在、フェルマーの最終定理が溶けるぐらい W

普段はバカっぽく、ここというときにキラッと。

127 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜(旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス(別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音(別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース

|| || 咲夜 || ||

店主の言葉に私は哑然としてしまった。

「……聞いてもいいかしら？」

お嬢様が「ネギま」を食べ終え、店主に聞いた。

店主は「ん？」と言ってお嬢様を見る。

「今が戦時中って……、わかってる？」

「へへ。だから騒がしかったのか……。」

知らなかったのか、店主はそう言った。

「……んじゃ、久々に外に行くか……。ここらへんに来た時から、戦ってないからな……。」

そう言って、タバコを加える。

瞬間的に火が付いた事に、私は不自然な感覚を覚えた。

ここは魔法世界であるが、店主は呪文なんか言ってはいない。

しかも、火は自然に付いものだ。

「……あなた。」

私は自然と口を開いていた。

店主は口から副流煙を吐き出し、笑いながら口を開く。

「自己紹介がまだだったな……。私の名前は藤原妹紅。
0年も生きている不老不死さ……。」

130

……もこたんinしたお。

|||||リリイ|||||

……プリームムと戦うのも疲れてきたな。

そう思いながら、魔法を避ける。

……なら、私が行くよ☆

……え、いいの？

……うん♪

私の中で声が響く。

もちろん、その声がなんなのか知っている。

……んじゃ解除後、私は大元に。

……で、私はプリームムだね♪

その声に返事をした瞬間、実行する

「なっ!？」

その光景を目にしたプリームムが驚きの声を出す。

「さて、ディレクターが巻いて巻いてと言ってるから、ここからはクライマックス……。さっさと終わらせるよ♪」

私の前に現れた束が、そう言ってレイジングハートを構えた。

……私と束が一つになることができる、という説明で足りる？

……さっきから、ずっつとそうだったんだけど……。

……融合？

……合体？

……そんな感じ。

……ちなみに、サードシフトって私達は言ってる。

何はともあれ、プリームムの目には私と束が写ってるんだよね。

……さて、私も黒幕のところに行くとしますか。

翼を広げ、プリームムの横を抜ける。

「ま……っ！」

「よそ見しちゃいけないよ♪」

「くっ！」

|| || || ? ? ? ? || || ||

……私も長生きしてしまったものだな。

……死んだと思ったら、生きているとは。

……全く訳の分からない。

私の髪が、強風によって乱れる。

……ん、戦争か？

遠くの光を見て、私はそう思った。

興味ないと言いたいが、私の目には懐かしいものが写った。

……なっ！？

……アークエンジェルだっ！？

実物は見たことはないが、設計図は見たことがある。

その艦が、戦火の中にあった。

127 (後書き)

お久しぶりです。

ネギまも最新刊が出たことですし、書いておこうと……。

あ、もうめんどくさいから、一気にクライマックスにしちゃいます。

アークエンジェル組はとりあえず、出番はもうないかも……。

あ、大戦中はですよ？

原作にはちゃんと出ます。

もこたん in したお〜♪

という事で妹紅登場です。

まあ、分かっていた人もいるでしょうが……。

基本的に東方が一番多い、クロスですね。

ゆうかりんや射命丸、BBA……もとい紫BBAの登場でも……？

ん、え？

これって、スキマ……？

アッー！！！！！

この作品は幻想郷とリンクいたしました（笑）

さて、最後に登場したのは誰でしょう。

とりあえず、分かりそうでわからない感じにしました。

では、またいつか……。

128 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…K O S - M O S
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…???

|| || ?? ? ? || || ||

白亜の巨艦を見つめ続ける。

前世では作られることはなかったモノだ。

そしてアークエンジェルは、私の大切な家族を思い出させた。

「……まさかな。」

そう呟きながらも、私は左目に眼帯をつける。

アークエンジェルがあるということは、ココに私が会いたい人がいるということになる。

アークエンジェルを作れるのは、その人しかいないのだから……。

しかし心では、その思いを否定し続ける。

本当なら居て欲しいが、流石に居ないと思う。

私を知るアークエンジェルではない、と決めつけた。

眼帯から手を離す。

……この眼帯は、数年前に死んだ父様が初めて私にくださったものだ。

……もう死んでしまった父様の、な……。

……いや、死んだとは思えない。

……死なないはずの、父様が死ぬとは可笑しい話だ。

銀の長い髪が、風に靡く。

……今も何処かで、母様と一緒にいるだろう。

……必ずな。

「っ!？」

気配を感じ、私は振り返った。

すぐさま、愛銃のグロック19を構える。

「……馬鹿、な。」

……なぜ、いるんだ。

私は唾然としたまま、そこにいる3人の女性を見つめた。

その内、2人には興味はない。

私が興味をもったのは、メイド服を着た女性だけだ。

「……咲、夜？」

「姉、さん……？」

|| || 咲夜 || ||

私は目を見開いた。

その姿を、最早見ることがないと思っていたから……。

500年以上前に諦めて、心の奥にしまい込んだはず。

だけど私の目には、その姿が映っていた。

「……十六夜。 いや、篠ノ之咲夜、か？」

その言葉に、私は泣きそうになった。

……ああ。

……もう、何を言えばいいのやら……。

「……はい。」

とりあえず、頷いて肯定しておこう。

「……咲夜？」

お嬢様が不思議そうに、私を呼んだ。

けど、私の耳には入らない。

いや……。

聞こえてはいるのだけれど、返事より確認を先にしたかった。

「……姉さん、は……。姉さんです、よね？」

意味が通じないでしょう。

言葉として成立してないのですから……。

しかし驚愕した表情のまま、頷く姉さんを見た。

……本当に、姉さん。

かなり年が離れている姉だが、私が尊敬していた姉だ。

姉さんは静かに銃を下ろす。

「咲夜は私が誰に見えるんだ……。。」

そう言って、驚愕していた表情を崩す。

私はその事に、何も言えなくなった。

「私がラウラ・ボーデヴィツヒ以外の、何に見えるんだ……。？」

128 (後書き)

ということで、本編（IS）の娘登場。

意味が分からないって？

めんどくさいな。

123話で咲夜が、口を滑らしそうになった事項。

本編より先に、言えないために伏せた事項。

うん。

娘です。

どうしてこうなった……orz

129 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜(旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス(別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音(別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ(両親…篠ノ之夫妻)

|| || フラン || ||

「あっはっはっはっは!!」

お母さんからもらった槍……、だと思ふものを振り回す。

「禁忌、レーヴァテイン!!」

そう叫び、私の前をなぎ払った。

……槍を投げたというより、レーザーでなぎ払った感じ（―――；）

……ま、いっか♪

……（ノ▽≡＊）キャハッツツ♪

「撃てっ！ 悪魔を倒しても、あれも悪魔だっ!!」

誰ががそう言う。

おもちゃのくせに……。

「禁忌、恋の迷路!!」

そう叫びながら、私の周囲に弾幕を放つ。

ぐるぐると回りながら、弾幕が不規則に放たれる。

もちろん回避できるわけもなく、近づいてきたおもちゃが壊れていた。
った。

「あゝ、楽しいな。こんなに楽しいのは、久しぶりだよ♪
……日光も苦にならないし、私もお姉さまと同じように、外に出かければよかったかな？ あ、でもリミッターがあるんだった……。」

槍を回しながら当たりを見ると、

「あゝあ、おもちゃが全部壊れちゃった……。」

|| || || ラウラ || || ||

「ほう。そんなことがあったのか……。」

ストライクノワールのビームライフルで、近づいてくる敵を撃ち殺

す。

めんどくさいため、移動しながら現状把握中だ。

「ええ、現在私達は両軍から狙われています。」

「厄介なことじゃないけどね。」

レミリアという、私の妹らしい子供がそう言った。

咲夜とは違い、この地で父様と母様が生んだらしい。

ほかに、フランドールと言う妹がいるそうだ。

……なんとも、凄い事に……。

……ん？

「あ、適当に自己紹介お願いします。」

「……？」

咲夜の言葉がよく分からない。

だが、深く考えないようにしておこう。

……ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

……父様と母様の……。

……篠ノ之夫妻の子供、という事だ。

……まあ「前世の」、という言葉がつくがな……。

……分からないなら、それでいい。

……だがわからなくても、これだけは覚えておけ。

……私が咲夜の姉だ。

「……で、いいか？」

「ん？」

妹紅というやつが、手を挙げる。

「なんだ、それ？」

私を指さして、そう言う。

……何かおかしいところあるか？

「忘れていましたけど、姉さん……。シュヴァルツェア・レーゲンじゃなくて、ストライクノワール使ってたら、流石にISを知っている、全員首をかしげますよ？」

……意味わからないぞ、咲夜。

「でも、これは慣れないとわからないでしょうね……。」「

「本当に、ね……。」

129 (後書き)

ISのラウラが、どうしてリリイ達の子供なんだ？

という声が聞こえる。

主に、別作品見てない人たちの声が。

えゝ、とりあえず説明。

ラウラは試験官ベイビーということですが、ラウラの生まれ方が「世界とISと名もなき者へ」だと、違うんです……。

束の前世の子宮と、それに付着していた王の精子……、つまりリリイの精子を使って生み出された人口受精された人間という、設定です。

DNAレベルが完全に、二人の子供を指してるぐらいの……。

もし暇なら、「世界とISと名もなき者へ」をどうぞ。

詳しいことは、全てそちらに……。

本編ですしね(笑)

130 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ (両親…篠ノ之夫妻)

|| || エヴァ || ||

「くそ……。」

そう呟きながら、ナギという男が毒付いた。

「まだですよ、ナギ。 あちらは、私たち以外にも敵はいるんです……。 引き際も心得ている。 それまでは、戦力の温存を……。」

「ブツブツ喋るな小僧ども。」

そう言いながら、適当にサギダ・マギカを撃つ。

だが、簡単によけられる。

……まあ、それでいいんだがな。

「当たれっ!!」

大きな剣が飛んでくる。

……ジャック・ラカンのアーティファクトか。

……これはまた、面白みのないモノだな。

……奴は剣生成機というわけだな。

剣は私にぶつかる直前で、ネジ切れながら溶け消える。

「くっ!!」

……流石は束だ。

……魔法無効化装甲の転用とはいえ、魔法物質の完全無効化とは。

……これを一般魔法住民に売ったら、有難がられるな。

……主に盗賊対策として。

「なんなんだよ! なんなんだよつ、アレはっ!!」

「俺が知るかっ!!」

「とにかく、攻撃するしかないのう。」

そう言いながら、魔法を一斉に放ってくる。

……くっくっく。

……実に馬鹿らしい。

飛んで来る魔法が、徐々に減衰していく。

そして、高密度の魔力だけが周囲に四散した。

「「「なっ!?!」」」

魔法が無効化できるなら、その途中の拡散も出来る。

魔法無効化装甲は、魔力まで無効化。

つまり、無にしてしまうのだ。

ならそれを残しておく方法は、どうすればいいか私は考えた。

答えは簡単だった。

……精霊に願い魔力と結合して放つなら、その反対。

……分解してしまえばいい。

……ハガレン理論と言うなよ?

……あれは、あれで私に面白い知識をくれる。

……まあ、いい。

……つまり、拡散してしまえばいいんだよ。

……そしてその魔力を集める!

目の前で大きな魔力の球ができはじめた。

「なんなんだよっ!?!」

「まずいぞっ!!」

……気がつくのが遅いんだ、馬鹿が。

……大規模な魔法を使う半面、私達にとって良い餌なんだよ。

高密度の魔力が、物凄い速さで球体になっていく。

……アイツらの技だ。

……食らっておけ。

私は球体の魔力を開放した。

「スターライトブレイカー。」

そう呟いた瞬間、奴らの魔力だけで構成された魔法が飛んでいった。

全員掠りながらも避けたが、着弾した瞬間に二次被害を受けていく。

あいにく、私は魔法無効化装甲を完全展開しているため、それほど被害を受けない。

……あいつら、こんな危険な技を毎回魔法球内部で使っていたのか。

130 (後書き)

0時に一気に4作品投稿WWW

ワロスW

やってしまったよ!!

さて、赤き翼も除外。

さっさと、ライフメーカーと戦おうかにやW

ニコニコ動画で、ななひら様の声を聞きながら書いていたら、ななひら様の声がフランにしか聞こえなくなった!!

昔から、そうだけどWWW

作用BGM動画

- ・【東方ヴォーカル】年2回人混みを避けきる程度の能力
- ・【ニコカラ】物凄い狂っとるフランちゃんが物凄いうた(OnV
o)【ななひら】

131 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ (両親…篠ノ之夫妻)

|| || || 紅音 || || ||

……あゝ、もう終わったほうがいいよね。

……長ったらしいったりや、ありやしない……。

……そういえば、神に送られたんじゃないかと、単体できたやつがいたような。

……誰だか知らないけど。

……いや、知ってるけど。

……神だし。

……作者だし。

「咲夜さんたちと接近する人が、二人いるんだけど……？」

なのはが哑然としながら呟いた。

その言葉に、全員眉を潜めただろう。

……たぶん。

「あ、通信だ。」

|| || 咲夜 || ||

「こちら所属篠ノ之、ラウラ・ボーデヴィッヒ少将だ……。アー
クエンジェル応答を頼む。繰り返す、応答を頼む。」

姉さんがストライクノワールの通信機器を使い、アークエンジェル
にコンタクトを取る。

私がコンタクト取ったほうが早かったですよね？

『はいよ、こちらアークエンジェル。』

……紅音さん。

やる気のない紅音の声が聞こえた。

『何を言いたいかわかるけど、アイツらは向こうの建物にいるぞ。』

「……了解した。乗艦許可を頂きたいので、艦長を呼んでくれな
い……。」

『艦長は篠ノ之リリィ……。お前の父親だが?』

『『『『え!?』』』』

「……なぜ知っているかは聞かないでおこう。なら現艦内最高責
任者は誰だ?」

『私だ。』

「エネルギーの補給を頼みたい。直接貰いに行く……。」

『了解した。カタパルト上に艦内動力と直列しているケーブルが
ある。そこでエネルギーの補給をしてくれ。』

その言葉と共に、左舷カタパルトが開く。

「確認した。乗艦許可とは別に識別コードを送る。おそらく使
えるだろう。」

『……こちらも確認した。機体識別を登録しておく。……あと、
隣にいる藤原妹紅も登録しておくぞ……。』

「うえっ!?!」

いきなり名前を呼ばれたからか、変な声をだしましたね。

……それにしても、姉さんと紅音さんが何を言っているか少ししか理解できなかった。

姉さんが操る機体が、開いた左舷カタパルトに降り立つ。

「……咲夜。」

「なんでしょう、お嬢様。」

「……出番が欲しい。」

「……残念ですが、姉さんのターンが終わってからですね。」

……非情でしょうが、姉さんが出る前は出番が沢山ありましたしね。

……今回ばかりは、姉さんに譲ってやってください。

少しばかり肩を下ろし、お嬢様が姉さんの元に近寄っていった。

131 (後書き)

ISでは大佐。

また階級上がっちゃってるよ……。

という感じ。

とりあえず、そんなような感じ。

すこしずつ、テンションを上げていく。

132 (前書き)

とりあえず、どうしてこうなったんだろうね？

まったく、訳が分からないよ……。

||||ライフメイカー||||

……ん。

……何者かが来るな……。

……強大な力をもった、何者かが。

我は振り返り、近づいてくるものを待つ。

……英雄となりえる者か？

……それよりも先に、術式が発動するが。

……もしや、解を導き出した王か。

……それも一興。

……だが、我がたどり着いた絶望を知らぬ者に。

「我を殺せる訳がない。」

……永遠を知らぬ者に、600の小娘に我が負ける訳がない。

「ところがぎっちゃん!」

……？

「殺せるんだよ！」

その言葉と共に、我は吹き飛ばされた。

|||||リリイ|||||

「あゝ、ようやくたどり着いた。」

フェニックスで飛ばしただけあって、結構早く着いたと思うんだけど。

とりあえず、出会い頭にローキック。

ライフメーカーを蹴り飛ばしてみた。

「変なモノログが聞こえたから、痛々しくて蹴っちゃったじゃない

いかゝ〇（ω、＊）〇」

土煙に隠れるライフメイカーに向け、喋る。

「大体、私は貴様より年上!」

……この世界に来る前じゃ、三千万年は余裕に超えてるって。

……あ、万は光の巨人だったね。

……失敬失敬、（＊、△、）ノ

……どこぞのウルトラマンのティガさんじゃないんだから。

……三千年越え、ね。

……正しくは。

「わ、我の多重障壁を……。」

「（m'・ω・、）m ゴメン……。 私、魔法効かないんだ……。」

「完全魔法無効化能力だと……。」

「ウ……ウン（・・；）」

「ええいっ! 顔文字を使うなっ!」

「だが、断る……。」

「ネタも入れるなっ!!」

「王家の魔力、マジパネェwww」

「ボケるなっ! あと、その発言は2h cでやってこいっ!!
そもそも、お前は王家じゃないだろうっ!!」

息を切らしながら、マント被ったライフメイカーが叫ぶ。

「……ツツコミご苦労様。」

「……お前が、ボケるからだ。」

「ちなみに、口調は良いの?」

「……。」

「カットして、やり直す?」

「頼む……。」

なんと言うか……。

シリアスぶち壊してみた。

この光景、かなりシュールだと思うんだ……。

|| || || やり直し || || ||

「……よくぞ辿り付いた。」

「それはどうも……。」「

ということで、さっきの事はなかったことにした。

「我を倒して……。」

「その前に言っておくけど。」

「……。」

「ライフメイカーの一人称は、「我」じゃなくて「私」らしいよ。」

そう簡単に、私がシリ阿斯に戻すと思った？

しないんだよね。

うん……。

残念、さやかちゃんでした〜（笑）

132 (後書き)

ちなみに、ライフメイカーの一人称は「私」。

ゼクトが言った一人称が「我」です。

ま、数十分クオなんだけどね。

だから、そこら適當。

本気で書いてると思った？

残念、適當な妄想なんだよWWW

133 (前書き)

前話当たりから、キャラがぶれまくってるW

今回も、そんな話。

キャラがぶれまくるよW
W

|| || 束 || ||

「くっ!!」

「まだまだっ!!」

ブラスタービットを匣に、ストライクフレームを展開しレイジングハートを槍のように刺し続ける。

だけど、何でかよけられるんだよね。

……リリィちゃんが、殺すなって言ってたけど……。

……殺そうにも、殺せないよ……。

さっきから本気で刺しに行ってるため、額から汗が流れた。

上手い具合に口に入っちゃった……。

しょっぱい……。

「……君に興味はないよ。」

「同感、私も興味ないよ……。だけど、リリィちゃんにお願いされたからね。あとディレクターにも。」

距離を離し、お互いを睨む。

しかし、それを中断させるかのように声が響いた。

「リア充は死ねっ!!」

「「は？」」

啞然としてしまったが、その間にプリームムだっけ？

まあ、戦っていた相手が何かに拘束されていく。

……ワイヤー？

……しかも懐かしい声。

ラウラちゃんっぽい声だったため、探してみる。

「金髪が何だと言うのだ。 全く男は金髪巨乳とくればすぐにデレデレと鼻の下を伸ばす。」

その言葉を啞然としながら、私は聞いていた。

「あ、シャルロットを除くと言っておかないと、怒られるな。」

……普通ここは、感動の再開じゃないかな？

……ラウラちゃん（――；）

「自分より胸の大きい……、あ。 母様、お久しぶりです。」

「う、うん……。」

若干引いてしまった。

|||||リリイ|||||

「でさ、こういう風にして欲しいんだよね。」

「いや、歴史の改竄とかできるのか？」

「出来るんだよね……。」

「……。」

「だから、適当にやられてくれると嬉しいかな？」

普通に私は、ライフメイカーと立ち話していた。

「……普通に、奴らが来るの待つのはいけないのか？」

「それでもいいんだけど。……間に合うかな？」

「間に合うでしょ。」

「分かった……。」

「じゃあね。」

「じゃ。」

……とりあえず、ライフメイカーと仲良くなりました。

手を振り、私は帰ろうとする。

「って、意味わからんっ!!」

「デスヨネー。」

ライフメイカーに突っ込まれたよ……。

これがノリツツコミって言う奴だね。

「え？ なに、赤き翼を英雄にしたいの？」

「うん。」

「原作って、言って良かったのっ！」

「ライフメイカー自身が転生者だったら、通じるでしょ？」

なんと、ライフメイカーは美人な転生者でした。

はい、拍手（棒読み）。

「なんという、投げやり!？」

……読まれたよ。

「で、何やりたいの……。」

「薬味フルボッコの、原作ブレイク。」

「なにそれ、楽しそうっ!!」

なぜか、ライフメイカーが釣れました。

どうしてこうなった……。

「転生者だらけの大運動会だから。」

……納得しちゃったよ。

133 (後書き)

ラウラ……（´；ω；´）

中の人ネタとはいえ、三日月夜空になるのは……。

いや、夜空は嫌いじゃないよ。

なんで、数話で染まってるのさ……。

というか、ライフメイカーも自由すぎる W W W

これ、どういう話にしたいの。

「薬味フルボッコの、原作ブレイク。 ちなみに、シナリオに興味はない！」

ヒドス……。

134 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ (両親…篠ノ之夫妻)

||||ラウラ||||

……実をいえば、本当は私はここに出なかったらしい。

……ん？

……馴染みすぎだと？

……気にするな。

……どうやら作者の予定で、一気に出ることになったらしい。

……ちなみに、私とは違う私が別作品で待機中だそうだ。

……一気に進出したな。

……流石私だ。

……ネタバレだが、その作品ではチンクという少女に変わって、私が出るそうじゃないか。

……父様のお溢れとはいえ、かなり出る事になる。

……三作品にでれるなど、そうそう出来ることじゃないからな。

……そういえば、母様も三作品とも出るのか。

……流石としか言いようがないな。

「……ラウラちゃん、戻っておいで。」

心配そうに声をかける母様の声が聞こえた。

|| || || 紅音 || || ||

……あ、ラウラのやつ言いやがった。

溜息を付きつつも、シナリオを考える。

神と言う名の作者であるから、シナリオを考えないと話が進まないという状態。

……えーと、ライフメイカーが完全に異端だから……。

……今のライフメイカー引き入れて、新しいライフメイカーをかわりに置けばいいかな？

少し考え、シナリオを作る。

だが、全然纏まらない。

……そりゃ、シナリオ構想なんかないもんね……。

……行きあたりばったりだったし。

艦長席から立ち上がると、首を回す。

ボキボキと音が鳴る。

「……とりあえず、ライフメイカーのところに行ってくる。」

そう言い残し、私は艦橋から消えた。

|||||ライフメイカー|||||

私は唾然としていた。

「ども、神です。」

いきなり現れた、神と名乗る者。

いきなりすぎて、話がついていけない。

「早速ですが、ディレクターさんに「巻いて巻いて」って言われているため、容姿を変えてもらいます。まあ、そのマントを脱げばいいんだろうけど……。」

……意味わからん。

「新しいライフメイカー作るから、そのマントは置いていって欲しいかな？」

……私が作ったらダメなんですか？

「ダメ。精度が落ちるし、何より弱い。」

……思考を読まないでください。

「無理、神だから。」

訳が分からない。

とりあえず、自称神が言うとおりマントを取った。

「門番採用っ！！」

「はえっ!?!」

突如、自称神と銀髪王との間に、おぜうさまと妹様、咲夜さんに束さん、ラウラが現れた!!

どういふことっ!?!

確かに、私の容姿は紅^{ホン}美鈴^{メイリン}だけどっ!

東方の中で美鈴好きだから、確かに外見容姿を美鈴にしちゃったけど、いきなり門番って何っ!?!

「んじゃあ、新しいライフメイカーを誰にしようか？」

「「ハイパーアルティメットまどか」……、でいいんじゃない？」

「「女神まどか」ですか。」

「公式だと、「アルティメットまどか」らしいね？」

「……そもそも、神に等しいうえに概念存在と成り果ててなかったっけ？」

「……むしろラスボスには、似合わない容姿だよね……。」

私をよそに、勝手に話が進んでいく。

……もう、勝手にしてください。

134 (後書き)

魔法が使えるメイリンって、どうよ？

基本的に、魔法より能力のほうが強いから、メイリンの基準は東方より少し強い基準？

当初はライフメイカーⅡ女神まどかでした、が。

YouTubeで妹様と美鈴の動画見ていたら、「ライフメイカーは美鈴でいいか」という状態に。

ちなみに、新しいライフメイカーは「女神まどか」に決定www

そのうち女神まどかさえ、仲間になりそう……。

時間という概念すら存在しない、お人だからね…… (笑)

135 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ (両親…篠ノ之夫妻)

|||||リリイ|||||

「……っと。」

紅音が適当に文字を書く。

何かに書くというか、空気に書いたという感じ……。

「何やってるんですか、紅音さん。」

「一番上参照。」

「あゝ、はいはい……。」

咲夜が問いかけ、レミリアは適当に答えを流す。

もちろん茜が気にした様子はない。

ゆっくりと立ち上がった。

「んじゃあ、行きますか。 ……まどかⅢ（。Ⅳ。Ⅲ）カモーン！
！」

「……適当な（「」「；）」

「……本当に来たら怖いわね（――）」

…
適当に叫んだよ。

……それで本当に、神様くるの？

「というか、まどかって誰だ（・・；）」

「後で教えてあげるよ」ウーちゃん（0・△・）＋

流石にアニメ「魔法少女まどか☆マギカ」を見ていないラウラだけに、まどかと言う子が分からないらしい。

それが普通なんだけど。

「流石に來ないでしょ（△△）」

フランが苦笑しながらそう言った瞬間、紅音の前当たりの空間が歪む。

そしてそこに、不思議そうに当たりを見渡す子がいた。

「……？」

「」。「」。「」。「ポポポポ」。
「」。「」。「」。「」。「」。「」。
「」。「」。「」。「」。「」。「」。
「」。「」。「」。「」。「」。「」。

「はろ、まどか。」

「あ、お久しぶりです神様。」

長いピンクの髪を揺らし、白い服着た少女。

……登場しちゃったよ。

……ハイパーアルティメットまどか、が（――；）

「エッ（。D。≡。D。）マジ？」

「おかしいでしょ……（＊、D、；）……」

「リリイちゃんと同じく……（；、D、）……」

全員呆れながら、その姿を見る。

「あ、転生者の皆さんですか？ はじめまして。」

丁寧にまどかが頭を下げてくる。

ハイパーアルティメットまどかのせいかな、妙に性格が確りしてるよ
うな……。

「まどかの転生者で、今は神になった者です。」

……まどかも転生者でした。

……少しがっかり。

……本物じゃないの？

「連れてきたら、淫獣が出てくると思うけど？」

「……転生者で良いです。」

「……以後会話のみ……」

「早速で悪いんだけど、悪役になってくれない？ やられやク……」

「……うんいいよ、というと思いました？」

「だよね……。」

「そういうのはK r i e m h i l d G r e t c h e n（クリームヒルト・グレートヒェン）に回してくれると嬉しいんですけど……」

「魔女化したまどかを？」

「はい。」

「確かに悪役っぽいけど……。」

「どうせやられるんでしょう？」

「そうだけどね、負けてもらわないといけないんだけど……。」

「……そこはほら、神様補正！」

「都合いいね……、それ。」

135 (後書き)

まどかまで転生者というオチ。

一応このまどか、昔紅音（神）に転生させられた人物。

ちなみに、リリィより後に転生した。

紅音が一時期いなかった時期は、そういうことしてた。

そんなこんなで、ハイパーアルティメットまどかまでパスしたよW

魔女化したまどかにバトンは行く。

……一体これは、何処に向かってるんだろう？

136 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ (両親…篠ノ之夫妻)

|||||リリース|||||

結局は、紅音自身が適当に作ることにしたらしい。

なんで、ハイパーアルティメット（以下略）を呼んだんだろう。

意味が分からない。

「……あ、父様。乗船許可いただきたいのですが……。」

「ん？ あゝはいはい、許可します。」

思い出したかのように、ラウラがそう言った。

……そういえば、艦長だったんだっけ。

……忘れてたよ。

「ついでに私ももらっていいかな？」

……はい？

許可を得ようとしたのが、何故かハイパーアルティメット（笑）だった。

「……持ち場に戻ってください。」

持ち場があるかどうかわからないけど、一応言っておく。

はっきり言って、断っているのだ。

「……遅かった、のか？」

「ん？」

声のした方には、プレミアムがいた。

すぐに何を言いたいのか理解できる。

……見知った姿がいなければ、そりゃ、遅かったって言うよね……。

残念だが、ライフメイカーはそこにいる。

「お、プレミアムじゃないか。」

「……誰だい、君は……。」

「ライフメイカー（笑）」

「……冗談かい？　それとも本当かい？」

ライフメイカー、もとい美鈴の言葉に、プレミアムは訝しむ。

最終的にプレミアムは、私に目を向けた。

確かに、最初からこの場にいたから、知っているだろう的な考えをもっているんだろうね。

「……残念ながら事実。」

「そうか、残念だ……。」

「おい……。」

私の問いにプリームムは納得したのか、肩から力を抜いた。

「まあ、嘘でも本当でも、どうでもいいことだけどね。……それで、これから私はどうすればいいのでしょうか、マスター？」

疑問で聞いたのは、まだ疑っているからなのだろう。

プリームムがめんどくさくなった、と言う訳がない。

「あゝ、どうでもいいよ？」

「……はい？」

「だから、好きにしていいいよ？ 自由、自由だよ。」

「はあ……。」

美鈴の言葉に困惑する、プリームム。

妙に面白い。

「ん、そうだ。これから、私は身代わりを立てて逃げるけど、プ
リームムもどう？」

「……それは、彼女たちについていくということですか？」

「Yes！」

妙に発音が良いYesだった。

「では、私も彼女たちと逃げさせていただきますよう。」

そう言って、そこらへんから生体ポッドを引きずり出す。

「……用意していたものに、身代わりを立たせます。」

……うわぁ。

「プリームム……。 お前……。」

「戦乱の中、混乱に乗じて彼女たちのもとに逃げるつもりでしたが、
なにか？」

しれっと、プリームムは言い切った。

「……私の乗船許可は？」

136 (後書き)

ということで、次話から原作に飛ばし飛ばしで進みます。

ネタ的に、並行世界シナリオ入れようか悩んだけど、止めた。

さっさと原作まで、飛びましょう。

137 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜(旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス(別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音(別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット(正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ(両親…篠ノ之夫妻)

|||| 赤き翼…会話だけ||||

「あいつのせいで時間がねえ!!」

「落ち着いてください、ナギ。」

「落ち着けるかっ!」

「始動した術式が、止まったのですから良いとしましょう。」

「……だが、再度術式を使われる可能性がある。」

「うむ、まだ敵の手の中にあるのだからな。」

「……姫子ちゃん。」

「はぁ、きますよっ!」

「っ!?」

「やぁ、千の呪文の男。 また会ったね。」

「っ!」

「……ここからは、各々の戦闘じゃな。」

「僕たちもこの半年で、ずいぶん数を減らされてしまったよ……。
この辺でケリにしよう。」

|| || || リリイ || || ||

『予定通り、アークエンジェルは帰還します……。』

そうラウラが言い、通信を切った。

紅音の変わりに、艦長として任命したのは私。

はっきり言って、ラウラの他に軍人は居ないからね。

上空でアークエンジェルが転移していくのを確認し、私は墓守り人の宮殿を見下ろした。

入口付近が激しく光る。

誰か戦ってをるのだろう……。

「じゃ、行こうか……。」

「うん♪」

|| || || またも会話のみ || || ||

「見事……。理不尽までの強さだ……。」

「ハア……。ハア……。黄昏の……。姫御子は……。何処だ？」

「フ……。フフフ……。まさか君は、未だに僕が黒幕だと思っているのかい？」

「なん、だと……?」

「そりゃ、違うよね。」

「っ!？」

「……誰だい？」

「ハロゥ。」

「君か……。」

「お前っ!!」

「それはいいけど、避けないと死ぬよ？」

「っ!？」

「「ナギっ!!」」

「|| || || またもリリィ || || ||

「「だから言ったのに……。」「

筋肉ダルマが、私を見ている。

いや、私達が正確かな？

（そっちが正確かな？）

束が肯定する。

私しかいなくても、私の体の中に束もいる場合、複数系でいいのだろうか？

知らないけど、違う気もする……。

「……あ、来た。」

その言葉と共に、私がいる周囲が吹き飛んだ。

魔法だ。

子供が防壁を貼っているが、私には魔法無力化装甲ついているため無効。

飛んでくるガレキも、フェイズシフトPS装甲があるため、ノーダメージ。

結果、その場に死に体の赤き翼の面々が出来る。

そして、遠くに黒いマントを来たライフメイカーの身代わりがいた。

そしてその周囲に、転生者達も……。

137 (後書き)

ニコ動《【東方手書き】 マリアリでStar Dust【紙芝居】》

これ見たせいで、サンホラを久々に聞き始めましたw

さて、久々にゲームしようかな。

今現在、東方で（これを）書く気力を補っています（笑）

とりま、次話も適当www

138 (前書き)

- 一人目…篠ノ之リリイ
- 二人目…篠ノ之束
- 三人目…十六夜咲夜 (旧姓…篠ノ之)
- 四人目…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル
- 五人目…カノン・メンフィス (別名…羽佐間カノン)
- 六人目…真壁紅音 (別名…神)
- 七人目…フェイト・T・ハラオウン
- 八人目…クリスカ・ビャーチェノワ
- 九人目…イーニャ・シエスチナ
- 十人目…高町なのは
- 十一人目…八神はやて
- 十二人目…レミリア・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十三人目…フランドール・スカーレット (正式姓…篠ノ之)
- 十四人目…KOS-MOS
- 十五人目…相坂さよ
- 十六人目…リインフォース
- 十七人目…ラウラ・ボーデヴィツヒ (両親…篠ノ之夫妻)
- 十八人目…黒羊齒鼎
- 十九人目…プリームム
- 二十人目…紅美鈴 (ライフメイカー)

|||||リリイ|||||

アルビレオ達が、愕然としながらライフメイカーを見ていた。

目や口から血を流し、両腕ない馬鹿もいる。

「……おい、無事？」

どうでもいいけど、とりあえず聞いておく。

……返事がない。

……愕然としすぎでしょ。

……まあ、いいか。

ライフメイカーを見直すと、消えていった。

残ったのは、数人の転生者らしき人間。

金色の鎧を纏った男や、長髪の男がいる。

「待てコラっ!!」

ナギがそう叫びながら、立ち上がる。

恐らくライフメイカーに向かって言ったのだろう。

「……オイ。」

「……ん？」

ナギが私を見る。

なんか、私を見て不敵そうにほほ笑む。

「……あゝ。」

何を言いたいのか、少しだけ理解できた。

|| || || 結果 || || ||

ナギ・スプリングフィールド、篠ノ之夫妻により完全回復。

ストライクフリーダム・フェニックス（篠ノ之リリイ&篠ノ之束）が、転生者（複数）を殺害。

ナギ・スプリングフィールドが、身代わりのライフメイカーを殺害。

術式の起動。

原作通りに艦隊が間に合わず、ストライクフリーダム・フェニックスのドラグーン十八基によって、術式遅延。

その間にメガロメセンブリア、ヘラス帝国、他多数の艦隊により術式の封印。

ゼクト行方不明。

戦争終了。

式典で赤き翼の授賞。

式典に篠ノ之夫妻、招待。

篠ノ之リリイのみ参加。

篠ノ之束は、遠距離で待機（観察）。

騒動も起きず、式終了。

篠ノ之リリイ、式場から離脱。

クルト・ゲーデル、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグと共に篠ノ

之リリイを追う。

オスティア崩落について、援助を求める。

篠ノ之リリイ、メリットがないため断る。

ラウラ・ボーデヴィツヒ、咲夜より十以上歳をとるため魔法球に籠る。

オスティア崩落。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア投獄。

篠ノ之リリイをはじめとするアークエンジェル乗員、全員投獄に関して反応なし。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア同様に、篠ノ之リリイを始めとする全員に、完全なる世界との関与で、戦犯者として殺害が命じられる。

魔帆等学園にて、大規模な戦争の準備が進む。

戦争準備により、黒羊鹵鼎、プリームム、美鈴の参戦。

ちなみに妹紅は焼き鳥屋を魔帆等ではじめ、我関せず無視を決め込んだ……。

戦闘は気が向いたら参加するとのこと。

138 (後書き)

適当に進めすぎた……orz

本気でどうでもいいと思い始めたよ……。

この作品ネ。

どうしょつか……。

また20年、経歴だけで飛ばすか。

うん、そうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0008u/>

転生者がネギまの世界に入り込んだようです。

2011年11月29日21時47分発行